十一月十五日増刊
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十四年十一月十二日印刷納本
（毎月一回廿三日印刷納本）

女學世界

順境と逆境

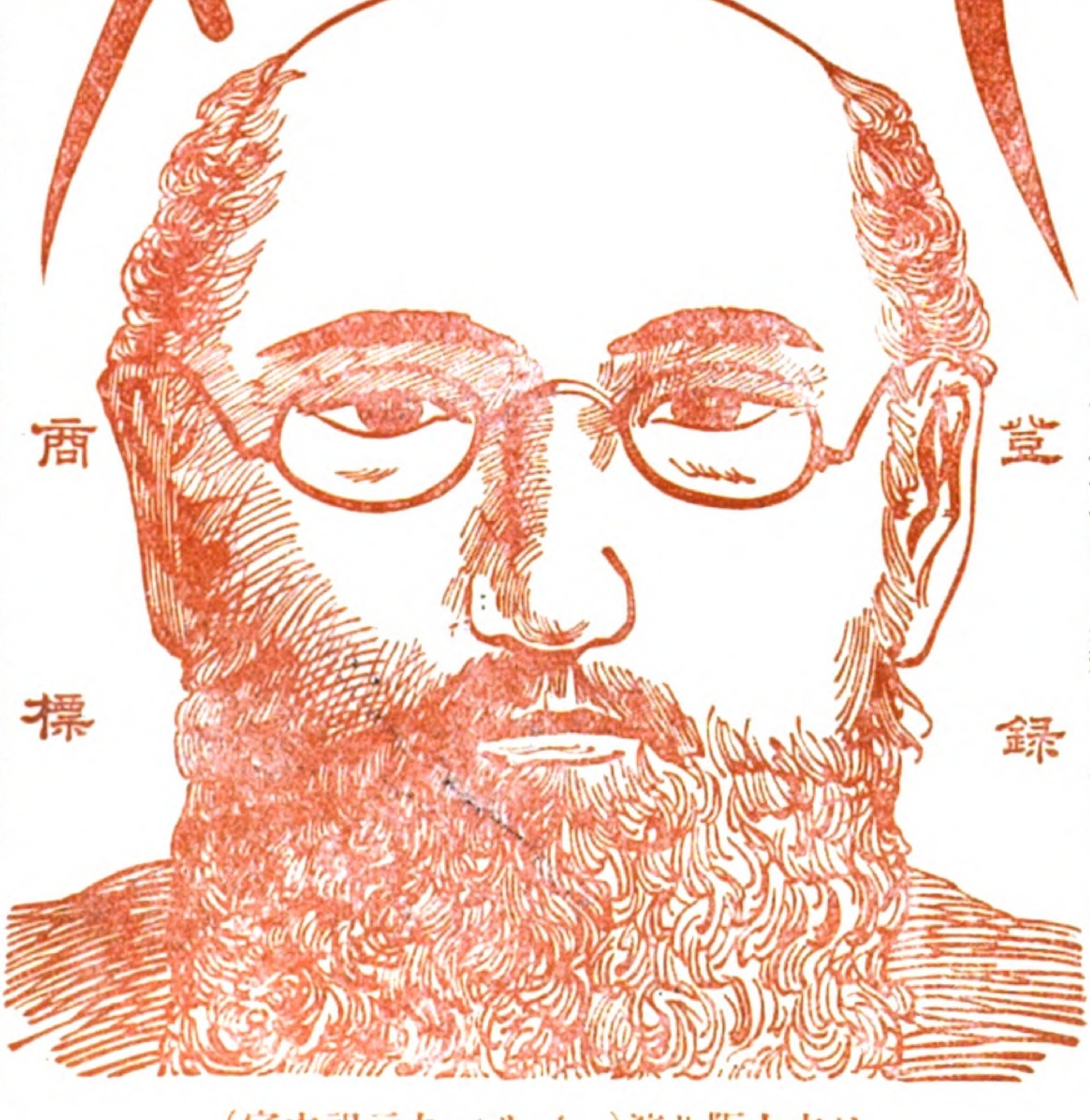


第十一巻
第十五號
博文館

大學目藥

「小兒の眼病には小兒用大學目藥を用ひられよ

登録商標



大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず

●定價金十錢（郵税二錢）　中瓶三十錢（郵税四錢）　大瓶五十錢（郵税八錢）

▲各地藥店に在

日本大阪北濱（ヘブリン丸元祖本家）

參天堂藥房

効能の概略

▲はやり目
▲トラホーム
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目

其外眼病一切に驚くべき奇効あり

◎又この藥は目力を強くするの確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防することを得べし

女學世界定期增刊 順境と逆境 第拾壹卷第拾五號 目次




舶來音樂原書ハーモニカ新荷到着
我社發賣ニ係ル「山葉ピアノ」「山葉オルガン」並ニ「鈴木ヴアイオリン」ハ米國「シヤートル」ニ於ケルアラスカユーコン太平洋大博覽會並ニ英國「ロンドン」ニ於ケル日英大博覽會ニ出品シ孰レモ最高賞牌タル名譽大賞牌ヲ受領スルノ光榮ヲ得タリ而シテ本邦樂器ニシテ如此國家的名譽ヲ得タルモノ唯我社發賣ノ樂器アルノミ以テ如何ニ其品質ノ優良ナルカヲ證スルニ足ラン希クハ愛顧ノ榮ヲ賜ヘ
●樂器及音樂書目錄實價月報
規定御申越次第進呈ス
東京市京橋區竹川町十四番地
日本樂器製造株式會社東京支店
共益商社
電話新橋三三二〇 振替東京二一〇七〇

池邊の紅葉



田中製版所三色版

日本女子商業學校學監 嘉悦孝子女史案

最新實用 家計簿

一ケ年一冊之豫定

定價金五拾錢

郵送料八錢

この帳簿は

一冊で賄帳●日記帳●金銀出納帳●元帳の四冊を兼用します。

一度つけると賄帳●日記帳●金錢出納帳●元帳をつけることになります。

一頁の中に凡ての費目の合計が別々に記されます。また毎日出入の小計と現金殘高とが記入されます。

たへず豫算高と支出高との差が、分るやうになつてゐます。

收支一覽表は一年中の收支が分り月々の豫算超過又は減少高が分りますから年々保存しますと家計の歴史となります。

それ故

一冊で何冊も兼ますから費用が省け一度つけると凡ての用をなしますから時間の經濟となり一頁の中に凡てのものが現れますから家事經濟の模樣が一目で分り絶えず豫算と支出の差が分りますから生活費の膨脹を防ぎ一覽表の保存により家計の歴史を知ることができます是非御採用を願ます。

振替東京四三九七　稻邑三拾堂　東京京橋區南鍜治町

女（甲の二）

化粧香水

プラチナ



定價 一瓶 三十錢
滿鮮 卅五錢
▼郵券代用一割増遞送無料

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さい持つて居ないが此のプラチナ香水は
◉微温湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ
◉顔を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し夏は日にやけず冬はあれを防ぐ
◉頭髪に塗抹すれば毛髪を養ひ香氣馥郁油の代用をするのみならず髪のくせを直し赤毛白髪を防ぎます
實に其効能は多方面にして貴きこと黄金にも優る價値あり

東京日本橋横山町一丁目
發賣元 近江屋 天野源七
浪花八六三番 振替口座五九三三番



女（甲の四）

菊



落葉



竹久夢二筆

茶の花



平福百穂筆

秋圃



週刊雜誌中に第一位を占むる

日曜畫報

正價一册 拾錢
郵稅一錢

四六判四倍大本文、光澤紙(廿四頁●寫眞版及木版挿繪澤山●本文二色刷乃至六色刷

最近發行本誌概要

十一月二十日發行
第四十六號要目

口繪

▲清國資政院▲革命軍の有に歸したる上海▲同▲蘇州抗州▲むうすめ▲本月の帝劇▲新裝の歌舞伎座▲美人思ひ〳〵

本欄

△急轉せる大清帝國の時局(根津一)△内亂帝國又外患に困む(一記者)△叛勢愈猖獗滿朝途に屈す(一記者)△狩獵客の昨今(猪鹿齋)△男裝の女俠客不死身のお留(南蠻鐵)△帝劇歌舞伎の對抗戰(帝劇背々歌舞伎時雨)△南米新風帶の絶域に悲慘の最期を遂げたる日本人(下)樹下石上人)△新俳句先生の十八河村黙先生(紅提灯)△懸賞コレハダレ△年中行事酉の市(丹後外人)△菊花巡覽記(金英子)△全國十美人投票第三回票數發表△時事川柳△九星判斷●講談國姓爺(桃川如燕)

社會各方面の出來事を、鮮麗なる二色刷寫眞版と、輕妙なる記事とを以て報道評論するは本誌獨壇の特色とす…各劇場の寫眞及び記事を、常に率先して掲載し得るは、週刊にして敏報なる本誌のみの有する特權なり……

精巧なる表紙繪、皮肉なる漫畫、奇警なる人物漫畫帖、時事の人物、問題の批判、各階級の人の噂等、一本を備ふれば以つて應接室を飾るべく、以つて智識と娯樂の淵泉を得べく、以て社交裡の話題に窮することなかるべし……

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

今井柏浦君選

榊原蕉園女史口繪

古今女流俳句集

女流の俳句は、男子の俳句に較べて放膽豪宕の氣に乏しいが、纖細、優婉、溫情自然に溢る。天眞流露の趣は、到底男子の遠く及ばぬ處がある、畢竟女子は男子に比べて、思想の經絡なると共に、感情の溫柔なる處が多いから、俳句なり歌なり女性的と男性的とは、歴然した區劃があつて、其觀察點も抒情の徑路も違つてゐる、即ち女性的俳句の特色は、男性的よりも多く同情に富める點にある。この書に蒐めた俳句は、古今を通じて女流の佳吟名什約三千其秀逸なるものに至つては優に男子を凌駕するものがある 俳句を學ばんとする婦女諸君は固より女性の俳句を究めんとする人は是非一本を備へねばならぬ。

全壹冊 菊半截美本 貳百五十頁 正價卅五錢 郵稅四錢

女子高等師範學校教授 横山榮次君外九名補助
報知新聞家庭記者 中村千代松君編

實驗問答 日本家庭節用 （三版）

全一冊洋裝總クロース三六判 美本紙數千二百七拾餘頁 正價壹圓參拾錢 郵稅拾貳錢

▲第一編 衣服問答 (一)裁縫(三)洗濯
▲第貳編 食物問答 (一)日本料理(三)西洋料理(五)漬物
▲第三編 作法問答
▲第四編 家事問答
▲第五編 衞生問答
▲第六編 病氣問答 (一)藥物看護(三)傳染病(三)强壯肥滿(四)體質(五)滋養食物(六)腦神經(七)小兒科(八)姙姉(九)婦人科(一〇)消化器(一一)呼吸器(一三)外科救急(一三)皮膚科(一四)中毒(一五)寄生蟲(一六)花柳病(一七)生殖器病(一八)眼科(一九)雜病(二〇)病院
▲第七編 理科問答 (一)家庭理科(二)工藝理科
▲第八編 戶籍問答
▲第九編 諸稅問答
▲第十編 通信問答
▲第十一編 農事問答 (一)野菜肥料(二)牧畜(三)家禽(四)養魚(五)果實
▲第十二編 敎育問答

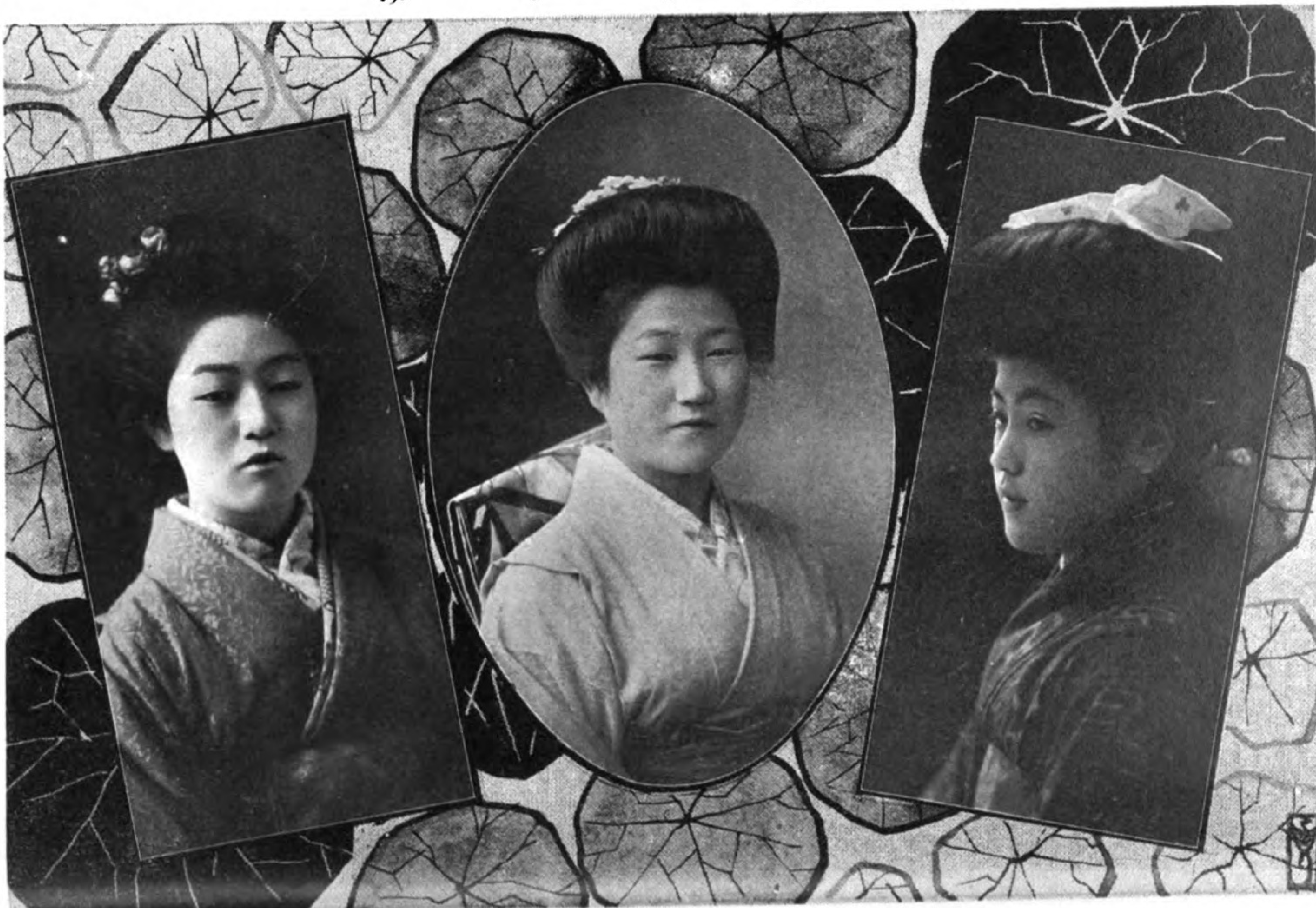
東京本郷 博文館 振替口座東京二四〇番

名流婦人



戸田伯爵世嗣夫人米子

令嬢かゞみ



右　新井長作氏（紳商）令妹友子
中　前田彰氏（紳商）令嬢氏子
左　莊淸次郎氏　三菱合資會社内事部長　令嬢靜子

山階宮殿下御買上の光榮を賜ふ

新案登錄 第二〇六三〇號
都はり箱

避寒必携



都はり箱は優美高尚體裁書籍の如くにして蓋を開くと中を鬮の如くに仕切り其内に起伏伸縮自在なる絎け臺を取付け五色の絲は自働的に回轉し又はさみこてへら二つ折の物差しつま形袖ル針、針差し指貫に至る迄の裁縫具が一切入れて有ります、御婦人方の旅行の携帶に頗る便利で尚御孃樣方の學校携帶又は家庭敎育用として貴婦人御令孃樣方の御買上げの榮を賜りたり尚年末年始の贈答品として最も適品なり又地方御土産には無類なり

送料
- 郵税市内 四錢
- 内地 十二錢
- 臺灣樺太清國朝鮮 三十錢
- 代金引替 十錢増
- 郵券代用 一割増

定價

漆塗金蒔繪	特製	金貳圓五拾錢
同	上製	金貳圓
クローズ洋本仕立		金壹圓
同上 但シクタク毫木製ツマ形ソデ形尺ナシ		金七拾錢
神代杉金文字入		金壹圓五拾錢
同	上	金壹圓

製造販賣店 東京淺草區三筋町四十三 **安井都堂**

特約販賣 三越呉服店、白木屋呉服店、大西白牡丹 百助商店、伊東屋玩具店并他各所に有り

●室內暖爐新荷着廣告

破格大勉強



電氣、瓦斯、石油
石炭、木炭焚き等
數種取揃有之候

無比廉價

●御一報次第目錄差し上申候

東京市銀座通り尾張町

宮内省御用達商 **十一屋商店**

電話新橋 一一三四三 一一三四四 振替口座 九〇九一二番

女(内の一)

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

隆鼻術

午後 夜間

和田耳鼻咽喉醫院

電話本局一七三〇番

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名助次郎

男ちぢれ 女くせ毛

赤毛は何程の難毛も直良き艶の出る最新發見奇液に根本的矯正黒化を郵券封入申込の方に教授し誓て美髪に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

月經に脫脂綿は大害あり

〔某醫學博士談〕

「月經」を處置するに古綿や古布を用ゆるの大害あるは今更云ふ迄もなきが「脫脂綿」ならば衞生上無害と思ふ人は大間違です、「脫脂綿」を詰込ますと第一「經水」の疏通を害し第二纖維が局部に殘留て腐敗しますから遂には焮衝を起し之が度重ると彼「子宮病」や「鬱憂症」等に罹る事が往々あります、然るに予の友藤川藥學士が苦心して發明した「安全帶」は帶と衣との二種より成り「經水」を外より吸收る樣に出來て居りますから衞生上無害完全で又如何程經水の多い方も失敗する憂がありませぬ。

定價「安全帶」壹筋甲壹圓廿錢、乙八拾錢、並五拾錢（一筋で四五年使へ升）「安全衣」壹打四拾錢（毎月半打で充分です）小包料（帶衣共）壹組拾貳錢、餘は壹組を增す每に貳錢宛「衣」一打以上御註文は無郵稅

東京下谷池端七軒町四二 本舖 安全堂

大阪阿波座上一電車道角 代理店 洋々堂

女(丙の三)

（三の四）

名流婦人



三井得右衞門氏夫人鍼子

令嬢かゝみ







右、紳商田村庄兵衛氏令嬢可爾子（麹町）、中 多額納税者松本安左衛門氏令嬢やす子（静岡）
左 米穀仲買業西村覺蔵氏令嬢きく子（日本橋）

學界二十名家

中學世界 第十四卷第十五號 增刊

近時我國の進運は、世界の驚嘆に價するところ、其因多々あるべしと雖も、尊重すべき我が學界亦多くの貢獻をなしたるは言を俟たず。吾人はこの見地に立ちて、曩に學界二十名家の投票選定を企畫したるが、その集まるところの投票十萬餘葉、而して、最後の決勝に於て、吾人は實に左の二十家の芳名を歷記するの光榮を得たり。

文學博士 井上哲次郎
文學博士 上田萬年
文學博士 服部宇之吉
男爵 神田乃武
文學博士 萩野由之
理學博士 山崎直方
理學博士男爵 菊池大麓

理學博士 石川千代松
理學博士 三好學
理學博士 本多光太郎
理學博士 池田菊苗
法學博士 添田壽一
中村不折
農學博士 横井時敬

工學博士 中村達太郎
醫學博士 北里柴三郎
文學博士 坪内雄藏
海老名彈正
陸軍大將伯爵 乃木希典
海軍大將伯爵 東鄉平八郎

十目の見るところ、その人格に於ても、將たまたその學識に於ても、聊か間然するところなきは、明かなる事實なり。中學世界はこゝに此等の諸名家の特別寄稿、傳記、立志談、學生時代の追憶、逸話等を主要素となせる紀念增刊を發行し、明治學界の光輝をして愈發揚せしめんとするは、頗る愉快なる事業と信せずんばあらざる也。切に愛讀を祈る。

十一月十五日發行

菊判紙數二百四十頁
口繪石版寫眞版豐富

正價二十錢 郵稅二錢

東京 博文館 本町

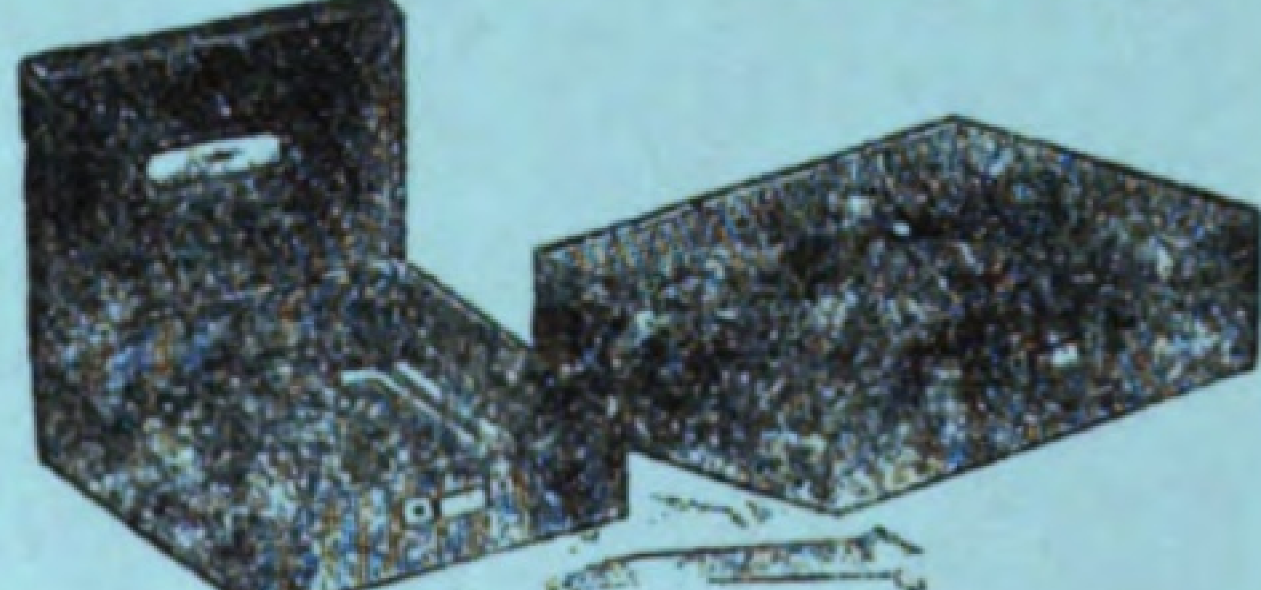
宮内省御用達

ヒゲタ醤油

伊國皇室御用

千葉縣銚子港
田中玄蕃醸造

輕便テンピ



●料理器の革命

本器は最も進歩したる瓦斯火炭火の兩用食物蒸燒器なり構造堅牢、取扱輕便、魚燒、餅燒、卵燒、洋食及パン燒等に最妙

大形 五拾錢
小形 三十五錢
地方送料 十五錢

販賣所は到る所の金物店食料品店にあり

最新輸入美術

ガラス紙

●本品は佛國最近の發明品にして硝子窓、硝子障子、欄間等に一切の硝子板に貼付して外觀を優美にし室内の裝飾となり頗る高尚にして雨水にも汚損の憂なく永久變色せず且つ硝子の破損を保護し實に美術と實用とを兼ねたる珍品にして彼の俗惡なる色硝子等と全く其選を異にす

●使用法は硝子紙の表面即ち艶多き方を微溫湯にて潤ほし硝子板の内側に貼付するものにて極めて簡單なり

代價一卷壹圓半より
一卷の寸法巾曲尺一尺六寸強
長サ二十六尺書柄は種々あり

●洋食器ランプ硝子壜問屋

東京銀座尾張町壹丁目

十一屋商店

振替口座東京九〇九二 電話新橋二三二三・一三四三

女(丁の四)

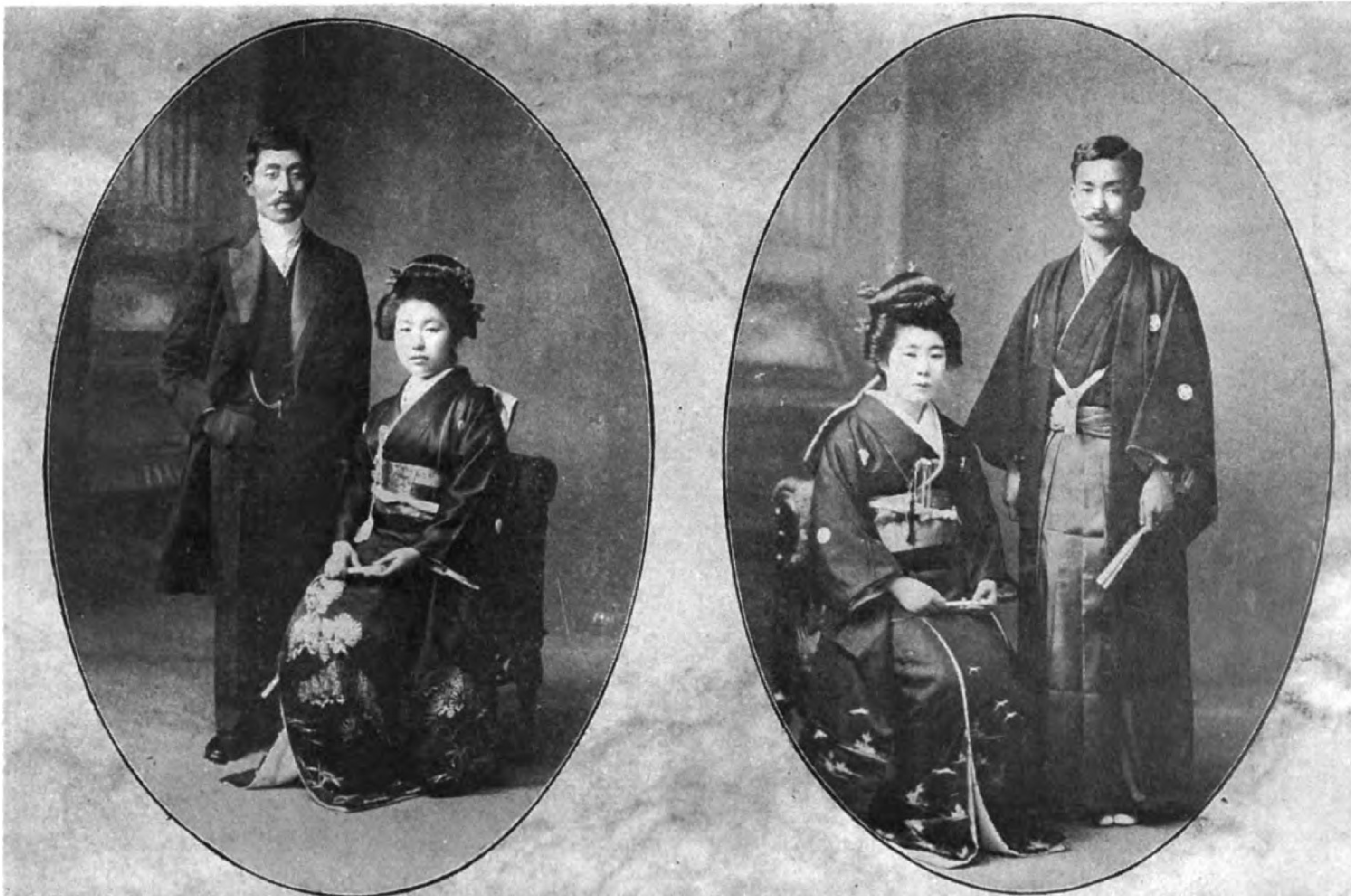
令嬢かゞみ





入江保之助氏（米穀取引所理事）令嬢喜代子（お茶の水出身）

山本留次氏（株式會社博進社專務）令嬢松子（お茶の水在學）



右　後藤多喜蔵氏（法學士）同夫人桃子　東京府知事阿部浩氏令孃）
左　上田萬平氏（香川縣事務官）同夫人幸代子（農商務次官押川則吉氏令孃）

内藤千代子著

杉浦非水装訂
竹久夢二挿繪

五版

スヰートホーム

洋装四六版三百十四頁
ハイカラ式頗る美本
定價 金六十五錢
郵税 金八錢

明治四十四年の日本が生みたる不可思議の産物。新時代婦人の大膽なる告白。小説以上の小説。破天荒の快著述。

初版四千部十三日間に盡き再版三版四版出來と同時に賣り切れ……今や『第五版』出づ!!

東京各女學校の學生間には『**スヰートホーム式**』なる新語流行しつゝあり。これ氣の利いた事才走りたる事、ハイカラな事を意味すと云ふ。一文科大學生は本書を通讀して、吾が筆遠く妙齢の一婦人に及ばずと嘆ぜしとかや。要するにスヰートホームは今や青年階級の話題となりつゝあり。

目次

▲スヰートホーム ▲天女降臨 ▲おてんば娘 ▲湖畔吟
▲松風 ▲少女の戀 ▲もゆるおもい
▲ハーモニカ ▲嫁が婦人 ▲夢より醒めた女

發賣元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

女戊の一)

奥様の心懸●●●家庭の平和

花嫁

主人は宅の料理は不味い〳〵と申ます。妾も此内へ参りますまでは料理なんか致した事は有りませんがドーシタラ主人が喜ぶでせうか心配で成りません

料理通

素人の家庭では御料理を成さるに大抵主に砂糖をお用ゐでせう牛鍋や鳥鍋を成さるにしても砂糖は鍋に(こげつき)ますが其代用に味淋を使へば其心配がなくて第一、味は牛屋や鳥屋でお喰べになると同様においしく戴けます魚肉や其他總てのお菜を煮るにしても味淋を使へば味は料理屋の樣に甘味たべられます上等味淋は流山の**万上味淋**に限ります瓶詰、樽詰も有りますから是非御試めしなさい御主人も必ず御喜びになる事請合です。

女(戌の四)

小 春 日 和



大隈伯爵の家庭



一　老伯爵、二　令孫豐子孃、三　令息信常氏夫人光子、四　伯爵夫人綾子、五　伯令孃熊子、六　信常氏

新婦人叢書

長谷川時雨著

日本美人傳

（新刊!!!）

第一篇

クロース表紙袖珍型紙數貳百餘頁
正價四拾錢
郵稅四錢

小島ふみ子著

現代男性觀

（新刊!!!）

第二篇

クロース表紙袖珍型紙數貳百餘頁
正價四拾錢
郵稅四錢

近刊

日本烈女傳……尾島菊子著
名媛日記……大平野虹著
閨秀作家文粹……佐藤紫仙著
文章の栞……岡田八千代著
日本美男傳……田村とし子著
育兒の話……唐澤學士著

新婦人叢書體裁

クロース表紙、袖珍型
用紙白菱、二百餘頁
天部純金緣裝飾
正價金四拾錢郵稅四錢

發行所　東京市本郷區龍岡町　振替東京三〇五八番　聚精堂　電話下谷一六七二番　電話下谷五〇七九番

女(己の二)

櫻痴全集

全三冊

洋裝三六判
函入上製美本
各冊壹千壹百頁
正價各金壹圓廿錢
小包料各八錢

女(己の二)

櫻痴居士の文は瀟洒にして簡明、殊に談粧の中に絢爛の趣を具へたるは、江戸子質なる居士の特色を最もよく發揮したるものと稱して可也。居士生前作るところ、小説あり、脚本あり、史論あり、戯文あり、短文あり、長短宜しきに從ひ、繁簡趣を成し、才思の横溢せる、學識の卓越せる、當代實にその匹儔を見ざるの概ありき。唯其作品の多量、雄編大作にして、猶且散逸するもの多きを憂ふべしとするのみ。今その粋を抜き、妙を集め、以てこの上中下三巻をなす、庶幾くは居士の彩筆に渇するもの、望を滿すことを得ん乎。

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館



化粧水

ライラック

日本政府登録

安心の出來る化粧水！

として最も歡迎せらるゝ理は美顔術實驗有効と云ふ絶對の保證と其卓越せる萬能の効力即ち

御顔に　朝夕用ゆればライラックの高き香りと共に終日艶々として素顔の美を發揮しニキビソバカス吹出物等を全治す

御化粧　時に白粉下。白粉ノベシとして斯の有名な無鉛芳香理容白粉と併用せられなば思ふが儘の御つくりが出來

フケトリ　用として御寢みの時御頭りに塗込みをけばフケはすつかり浮きて翌朝はサツパリとして心地爽かにクセを直し艶を出す等の特色を兼ねするから數ある化粧水中特に嗜ある方々の本品を手放せぬ故もこゝにあるのです

定價　大瓶　五十錢
　　　小瓶　三十錢

新橋竹川町十二番地

ライラック水一手販賣

理容白粉本舖　美顔術　**理容館**

電話新橋二三〇二番
振替口座一四一〇〇番

衞生改良酢發賣

貳合入壜詰一本　金廿五錢
送料　八錢



本品二合は普通品の二升六合に當る

在來の食酢は腐敗し易く貯藏法に至難なるも本品は防腐性を有する醋酸を資料とせし者なるを以て有害なる黴菌を生ずる憂なく永久不變なり而かも之れを菜肉に使用して風味云ふべからず是れ本品の特點にして殊に衞生酢と命名せる所以なり家庭に於て御試用の上御高評を希上候

東京日本橋區本町三丁目

薬種貿易商　合資會社　**博愛堂**

電話本局長二八六番
振替口座東京八八一三番

十一月一日より

冬物新柄大賣出し

●藤原模樣半襟數百種陳列

●新形ショール數百種陳列

●よせ切れ見切反物取揃

●冬物洋服地悉皆取揃

●餘興塲日々開演（少女音樂隊其他）

●寫眞部撮影（出來期間一週間）晴雨天共

東京日本橋

白木屋呉服店

女（己の四）



順境と逆境

女學世界

第拾一巻

第拾五號





草籠

秋雨女

はしがき

早いものでは御座いませんか、石の上にも三年といふ、それがもう四年も秋といふのですもの。校門を辭した其翌年お廻し申した草籠には、それこそ色とり〴〵の花紅葉、光榮ある處女の香に充ちて居りましたが、雨に風に過ぎた後三年の今年の草籠を拜見すれば、既におほかたは庭の菊、色こそかはれ香こそ異なれ何れは浮世を垣の外と隔て末葉のしげり番の數を樂しみの御朝夕と承はられました。然り乍らいまだきのふのまゝの野の花もたておはします鄙の都の皆さまが、故の土をばお忘れなくお送り下されました枝の幾もと謹しんでこゝに其のまゝ。

○里の妻

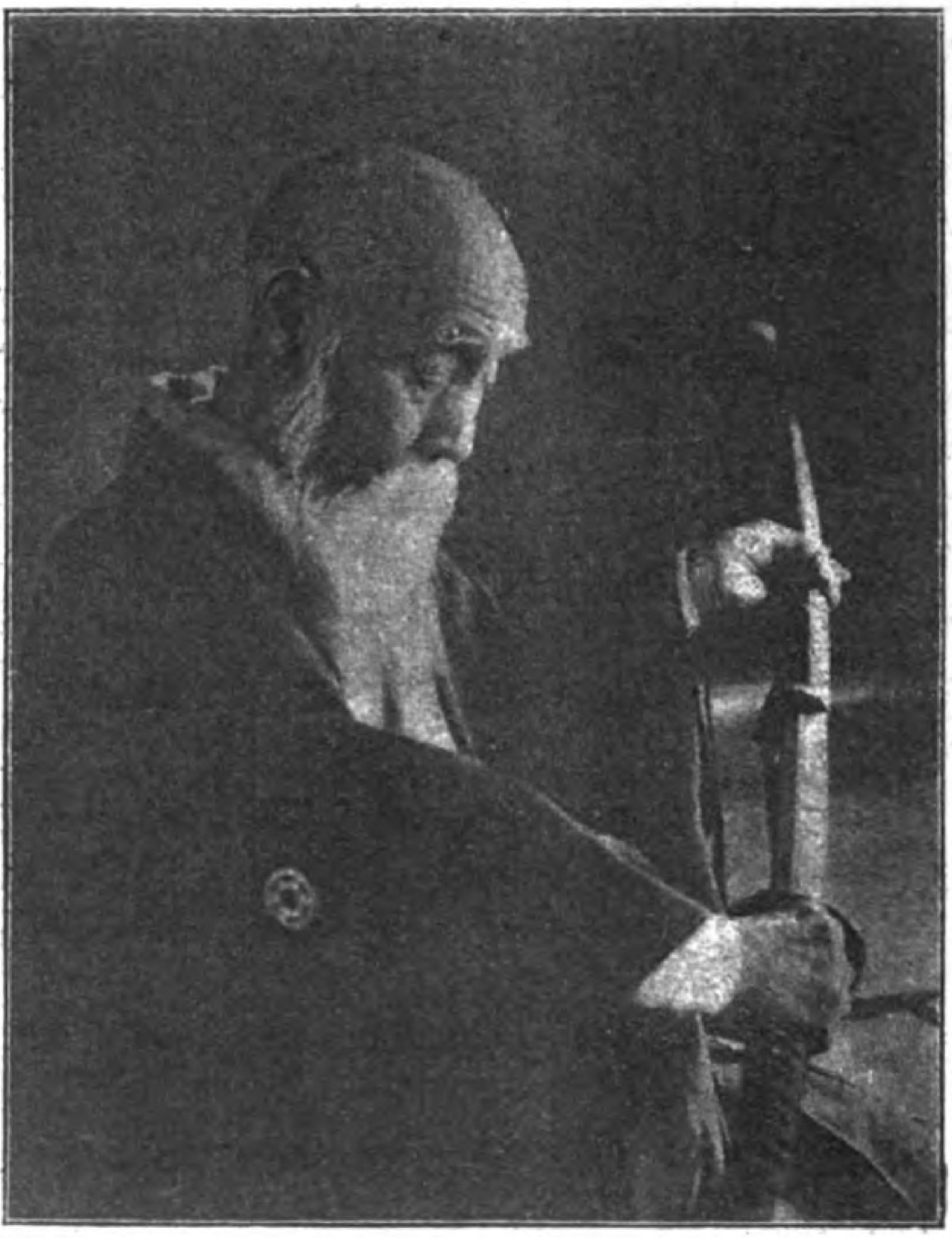
筑波の里　ぬい

窓を離ては今日如月の薄梅月夜、枝も疎らの人しれぬ曲者が覗ふとも氣づきますや否や、詩作に餘念なき書齋の夫、餘り凝りたまひてはと氣抜きにお肩揉みましよかと尋ぬれど人も居ぬ氣のお面付き、火のない火鉢にお手かざして居玉ふに、ふと氣づき赤うなりし炭つぎ温かき心盡しお傍にもて來て召し上りませぬかと申上ぐれば、此の句がどうも拙いんだと頭叩いてのお振舞　秋雨樣、今こそ馴れたれ、つひ此頃迄は隨分悲しうなりし折も候ひしよ。

とはいへ藝術を樂しむ人の妻となり母となりしものはこれ位のことは朝飯前の仕事と觀せねばならぬのにて候ひし、「興」といふ蟲一度首を擡ぐれば詩人の胸は一切無——ぬいが此の呼吸のみこむ迄には幾干の心勞

めしこや思召す、趣味といふもの塵ほどもなかりし身には。時には米櫃の底音立てじと手ふるはせし折もは、嫁入着よその倉に曲げし事も幾度か、裏の畑の芋つきて脊戸の嫁菜摘みに暇つぶしするつらさ、思へばいづれ世學の教訓に外ならずいへど、小さき女氣には時として昔しのぶの振りの袖に睫毛の雫そと拭ふ折もこれありはよ。

然りながら明暮れに眺むる遠山の霞、樹林の夕照、は云はずもあれ、心ゆく野の田植歌、松原すぐる哀調に耳なれてゆく身は浮世の煩ひ何處にかと覺えは。夫の名　世に出る日はまたれは、否さあらう可きが妻の手柄には、されど何を焦りて此の樂園を離れて住まねばならぬ義務を人は作るや何を求めて世の繁き繩にからまれんとせねばならぬかとは昔よりとけぬ疑にこれあり候。人生意氣に感じては成否はもとより浮べる雲とのみ、夢にも榮達は望まぬものを、まして我が子に美田買はんとは思もよらず候に。世渡りの聲はひし／＼と耳もと近く迫り候。ひまゆく駒の足掻にも老ゆる匆れと囁くが如くきこえ候。土橋の下くゞりゆく水にも、流れにうかぶ木の葉にものがれ難きは「時」の運命に候かな。かゝる中にも心ひとつの春秋はは、庭に鶯の音はきけど春まだ寒き筑波颪の隙もる夜さば知らぬ顔に榾折りくべてさしむかひ　政坊を夫の膝にあ


白雲の落來る音や秋の水

づけて、夫が所望の時雨西行にのばすずつきも、うろうろしや、そがまた昔しの俤見えて嬉しと寂しう笑ひ呉るゝなど浮世ばなれのしたる甑當は都におはす御方々には夢にも入らぬ興あるものに候を、うそとのたまひますならば一度はたづねて御覽じ候へ。

高砂の翁と嫗にはまだ末久しう候へど、妾自慢の蓬餅はいつ如何ならむ御訪づれにも、お口元はづかしと宣ふまで勸め參らす心組、我れと思ひ玉ふ強の者もおはさばお幾人にてもお誘ひ合せお越し下されo

古き暦にたよりてならば、昨日今日は此處ら村々杵の音、臼の聲に賑ひ候半を、今年は改暦の、既に都と時を同じうして門松も立て終りしなれば　梅の幾日は寂しさ云はん方もなく候。萬歳に出でし若者も土間に鍬なげやりて晝寢に長う、春駒曳いての酒機嫌に土臭き何とかぶしを唸り散らせし六兵衛爺さんも孫の鼻垂れ春に引負ひてト…と鷄に餌やる位が關の山らしく候。さりとては世にあり難き文明の光り、さりながら漲れる野趣は人の心の如くに移り行きてゐ、來む春は短冊にローマ字綴るゝようなりもやせむ、道ばたの木槿は馬の歯にあはで馬車の轍の犧牲とやならむ、ましてわが世の春に笑む菫たんぽゝ、蓮華草は、さも荒けなき自働車にふみにじられて恨み空しく殘る春雨、誰が手向にとて涙こぼして呉れ候可き。思へば思ふほど胸いたき事許りなる世に



秋風に散もみぢ葉は女郎花宿におりしく錦なりけり

自問自答の繰り言のぶる里の妻が心根せめてあはれと推し玉はゞ何卒弱者の聲ときかず、あれはあゝいふ性格の女が一人角力を取り居るのぞとお笑ひ下され度候
久し振りに文かいて何時になう胸の躍るを覺え候。更けゆく鐘を身にしめて政坊が夢の半をふと走りがき、いざゝらば書齋よりお手のならぬうちこゝに筆とめ参らせ候かしこ。



さす日見て驚く鳥や冬木立（洞天）

○小間物店の女主人公

赤坂　つた

お隣の小母さん――、おむかふのお女房さん――桐屋のおつたさん――。以上何れも妾の呼名です。ホ、ホ、これでもクラスに居た頃は、『未來は何々夫人と云はれる身精々お辭儀の仕方でも研究して置きませう』と思つた自分かと情ないやうな氣もします。三寸二分の襟あき、黒襦子の抜衣紋は偖おき、明けるから暮れるまで上るものは癇癪の蟲ばかり、あとは、『好いお天氣さまで『毎度有り難う存じます』『牛肉賣切らしまして相濟みません』――『エエ、もうこの方がいくらお德用か知ません』――お氣に召しませんければ致し方も御座いませんまたどうぞ御ひいきに』――なんかんと貴重な頭をさげてばかり居るのですもの、一昨日三十錢出して二時間待たされて漸つと結つて貰つたおぶんさんの丸髷も臺なしに根が下落てしまひました。

それにこんな商賣をして居ますとね、どこの出身のなんのかんのは骨抜きにして、一も二も、體面、交際氣前、こんな事に身も疲せた、お蔭さまで場所が好かつたのか、親の顔でか、新店には勿體ないほど品がはけて參りますが、其お客樣の心持を一々見判けて行くことや心にもないお世辭を浴せ掛けて仕方がなしに買つて行かせるように仕向けるのは、どうして○○先生の心理學や△△先生の源氏のお講義以上だと思ひますわ中には随分骨の折れる方が入らつしやいますからね『今どれが流行でせう』とかうお出なさる『左樣で御座います只今は皆さまが彌生形をお召し遊ばしますやうで御座いますが』とくと叮嚀な答をします、すると御當人三十面の薄菊石と來て居るのがグッと氣取つて一番の髷形をいそ〳〵買つて行くのですもの、一體下町は華美ときいては居りましたが、地味に〳〵と育てられた妾など始めはそれは閉口しましたのですよ『人見て法を説け』全くですね。折々黑人の婦人が來ますが、こんな時は成る丈け挨拶の外は默つて居りますの、でなきあ反對に面くらつちまいますもの、商賣とはいひながら配合など巧みに考へるものですねえ、誰れに敎へられたといふでもないでせうに、妾達原理を聞かされて居るものなんか却て虎を猫みたいですわ。



人柄も古風になりて黄菊哉（牧童）

殊に交際と來ちや全く辛う御座います、ヤレ木挽町の蓋があいた、ソレ二長町の總見物だ、今度の祭にや花車を出す、そりや當り前の話ですけれど三日にあげず出錢があるのですもの、家内ぢや大根の赤つ葉しやぶつて居ても三度に一度は揃つて行かなきやなりませんーねえ、それにや何時もながらの姿振ぢや意氣地なしと見られる、入らぬ詮議ですが蛇の道はへびの譬へそれに主人でも居りますならどんなにか氣強いでせうけれど、いふて歸らぬ旅路の人なのですから、時にや自暴が起つてどうして呉れうかと思ふことも御座んす、然しまあさういふ時は心の隅の一部分から「矢張り世間並の女か」と誰れやらが譏るやうな聲に引き付けられて今日迄はどうやら斯うやら行つて參りました。



皿を嘗む鼠の音の寒さ哉（蕪村）

皆樣此後とも何分宜敷お引立のほどをと、こゝから商賣言葉で御願申上ます、何ぞの折のお序もありましたなら、お蔦さん居るかとお立寄り下さいますやう。

○孤兒の母

洛東　やす子

母は今は人の孤兒を寢かしつけて、油漸く渴えてゆく枕行燈のかげに久し振りの筆を執り申候。何から申上てよろしきやら、お慕かしさの念のみ先だちて容易くは手も動かず候、何れも樣には其後定めし御希望通りの事にお携り遊ばされ候御事とお羨ましう

存じ候につけ早う兩親にわかれ他人の情に辛くも生ひ立ちし私は如何にもして我身と同じやうなる哀れなる人の子を育てゝ一人前に為度きものと只これのみを願に候ひしが幸さる人よりの傳達ありて當寺の別院に收容せらるゝ孤兒の一部を預るようになりしは昨年の霜月よりに御座候。まだ半年位の經驗故、これといふお報せも覺束なきものに候へど近況一二お目にかく可く候。

此處迄書きて傍を見ればはや鼾高き子等が寢顏、此時ばかりは隔てなき佛弟子に候。世にある時はお乳母日傘の紅振袖に甘えて育つ子もあらむ、何不足なき家に生れて暖かき實の母の乳もさぐり得ぬ、雨や風　とも何時かは滿足を與へ得可きに言ふ丈野暮の此の境

行秋や野に山に日のうつくしき（丁知）



やの彼等が前途を思へば、お腹痛めし子は持たぬ私も腸千裂るゝ如に候。

十一のが一人、あとは取りませ三つ迄、此三歳のが今の處一番手がかゝるのに候。望む可からざる事かも知らねど斯うして毎日一つお釜の御飯をいたゞきながら子等お互の間柄に勢はり助けるなどの情愛は露ほどもなきには呆るる許りに候。然も他を羨み妬み絶えず疑と不平の眼を光らせ居る事は驚く程にて根よき人ならでは頬の一つも捻り上たき位に候。

それも充分の資力ある家の子ならば如何にねぢけて居りれ

遇にありては俯伏の枝を上に矯めんこと容易の業とては之なく候。

朝五時より夜八時迄衣食住の世話何くれと身を粉にしもて手一杯に候。支給せらる食料にてはとて子等が唯一のなぐさめなるおやつも購ふ事叶はねば、風少し強かりし秋の翌朝などは袖引きはえて栗拾ひに出かけ此の間にても少しは世の中を知らせんものと心掛け居り候まゝ御寺の庭に散る落葉かきあつめ來て、そを燒いて與ふれば舌皷打つて喜ぶ顔、子供は食べる事より外に樂しみなきものゝやうに候。それも其筈鮭や干物が無上の御馳走といふいぢらしさなれば。

のべ立つれば果てもなき事故、もはや筆とめ申す可し、物好らしき我身の業も年來の素志幾分かづゝは充たされ行くやと満足して毎日を送り居り候。追て比叡颪も吹くなる可し、さすればまたかれ等の着更へに目のまはる急がしき關が來るのにて候、又暫くは御無沙汰と覺え候　何卒明るき道になほ一層の光り添へたまはん事を祈りてやまず候。

北米奇觀タコマ富士



○動物のお友達

きぬ

主人は馬鹿に飼物が好きなのです。そして他にも一つ盆栽！お友達よりお守り！！

クロベー、これはポインターの牡で二尺五寸犬です　總黑で胸に灰色のネクタイを掛けた極のハイカラ、ステッセ

ル將軍の犬の子で非常に柔順ですが怒つたら大變、五寸丸太なんか蹴飛して垣根をヘシ折つて難に赴きます。好きなのが味噌汁と牛乳と肉とお菓子。嫌ひなのが自轉車と洋服と水と果物。殊に水と來たらどんな場合でも逃げて行きます。其代り主人でも洋服姿で居ります遠方から吠えて居ります。

ベル、これはセッターの座敷犬、來て間もなくインフルエンザに犯されまだ青息を吐いて居ます、肉の外にはお氣に召すものなし、牝だけあつて甘へて仕樣がありません、まだほんの子供。

美いちやん、これは牝の三毛猫です。さる大家から生れて三月目に戴きました、これはまだ眞實に可笑しな猫で、美いちやんと呼ぶとニヤア〳〵と返事をします、それから人の膝へ上るときも挨拶をしてキヤッ〳〵と二聲鳴きます。夜になると人間と同じやうに床の中へ入つて人の手枕をして足を伸して寢みます、其時もキヤッキヤッと三聲ないて入て呉れと頼みますの。肉は好きませんが、おさつが何より好き、そしてクロベーの振袖耳に戯るのがまた好きです。

ヘンリー、ミノン、何れも白レグホンの鶏です。まだ雛兒は居りません。

火事だつたら何を持つて逃げなくとも好い此連中を下女やなんかと連れて出よ、盆栽は車屋の親仁に曳か



ほつかりと茶の匂ひけり初時雨

せて行けと常から言渡されて居ります。

これでは大抵私の毎日がお察しがつきませう？　何の事はない動物園の保母ですホヽヽヽ、さよなら。

○南湖の夜嵐

茅ケ崎　てる子

いつそお知らせすまいかとも存じましたが何れ一度は判ること、殊には弱者の土地と云はれた此の茅ケ崎で杉田さんを知つて居たのはまあ私許りといふてもよい位で、此寂しい果敢ない、一漁村を遂に墳墓の地とした杉田さんの御臨終をお知らせするのも故人の意志に背いた事ではあるまいと。

七月十二日、其日は朝から潮鳴りのする、そして空は灰色のいやな日でした。私は午後から杉田さんをお見舞するのが例なので其朝も病院の一室に讀書して居りました。すると十一時頃でしたらう、病院から程近い松原の端れの貸別荘に居られる杉田さんから使が來て直ぐに外出をなさる事は出來ますまいかと申のです、何用かと聞いても申さず、只一寸お出が願度いといふのです、何だか胸がわく／＼して前後の考もなく看護婦に斷つてすぐと杉田さんを訪れました、處がどうでせう、もう今夜は越せないと仰るのです。私はもう飛付いて杉田さんを抱き度いと思ひました。然し側にはお母さんもお兄さんも入らつしやいます。仕方



高砂のをのへの月や更ぬらん川音すみて千鳥なくなり（建保御製）

がなしに一通り御挨拶してから扨病人の顔をのぞきました。すると口もきけないといふ病人は『てるさんよく來て下すつたわね、あたしもうさよならよ』とあの手で私の膝をお撫でなさいました。私はもう悲しさが極まつて涙も出ず思はず南無阿彌陀佛を口のうちで稱へずには居られませんでした。

其眼、其口、其鼻、あゝ之れがつひ此の間建長寺の御堂に結迦扶座して禪の奥義を追究した女性かと寧ろ不思議に思ふた位、やがて默つて一冊の黒いノートをお渡しなさいました、そして『皆さんに宜敷ねもうかへつて頂戴!』と…。

と儘ならぬ身の私は誠に御臨終にはお目にかゝれませんでした。然しそれからはもう何もいはず只スャ〳〵と眠るやうに往生せられたといふ事です。千歳の齢を讃へる松の調も其の夜は南湖の嵐が耳について私は終夜瞼を合す事が出來ませんでした。ノートはもとより病床日誌、其大かたは墨で塗てありましたが殘してあつた文字のあと丈が皆さまへの御挨拶であつたと思ひます。



月草の花すり衣あだにのみこゝろの色のうつり行かな　(資季)

——日

窓によりてこゝの海をながむるようになりてより早や三月、いつ迄かくてあらむ吾身ぞ。われ孤島の島守にならんかと思ふなまじひにかへて強者の聲の少しにても耳に入るが怨めし、弱者は自ら天地をなさんかたこよなき滿足なり。

——日

愈々もう二週間で注射も極量、すると兄樣が休暇になる、一緒に鎌倉へ行くのか。あゝ早く二週間が立てばよい、母樣が其間に東京へ行てお召の重ねを誂へて置くと仰つた。と丁度帝劇が開場する頃になる、早く其日になればよい。

——日

茶柱が朝立つたと思つたら東京から三人見舞に來て下すつたN氏は相變らず太く短かく、H氏は例に依て細く長くM氏其間に在つてエクオルを經にした宜敷といふ鹽梅であつた。鱸のお刺身に鷄と茄子の煮付けそれと玉子のお汁で樂しいお晝を濟せた。此時ほど甘味と思つた食事は前後にない。濱近い驟雨が珍らしいと山國のM氏は感心して居られた。N氏は畠の芋に目をつけて此れが太くなる頃はなんかんと太平樂をならべて愁好きのH氏に苦笑をさせた。かくて時間の無情に迫られて東京に送つた時は知らず〳〵涙がこぼれた。殘る烟が癪の種早く健康に戻つて粹な癪の種でも見付たい。



うら風に明石の濱のはま千鳥立居は濵のこゝろなりけり（季經）

——日

てる子氏昨日出京して即日おかへりの今日さけばクラスメートの六分迄はすぐに夫と家庭に入りし由マダム振〳〵、われはすでに廿有五年を處女と誇りて得たれど…、汲むや心も潔き清瀧の水も引きて歸らぬを如何にせん。きのふけふ秋更けて萩の友づり　野分の聲いとゞ心をいたましむ。思へば人の力の疎ましきかなかく迄運命に弄ばるゝ子をあはれと救ひ異るゝ手の一もなきを見れば。

お宮參り





冷たき床

小宅てう子

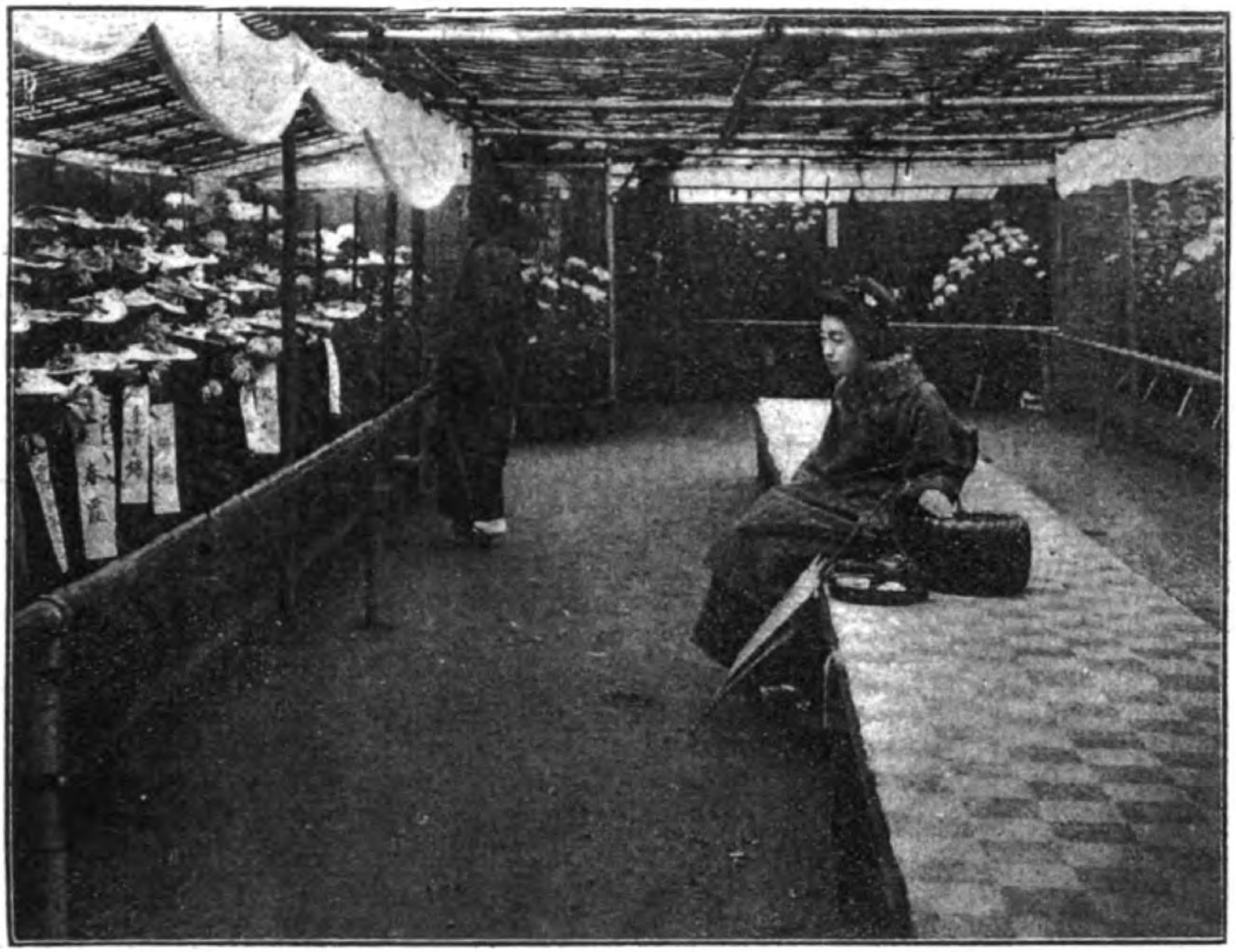
『皆さんお注射ですよ――』

と、聲の太い看護婦の小山さんが廊下ぢうをふれて通つた。すると彼方の室からも此方の室からも輕い咳嗽を先立てゝ、重く引づる上草履の音がしだすと、今まででひつそりと靜まり返つてゐた建物の内部は、俄かに笑聲やさゝやきで一杯になつた。注射は此の二階の南はづれの小さい室で受ける事になつてゐるので、階下の人は皆ぞろ〱と昇つて來る。こゝは婦人ばかりなのであひさつが細かい。まもなくむづかしい顔をした院長が、肥つた、西洋人の樣な血色をした副院長と、細い、未亡人の樣な姿をした看護婦長とを從へて見えると、赤く肥つた小山さんがうや〱しく注射器をささげて入つて來る。髪がいつもより少し丁寧に油をつけてすいてある。院長さんは汚い女が大嫌ひとかで、美しくない人達も院長の注射日には平常よりも三四十分早めに起きて身じまひをする。この習慣がいつか私達――女患者の間へも傳染して、いつも蓬の樣な髪をして、襟の薄よごれた脫襦袢で平氣でゐる小野さんの樣な人でも櫛に水つけて髪をなでつけたりなどする樣になつた。

「由井さん」と看護婦がよぶ。後向に院長の前に腰かけて大きい眼をふせながらぬいだ由井さんの肌は臘を固めた樣に透きとほつた色をしてゐた。

『アインス、〇、七。』

副院長が表を見ながら前回の量を讀みあげると、院長の手が機敏に動く。次は私、長く居るからこゝでは先輩だ。チクリと脊中へ頂いたので急ぎ肌を入れて室に歸つて寢る。



菊の香や庭に切れたる沓の底

『まあ、彼の方妊娠だつたのですか、道理でお注射の進まないわりに體量が増えると思つた……』

誰か廊下を通りながらクス〳〵笑ふのは江田さんの噂をしてるらしい。次から次と大分済んだらしい一人〳〵と室の障子の閉る音がして、やがて院長さん等の足音が遠く廊下の端れに消えてしまふ頃には、前にもまして靜かになつた。皆一生懸命に息を凝して退屈するのを我慢するのらしい。じつと耳をすませてゐると遠くで針の落つる響も聞えさうだ。窓のところを行つたり來たりする虻の聲が糸車の様だ。男患者の居る、庭をへだてた向ふの建物には日が一杯に當つて、爽やかな光りが室内にもみちみちた。私は手を枕のそばへ投げ出したまゝ、默々として壁に對つて横つた。

ところ〴〵小さく抉られた様な痕が幾つもついて居る壁は　黄ろく古びて雨じみのあとの様な色をしてゐる。前のこの室の主が慰みに繪紙でも張りつけたものであらう、煤色をした紙がそこらぢゆうにこ

い、びり付いてゐる。この何の色彩もない病院の陰氣くさい古壁を私はどんなになつかしんだらう。

十年病褥に居る私は癈人だ。他人の厄介にならねば一日の生存をも續けゆく事の出來ぬ病殘の身を持てあまして、人知れずもらす溜息には、泣くよりも慘ましい響のあるのを自らきゝながら、どうする事も出來ないでゐる。食べさせてくれる人があれば食べるし、かまはないと言はれゝばそれまでだと考へてゐる。頼まなくとも面倒を見てくれる人々の好意は有難いと思つてゐる。けれども感謝せよと要求する人があつたら、私はこのまゝ食べずに死んでしまつても好い。飢死んでしまふ方が義務を強ひらるゝよりどれ位好いか知れない。けれども、苦しい思をつゞけながら與へる心のよろこびを保たうとする人の顏を平手で打つ樣な事は心の弱い私に出來る仕業ではない。ほんとうに死は最終の事だと思つてゐる。この命の究るところまでつきとめてみたい。私にとつてはたつた一つの大切なものを易々と棒に振りた



何となくまつかきくもろ心哉時雨しぬべき空のけしきに

くないのだ。

藥よ、轉地よと我事の樣に騷いでくれた弟も姉も、さすがに平坦な道のどこまで續くかわからぬ樣な私の容體には倦屈しだした樣だつた。私はその言ふがまゝに、草冷やかな野の故鄕へ、今度は母の看護を受くべく病床を移してもらつた。それは去年の夏であつた。濃い牛乳を飲み、新しい野菜を食べ、淸冽な水に口嗽ぎながら足踏みのばして思ひ度いまゝの事を思つて何の仕出かした事のない代りに一年の間に十三度血を咯いた。

血を咯くといふ事は、私にとつて悲しい事でも恐ろしい事でもなかつた。すくなくとも女が年をとるほど厭なものではないといふ事が言へる。その時の心持をたとへて言はふなら、月影明かな夜、大海の底に心地よく沈んで、心を掩ふ萬象の夢からさめて眼は、はじめて自分の姿をつく〴〵と見た。死と言ふ事が明かに意識されるも此時だ。愚かな私は、忘れては同じ思ひを幾十度となくくり返して來てゐる。澄んで氷の樣な我眼、我心――その時の心持はいつもなつかしい。倦んで心に空虛を感ずる樣な時は、又咯いて見たいとすら時々思ふ。この時ほど嚴肅な自分を見出す事は他の日にはなかつた。



心まで心をはかる心なれこゝろのあだは心なりけり

隣人からは相變らず謎の樣にせられてゐた。否、解しえぬ人とせられてゐるのなら、まだ幾分の誇りもあらうけれど、全く爲すなき白痴か狂人の樣に見られてゐるらしか

つた。氣がむけば束髪の額を手拭で包んで、端をぎゆと後で結んだまゝ鎌をさげて、畑へ母のあとをついて行つたりなどした。が、大方は堤を越した裏の草原にうづもれて物思ふ事のみしてゐた。泣きたくなれば土藏にかくれて、半日位出ない事などもあつた。

この春、雨の細く降る日であつた。板の間で毛蠶に與る桑の葉を母が一葉一葉に摘みわけてゐるので、私は氣まぐれのおてつだひしてゐると藤やのをばさんが來た。何かの事で談話が子供の病氣といふ事に移つた時母が、

『一日でもいゝから子供より先きに死に度いものですね』と言ふと藤やのをばさんもしみじみとして、



秋かぜの吹からかへすくずの葉の
うらみても猶恨めしきかな　（貞文）

『ほんとうにねえ、さかさは見たくないと思ひますよ』

と言つた。

『あら、母様は私を先きに見送つてからでなけりや安心して死ねないつて、仰しやつてたぢやありませんか。』

母は私のそれには答へないで『おてうちやんより早く死なうと思ふと、私も大變忙しくなる』と言つたので皆なが笑つた。いかに私の命がもろいものにせられてゐるかゞこれでもわかる。その頃私をたづねて歸つた都の友の手紙に『たくみの手になつて美しくもゝろき花がめ、その碎けるのを見まもつてゐる人々の暗愁。——私には御宅のしんみりとした空氣がよく解る。』とあつたのを合せて思ひ

出す。

さはやかな日光が雨の樣に降りそゝいで、あたりは青く透きとほる樣な光りに充ちた初夏のある日の午後、俥が門に止まつて、不意に姉が歸つて來た。ひとり留守居をしてゐた私は、茶釜の湯を汲んで出したり、土産物を盆に積んだりしてゐると、祖母のしらせで母も畑から歸つて來てよごれた足を、手拭で拂つて上つて來られた。祖母は夜具を出すやら、什器を出すやらホク〳〵として土藏から出たり入つたりして居られる。姉の見えたのは私をもう一度名醫の手にかけて見度いと云ふのだつた。

その夜、母と姉との間には一寸した爭論があつた。

大原の朝霜



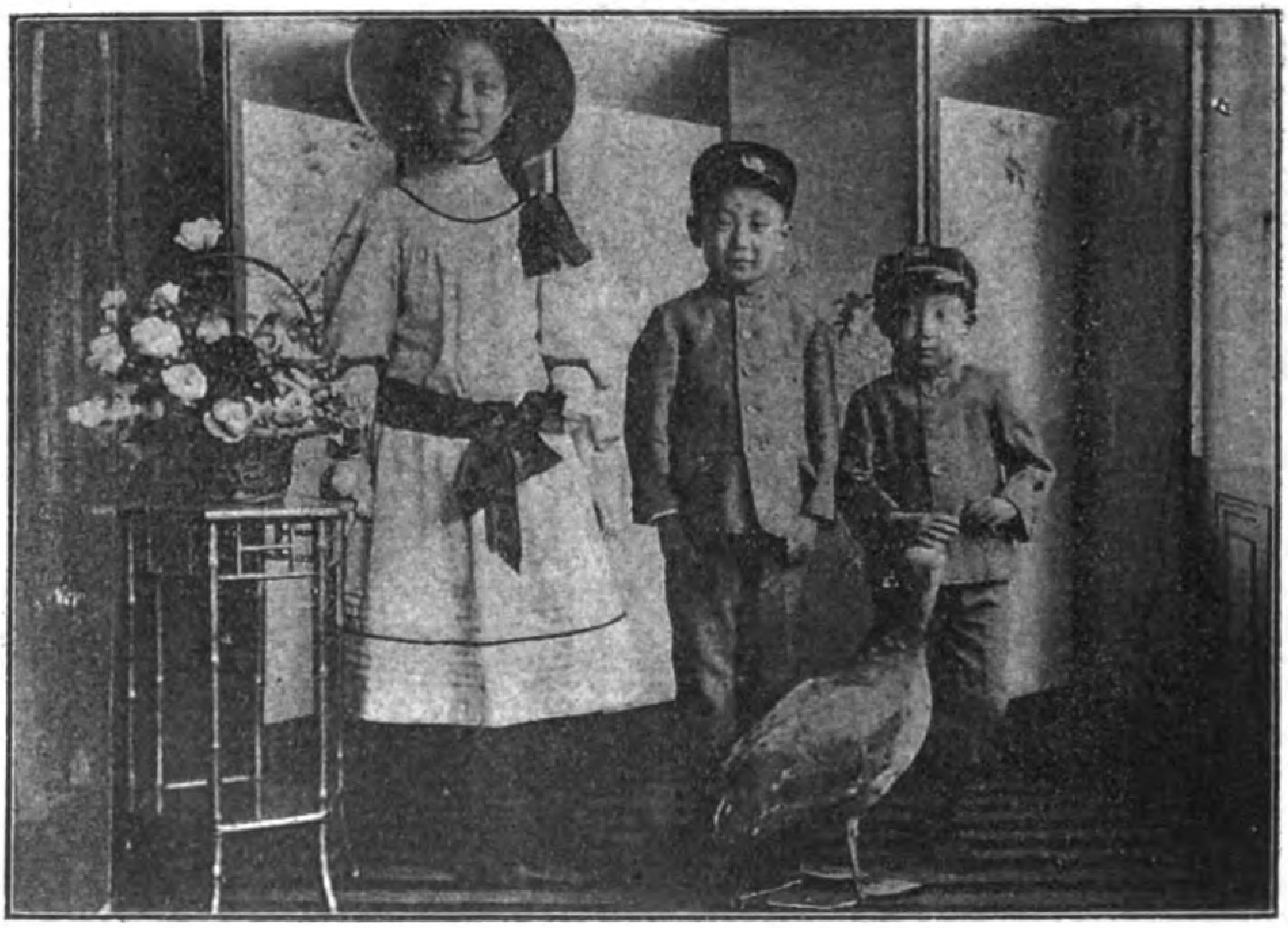
『肉身といふ情からはなれて考へても、一個の生命が自分の罪の結果といふでもない病氣のために、みすみす衰へ亡びゆくのを、手を束ねて見てゐる事は出來ない、なし能ふ限りの事はしてやりたい』と云ふのが姉の意見だ。

併し

『あてもない病氣のために、乏しい田地を失くしてまでこの子一人にかける事は出來ない。親戚の手前もある、此子は自分の手で及ぶ限りの看護をして死なせる事にする、弟の負擔をまさせる事は遠慮せねばならぬ』といふ母の言葉にも涙はあつた。自殺だけは思ひ止つて死ぬまで生きてゐる樣と思ひあきらめてゐる私に、そんな事どうでもよかつたけれど、この家の相續人の弟も熱心に希望し

てゐるとの事で私は又々東京へくる事になつたのだ。費用は姉さんが半分は持つとの事だ。

東京へ來るときまつた時はさすがに胸が躍つて。絶えず旅にある樣な私の心は、第一生れた町から離れるのが何よりも嬉しかつた。餘りに溫かい母のふところと、餘りに批評的な隣人の眼とはこの我まゝものを一日もそこに安じ得しめなかつた。憐むべき旅人――私の樣なのが人世の漂泊者といふのではなからうかと思つた。白髪垂れて母はいませど、奉養のまことを



同胞

盡すべくも思はず、寝るに家はあつてもそこに眠る事を欲しない。迷へる心、司るなき魂、泣くべくもかゝる子のまへには母は到底遠い人だつた。何の執着もなく故郷をさる日の心はさすがに悲しかつた。

病院――何といふなつかしい名であらうと思つた。人のきらふ病院の中を私は戀人にでもまたるゝ樣な思ひをして慕つた。病院の中は冷たいであらう。冷たい壁土にめくられた冷たい室の中に、獨り起臥す心の自由を思つて見るだけで私の胸は輕くふるへた。そこには病氣を忌みきらふ人

などは來ないであらう、この愚者を、世間の賢い人に比べて人間が人間の價を勝手に定め樣とする樣な、さかしら人をも見ずにすむだらう。考へ度い時殊更人と物を言つたり、泣き度い時に笑つたりする事もいらないだらうと思ふと、青空を望んで翼をならす鳥の樣な心地になつて、この薄暗い建物の中へ入つて來た。

早咲の得手を櫻の紅葉哉　（以兄）



入院後三日目の日記にかう書いてある。

『頬に觸れてみると、この頬に冷たい涙が流れてつたふ樣な感觸がある、壁よ、病院の壁よ！　私は何人とも語り合ひ度くない、私と幸福の觀念を異にするそこらの人は、どこまで行くも平行線の樣に私の心にぱつたり合ふ事を言つてくれない。私の言ふ事も皆に通じないのだ、お前は解つておくれだらう。おまへを見た時、私は久しぶりでほんとうの故郷へ歸つた樣な心地がした。おまへのその汚い面に對つて居ると、私は自分の姿をさながらに見る樣な心地がしてうれしい。私は、おまへに繪紙を張付けたり、花をかざつたりする事は止めよう。おまへもそのまゝ赤裸々になつた私の心と對つてゐておくれ。私の胸から限りもなく引出す糸でおまへの肌をかゞつてあげ樣、殊更おまへの胸こ時計をかけて置かない私の心を汲んで、おまへに對つてゐる間はどうぞ私に時計といふ事を思はせないでおくれ――』これは其日の感想を長たらしく書いた内の一節だ。今日は室の半分をてらしてゐる。私は少し眠らうと思ふ。壁よ、しばらく私を守つてゐておくれ。（十月十三日まひる）（一四八ページへつゞく）

美人畫評判記

ABC

上野竹の臺に開催中の展覽會に向つたのは、秋雨上りの小春びより、池の端の柳がハラ、ハラ、と散る好景色であつた。

例の半白堊の汚れた建物が、揚らぬ風彩を霜ちかい木の葉のあひだにそびやかしてゐる、會場前には自働車が二臺、息をぬいて主を待ち、數輛のゴム輪は程よき場所に轅棒をおろして居た。乗物に運ばれた人、電車から歩行で來た人、なか〳〵の盛況である。赤羶の草履に穿替へて中に運入れば、、、テカとした外の光線がむら〳〵とかたまつて、それより奥は薄暗く畫會特有の空氣がたゞよふてゐる。

その鈍日の中に、ポツと浮出した婦人觀覽者の帶の色が、かへつて當の畫幅を壓し氣味、三越白木の看板が動き出したかと怪しまるゝふかりである。

二百有餘點の中を蜂擇びでもする樣、美人畫々々と探し廻つて觀る。

▲蛇●線●皮●　（松村梅叟）

一人の若い美いし琉球の女が、壁のなかほどを割つた柱にもたれて所謂蛇皮線を彈いてゐる、しかも爪彈の優音である。蝦蟇口かなんかで見る、蛇の皮の鱗目のイヤな感じと赤味を帶びた全體の色とが、うまく調和されてゐる。こゝが働きと云へば働き、試みと云へば試みである。其の婉やかな顏を見て、女よ、汝は太平の逸民である。と云ひたくなつた「琉球の藝者さんだれ」と云ふまつさきの警句が中年増の奥樣の口から漏れたきり、人群りもない。

▲をどり●●●　（金森觀陽）

元祿享保ごろの若い女と男とが、盂蘭盆の夜を催かず踊り明すと云ふ繪柄、それが屛風一双を打拔いて享樂主義者の魂を天外にふつ飛すだけの値打はある、胡粉ぽい、柔かい曲線。あのとり〳〵の着物の模樣に、ゆめ見る若者の一本々々の指先きにも高鳴る血潮が聞かれさうである。だが一貫した色の流れは重く沈んでゐた、なんだか昕う悲しい夢でも見てゐるやうな處があつた。こゝには長い間口一杯に人の足をとゞめてゐる。そしてこゝでも一組の風俗畫が出來さうに見えた。

▲護●花●鈴●　（今村紫紅）

これは又同じく取材を時代に選んでゐても、櫻花を中心として豐公が老後の榮華を描いたもので、チヤンと繪の目的があらはれてゐる。だがこれは繪解の上の目的なので、ほんとの作者の心では秀麗な侍女――つまり桃山時代の美少女に刷毛を振つたものと見た。桃山時代と云へば直ぐ淀殿や名古屋山三や出雲のお國の戀のしがらみを思出すわれ〳〵にはこの繪もなるほどゝ首肯れた。繪の中の綱に結んだ鈴がシヤン？と鳴

つたら、櫻の花瓣がハラ〳〵と散るだらうと餘計な聯想を起させる。こゝでは綺麗な割合に女連の足を止める者は少なく、若いお母さんに手を引かれた子供が「綱引きだれえ」と云つてお母さんの顏を赤くさせてゐた。

▲朝顏と驛路の女（鏑木清方）

朝顏日記と云ふ物語りは、多情多恨の女性には名を聞いたばかりでもう涙ぐまるゝ。そのヒロインの瞽女朝顏が、金谷の驛路を過ぎる時そこの驛路の女どもに引止められて、これも務めの否みがたく、悲しい一曲を彈いて聞かせると云ふ圖。歌の文句、嗚咽泣くやうな糸の音、つひ我が身につまされて美しい眉にピリ〳〵ピリ〳〵と沈痛な曇りを寄せる所、さうして無人格な驛路の女の憎らしさ、息をも入れさせぬ妙味がある。構想は昔の浮世繪に何々「遊樂の圖」等としてよく見る型だが、清方さんの筆に乘つたらかうも快い情緒が動くものか。チャラ〳〵と雪太を引摩つて來た令孃が、この繪の前に立つと急にその晴れやかな顏をひそめて、しみ〳〵とさせられた風に見えた。



伊勢物語（島内松南筆）

▲楊弓遊び（三宅曾山）

慶長元和頃の武家の娘が尺餘の小弓を弄んでゐる處。色は赤と黒との對照とも云つていゝ位ゐ單純で、まあ一枚の風俗畫だと見ればいゝ、只一つ見逃されん試みは深紅の唇の中に墨を含ませた、繪畫上の化粧法である。矢拾ひの子供が可愛いゝと飛んだ處に同情を寄せてゐる人があつた。

▲隅田川（夏目利政）

梅若をたづねさまよふ狂女を主材としたものである。だが折角ながら、子を訪ねる母親の心持も、それを取圍む里人の素朴な思遣りも、少しも畫面から汲み取ることが出來ない。つまり情味がないのだ。情味と云つたところが、物狂ひのお夏が「向ひ通るは清十郎ぢやないか。笠がよう似た菅笠が……」かう云つて野を山を戀しい人の名



歌のぬし　(河崎蘭香筆)

を連呼しながら尋れ來める、近松の女の情味を云ふのだやありません。

▲●閑庭●　(島崎柳塢)

美人畫、裾模様の圖案などに一工夫も二工夫もしてゐるのは御苦勞千萬、本郷座あたりの繪看板にしたらと用ひ場所にいらぬ方寸を立てゝ見た

▲●伊勢物語●●●　(島内松南)

昔男ありけりの業平が浮氣沙汰、いはゆる河内通ひの裏である。いま頃はどこの峠を越えらるゝかと云ふ心を「風ふかば」の歌に詠つた留守居の妻の心根がいかにも殊勝らしく、また痛いけに畫けてゐる。見給へ、折からの夜をうち濕らせて、カサコソと紅葉々が地を埋めてゐるではないか。女の顔は益々冴えて、白い被衣に淡緑色の下着、花菱の模様がボンヤリ浮き出てゐる。靜かな氣分をよく畫きわけた繪である、又二つには一度は妻たるべき人の平氣では見逃せられない處に、評價以外の同情を持つた繪である。こゝは狹い室で、縁がとつた戸外の光線がさし込んでゐた、その中に後から後から女連が足をとゞめて「だわねえ」とか「可愛相」とか云ふさゝやきが聞えた。

▲髪●　(池田蕉園)

元の榊原女史が新マダム振りの意氣を窺ふもつとも大切な一幅、まづは恙なき筆路を拜して大慶の至りである。この繪も、此の人がいつも好んで畫く時代の武家の娘と老女とである。美しく結上げた髪の喜びを鏡にうつしてゐる娘の、初心々々しい表情、櫛の拔毛を始末しながら見惚れてゐる老母の微かな笑ひも、手落ちない出來である。色は以前よりよほど落ついて來たのでいつものやうにぱつと明るくはないが、それでも一脈の温味がある。器物の畫入には女性ならではと思へる纖細な選擇と描寫とを見ることが出來る、私の傍に居た令嬢組みの一人は云つた。「百八十圓、まあ安いわねえ。」

▲道●頓●堀●（西村青歸）

特別に題材のやうな氣分が出てゐるとは思へない。享保年代の若衆歌舞伎の舟遊びと云ふ甘い物、むかし〳〵大阪にはこんな男が澤山をりました。

▲日●照●雨●（北野恒富）



髮　（池田蕉園筆）

一人は稍年增女、一人は十七八の娘、いづれも素人とは見えぬ附襟の首際白く、素足のクッキリとすべてが意氣である。



日照雨　（北野恒富筆）

それが相合の蛇の目傘、湯歸りと見えて眞鍮の金盥を下げてゐる。だが繪の氣分はつまり日照雨そのものにあるので、こゝいらは西洋畫の心得で行つたものだとも云へる。黄昏のつかれた內にも、パッとした生氣が見るさへ心を引き立てるやうな繪である、誰やらが關西趣味ぢやと云ふた此狐雨に魅られたのが中々の人氣である。

▲う●た●げ●の●裝●（津端道彥）

五月五日禁中に邪氣を避くとて藥玉を作る慣しがあつた。それを主材とした繪で、美しい官女が藥玉の香高く五色の房のチラ〳〵めくのに恍惚として居る處。純土佐派の型をどこまでも尊重し、古い趣きを傳へやうとしてゐるのはいゝが、それにしてはもちつと人を魅する筆がほしい「お姫さんよ」と海老茶組がツン〳〵通り過ぎる。

▲赤・茄・子・と・芋・（平福百穗）

平福さんの日本畫だよと云へばウンさうかと直ぐ氣味の好い粗畫をおもひ出す。これも矢つ張りそれで、畑着をきた田舍の少女ゝ、それに赤茄子と芋とを前景としてうしろ一體に晝顏の花の小輪なまろで菊人形のきものゝやうにボツボツと畫いた繪だ。赤茄子だけ離して見ても芋だけ離して見ても、一つ〳〵の面白味がある。女學校の畫手本の教科書にでもし度いと思つた。



朝顏と驛路の女



（鏑木清方筆）

▲歌・の・ぬ・し・（河崎蘭香）

歌の主は誰あらう籠の中の鈴蟲である。この小さい動物を中心として珍らしさうに取圍んでゐる現代式美人の眼の清しさ、そこにも音樂の調

べがありさうである。やはり女性の觀察だなと思はれる一味の柔らかい感じがそことしもなく行き渉つてゐる。この人がもつと畫題をえらぶことに意をそゝいだならキツトいゝ物を得ることが出來よう。凹地がゝつた場所だけに人だかりは少ないが、正直の繪だと云ふ一般の評定を盜み聞きしたこれだけ見て西洋畫の方へ移る。

▲雨の日（石川寅治）

ホツと息する間もなく次は洋畫室、ガツタリと様子が變つて、四圍の壁からは沈んだ油の色が迫つてゐる。この繪は若い女が椅子に身をしやつきり揃へて、雨の日の庭を眺めてゐる處である。そのつゝまし振りの後姿で目を引くのは第一帶の紫、庭の立樹の葉末重さうな雨の心もなかなかよく描かれてゐたけれど、あんまり綺麗過ぎるのでコロム繪に近い心持ちがつき纏ふのは恨みである。

▲或る人の母（片多德郎）

はじめから酸氣も甘氣も混へぬ繪でほん正直一方の寫生である。と思ふ内にも、どこかしやんとした母親氣質の型が、一口に肖像畫と云ひ捨てゝしまふことの出來ない權威を示してゐる。或る人の母ではなくつて天下幾百萬のお母さんを一つの繪に納めたのだと云つた方がいゝやうである。

▲幸ある朝（藤島武二）

朝の窓際近く祈りを上げる金髮の少女を畫いたものである。皮膚觸りのひやゝかな朝の空氣がスーツと戸の隙間から流れ込んで、それと同じ窓からなんとも云へない懷しい光線がサツと落ちてゐる。祈りの聲は思はず高くなつた。どうしても藤島さんだ、あの亂暴な奔放なブラツシの跡に、可憐な眞意を手よく捕へてゐる、あはれ幸ある朝の汚れなき女の心よ、夕べまでも續けかし。

▲春日野（高村眞夫）

「春の日を春日の山の、高座の三笠の山に、朝離らず雲井棚引き」と云ふ人の詠んだそのまゝの背景に、盛装した天平の少女が三人遊んでゐる。此頃の色と云ひ人と云ひ、それからそれへと聯想の翼をひろげて藝術心をそゝることが出來る。だがこの繪はさう上手ものではない、惡く云つたら天平の着物が畫きたくつて描いたのだとも云へる　吳服屋の意匠部ぢやあるまいしなど云ふ人もあつた。

▲女（中村彝）

亂れ髮の少女の半裸體畫である、その皮膚の色や耳のたるみ、聰明な畫家の頭にうつつたものでなくてはならぬ。

▲姉妹（宇和川通喩）

カーテンを透して綺麗な日光が室内の明るさを保つてゐる。その中で

鼻の赤い姉が鼻の赤い妹の襟を剃つてやつてる處である。そこらに雜然と置いてある油瓶や白粉瓶の一つ〳〵が、それだけでも凝つた靜物の寫生となつてゐる。この赤い鼻が大分女群の笑ひを買つてゐた。

▲凝●視●（橋本邦助）

裸體の西洋婦人の表情、チヤームのある目が中天の星の如く一點に注がれてゐる。嬌態と云はふか、なんと云はふか、これまで此の人の繪はあまり纏り過ぎて熱が乏しいと云ふ弊をまぬがれなかつたが、今度は大いに立て直したのである聞けば同氏はこの外に猶二枚出品したのださうなが、惜むらくは鑑査の關門を通り損なつたのださうな、そこで同氏は慨然として云つた。「知己を百年の後に待つ」と。これは未だホヤ〳〵の逸話であるさうな。



暖爐の前　（中澤弘光筆）



帯　（渡邊與平筆）

▲初●秋●（三上知治）

しげみの所爲かいさゝか暗い二階の緣近く、日本髮の少女が蹲つて輕いお話の本かなんかを讀んでゐる。欄干を透して、ちよつと山の手邊と云つた樣な木立の多い屋根の街が、ハツと胸が躍るほど鮮やかに見えてゐる。極く無事な作、心地のよい畵であるいつもこの作者が鞭も打たず石にも休まず、行くべき道をつゝま

しくノシリと歩いて居るのは感服の至りである。

▲小娘（土岐芳助）

少女をたゞ坐らせて寫生したもので、別にどうと云ふ畫意はないが、こんな小品の内にも同氏の技巧を信頼することが出來るのである。脂つぽい顔色の强み、のびた筆のあと、見てゐる内に一つの糸にするくと手繰られて行くやうな所がある。アートの力、アートの力と云ひたくなる。

▲浴場にて（岡田三郎助）

一風呂浴びた女の裸體のまゝの後姿である。見ない内はよくある溫泉場の例の湯烟モヤくかと思つたが、案外さうではなく別に背景らしいものも畫かず、道具で瞞かさないのが第一結構である。審査官の繪の内ではまづ買へる方の部類である。とは云ひ條、色調の低いなんだか映えの悪いものである、要するに値打はその不斷の努力と云ふ點にとゞめを指されればなるまい。

▲暖爐の前（中澤弘光）

中裸體の女がカンく火をふくんだストーヴの前に腰かけてゐる繪、その氣持ちがまことによく出てゐた。室内の暖氣、ポーツと上熱つたからだの皮膚の色など寸分申分がない好評の一つである。

▲休憩（高村眞夫）

モデルの女が畫室で休んでゐる處である、兩肌はすつぽり脱いだまゝの長椅子に腰かけて、何か浮世繪本風の日本綴のものを開いて見てゐるパステルで畫いた綺麗な繪、ほんとに綺麗な繪である。手に持つた本には元祿の男と女の優しい繪姿をかるく浮き出させてゐるのが嬉しい。目を喜ばす繪としたらこの上もないいゝ物である。鮎瀬の如く婦人連をこゝに堰き止めてゐる人氣畫であつた。

▲白い色（滿谷國四郎）

白い蔽ひのかゝつたベツトに、白い衣服を着けた少女が寢轉んでゐるこゝは滿谷さんの畑で、情緒的な取材にシツトリとした色調がよく溶和されて、なつかしい繪である。大安組だとかなんだとかへらず口を叩きながらも、やつぱり大家だなと一寸鼻柱をくぢかれる處がある。

▲秋のおとづれ（五味淸吉）

裏庭におりたちて初秋の氣にうたれて居る、品のいゝ娘をかいたものである。その娘、パツチリした眼を持つ——それが夢二式にもならず、お姫樣式にもならず、懷しいやうな寂しいやうななんとも云へない眼なのだ。この娘の書齋にはキツト手擦のしたバイブルがあるだらうと、そんな餘計な詮索まで起させる。色彩は多少乾燥いて居るが、淡い緑、褐

よき裝に初秋の靜かな心持をよく語つてゐる。

▲本を見て居る女（相馬其一）

強いコバルト色の衣服を着た現代式の女が本を見てゐる處である。かう云つたら直ぐ想像のつく繪で、なるほど好くは畫いてあるけれど、たゞそれだけ。

▲白い原（瀬野覺藏）

夏らしい強い日光を浴びて白い花が咲き亂れて居る。そして其の原中にクリーム色のパラソルをさした女が、何か恍惚として立ちつくして居る。所、時、光線、空氣等の氣分がかなりよくあらはれてゐる。だが又何處となく弱く鈍い。これを見た女連の囁きは「なんだかまぶしいわれえ」と云ふのに對して「傘の裏が穢ないわれえ」と云ふ答へであつた。要するに女には桑原々々の繪である。

▲ある女の顔（池田治三郎）



雨の日（石川寅治筆）

どうせ堅氣の女ではない、暗い中からたゞ一つフツと浮き出た女の顔には、色街にそだつた意氣と張とを見せてゐる。目の色にも世の中の酸も辛ひも嚙味つて來た女の身上が明らかに語られてゐる。日本の女の顔をもつとも特長的に畫いたものだ。この繪の前のベンチを占領した青年組みの一人が「理窟なしに好きな繪だなあ」と云ふと「ウム、純粹の日本の婦人だ」「雜種ぢやないや」とそれぞれ管言を吐く。そこへ若旦那かなんかに連れられて來た半玉らしい娘が立ち止つて、「あらお酒に醉つた女よ」といつた。なるほど、繪の女は艶やかな顔に赤い光線を受けてゐるのだ。

▲髪（寺松國太郎）

裸體の女が、丈なす黒髪を背中にたらしてゐる圖。綺麗には違ひないが安つぽい。むかしむかしその昔、ピンヘツトかなんかに入つてゐた卷莨の寫眞を大きくしたのだと云ふ酷評が湧くのも致方がない。

▲病婦（柳敬助）

見た目には勿論愉快な繪ではないが、病にわづらふ女の感じがよく出て居た。とりわけ腭から下の色の落着き具合がたまらなくいゝ、がここには不幸立ちどまつて觀て行く人は少なかつた、まさか傳染病でもあるまいにと一寸可笑しくなる。畫題は何處迄も美しいのがよいと適切に思はれた。

▲フウセンダマ（石川伊十）

ヨヘイさんにでも畫かせたらと思はせる取材、紙フウセンを持つた女の子が、魂をそのフウセンダマの中にうちこんでゐる無邪氣なものである。こゝでホッとして、眼を休めてゐる人が多かつた。

▲帶（渡邊與平）

二十三四の瘦ぎすの女が、紺地の着物を着て今空色に白抜きの模樣のある帶をしめてゐる處。だらりと疊に這つた帶の端、だが決してけつして體をもち崩した女ではない。主ある花か、それにしては未だどつか我儘な人擦れのしないところがある、さは云へど處女のはにかみも持つてゐない。謎の女と云つて終ふほど赤



讀書（渡邊ふみ筆）

同題になる女でもない。色は一體に淡く明るい調子でこなしてある雜誌のコマ繪にも此頃こんな女が盛んに出て來るよと云つた人があつた。

▲讀書（渡邊ふみ子）

ふみ子さんは與平夫人である。夫の君が昨秋の文展に出した「ネルのキモノ」とお揃ひの着物を着た女が、鹿爪らしくバイブルかなんか小形の本を讀んでゐる處、一寸氣が利いてゐる。こゝでは大分女學生組の目を引いたらしく「背の君の感化よ」などとさゝやき合ふ聲が聞えた。

これをさめに、美人畫のつたひあろきを了つた。押し出される氣持で戸外に出れば、パッとした別の世界。會場前には自働車の數が増えてゐた。

茶の花や鶯の子の鳴き習ひ　浪化

朝寐して出れば小春の天氣哉　李由

鳶の眼と馬の脊



司馬蘭子

△風變りの別居生活

良人は美術學校を卒業てから今年で五年あはれ當年の天才も片田舍に許りくすぶつてゐては、想は古びる腕は鈍る、新らしき技巧なんて駄目なんでせう。

其ですから、今年の夏休みは、視察旁研究の爲めと云ふ觸出しで、本邦美術の淵叢たる京都で過す事と成りました。御存じの通り、洛陽は、新婚當時燃る青春にまかして、華やかな、印象を留めてる地、私共のこゝろの歷史にはアンダーラインの地と云ふのに憧憬してと云ふのでは有りませんが、一度私の眼に入つた舊都の面影は忘れんとして忘れ得ず、三十六峯匂ひ立つ京の山水を戀ふる事久しと云ふ曰く付きの土地なんですものね。何條此好機を逸して大人しくお留守居役を勤める事が出來ませう。私獨得の良人操縱術美ん事功を奏して、漸と三年の想が此に適ひましたの、曰く多くの同窓友の中には、當時流行の伯爵夫人こそ在さざれ、慈善會の自由劇のと、輝く面華やかに一世を時めき給ふ貴婦人もあるものを、石入の指環、有職の御帶一つ強請るでも無く、瘦せ藝術家に連れ添うて、手鍋提げても厭はぬ風情殊勝らしとて、此度の隨行おゆるしが出ました、其はね、避暑は鎌倉箱根の別墅に爲るものと思し召し給ふ人々に取つて、何の此式の事、お胸を飾る襟止一ッ撰び給ふよりもいと容易い事でせうけれど、でも、私共の樣な貧乏世帶で以て、二人連れの五旬の旅行は實際良人の大英斷で御座いました

嬉しさに氣もそゞろ、旅裝もそこ〳〵、鐵路一百里を

思出多き平安の都にと運ばれたのは、打殺く烈日に流石ひつそりとした京の街も、塵と埃に渦なして、時々通過る自動車の音が、さながら砂漠を走る巨獣の聲とも聞きなされる、ある日の午さがりで御座いました。私共の身分では、第一流の旅館に就いて、天晴當世の紳士貴女を氣取ると云ふ贅澤は無論出來樣筈も御座いませぬが、よしや其が出來能ふとした處が、少なくとも、俗惡と云ふ事を厭う私共に取つて、さ程興ある事でもありませんでした、何か一ッ斯うひねくれた生活がして見度いと、頭を惱ましましたね、其は確に、何時かの大晦日に、七つ屋の土藏に藏つて有る良人の禮服が引き出されないで、扨て明日の新年を什麽仕樣……と二人膝突き合はして頭ひねつた時以上だつたと信じます、處が天も此私共の企を贊し給ひてや、之に所謂私共の理想生活を爲すに、お誂向の家が有りました。

　處は洛北下鴨の片ほとり、遠目には三十六峯一際目立つ叡山を使つて、背景はこんもりと茂つた雜木林、垣根に添うた藪際には、瀬をなして流れる溪流がせゝらぎまはつて、朝な夕なを白手拭に三幅前垂れ丸ぐけの襷白の手甲脚袢と云ふ、お約束の姿した花賣女が通るだら〳〵坂を下りた處、其處に私共の見付た埴生の宿はあるのです。

　荊棘垣打ち廻らして床しき萩の枝折門其邊一面露もしとゞの八重葎生茂つて筧の水の音する邊り浮萍に黑づんだ、池には、蓮の破葉が二ッ三ッ四ッ浮んでゐました、蟲聲水の如く、靜寂なる處、霧不斷の香を焚き、月常住の燈をも掲ぬべき小やかなる草の庵、其こそ、彼の詩人氣取りの蓮子樣なんかに見せたなら屹度〳〵、おー我宿よわがやどよ……でも唸り出すでしうよ。え？、其崩れ掛つた壁の上には、屋守が匍つては居なかつたつて、どうも貴女何か駄目よ、凡人だから。

　其を想ふと良人は話せますのね、一目見るなり、之だこれだつて手を拍つて喜こびましたもの。私は此樣な誂へ樣たつてめつたに出來は仕まいと思はれる、お

誂通りの家が、如何して有つたかと、涙が溢れる程嬉しう御座いました。其も其筈で御座いませうか、つひ近頃迄、世を拗ねた若い美くしい尼様が、朝な夕なを御佛に事へて、行ひ澄まして居なさつた庵だと申ますもの。

　何は兎もあれ理想の家が發見つたものですから、在京の友人方の御親切や、足らぬ處は夜店物か何かで間に合せて、何うか斯うか、茶の所謂侘の住居が一ツ出來上りました。



　花いりまへんか花入りませへんか——

　朝涼の森の中から、一種の野調を帯んだ聲の大原女が語り交はして行く、朝な朝な夕な〱秋草模様のモスリンの單衣帯は白絽に良人が筆を揮つた墨繪の芭蕉思ひ切つて大きく畫いたのを、かつちりとお太鼓に結んで、洗髪を其儘後へ長く垂らして、スッキリとした肩の邊りで緩く紺色のリ

ポンで結へて、眞白な素足には燃る樣な緋鼻緒の三枚草履と云ふ私一流の出立ちで、前のさゝ流れに、繪筆洗ひに出る姿を通る程の人が見返らぬ者はありませんでした。「何者の風流ぞ」「心憎き振舞や」此を聞く私は、餘り惡い氣持ちも致しませなんだ、然し〳〵、幾ら通がつても、日々九十五度九十七度の熱度で以て照り付けられては、流石の私共も少なからず弱らせられました。其かと云ふて銀盤に盛つた花氷、旋風機、安樂椅子佗の身には何もなにも駄目でした。

△清流に枕して自然の琴を聞く

月の都の山蔭の賀茂の宮居にはよく行つたものです。千古に立てる松杉檜の大樹が、鬱蒼天を摩すると樣に、掩ひ重なつた暗綠色の木の間から、燃る樣な丹塗の樓門、檜色の宮居、見るから壯嚴の極みでした、廣々とした綠の草原の間々を、底の石も、躍る魚も、數へ盡くされる樣な淸い〳〵小流が音たてゝ流るゝあり、此處彼處に緋毛氈敷かれた掛出が仕繕へて有つて、三幅前掛の裝ひ飾らぬ鴨の姉さん達が、茶を汲む風情も凡ではありませんでした。

私共は、八月の强い日光を避けて、椎の大木の根方に腰を下して、足下の露草弄り乍ら、甘美な甘美な物語りも致しました。持つて來た詩集も耽讀しました。其して誰憚らぬ、高い聲に唱ひました。バナヽもかじりました。其が飽いたら、良人は夢見る樣な眸に、綺麗な羽色の蝶の行衞を恍惚と眺め入つてゐる私の橫顏を、寫生して呉れました。折から此畫面には態はしき、目の醒める樣な空色や純白の洋裝のスカート長う石竹色の頰をベールに包んだ、華やかな歩み振りの丈高き西洋婦人の幾群や、畫板を肩にした若い美術家も通つて行きました。隨分遠い中京邊りからも、驅引と暑さに喘ぎ疲れた身體を、せめて一日の凉に忘るべく來て居る實業家連も少なく無いので、此處等邊には、見馴れぬ粹な人も見えました。夏を書入れの檜垣のお茶屋には、祇園新地で名高い此妓彼妓も交つて見えま

した。が然し流石此あたりには人聲も微かに、柔軟き綠の敷物涼しき木蔭、默想には以て來いで御座います。

ぢつと、斯う眼をつぶつてゐますと、光麗かな春の日の、若草萠る神苑に、落花雪と散る裡に、數多の女房に取まかれて、上﨟姿若く美くしき明石の前と、町娘小枝の楚々とした姿とが、神前に額いて戀の成就を祈る樣が、さながら、極彩色の繪卷物の樣に、浮んで參ります……

…………………………と「お前彼樣のが羨ましくは無いの？」突然良人の頓興聲!!

美くしい、幻



は夢の樣に消えてしまひました。吃驚して目を開いて向ふを見ますと、如何にも……！

私だつて女ですもの、桔梗色がかつた色の絽縮緬の御單衣に、金絲織りなしたおみ帶胸高に、白金の鎖燦爛く指環、それは〳〵、慄へつき度い樣な好い恰好の丸髷、クリーム色の洋傘に日光を避けて蓮歩嫋やかに運び給ふ貴婦人振り見た時は、流石私の此胸も、少しは波打ちましたよ。然し

然し、其も瞬時、生來の負ず魂は何の容赦も無う「左樣ね、彼樣な綺羅びやかなのも好けれど、あの一絲亂れぬお髷には、暑くるしい梳き油の香も致し

ませうに、私は、わたしは、ダリヤの濃艶より、桔梗の清楚が好いですわ」。伏目に成つて水引草弄りながら。良人は只默つて微笑つて居ましたつけ。

△研き出す京女の膚

御手洗の色も涼しき夏かげや〳〵糺の森の御手洗の水の美くしく冷つこいこと！ 掩ひかゝつた楓の緑がうち映えて、翡翠の玉を溶した樣、此んな水で白粉溶いて、朝な夕なのお化粧したら、私だつて〳〵美人には成つて見せるわ、と人知れず力んだのでした。お化粧で想ひ出しました。京一番の櫻湯と云ふのへ參りました處、所謂京式の細長い又ヌッペラとした顔の眉のあと青々と美くしい年增や、若い娘樣が幾つも〳〵並んで盛におめかしをして居ました。まア磨く事〳〵よく〳〵數へて見ましたら、糠袋が顔面へ丈け、百五十七遍當りました、大枚三錢の湯錢拂つて來てる以上、心行くまで磨か無きや損だと云ふ樣な顔して――去らぬだに、烏の行水の私は、先客樣の手前、幾度湯槽へ派入り直しをした事でせう、とう〳〵指の先が白く濕大けて來たので、根が盡きてお先きへ失禮致しましたがね…日頃から木綿の糠袋何かで、ゴシゴシと柔い皮膚を摩擦しては、表皮を壞し眞皮をむき出すものなり、と云う衛生家の言を信じて居る私は雪の肌の京美人諸姉のため、内々寒心に堪へられませんでしたが、其は私の杞憂に過ぎませなんだ。やがてお磨きも濟んでコッテリとした湯化粧に、スラリと姿見の前に立つた京女の羽二重肌は、依然として淸く美くしくスべ〳〵として居ました。玉磨かざれば光無しとは眞理ですわねえ。其して私は、物數寄にも、女湯に來る程の人の金盥化粧籠を一々覗いて見ました、お白粉は御園、洗粉はクラブ、石鹸はアイボリー、に大勢定まつた樣でした、廣告の力も大きいのね。私は思ひましたよ。本朝女の隨一京美人の雪の肌を標榜して、都の雪とか京の花とか云ふ化粧品を、盛んに全國に賣り出したらと、案外京都人に商賣氣の無いのを惜しみました。御免遊ばせ。ま大變談が横道へ走りましたこ

と。其所で話を元へ戻して。

△光度の弱いイルミネーション

扨て小隠は山に栖み大隠は市に栖むとかや。私共だつて、何も仙人がつて人間を恐れると云ふのではさらさら有りませぬ、随分人並に賑やかな俗の世界も見て来ました。其内最も深い印象の殘つて居ますのは、左樣大文字山の大文字位でしたらう、盆の十七日の黄昏頃から、今日は大文字だと云ふので、



特別念入に美くしく装ひ飾られた少女達や、くすんだ色の細い縞物なんかに、白丈長の高髷コッテリとお化粧した娘さん――あんなのが純粋の京都式の娘さんだから、よく見て置き給へと良人が注意して呉れました娘さん達の中に交つて、人波に揉まれ揉まれつゝも、出町橋の上に立つて好奇の目を瞬りながら、遥か東に聳ゆる有名な大文字山を望みました。待つ間程なくそら大文字だと云ふ人々のとよみの聲！なる程大文字です、左樣、何の事は無い。遥か中空にぶら下

つてる光度の弱い大と云ふ字のイルミネーションだと思へば、大した間違はありません。是は大文字のみでは無く、之と同時に北方の山々にも船の形だの左大文字妙法と云ふ樣な文字も現はれます。之は山の中腹に大と云う字の形に松明の如きものを多く並べ、之に一時に、油を灌ぎかけて、火を點じるのだ相で、山の麓の村人達の、精靈送りの習慣だとか申します。文明の世の精巧なイルミネーション等見た目には、子供欺しの樣でもあり、案外詰らぬもの丶樣ですが、今を去る數百年以前の大昔の人々の思想に成つた、人工のイルミネーションだと思うと、又なく面白い物なので御座います。

△紅提灯と花電氣

京の夏の景物には是非無くてならない四條磧の夕涼が今年からなくなつたので、橋行く女の美くしい姿を見る事稀に、誠に淋しう御座いましたが、其變形とも云ふべきものが嵐山納涼會となつて新に今年から出來ました。どんなものかと之にも月の好い頃を見計つて、夕景から出掛けました。無論二人連れ。二條から、嵯峨行の電車に乘るとほんの暫くで、嵐山に着きます。ぞろ〳〵とはき出される群衆に交つて、下り立つと、景氣を添うる紅提灯や、花電車やで夏の夜の嵯峨は晴がましい程明く美くしく御座いました。例に依つて嵐山名物、櫻團子や櫻漬、ひさぐ店からは、盛に聲ふり立て丶客を呼んでゐます。此處を通り拔けると川の兩岸軒を並べた氷店の赤い灯が風に搖れて水に碎くるのも時にとつての美觀でした。渡月橋の半ばあたりに指しかゝると、清凉の氣が浴衣の肌に迫つて、眞夏とは思はれぬ快さ。橋を渡り盡くした處の廣場には、樂隊の調べ賑やかな、活動寫眞、落語、名古屋美人の手踊り等無料で見物さすと云う趣向。私共は此等をも、興ある事に思つて、一々覗いて見ましたが、何時か知ら二人はつと人込の中を潜り拔けて、木下陰の細徑を、川に添ふて上へ〳〵と歩んだのでした。流石の群集も此處等迄は來ぬと見えて、人々のどよみ

の聲も微かに〳〵、聞えるものとては、岩礁に激する速瀬の水の音許り、二人はひたと寄り添ひました。

△歡樂の夢を破る秋風

下絃の月が大悲閣あたりの松の梢にかゝつて、西山はたゞ黒う〳〵、保津川はたゞ白う白う、心行く極みでした。二人は多く語りませんでした、其して二人二樣の想出に耽り乍ら・・・・

斯くして樂しい沈默は二人の間に續



けられました。あはれ嵯峨野の山よ、川よ、思出は涌くよ三年のまへ、陽春や昔の花ざかり、新婚の歡樂に醉うた二人が其夜から、蜜月の旅に上つて花に狂へる双蝶のごと、三月が程を夢の樣にたゞ夢の樣に――

――忘れもしない此あたりで、未だ十七の花姿、人目をさけてあの岩角へ、燃る想の青春き二人が四の袂に櫻の花片がハラハラと散りかゝりましたつけ。

思へば三年は夢でした。突然、蛩聲が起つて大木の蔭から、若き學生がドヤ〳〵と夜の靜寂

を破つて行き過ぎる。私は思はず胸を冷して、良人の傍へよりました――あら御免遊ばせよ、まア私とした事が内藤様に云はしたら、其んなお甘い處黴びの生へた羊羹ぢやあるまいしと嘲笑られるかも知りませんが――だつて私自身が新派の女主人公となつて、お甘い所を味はう事の出來るのが、たゞもう無性に嬉しくつて／＼堪ら無いんですもの、まあ此なにしてすつかり、貧乏世帯何か忘れて仕舞つて、うか／＼と暮して居ます內、木犀の香りが庵一杯に高くなつて、ぞろ／＼秋風が身に染みて參りました、良人が西の國へ歸らねばならぬ時が來たのです。

垣根を流れる水がいよ／＼清く澄んで、眞萩白萩野菊の樣ざまが亂れ伏して、庵の初秋の趣が深うなり勝るにつけ、私の歸心はいよ／＼鈍る許りです。思ひ餘つて私は願ひましたの。今暫く此儘の生活が續け度いと……其は私の我儘からですけれど……想へば私達も結婚してからもう三年、靑春の胸の血潮もそろ／＼醒めるべき時、其は私共の愛の泉は汲めども／＼盡きぬものとは云ひながら、同じ濃度の愛情を不斷に消費ては、何時かは涸れる時が來はしないでせうか、私は其を恐れる。

鯛の刺身もビフテキも、相變らずの三度ではねえ、時には新漬のお香々でさら／＼とかき込む、お茶漬が戀しくもなります。其所で初めて此物語りの題目に致遂しました。曰く夫婦別居生活……愛情の濫費を防いでいつ／＼までも濃やかな語らひを繼續け度いと云ふのです。人或は私共の此企を突飛なりと嘲笑かも知れませぬ、然し／＼私共は決して恥ぢませぬ。私共は或信念に依つて決行した事ですから……其所で私は又もや雨の晨風の夕庵の丸窓に倚つて西行く雁に物思ひ。と云ふ二度の戀を味はう事の出來る身となりました。良人は潔よく、私と一人の小女とを殘して、西の國に歸つて行きました。

あるときはありのすさびににくかりき別て居れば戀しさも倍します。思はじとすれど猶思はるゝ……私も隨分物好きね、此んな苦勞好でする苦勞ではありま

せんか。あら何誰？　其んな憧憬式は止めて、もつと質實な思想に歸れつて仰るのは、……ほゝゝ私だつて其位な事、百も承知して居ります。何せ大阪男が京女を女房に持つたら、一身代出來るとさへ云はれてゐる位の處ですもの、京の女は食べる物も食べず昆布や鯡や湯葉を最上の美食と心得て、けち〳〵として蓄めた金で夷切れ買うて、女の子の美服作る事に心を碎く其苦心や、着物の裾の擦り切れるのを恐れて姫御前のあられも無い裾を捲くつて大道を歩く事や、少し田舎へ行くと百姓の女房たちが、キリヽとして三幅前だれ甲斐々々しうも男子の爲る事何一つ出來ぬ事無く勞働は神聖なりと云ふ事實現してる事や、私の心ひそかに敬服してる事も少なくありません。が然し。私何も年に一度の夏休みを、此樣な肩の凝る研究に來たのではありませんもの。平安朝の匂のする、堂塔伽藍たゞ繪の樣な舊都の面影に憧れてゐれば好のでした。やがて膝の上へ可愛きものでも乗せる樣になつたら、其れこそ天樂園!!!　萩の枝折戸へ襁褓でも干す樣になるでせうよ。

とは申ますものゝ、此んな破天荒な生活が何時まで續けられます事やら……やがて寂しさに堪へられなく成つたら別居生活何て甲を脱いで逃出して歸つたら好のですわ何と氣樂なものでせう。

やがて、都の秋色が深くなり行きて、洛中紅の錦もて包まれる頃に成ると、美術展覽會見に良人が上洛る筈ですから、嬉しい其日を指折り數へて待つてゐますのよ。

幸か不幸か貧しくこそあれ、今までは大した逆境にも沈んだ事のない私共は、平凡な順境に飽きて順境の外に超越したいともがいて居るのです、そもや私共の此境遇を、何と名付けたら好のでありませうか？





乙女の一日二日

花筐

暖たかい日影が長閑にさして、緣に解き物する私の身體を萬遍なく包んで吳れる、着物の綿が少しづゝふくらんで、何だかもう袷にしたいやうだ。

ぷつつりと鋏を當てゝ糸を拔く、絹糸は涼しい幽かな音を立てゝ私の指にからまつて來る、からんだ糸を白い厚紙の上へぽつとりと落すと糸の綾が紙の上にもつれて繪の樣に美麗くしい裏地と表地とをはなしてゆくと、パツ〳〵と小さい綿のほこりが立つ。

日光を受けた右の半面は火の樣に熱くほてるので、くるりと向きをかへて坐ると、庭を後にして了つたので、何だか目の先が暗くなつた。その上左の目の端を日がまぶしく射てくるので今度は日光を背中に浴びて坐り込む。

さアいよ〳〵始め樣とすると鋏が無い、立つてばた〳〵と膝をはたく袂を振る、胸をおさへて後を見る、ない！　どうしてもない、解きかけの布を一つ〳〵取り上げて見る、それでも矢つ張りない!!　!、お終ひに座ぶとんを引つ立てるとチヤリン……。又坐り直して鋏をとる、もう口をきくのも厭！　舌の先にうるほひがなくなつてゐる、何だか眠つて了ひさうだ。

「お孃さま！」

勝が傍へ膝をつく。

「お手紙でございます。」

返事をしやうとしても聲が出ない。

「お孃樣！、あの此處へ置きましても宜しう御座いませうか？」と重ねて……。

「あゝ有難う！」

皺枯れた聲がやう〳〵に出る。

「何處から？」

「左樣でございますねえ、……あゝ番町のお孃樣からでございますよ」

「えゝ？　文江さんから？」

あわてゝ手に取り上げた。

御機嫌お宜しくつて？　と書いてある、土曜日から泊りがけでゐらしつて頂戴と書いてある伯父樣伯母樣にどうぞよろしくとも書いてある





十一にしてはなかなかよく立つお筆だ。土曜日と云へばもう明後日!、別段の用事もないから母様に願つて出かけませうと思ひ立つ。

解物は其儘にしてお手紙持つた儘、母様の許へ伺がひにゆく、丁度獨逸の叔父様へのお便りを認めてゐらつしやるところ、おめに懸けて伺がふと二つ返事でゆるして下さつた、そして叔父様への表書をついでに一寸書いてお呉れと仰有やる卅様からもお禮申し上げて置いたけれど結構な物を頂戴したのだから、お前からもよくお禮申し上げればいけませんよとのお言葉に、そのお手紙を頂いて、居間の文机に寄る。

先づ筆洗に水汲み更へて繪筆を取つた、文江ちやんによく似たお下髮の少女を描いて、繪の具の筆を文に走らせる。土曜日には屹度行きます、一時頃になつたら御門の外へ出て待つてゝ頂戴・姉様は門の柱に靠れてゐる文江さんの可愛い姿を見るのを樂しみにして居りますよ、いづれ明後日ねえ、左様ならと書いて筆を置く。

叔父様へは水色の玉章用紙、同じ色の小さい狀袋に入れて、母様の御便の中に挾む、表はペンの走り書き、學校よして了つてから、叔父さまへの手紙の外、書きつけないので字が亂れる。

二つを手に持つて立ち上つた、母様へは襖越しに「一寸郵便出して參ります」と申し上げて、內玄關の下駄突懸けて外へ…。

郵便を出すにしても一町から行かればならない、だから市外は厭だと云ふんですよ、それに私宅なんて引つ込んで居るから尙更…。

切手をはつてぽとりとポストに投げ入れる。かうして落ちた郵便物の上へ、落ちてゆく私の葉書は、上を向いてゐるかしら下を向いて居るかしらなんて、くだらない事を思ひ續け乍ら、霜解路を歩いてゆく。もう春の聲がかゝつて、桃が咲かうとして居るのに、まだ往來は氷つてゐる。

門を入ると馬のいなゝきが聞える、おや!もうお父様はお歸り遊ばしたのだらうか?。玄關先で臺所口から出て來た馬丁にばつたりあつた。

「もうお父様お歸り遊ばして?」

「へえ先刻!　今日はお早くお退けで御座いま

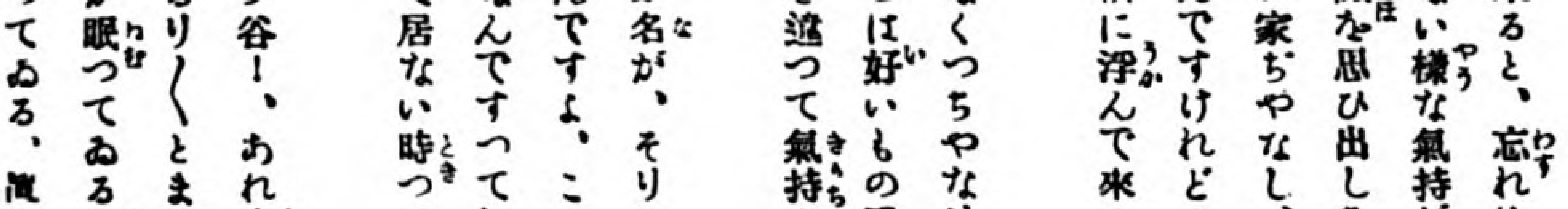




した」といふ
「御苦勞だつたわねえ」
にこ〳〵笑つて二つ三つ續けさまにお辭儀をして、馬小屋の路に姿が消える。
…………。
茶の間の襖を靜かにあけて
「只今……お歸り遊ばせ」
何だかわからないことを云つて頭が下げる。
「うむ」
お父樣のお顏は莞爾と微笑んでゐらつしやるけれど、御返事はそつけない。

△

お父樣のお出ましを大玄關の式臺にお見送り申し上げて、扨お掃除をするお洗濯をする。
早晝をすませると、昨日結つた桃割の鬢の毛撫で付けて、すぐ支度をする、母樣からのお菓子折と、私の編物の箱とを風呂敷に包んで我家を出た。
吾妻下駄なんてはきたくはないんだけれど、郡部の路はそれでなくつちや歩けませんもの、純白い足袋爪先氣にし乍ら、道を新宿の青梅街道へととろ。
私は何時でも途中まで來ると、忘れ物でもしたやうに、何だか物足りない樣な氣持がするんですよ、そして母樣のお顏を思ひ出しちや泪が出ます。もう歸つて來ない家ぢやなし、どうして悲しいのかわからないんですけれど……優しい母樣のお顏の私の目の前に浮んで來るのですもの―。
甲武電車だと澤山歩かなくつちやなりませんけれど、屋敷街をあるくのは好いものですよ、それにまた電車が市街のと違つて氣持よく走るんですからね。
私この青梅街道つていふ名が、そりやもうすつから氣に入つちまつたんですよ、こゝの踏切け開閉の烈しいので有名なんですつてね、何時だつて車や馬の立往生して居ない時つてありませんわ。
……代々木！　千駄ヶ谷！、あれ木が走る家が走る、走つたのがくるり〳〵とまはつて見えます。枯草の奥に小兎が眠つてゐる樣、解けきれぬ雪が一かたまり殘つてゐる、眞實に此處





らは寒いんでせうねえ、木の蔭草の蔭、日光なんてちつとも當つてやしませんもの!。

「お孃さま!　誠に恐れ入りますが、坊主の帽子をも少し上へまくつて下さいませんか」

隣家に居たお婆さんが私に云ふ、目付の可愛らしい人だ、寢んねこにくるまつて、暖たかさうに赤ちやんが背負ぶされてゐる。

立ち上がつて手を伸ばさうとすると

「帽子が大きう御座いましてねえ」

と云ひわけがましい。

何と云つて好いのかわからないので、たゞ默つて捲くし上げると、玉の樣な……それこそ玉の樣な赤ちやんの顏!

「まあお可愛い坊ちやんでゐらつしやいますことねえ」

私は先刻から、このお婆さんに對す乘客の支打ちが不快でたまらなかつた、子供を負ふた見すぼらしいこの老婆が千駄が谷から乘つた時、誰もその半座をわけてやる人はなかつた、漸々にして私の隣へ腰かけても、人はまだ賤しめたゆうな疑ぐり深い目付で見る、たとへ縞目はわからなくつても垢なんてついて居ない、繼は當つて居るけれど、綻び一つ切れて居ない床しい人となり!　いくらよく心がけても、美くしい衣を着て居なければ、かうした席にも肩身が狹い、着物で人を區別する人が憎らしかつた。

私はかうした時、無暗に反抗してみたくてならぬ、よくない癖だと思ふけれど、私は不親切な人の前で、殊更に大切にかけてやりたかつた

「よくまア笑つてらつしやいますのねえ」

私は覗き込むやうにしてあやして見る。

四つ谷で降り樣とするお婆さんに

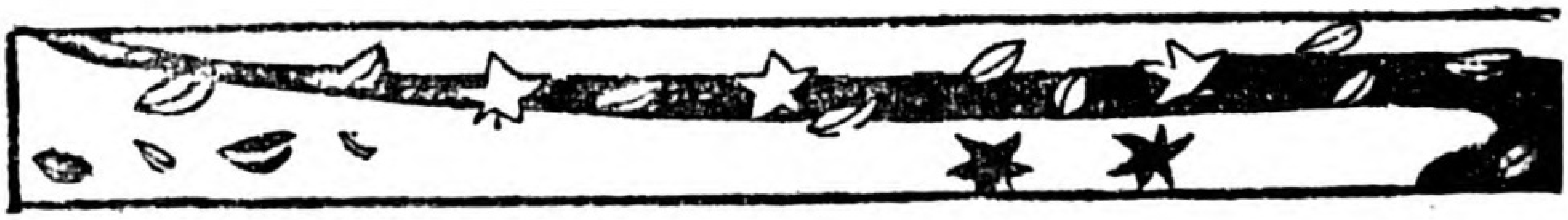
「氣を付けてお出で遊ばせよ」

と聲を懸ける。嬉しさうに莞爾……、丁寧なお辭儀を殘して車臺を降りた。

横の窓から眺めると、こちらを向いて佇ずむお婆さんの笑ひ顏!　私も微笑んで小さく頭を下げる。

電車はきしり出した。

市が谷の改札を出ると、大きい時計がぼんと一つ鳴つた、文江さんは待つてゝ下さるだらう急ぎませうと左の包みを右に持ちかへて足を早





める。

カラ〳〵と後から車が來る、車をひいた小僧さんは、「何て間がいゝんでせう」と大きな聲で唄をうたふ、おゝ厭！　この番町の屋敷町へもあんな唄が流れ込んだのかしら？　文江ちやんの清い耳へあの聲がきこえたかしら？。

餘り大きい聲で調子をとるので、私の足はつひそれになじむ、歩調が節に合つて了ふ、おゝ厭だ……。歩調をゆるくふむのがむづかしいので、私は駈け出した。文江さんの邸の銀杏の木が見える、塀が見える御門が見える、あれ文江ちやんが門の柱に佇ずんで居る。

「文江さん！」

「あ、お姉さま！」

「學校は？」

「今退けたの！」

「母樣は？」

「奥にゐらつしやるわ」

「葉書ついて？」

「えゝ昨日よ」

ざく〳〵と小砂利を踏む。

「靜かだわれえ、まだ誰方もお歸りにならないの？」

「兄樣達とれ、武ちやんと英坊とは植物園へ行つたの！　小坊と環ちやんは駒とお裏に遊んでるのよ」

「さう？　ま呑氣だわれえ、姉樣は文江さへ居て下さりやいゝんですもの！」

「私だつても姉さまさへいらしつて下さりや、誰も居なくつていゝわ」

「ホヽヽヽ」

文江さんの長い袂から、紅夕禪の繻絆の袖が零れる、艶々しい黒髪に映ゆる、美くしいとさ色のリボンを葺つてか純白い胡蝶が上に下にもつれ合つて舞ふ。

霜さへて千鳥なくなりみよし野の
淸き河原の明方の空（頓阿）





姉と妹

若紫

學成塾の塾長に芳江さんと峰尾さんといふ美くしい娘がありました。

芳江さんは快活でいつも華美なおつくりをしてゐました漢學者氣質の頑固なお父さんも、沈着た利潑なお母さんも手掌の玉の芳江さんに我儘を言はれてこまつて居ることが度々あります。着物の配合や髪の結ひぶりに浮身をやつして、苦勞といふもの知らぬ娘生活、身も心ものんびりと春うつくしい我世の花を、雙手に一ぱい摘んで芳江さんは美くしい夢の中に溶ける樣な日を送つて來ました。

質素好きな峰尾さんは姉さんの樣に見えました。

生れ落るとお母さんが大病のため、他人の家に生立つた八年間の月日は知らず〳〵生の父母との間にへだての垣が結はれて、幼い時から氣兼ね氣苦勞を味つて來ましたから、姉さんの樣に若々しい心の芽も充分に吹くことができませんでした。

男の子持たぬ夫婦は、姉娘の芳江さんに、よき聟がねをとあまねく塾生を物色して、えらび出したのが高也さんといふ、いかさま先生のお眼鏡にかなつたゞけあつて、無口で、眞面目で、勉强家で當世の學生には珍らしい人でした。然し、活世間へ出て奮鬪するにはもう少し才がほしい、正直過ると思はれる、また風采もあまりよい方ではありませんでした。

お茶の水出身の才媛、殊にハイカラ好みの芳江さんは、婚約當時から始終厭だと言つて居りました。

望月に缺けたることもない玉の胸に、一點のくもりはこの一事ばかりでした。

峰尾さんは兄さん兄さんといつて、よく英語の解らないところ等をきいてゐました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

高也さんが首尾よく文學士の稱號を得た秋、いよいよ芳江さんとの結婚式を擧げることになりました。愛娘が一生一度の晴れ衣裳、振袖や留袖の重ね、めざましい丸帯も出來ましたのに、芳江さんはどうしても婚禮はしないと言つてゐました。

お父さんもお母さんもいつもの我儘が角をだして甘へ半分言つてることゝ思つて、少しも取合はず、ずんずん準備をして親類知己へも通知をしました。

お祝の品は床の間に山と積まれ、疊屋が來たり、植木屋が這入つたり、いよ／＼當日となりました。

厳かな式場には電光燦と輝いて、禮服裝ふた親戚の人々が居流れて、羽織袴に威儀を正した花聟も、設けの席につくばかりとなりましたのに、化粧部屋では大變なさわぎ嫁御寮の芳江さんは、鏡臺の前に泣き伏して、眉はけ持つたお母さんの顏は眞青でした、憤怒、當惑、後悔の念に口も利けぬお父さんは、末廣持つ手をぶる／＼とふるはして居る。

騙しても、嚇しても、宥めても、すかしても、芳江さんは厭ですの一點張。

と言つてこの儘にはすまされぬ。

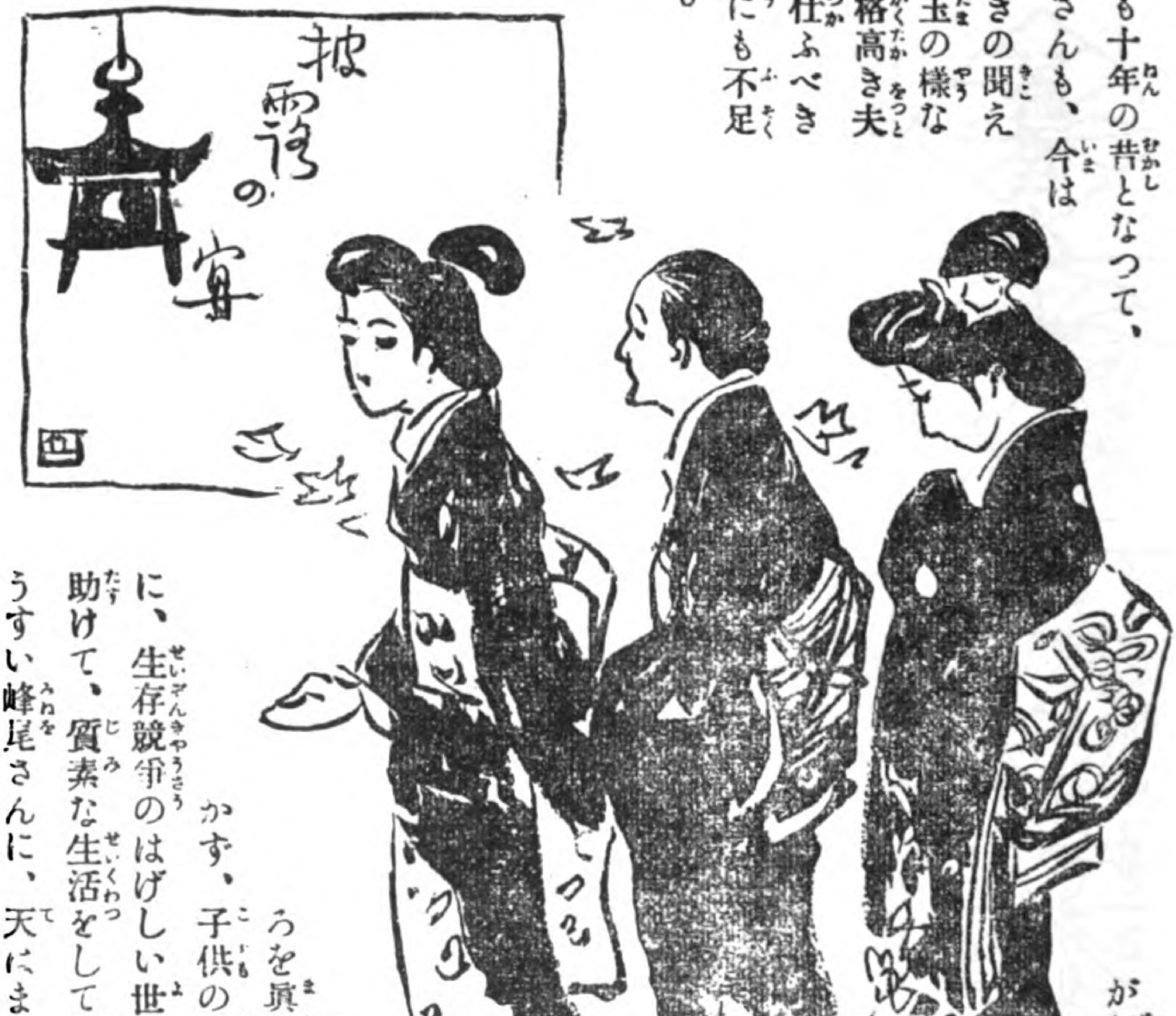
兩親が涙ながらのたのみを、素直な峰尾さんは厭と言切ることが出來ませんでした。

溫厚篤實な高也さんは、恩師夫婦が謝罪を打消して快よく許婚の人を思切つて、峰尾さんとの結婚を承知しました、家のため、親のため、姉さんのためと、けなげにも身を犠牲にした峰尾さんの白無垢姿の神々しさ。麻の樣に亂れた胸に、はさんだはこせこの銀のくさりの末に、舞ふ胡蝶はあやしくおのゝいて、盃持つ手に一雫、／＼清い處女の涙、永久に變らぬ妹脊のちぎり。高砂やこの浦舟に帆をあげて、月もろともに出しほの。と祝ひ納めて式は滯りなくすみました。

この小說の樣な事實も十年の昔となつて、今は兩親をこまらした芳江さんも、某會社の顧問役、腕利きの聞えある中田法學士夫人、玉の樣な坊ちやんのお母樣、人格高き夫の愛を一身に荷ふて、仕ふべき舅姑も戴かず、物質上にも不足のない、幸福な身の上。

慈愛あふるゝはゝその陰より、浮世の風の辛さも知らず溫たかい園生にうつし植ゑられた芳江さんは、ほんに運命の神の寵兒なのでせう。

さても夢の樣な奇緣に結ばれて、人妻となつた峰尾さんは、兩親



が相次いで世を去つた後、東北のさる中學校へ赴任する、夫に從ふて都をあとに寒い〳〵山國の人となりました。

早この時には二人のお母さまでありましたが、都育ちのうつくしい物腰格好、色めづらしい片田舍では異彩を放つて見えました。

鳥なき里の何とやらマダム振つても見たいところを眞面目な峰尾さんは女中も置かず、子供の世話やら炊事洗濯も手一つに、生存競爭のはげしい世には不向きな學者肌の夫を助けて、質素な生活をして居ました、生れながらに幸うすい峰尾さんに、天はまたもやなげきをあたへまし

た。

北山おろし身にしみて、かりそめの風邪に床についた夫の高也さんが、輕からぬ胸の病をひき起して、職にも堪えず臥床三年。

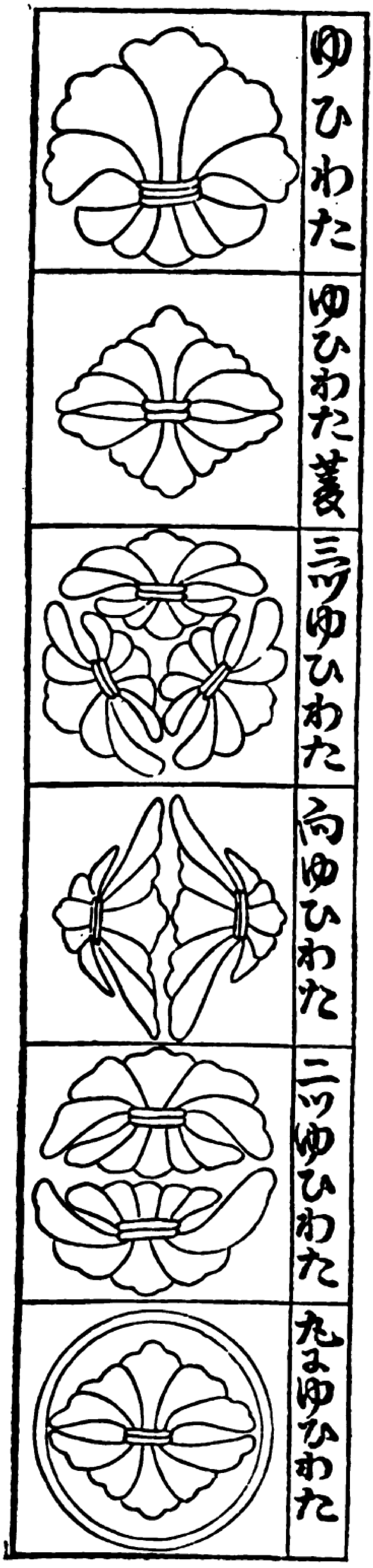
若干の貯へも盡き果てゝ、藥價滋養物の代はもとより、生計にせまる一家の境遇、峰尾さんは夫の病を看護の傍ら、他人のすゝぎ洗濯、針仕事までしました。洗ひざらしの木綿着物に櫛卷姿、これがまあ、矢絣の袖ながくゆたかな髪をふつくりとルイザに結んで居た令嬢とは誰が思ひませう。

この苦しさも、この辛さも、夫の愉快を願ふ心に打消されて居りましたが、四年目のみぞれ降る夜、まだ若い高也さんは、つひに亡き人の數に入りました。

忘れ形身の幼子を抱へて殘された峰尾さんは張りつめた氣も力も失せて、放心した樣に知るべの人のなぐさめも、はるかに書をよせて同情のあふるゝ樣な姉さんの眞情も、心には留まりませんでした。

四十九日の法要もすんで、迎ひに來た芳江さんは、不遇な妹と薄幸な二人の遺子の手をひいて東京へ歸りました。

寒い、淋しい山國に、辛い運命の手にさいなまれたうち若い未亡人の峰尾さんは、羅綺粉黛の都のさまをどんな思ひに見た事でせう。





弱き心よ!

夕かげ草

十一月十日

昨夜から變つた臥床に、まんじりとも仕無いで夜を明した。

誰彼時、灰色の中に、刻一刻と明らかに、浮出て見える室の内の調度は、床の上壁際などに、雜然と取散らされて、俄なわたましの周章しさを語つて居る。

移轉!

此事については成るべく考へ度く無い。ベットの上、雪の白絹の羽布團に埋まつて、平靜に平靜にあり度いと思沈める心に反抗して、過去から未來にわたる、一卷の繪卷物を目の先に突付けて、想へ〳〵と切りに責める曲者が、胸の底に住んで居る。斯して私は痩るのだ。淋しさに堪へかねてほの白んだ窓を開けて見る。暮れ行く秋の朝風は、冷りと肌にまとひ付く。窓にかぶさる破芭蕉を透けて、物古りた池の水が白く光つて、心忙しく蟲の音がする。何處とも無くぢつと瞳を落して、泣いても見度い心を、力一杯こらへて居る。

泣き度い! 聲の限り!!

さうしたら胸に堪まる幾重の雲も少しは散らう。零れる涙をそつと隱して、殊更に笑つて見せる……自分の弱點を人前にさらすのが口惜しさに……幾年と無い習慣に、今は左程辛い業とも思は無いが、忍びかねる折もある。

邸の内のあちこちで雨戸を繰る音がする。はつと我に返つて身のまはりを見廻した。

木の香かほる檜造り。俄普請とは云へ、床も柱も、お父樣御自身木口をお選びに成つた。私にとつては金殿玉樓であり、敗軍の將の隱家である。あゝ私は……千代野がゆり零れさうに、洗面のお湯を溢てた湯桶

を持つて來た。

「まあお殿樣のお早いお目醒め。お住居がお變り遊ばして、御氣分もお宜敷いので御座いませう。」

と獨で極めて居る。お目出度い譯だわ。

今朝はミルクばかりを僅に取上げて、片付けの間を書院へ臥床を移す。

登代も千代野も忙しいか、折々顏を見せるばかり。

今こそ我世。人前を粧ふ假面を取つて捨てゝ、赤裸々の我姿を見るべきの時。私は何時からかこそ云ふ無人の境を求めて居た。けれども僞多い世に、僞の人で有らねばなら無い運命を持て來た私は、もう〱立派な虚僞の人に成りおほせて、昔一點の塵も穢れも許さ無かつた、純白の我身を今更かへり見るのは空恐しい獨居の身は、目に見え無い何者にか追窮される想がして：：。

昨日までの住家だつた新座敷では、鐵槌の響や鋸の音がかしましい。修繕就るの日：：。午後鳰樣が訪ねて下すつた、お父樣もいらした。

「今迄お姉樣のお机の御座いました、彼の丸窓の下はよろしう御座いますのねえ。障子を開ければ、お縁の向ふは秋草が亂れて、晝でも蟲が啼いて居りますわ。私彼所で物語の本でも讀み度う御座いますわ。」

「あのお新座敷一棟は、安彥樣とお二人の天地ですもの、ねえお父樣。御相談の上どうでもいゝ樣に成すつた方がよう御座んすわ。」

鳰樣は眞赤に成て差うつ向いた。昨日結つた初島田の後れ毛が、白い頸に亂れて艶なのも憎い。

體溫卅八度。異狀無し。

十一日

明方から糠雨しと〱と縁も疊も踏む爪先が冷え冷えする。冬の來るのも間近い！

此樣な日には流石に、豪傑の繁高樣厚樣たちも、朴齒の下駄に御院殿のぬかるみを蹴返して、此笹の葉の根岸の里まではいらつしやら無い例だ。淋しい日は愈愈淋しい。

寢ながら居間の内を徐ろに觀察などして居る處へ、

鴻様が來られた。お父様の御命令に依つて、日に一度は必ず訪ねる筈で有つて見れば、強ち無聊を慰めようの、厚いお志と云ふ譯でも無い。

「明日三越から見本を持つて參りますから、お姉樣もお造り遊ばせよ。是非ねえ。私模樣は曲齋さんに、お舊藩の城山を、思切つて奇拔な筆つきで書いて貰はうかと存じますの。如何でせう。」



此様な事より外に苦勞は無い人、先づ賛成を表して置く。

「お姉樣はどんなのに遊ばすの？」

「あゝ私？此様な病人が新調の御紋付なんか、引張つて見たつて初まら無いぢや有りませんか。一昨年お揃へに拵へたのさへ、一度も手を通さ無いで有るんですもの。お構無く……一生に一度の晴の時ですもの思切つて華やかな思出をお殘しなさい。」

「私、申譯無いと存じます。」

此人の口から、此樣な詞の出たのを初めて聞いた。

「いゝえ鴇樣。惡く取つては困つてよ。あの親族會議の時も、皆樣の前で申したでせう。病み疲れた體には高松家を脊負て立つ力が無いのですもの。夫よりは自分相應の、負債をはたられ無い、氣樂な世を送り度い。お父樣も其思召なんです。もと〳〵叔父樣のお家なんですから。鴇樣へお返しするに不思議は有りませんわ決して其樣な事を考へ無いで頂戴。考へてはいけませんよ。戸籍上鴇樣の母樣ですもの命令しますよ。お母樣の云ふ事聞か無いで、此次そんな事云へば灸ですからねヽヽヽヽ。」

同窓の○樣は帝國劇場の花と呼ばれて、お姫樣になつたり、西洋婦人に扮したり。時には海女にも乞食にも成ると云ふ。萬一私を舞臺に立たせたなら、乾度立派な女優に成れるに違ひ無い。泣くべき時に笑ひ、可笑くて堪ら無い時も、巧に泣いて見せる事が出來るから…。

半日は此樣なお芝居で日を暮した。

雨は上つたが誰も訪ねては來なかつた。

居間の床脇に据付けた高蒔繪の書架を、寢室の枕に近い所へ置き直させる。つひ顏をそちら向ければ、草艸紙やら物語の本やら、其一部一部が懷しい思出を語る。

懷かしい幼遊びの友！

奉書刷の彩色美しいお姫樣奥女中お腰元。一人〳〵を手近い人に擬へて、自分達の世界の縮圖の樣に思つて見た。其頃の罪の無い麗子が目に浮ぶ。感情を表にし無い陰鬱な兒で有つたが、豐かな頰と漆黑の瞳と、房々と肩に掛る黑髮の持主で有つた。亡き祖母上貞祥院樣は貴族の血を受けた兒の淑やかさよと、召使などによく仰せられた。そして大江戸の昔紀州家からお輿入れの有つた折、雲助唄賑はしく、東海道の並木蔭を下つて來たお手道具の一つの此書架を、私に遺して逝つておしまひに成つた。米のお祝も間近いお年では有つたが…總て懷かしい人は走馬燈のやうに、私の傍

を馳けて過ぎた。お母様はお顔も覺え無い。十二まで育てられた乳母は、常陸へ嫁に行つて、難産で亡くなつた。廣い家にお父様と二人きり、多くの召使に圍まれて淋しく薄暗い日を送つた。淋しかつた幼語りは止めにしよう。

夕方厚様からお端書が來た。明日大擧して君の病床を驚かしに參上可仕候。と例の蠻筆を振つてある。可愛いゝ愉快な人。あゝ明日は日曜日。

體温八度。

十二日



樂天家の鳰様は、日の光を悦ぶ群雀の様に、しめやかに澄んだ朝の空氣を傳つて、賑かな笑聲が聞える。手に取るような話聲の一つ一つが、勞れた脳に響いて堪へられ無い朝の目醒めの物憂さは、三歳餘りの一日も變る事は無い。熱は七度七分に降つたが氣分は昨日も一昨日も同じ事。

上野の鐘が九時を打つた

「麗様、お目醒め。」

聲を聞か無いでも夫と定まつた力足のどしばた。眞新しい角帽が借物に見える、初心な安彦様繁高様を先

鋒に、後陣の厚様、道彦様は、向ケ陵の擬的さん。稀さか病室の單調を破つて、新しい生氣をもたらすのは此人達のお蔭に外なら無い。

「昨日はねえ。ベースを見に行かうと思つて居た處が雨でせう。いま〳〵しくて學校へ行つてもつまら無いから、厚君と目的も無く、池の端から廣小路へ出て、初めて博品館へはいつて見ましたよ。麗様も未だいらつしやら無いの？　夫れぢや僕ばかりが山の手の山猿と云ふ譯でも無いんですね。」

「あゝ私は病人ぢや有りませんか。較べ物にしては無理よ、人一倍大きな、別誂への朴齒の高足駄で、がらん〳〵天井へ反撥させてお歩きに成つたら、小商人が吃驚して見ましてせうねえ。」

「エ、見るの見無いのつて、辨當を喰べて居る女が、箸を捨て口の邊をこすり〳〵立つて來て見るんです、全く勸工場と云ふものは、客に注意するものですねえ。」

と道彦様は妙な事に感心して居る。

「何風體がよく無いから、怪しい奴だと思つたのさ。」

「お兄様ぢや有るまいし。」

「おつと兄弟喧嘩は成りません。」

「イ、エお姉様。」

厚様は何時からか、かう呼んでいらつしやる。

「道彦君は玩具屋の前へ行くと、定まつて立止まつて終ふんです。さうするといゝ椋鳥が引懸つたと思ひますからねえ。喰べかけの辨當も投り出して何ぞ如何樣つてやつて來ませう。其返答が振つてます。僕に弟か妹が有れば皆買つてやるんだがなあ彌次さんて云ふんですからねえ、僕はきまりが惡くて〳〵仕樣が無かつた。」

「止し給へ〳〵厚君。例のを出そうか？　麗様お土産を買つて來ましたよ。」

「まあ私に？　嬉しい事ねえ、博品館で？」

「エ、鳥渡此ボタンを押せば開きます。」

方三寸許りのクロース張の小箱。四人が顔見合せて殊更眞面目を粧ふのが小氣味惡い。好矣。何もお座興

かつがれてやりませう。一寸押へて見る。蓋がパッと跳返ると目の前を流星が飛んだ――と見たはバネ仕掛の滑稽人形！鴻樣も來られた。元氣の好い人が後へさがつて物も云へない。安彦樣には變つた樣子も無いのに之だから女は厭だ――自分も女だけれど――

『鴻樣にも持つて來ました。之はお部屋へお歸りに成つてから御覽なさい。今開けてはいけませんよ。』

新聞紙で包んできり〳〵麻糸でからげてある。

『鳥渡拜見よ。好い事よ、構は無いわっ』

『いけませんよ。』



『好い事よ。』

引たくつて開いて見ると、硝子箱にはいつた飯事道具。誰かさんは赤く成て逃出した。

登代が岡埜の栗饅と、根岸名物の笹卷鮨を、うつ高く盛つて持つて出る。繁高樣の曲喰が初まる。

『もし。笹の葉だけは召上ら無い方が好くつてよ。』

之が最高の學府に、政治だの法律だのと、小むつかしい事を四角張て論じて居る方かと思ふと可笑しく成る何時までも若々しい男の氣持が羨しい。

此樣な馬鹿々々敷い騷ぎにまぎれて、お晝には食堂迄引張り出されて、何時に無くおいしく頂いた。

行拔けの縮り無し。只もう笑つて騷いで、淺薄な奴と人は云ふかも知れ無い。自分ながら空々しいと思ふ事は始終ある。こんな風に私を一日々々己を晦まして終るのだ。彼の陰欝に育つた私が、一轉化かうした性格に移つたのは、病氣の不治を悟つた其日から。自暴では無い。決して。それ程狹い心では無いつもり……

夕方打連れて歸られた跡の寂しさ。

ピックリ箱の御返禮を考へながら夢に入る。

十三日

お朧樣はお仕合せだ。お體がお弱いのを、從三位樣はどんなに、おいたはしく思召すだらう。子爵家の女王と成ては、內外への氣あつかひは並大抵では無い。其御苦勞をさせ申すがおいとしさに、お鳰樣を御養女にして御隱居に遊ばした。しかも澤山のお化粧料を添へて……氣樂に思ふまゝの世を經るとの出來る、お仕合せな御身分。

お鳰樣も御運の好い方。御前のお兄樣――御先代樣――のお子とは云へ、奥樣のお腹の若樣がお逝去の後今の從三位樣が御順養子になられた。それから後、ふとお侍女のお絹がお持ち申たのがお鳰樣だ。本來なら日陰に育つ瘦桃のお身が、子爵家の華と匂ふも叔父樣のお情け。しかもお朧樣のお弱いにつけ、御先代へのお義理も思召して、御一家の安彥樣を迎へて、お世繼になさると云ふ。何と云ふ御幸運なお鳰樣。

世間の人はこんなとを云ふ。

獅子頭を冠つて舞ふ子猿を見て。嘻樂しげに舞ふよと云つて見よう。人は實に嬉しげな手振り足取りと同じるだらう。又假に、一片の食物故に詮方無く踊る悼ましの子猿と云はう。胸を打つて噫哀なる哉。口腹の慾に踊らされる子猿と、眼をうるませて云ふだらう。

兎に角に、「我は不幸なり。」と思ふ其一事が、既に不幸なのでは無からうか。私は片親でこそ有つたれ、順境に人と成つた。悲境に有るべき鳰樣は、私の行くべき明るい道を、一歩一歩進んで行くのでは無いか。總

ては鳰様に奪はれた。

つくろはず告白する！

高松家の女王としての富も望も自誇も、昔描がいた幻の華は空しく散つた。泣くべきか此時、笑ふべきか此時。むしろ肉體の樣に弱い心を持つて居たなら幸福だつたかも知れないが。餘りの口惜しさに、かへつて小鳥の樣に樂しげな唄を唄つた。そして矛盾した性格を自分で拵へ上た。

ひどく勞れた。

午後から風立つたのが、今此日記を書く枕邊の雨戸へ打付ける野分の物荒び。痛快！ 痛快！！

十四日

庭木が根返りをしたと云ふ。垣が倒れたと云ふ。瓦も少しは持つて行かれた樣だ。哀なのは、舊の住居の庭に咲いた白萩の倒れ伏したとの話。鳰様と千代野に扶けられて、庭續きに行つて見る。

「何時のまゝで、お草履を召す事でせう。」

と千代野は涙ぐむ。

名殘の風に裏木戸が、ギイと煽られてはパタンと締まる。柱に寄つて好奇に外を見渡せば、近い農家の垣が破れて、あらはな庭には燃えん許りの雁來紅。取澄した紫苑。芙蓉やら尾花やら其所へは野分の風も見舞はなかつたが、亂れた樣子も無く美しい。傍に繪に有る砧打ちの姿其まゝの老婆が、のんびりした調子でトーントーンと槌を打おろして居る。千代野はかう云つた

「御覧遊ばせ。あのお婆さんは毎日せつせと布を織つては、あゝして晒して居るんで御座いますよ。息子達が今時そんなまだるつこい事をする者が有るもんかつて、よく笑ふさうで御座いますが。何。私の織つた布は、お授け下さる水と



お天道樣のお光で白く成るつて、平氣で相變らずやつて居るんで御座いますよ。熱心な信心家で、お正信偈なんぞを、聞き覺えで讀むと申ます。文字を讀むんぢや御座いませんからねえ、向ふ向けでも横つちよでもお構ひ無しで御座いますつて。」

「あらまあ隨分滑稽ねえ。」

と鳰樣は笑ふ。聲に驚いて婆さんは、現代とは何の關係も無いと云つた樣な、おつとりした眼をこちら向けたが、さつさと自分の仕事をして居る。何とも云へ無い崇高な想に囚はれた。信仰……嗟純にして篤き信仰……あれこそ神に近い人で有らう。私は……私は……彼の人の靴の紐を解くにも足らぬ俗々人。かうして居る内も、淨瑠璃の前に立つ心地がして、堪へ難く醜い自分が恐ろしい。思はずぶる／＼と震へた。

「お姉樣。御氣分がお惡くて。さあ歸りませう。」

何の想も無さゝうな鳰樣は、少しずり下つた頸卷を上げて下さる。茶席の裏手からもう足が竦んで歩けない。千代野に負はれて臥床に歸つた。

神！　佛！　大能の御手に、もし此一人を救ひ能ふなら、其御救を法力を以て、信じさせ給へ。此病軀はもう、胸の重荷に堪へられない。意地も無い。我も無い。今此時、光の國へと導く者が有つたなら、假令夫が鬼でも夜叉でも誘はれて行くだらう。弱き心よ！　弱き心よ！！



ちがひ大根　巴り大根　ふた又大根　一ツ大根　丸に立大根



△女と謎

女はその身其儘にて大なる謎にこそあれ「女とはなあに」とし云へば、誰も解かまほしうは思ふれども、得解く者あらじ。

女の美しう着飾れる、又は若き男などに逢ひたらんとき顔紅うするなど、謎と云はで何といふべき。

女は自ら謎なるのみならで、たえず人に謎かくるものなり。然も其謎も口にて云はで目もてかくるこそ恐しけれ。

若き男などの女の謎解かんとて物狂はしきまでに打ち騒げるは、實に氣疎きものなり。謎解かんとする男の多くは馬鹿者なるに、謎かくる女のすべてはすれ者なるこそ可笑しけれ。

△女と指

總じて女の手足は小さきこそよけれ。されど病などにて痩せ果てゝ指などの骨と皮ばかりなるは蛙の手にも似て醜し。白きふくよかなる指にダイヤの指輪の餘りに太からざるが一つ輝けるなどは、あの手握りたらばなど思はするものなり。

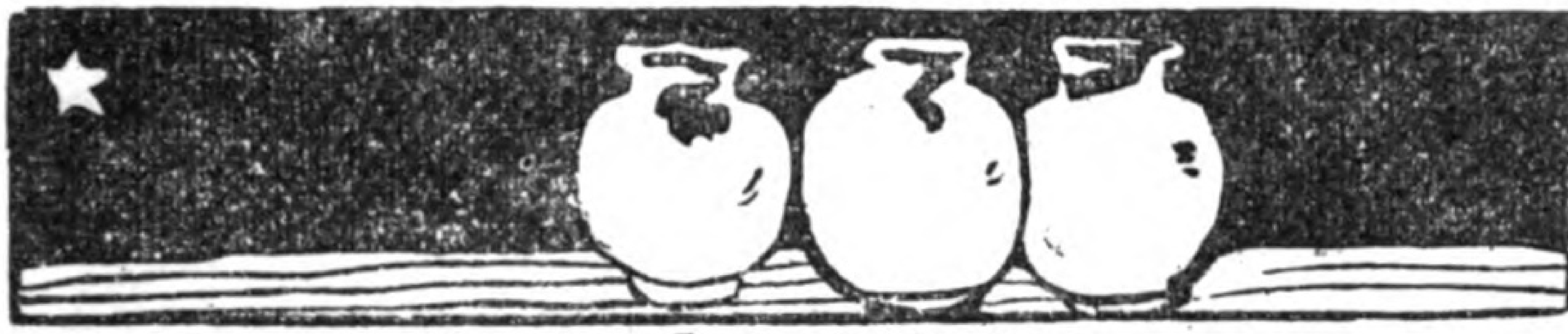
指の餘りに肥りたるは水仕事する女にもなど思はれて　現代の女性らしからず。指尖の細そりしたるこそ女らしう嬉しきものなれ。まして唇に濃き墨の跟ある女の指尖を少しく墨にて汚したるなどは、戀しき人に玉章書きたるやなど思はすることもあるぞかし。

△女と妬

男にも女にも妬なき者はあらじ。妬みは人の性なれば、止むべくもあらず。妬なき女など妻としたる男ほど、世にも哀れなるはなし。妬心あればこそ女は男に可愛がらるゝものなり。

なれども妬心を夫婦の間に止めず、美はしき衣着たる女を見ては妬み、己れを悪しとや思はれもせんなど思ふては人を妬むなどは憎らしう思はる。

夫婦の中なればとて、餘りに妬心の強きは、犇々にも似てすさまじきこゝちさる。



燈火のもと

こうばい

△蟹の肉

夏の末つかた、房州は館山に二日の旅をなせし事あり。夕げの膳に大きやかなるむしり蟹のそへありしを見て、われ、珍しうも肉のあることよといへば、宿の女中のうちゑみつゝ、今頃ならば味もよう御座んすが、もう少し先へいつてお月さまが美しうなる時分にはずつと味がおとります。なぜといふに、臆病ものだと見えまして、お月さまの好い晩には、砂地にうつる自分の影を見て、びくびくするので痩せますさうな……といふに、こはおもしろき話しよと思ひしが、何となう、月夜の濱をわびさまよふやせ蟹のあはれな姿のおもひうかべられて、つひに箸をつけで下げぬ。

△胡瓜と木瓜

ものゝ本に、木瓜の花とありしを見て、並みゐる生徒に、きうりの花とよみきかせ居りしは、さる國文の教師なりき。

△白瓜と茄子

このごろ國文に志しそめし人の、八百屋の門にたちて、あのしろうるりとおなすびを。

△リンコルンの名

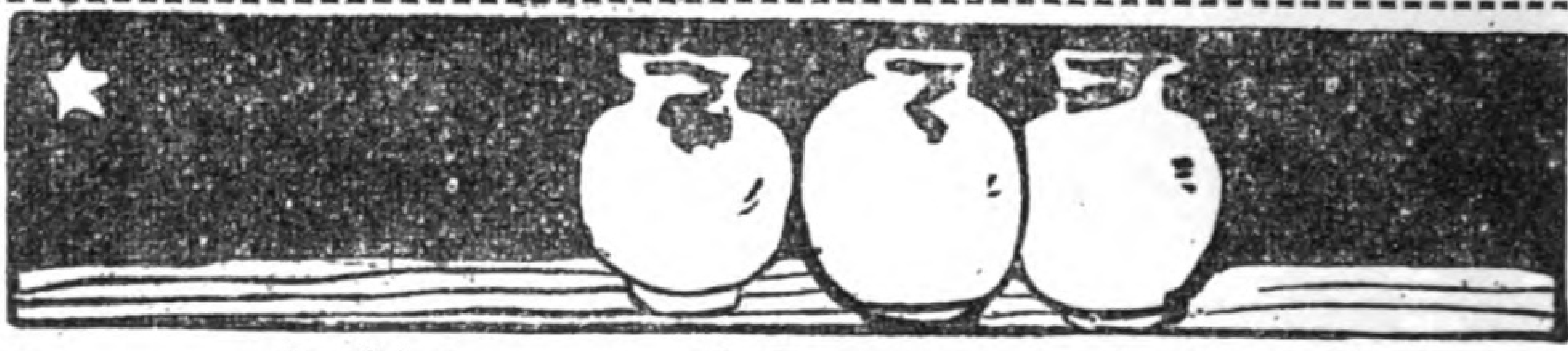
リンコルンの傳記をよみ終りたる後、人にはなしてきかせ居りし男のいかなる拍子にや、初めより終りまでホルマリンにて押しとほしたるがありき。

△主婦のたしなみ

某女學校出身の若夫人あり。夫の誕生日をいはふため、日ごろ親しき人々をまねきて、手料理をすゝめけるが、をりふし夏のはじめなりければ、夫人は料理をいだす前に、蠅よせのため、洋皿に西瓜を切り、砂糖をふりかけて、室の一隅にさしおきしに、友の一人、もとより心おきなき間がらとて、ヤ、これは好物でとばかり、忽ち食卓の上へとのせたれば、夫人はハッとおもへど色にもみせず、妙なものでお恥しう御座いますが、お口にさへ合ひませば結構で……とのみ、ほゝゑみつゝも、ただちに同じ品をかずつくりて供へければ、中にても心ある人々は、たしなみふかき夫人の德をそゞろにたゝへけりとなむ。

△氣障男

氣障の二字にて通りものとなれる男あり。幼きより商家につとめ、中より、學生となり、のち又銀行員となる。従つてものごしもゐゝのごとかりしが、此の人つれに七寸口明のつゝ袖を



着し、いかほど高價の反物を求むるも、かつて是にならはずと云ふことなく、裏にはをみなと同じ紅絹をもちひゐたりしが、ある年のはじめ、黒の紋服をはじめて並袖にて仕立てたるに、模樣は富士のすがたを熨斗目になし、下着はあらき青海波を見せ、同じ羽二重の羽織の裏は無雙にして、松に羽衣天人のかかりたるさまを、いと華美やかに染めさせ、いづれの宴會におもむくも、醉ひにまぎれたるさまして、一々脱ぎすて居たりきとなむ。

△入齒と乳齒

洗ひし入れ齒を再びはめんとするをりから、居あはせし幼な子の、ふと見つけて、お祖母ちやん、齒がぬけたら椽の下へなげて上げやう、ぢきに好い齒が生へるから。

△口輪とブエール

犬に口輪のきびしかりし頃なりき。幼き兒とうち連れて散歩のかへるさ、かなたより二三人外國人のきたりけるに、その中にて網に面を掩ひし婦人のさまを見て、姉ちやん。彼の人は喰ひつくからだね。

△とこぶし

江の島よりの土産にとて、おくられしとこぶしを煮て、貝のまゝ鼠入らずにいれておきしを、ちらと見かけし小僧の、なりをうかゞひ忍びよりて、一つつまみかけしに、生憎うしろに足音のして、主人のかほの見えければ、こゝに百計つき、いきなり手にもちし貝を投り出して、しつ〳〵、畜生々々。

△ものは聞きやう

ものも聞きやうなり。月かげ、しもの色、ともに白くてりそへる冬の夜を、撥音冴ゆる新内のながしの、とりやうに依りては、食事すませし後にても、天ぶらくひたい、又は、ちんころ踏んだともきこゆるとかや法華宗の團扇太鼓の、一貫三百たゞ捨てたと響くも、角力の太鼓の、入る時には、ドンドと入りこめ、出づる時には、カタ〳〵出てゆけてん〳〵ばら〳〵ときこゆるもをかしきに、おすはと云へる臆病女のありて、霜さゆる夜な〳〵を、閨の戸ちかく、細くしはがれたる聲にて、おすは殿〳〵と、絶えてはつゞきつ呼ぶものあるに、そゞろ魂をひやし、つひに堪えかねて他へうつり住みしのち、よくきけば、そは、うどんやの爺が、おそばうどんとふれ歩きしなりといふ、など、かゝるたぐひのかずある中に、ことはりせめて異やうなるは、わが門を朝な〳〵かゝさで、七色唐辛子、大がらに中がらと太き聲にてよびありくがあり。いくたびきゝても、七色唐がらし、ドーンガラリ、チンガラと聞こえて。

△半可道

半可通の人、さる宴席にのぞみ、老いたる藝妓の、吾妻八



景を唄ふをきゝ、かたへの人に囁きて曰く、堅にも中々澁味があるし、何時きいても好い淨瑠璃だれ。

△バナヽの價

每度、バナヽとバナナマをとりちがへる伯母の、森永の菓子をつゝんで出せしに、マア大さうハイカラなお菓子だれえと云ひつゝ一つ味を見て、オヽ却々おいしいこと、失禮だけれど一つどの位するのと問はれ、心やすだてにつひ價をいへば、眼をまろくして、えつ、ぢや餘りお旨しくも無い。

△三人の智慧

衣類の土用干しをなせし時、三人の女中にいひつけて、紋のあて紙をつくらせしに、一人は一枚の半紙を六つに裂きてあてがひ、他の一人はきつかり、、、、と六つにたゝみて鋏を入れぬ。殘る一人はと見れば、後者のごとくなせしに、尙手を加へて紙の四隅を小さう截ち落し、紋にあたる方へ、眞綿すこし伸して綴ぢつけたるを用ひ居たりき。

△自轉車乘

自轉車に乘りならひの若もの、一日、ひろ場へ出でゝ、落ちては乘りのりてはまろびつゝ稽古の最中、ふとした拍子に、車は勢よくはしりいだしたれば、馴れぬ身のかなしさには、うつかり飛び下りて怪我でもしてはと、たゞ足にまかせて方角もさだめず、うれ〳〵とゆく後より、知りあひの人の、電車の窓より聲をかけ、オヤ、御上途ですな、今日は何方へと問はれ、若ものはひしとハンドルにしがみつきしまゝ、はい此ぶんではどちらの方へ參りますやら。

△膾を吹く

とある水菓子屋の店先に、空荷車のおきありしが、なりふし通りかゝりし小按摩いまだカンの定まらぬにや、あなやと見るまに、轅棒の先の空にありしに、したゝか頭をうちつけてけり見えぬ眼をしかめつゝそこ〳〵に立ちさりしが、よく〳〵懲りしものと見え、それより外をたどるを見れば、口に笛をくはへ片手は杖にて地をさぐり、尙片手には、雨ふらぬ日も、太陽の照らぬ日も、たゝみしまゝの洋傘、頭よりもたかくかゝげて、楯となして、居たりける　羹にこりて膾を吹くといふは、かゝるたぐひにやと可笑しかりける。

△女子大學御用

女子大學御用と記しゝ札をさげて、下宿屋渡世の家ありきと聞きて、口わろき人の、今に餅屋や芋屋もさうなるだらう。

△十五歲の俳人

某が家にて、俳句の運座のありける時、蟲といふ題にて人々いみじうよみ合へるが中に、その家の子息にていまだ志したることなきが、われもとてさし出しけるを見れば、泣蟲やお空のまはり驅けまはり……年は十五歲なりき。



女繪師

松平鏡子

一

このやうな、冷たい空氣の朝であつた。

荒く結ひめぐらした竹垣の隙間から、すつくり立つた雞頭の穗先の紅さ！　そよろの風にゆら〳〵と搖らめいたが……

崖には露草が零るゝばかり、雜草を挺んでゝいくつとなく花を見た。縋る枝もないので其儘ぐつたりと、崖を下つて、危ふくば水にも落さう、さゝ、さゝ、と小さい乍らも瀨を切つてゆく流れに臨んで、しなやかに咲いてみえた、長月の末の朝である。

白地の單衣は藍染のはつきりと、秋草を描いた大模樣、二尺の袖をふんわりと双肩に荷ふて、私は默つてその下に立つた、これも同じあさ、三つ勝りのお小夜が、十二のとしを程遠い足利の機織場へ、年季に行くその日のこと！……紺絣の色の濃いのと、貝の口にしめた帶の紅メリンスと――これ丈の記憶は今も鮮かであり乍ら、後の便は絶えて聞かぬ。恰度、お寺の裏に咲く椿の花の散り際か、切つて落された芝居の道具幕の樣に、去つては儚くさびしいものであつた。

――かうするうちに舞臺は廻る――。

＊　＊　＊　＊

栗林の中に漂よふ空氣のつめたさ、それを動かして散てゆく枯葉の色のさまに、私の心から、ふつくらした優しみは失なはれて了ひましたの。

もの心ついた時は、もう兩親はなかつた、乳を與れたばつかしが緣なのに、わたくしの優しい乳母は、小父に引き取られる筈の孤兒を、おいとしい、たつたお

二才のお兒をつて、學校へゆかれる迄の約束に、強ひて田舎へ連れて行つてくれたんですつて！。

うね〲と曲つたみちが、消えたと思ふと菜の花の間から生れて、又麥畑のかげにすつくりと隱れる、つづら織な細い畔には、春はよく蓮華草の花の赤いのが靑い中に交つて咲いて居ました。

『お孃さま！　誰方もお在で遊ばさなくつて、お寂しう御座いますね』つて、春蠶の絲を繰り作ら、しんみりした調手に乳母は云ふ、『いまに此絲で、お祭禮の美いお衣服をこしらへて差上げますよ』つてね、えゝ、百姓をして居た家なんです、藁葺屋根の。入るとすぐ細長い土間になつて、緣側も沓脱もありやあしないの、疊の代りに薄べりが敷いてあつたんですもの。枳殼の枯れたのがしるしばかりに、門と垣根の役を務めてゐて、入口の厩小屋には、年とつた栗毛が飼はれて居ましたつけ。夏には翅の黑い大きな胡蝶が飛んであるきますけれど、うすら寒い風が吹くやうになると、すつかりきものを脱ぎ更へたみたいに、つばさの純白い、そりやあしほらしい姿のに變りますの。其頃には、漫珠沙華の赤い、炎のやうなかたまりが、といて流した風情に、川べりだの土手だのに咲きましたわ、一口に言へば、まあ美くしい郷！　武藏野には大した變化はないけれど、暖かい腕に抱擁されたやうな、心地のされる景色です。

やがて、八歳の正月を迎へて、まだ寒い××村には雪解の跡のしめ〲するのを、學校へゆくのも近いからつて、東京から來た叔父は、私を連れて歸りました。

叔父は陸軍の、たしかその時中佐位だつたでせう、うちは麹町で、叔母と、私より三つ上の、御存じでせう？　由子さん！　あとは下女と別當の五人ぐらし、質素といへば質素な世帶向でしたが、門がまへの廣い、植こみの繁つた屋敷でした。

叔父は軍人肌の淡白した人で、他所歸宅つた時なんぞ、いつも定まつたやうに、『路子、どうした』つて云つちや、ポケットに手を突こんで、お菓子の包みをくれましたの。由子さんをさしおいて迄、小さいからつ

ていたわつて與れる叔父があるだけ、叔母は私に辛く當つて來る、留守がちな人をたのみに暮す身の、度重なればつひ反目するやうに成つて來ましたし、勝氣なだけに他人に同情を求め樣とせねば、叔父はもとより何事も知らず、まして他家の者は曲くれた厄介者の私を、よく思つてくれよう筈もなかつたんですもの。

もう、十五十六と年がたけて、目の上まで切り下げた前髪の毛も、元結に届く程丈が延びては、勝氣も益益高じる許り、叱られて泣いた時分はよかつたけれどもうかうなると泣きはしませんでした。



自分を憎む人の前で、恥かしい泪なんて零したくないと思ふものから、小言も厭味も頬に、冷笑を浮べて聞いて居ました、その態度が憎いつて、大聲でわめく叔母の聲音を聞き捨てに、臺所で强ひて唱歌を、それでも小聲に、うたふたこともありましたの、われ乍ら音の顫へるのを氣づかひつゝ、わざと勇まし氣な、調子の早いのとうたひ

ました。
　それで居て、時節の流行の一つ二つ、由子さんにさまで劣らず出來ますのを、いぶかしくは思ひましたものゝ、知らねば只嬉しくて、叔母にのみ禮云ふて居りましたけれど——みんな母が心づけてくれたんですわ。
　三宅の小母、…小母と親しんだその人が、私を捨てゝ嫁いだ一人の母なのでした、叔父と乳母も語つてくれやうとはせぬ身の秘密は、叔母のはしたない陰口から…立聞とお咎め下さいますな、ひそ〳〵と名を語られては、忍足する程汚い心の私でした。
『奥樣顏して澄ましてるんだよ、あんな厄介者をひとにおつつけといて、自分一人榮耀に暮せば好いつていふんかしら、あれんばかりのお金で女の子を育てる小遣ひにだつて足りるもんぢやあない。』
なんて、話相手は下女らしい。
　在郷から時候見舞だつて、折よく來た乳母を捕へてあの裏庭の、竹藪の向ふの陰ねえ、あそこで、私は思ひ切つて訊いて見たわ。
『お惡い事をお聽き遊ばした』つて、乳母がその時、すつかり聞かせてくれましたの、父は畫家、母はまさしく三宅の小母…彼の人の心添へに、十才の時から繪の稽古にやつて貰へたのも、不遇に終つた亡父の名目を、幽かなりとも繼がせん爲か。
『お厭しい！　旦那さまさへ御在世なら。』つて、あの氣の小さい乳母は、しみ〴〵云つて泣いてくれた。
　今迄とりわけ優しくして下すつたのも、『路子さん、おばさまの御氣に召すやうにしなければいけませんよ』つて、諭して呉れる人のない中に、こつそり云ひきかせて下すつたのも、あれもこれも、と思へば思ひ當るふしばかり、何卒母として、一度會ひたいと思ひました、けれども、それと知つては倘あひ憎く、やがてその年の、私が十七の秋が來ました。

二

萩の下枝は土にまみれて、いささかの昨夜の風にも縋り切れなかつた葩の白と紫と、無慘たらしくも泥に交つて小砂利に亂れた、恰度九月の中旬でした。

學校の歸りを琴の稽古に廻つて、納戸町まで來ると、母に會つて行きたくて堪らず、みすぼらしい自分の服装を忘れて三宅の嚴めしい門をくゞつたのは、もう夕暮に間のない四時半過ぎで、街には豆腐のラッパも聞えてゐた。毛襦子の海老色の蝙蝠傘で面を被



ふと、門からは數十歩、さく／＼と心地よく下駄の齒にはさまる玉川砂利を踏み〆めふみしめ植込の高い木立をくゞつて石だゝみの玄關に立つた時には、もう、恥かしさと嬉しさと怖ろしさとに、小さい身の置き處もない位、心臓の烈しい鼓動が、五體にその餘波を送つて、胸はおのゝく……

象牙製の呼鈴を押へると、弛みのない眞正なひゞきが、廊下を傳ふてまつしぐら、奥の間の、母様のお部屋へ走つて行くかのおもひ

洋傘の柄を力杖に、うつむき加減に身を置いてぼんやり！……ふと、目の前を颯と射る白い光に、振り仰げば、それは取次の書生の木綿袴の縞の荒いのだつた。

…………。

燃えるやうに艶の好い紅天鵞絨の椅子、對の色のテーブルかけ、敷つめたカーペットは色の濃い橄欖色でしつッこい色彩が、どつしりと重く、その癖華美に私の眸に映りましたの。

此室へ招じ入れた取次は、紅茶とお菓子をテーブルの上に載せて、何事か囁やく樣に云ふと、重たげなお辭儀をして、そして出て行つて了ひましたの。ふつくらした卓子掛に手を置くと、自分のネルの色のうすさが際立つて、思ひなしか私の腕に、血の氣が少とも通つてゐぬやう、たゞ青白く、寂しい色に見えましたわ。

庭を作りに入つた植木職の五六人、窓のむかふでさざめいてゐる聲が、間に距る大きい物がない爲に、手に取るやうに聞えて來ます。長い廊下を通ふ下婢の足音の、せわしないのもやつと靜まつたと思ふと、違つた方向から、此度は穩かな上靴の音、與實の少許づゝ高まる響が、壁越にヒタと止まつた。——かと思ふとカチリと尖つた金屬性の擦れる音、扉が開いて、見覺えの母が美くしい半身！

わたしが訪ねて行つたのを、迷惑らしくも、訝かしさうな顔も見せて居ましたが、『少しの間に大きくお成り遊ばしたこと。お變りもなくつて被在しやいましたの？』つて、それでも優しい、腰もおろさず後から、私の肩に手をのせて訊く。

知らない昔ぢやあ無い、知り盡した今である、聞捨にした言語の端迄が、一言一言、胸の底へ浸みてゆくの！　俯向けば泪の溺れさうな眸を大きく見開いて、顔を反けたが、流石に母の面は見る事も出來ず、眼をそらす庭の花、コスモスの蕾がふくらんで居た。

『みんな乳母に聞きました、何故娘と呼んで下さいません、母と呼んでは惡のでせうか、情ないそぶりがお恨みで御座いますわ。』

云つたらどんなに心で輕くなるだらう、とおもふても聲は出ませぬ、泪の塊が胸のつかへ！　こみ上げて喉へつまつた。思ひ切つて云つてやりたい、おさへられた樣な胸を袂で支へて、詞の數は算んだけれど、矢張一言も云へやしませんもの、

「如何遊ばして？」

香水の匂ひの芬としたのは、軟かい母の手巾が、私の顏にかゝつたから……。

母は、つと窓傍へ立ち寄つて、カアテンを颯と引いたが、座にもどること一度私のほつれ毛搔い撫でゝ、

「泣くもんぢやありません。」

幼兒を賺すやうに云つた、物靜かな言葉の端が顫ふ。



「かあさま！」

手に手を載せると流石にたじろいで、えと小さい驚愕の聲もあげましたけれど、答もなく其儘、私の肩に頬うちあてゝ、音を呑んでの啜泣き、堪忍して下さい」——。何故、何故に、一人子を捨てたかと、なじらうとしても聲は出ぬ、しやくりあげ——しやくり上げ……。

會ふ迄は懷かしい中にもいさゝか強く、心に餘る不平不滿を云ひ切つて、と思ふて來た私が、母より先に自ら泣いた、强い事を云ふどころか。心弱な、京ちやん！

路もまだその時は、こんな偏屈な女ではなかつたかもしれないのねえ。

「人の子の母と呼ばれて、まんじりと寢た夜もないこの朝夕を、自分乍らに奪れた樣な氣もするけれど……路さん！　かあさんはお前を一日も忘れやしない、雨につけ、風につけ、貴女の事のみ思ふて居た、一人子を捨てゝ迄、榮華に走つた、情の薄い母だと、何卒恨んでお呉れでない、皆わたしが惡いんです、小さい氣だつた、心弱かつた。」

　母の暖かい息づきが、幽かに私の神經に感じられるの。――やがて――。

　ぽつてりと赤くふくらんだまぶたを、白綾のハンケチでおさへ乍ら、面を上げた母は、つと衣紋つくらふて、

「貴女に度々お會ひしたい、成らば一緒に暮したいと思ふけれど、今更どうにもなる事ではなし、奉公人の手前もあるものを、再緣だと知られたくないからねえ私の體面を思ふて呉れたら、母さんはもう死んだとおもつて、ねえ、さつぱりあきらめて了つておくれ、十七年の今迄さへ、聞かなければ知らないで暮して來たんぢやあないの？　以後は、今迄貯つてゐた金子を、貴女に直接に渡しませう、金子だけのものを、身に附けては居ないやうだ。」

　本心かと疑がはれもしました、子を思ふ、母の情がこれかと怪しまれもしましたけれど、云はれゝば負け嫌ひの私です、零れて來る涙を一拭ひ！、立ち上つた。

　帶の間から出して呉れた紙入を横に拂つて、扉をあけると、廊下を流れる空氣がつめたい。

「まつて……お待ちなさい、路子さん。」

　凛とした樣なあわてた樣な、力のある母の叫び！　振向きもせず歩みを急くと、人の立つ氣色がした。パタン、といふ烈しい響は、袂に觸れて應接室の、花瓶でもたふれたのでせう。

　幾曲りの廊下を夢中に走りぬけて、玄關へ出るといきなり下駄突かけて、お辭儀もせず門の外へ――。

　それでも、泣き顏を見られるのが恥かしいので、知りもせぬ露路の奥へ入つて、節穴だらけの板圍ひに縋ると、また胸から溢れた泪が一塊、二塊、私は聲をあ

げて泣きましたの！。
もとより會つたからとて、如何しやうといふ事もなかつた、只會ひたい、會つて、眞實の親の情ある聲が聞きたかつた、行つたなら、どんなに喜こんで下さるだらう、胸に抱いても下さらうか、頬ずりもして下さらうかと、味をしらねばお御斷のやうな幼いことを、密に築いた樓閣は、根柢から打ちくづされて……。母に彼樣所業をしたのは亂暴すぎたでせうけれど……けれど……。
あまりといへば口惜しかつた、情けなうございましたわ、たつた一人の母親さへも、自己の爲には子さへ振捨てやうとするんだもの、何の、他人なんて當になるものか、おもへば人の言も疑がはしい！
疑がふて疑ふた果は、わが心さへ不安、恐怖の境に迷ふ、五尺の身體の入れ場もない程な、世間のせまさ！
冷い心は冷たい目で見返して、彼時からもう三年たちます。
知らないで過した十七の年が戀しい、それよりも、暖かい双親の懐に、無心で暮した二つの昔がなつかし



い。
死なうとて死ねる自分ぢやあない、甲斐ある生活に一日をもすごさないで・私は死骸になんて成りたくないわ、尼になつて了はうかと、考へる日もあるけれどどうしたつて安らかにおくれる一生ぢやあないものを彼様ないたましい姿を、敵の前に示したくありませんの、表面丈でも強く立ちたいと思つてますわ、虚榮でもいゝ、虚僞でも好いんです、勇者の態度で、私は人を見かへして遣り度い！
――嘲笑た人に――冷酷な眼で見た人に――。

＊　＊　＊　＊

ほろ／＼と、泪のやうに葩は散る、深緑色な葉の蔭に、純白なる茶の花の吐息！……やみに描かれたこの眸は、絶え入る程の淋しさだつた。
二人の心の現在のさまに……。

三

春雨に、書室の窓は薄暗かつた。
しつぽりと、雨に濡れ／＼散つてゆく葩を踏んで、本郷の宿に路子さんを訪れたのは、この雨もよひの、煙つた土曜日の午後であつた。
電車の窓から眺めた都會の街は、淡く狭霧に包まれたやう、叩きつけられた花片がその儘の綺模樣に、鱗ぶきの屋根の艶の好いこと！
××の停留所で降りて右へ曲ると、また水菓子屋の横を同じく右へ、一折毎にせばまる道を、心細さうに見やり乍ら、屋根の廂のかちあひさうな、見苦しいところを一しきりゆくと、恰度、川から海へ出た形に、此度は横ざまにぐつと廣がつてゐるのを、左から算へて三軒目、「山田」とかいた四角い軒燈の下に傘を疊んで、もちかへて一度水氣を切ると――格子戸をあけた。
眠さうなベルの音も、馴れゝば耳に擽くと見えて、どう傳はつて老母の鼓膜をついたかと思ふまに、もう障子が開、おはぐろに染まつた小さい齒並を見せて、
「さあどうぞ」

よくねえまあつて、八寸ばかりの幅しきやない、あげぶたの板の間に飛びおりて。この雨に、合羽もお召し遊ばさず、……それでもまあ、ようこそお出かけなさいましたこと、もう／＼お二階ぢやあ散々お待ち兼、え＞お在家でゐらつしやいますよ、大變お靜かですけれど……。甲斐々々しくも傘とりあげて、暫の程もとこの土間の、僅一疊ばかりのところに廣げて呉れる。

ふみなれたれば事もなく、忙し氣に階段を登ると、上り口から、

『みち子姉さま……今日は。』

聲をかけたがひつそりとして、人の氣合もたえて無い。少しの明味を受けた繪框の美人が、ぼーつと、夢見るやうな眼差に、ぢいつとこちらを凝視てゐる。

その可愛らしいお姫さまの傍から、庇ふやうな形容に、お乳母でせうね、蠟塗の柄の、うす紫の繪日傘を少しすぼめて、ひつたりと寄り添ふて居ましたの。

姫の、ふつくらした頤に、紅の勝つた襟元の映りのよさ、有職模様の袂から、葩のやうに零れたのは襦袢の袖で、白絞に麻の葉くづしをぬいたのが、震ひつきたい程よく似合つた。内輪にふんだつま先の尋常さ、雀のやうにせゝこましくもなければ、烏のやうな卑しいところもなく、鳶みたいな鋭さも見えなければ、孔雀のさまの、驕つた風もさつぱりない。たゞもうしほらしい、やさしい、氣品がある、恰度鳩だわ、鳩ね、白鳩のやうに美くしい姿だつた。

平常よく描く、あの下町娘の、下髮な、くるりとした唐人髷に、紅鹿子の布をかけて、縞の着物に黑襦子の襟のかゝつた。茶だか何だかの風呂敷は、長唄の杵の染めぬいた模様なのを、しつかりと胸に抱へてゐる、彼樣なのより、ずつと立ち勝つて見えるのは、かゝれたのが上流の姫君だ、ばかりでなく、他に他事かの意味があるやうに、私の胸をついて來たの。

ぼつてりした、重い袂を手にもたげて、やる瀬なささうな、その癖憧憬たやうな眸をして居るんでせう？！。

……『仕樣がないわ、路姉さんにも……』

と、口の中につぶやいたけれど、あとの言葉の接ぎ穗

もない、で、投げるやうにそこに坐ると、黒地に紅白の折鶴を大きく染めたメリンス座蒲團の二枚の中の、(京子)と墨痕鮮かなのを引き寄せて、また居住ひを直したが……そのまゝ手を延べて繪筆を取ると、たつぷりと江戸紫含ませて、散らばつた紙に手當り次第、いくつとなく、菫、苧環、桔梗、烏頭、あちらこちらに花を描いた——といふのも、全く自分で意識してしたんぢやあない、路子さんの姿がないので、探すか、下のお婆さんを呼ぶかするところを、半分は道を歩いて來て疲れてゐるのと、半分の心の底に、便所へでも行つたんだ、と、幽かに囁くものがあつたから——。

繪絹の女が、浮び出したかと思つたのは、その向側におしやられた腰高障子の後から、路子さんが出てゐらつしやつたのだ。

「居なかつたら、何故に探して下さらないの?　探すかと思つて隱れたら、平常に似合ず神妙に、坐り込んで了ふんですもの、張合ひがなくなつて……私、情なくなつて來た。」眼ぶたの上が仄のりと紅い。

「居なくつても關はない?　え。」

「だつて私……何の氣もなく坐つちまつたんですもの。」

云ひわけがましく云つて筆を置くと、袂引き寄せてハンケチをまさぐる。

「おばさんは何と云つたの。」

「待ち拔いてらつしやいましたつて、だから私……」

不圖目を上げて偸見すると、路子さんは、はた〳〵筆洗の水ゆるがして、筆の穗先を洗ひ乍ら、こんどは小皿の濃紅をつけて、答もなく伏目に、自分の爪を一つ一つ染てゆく。

「京ちやんのは好い艶だけど、わたしのはちつとも血の氣がない。」

さまでゝない事を、さも物案じらしく云ひ放つて、左から右、拇指から中指くすりゆび、小指の紅が一番うすい。

「姉さんが宜しくつて!　そして此品を路姉樣に……」つて、風呂敷の儘手渡せば、細やかな膝にのせて爪先

に結目を解くと、中からは味附海苔の罐！　熨斗も水引もないむき出しのを「有難う」っておいたまゝ、おもちやにしたり、つッついてみたりしつ。

「京ちやんでも來て下さらないと、私よく御飯も食べずに了ひますのよ、全然懶者になつてしまつたのねえ」つて、便無ささうに笑ひ乍ら、

「かうやつて、もう何もかも出しつ放しなの、今も今迄掻巻つつかぶつて、此の袷の前に横になつて居ましたわ、まるでつきものでもした様に、何かするのが億劫で堪らない。」



小夜具の模様は揚羽蝶で、更紗ではあるけれど、華美な色彩が路子さんより先に、私の心を奪つて了ひました。塗臺の箱枕は緋縮緬のくゝりで、白木綿を被ふたのが、何といふより品が佳かつた。

「此頃も、やつぱり先生の許へお出でなさる？　春はとう〳〵何處へもお出品なさらなかつたのね、秋のは早くから下絵をおとり遊ばせよ、ねえ、駄々をこねずに……え？　えさま。」

袖疊みにくるりと捲いた、掻巻の上に、片肱もたせて、眞面目臭つて云ひ放つと、

「駄目！　だめなのよ、わたしにやあ到底かけ

られませんもの。」つて子供らしく、私の膝へ片手を掛く、廿一才の路子さんの腕は、十六のわたしのより、一まはりも細かつた。

「何故其様な事仰有るの？ 姉さまつてば、かけないつてありませんわ。わたくしねえ、先日上野で酉さんのを見て來たの、あんなのさへ出て居るのに……路ねえさんもお出しなされば好かつたこと！、兄さまもね、屹度今度は、出さない迄もかいて欲しいつて、さうして是非、一枚頂きたいつてね。」

「有難う」と句を切つて、

「皆様に御心配かけてすまないけれど、わたくしね、……脆い事を云ふ様ですけれど、恰度荒い波に揉まれ揉まれ來たのが、何處かの陸へ打ち上られた時みたいに、心底から疲勞ちまつて、もう慾も得もなく、休んで居たいやうなんですよ、負けまいと思つて張り切つた意地が、優しい人に圍まれるとぐつたりして、もう立つ瀬も無い程！」

と、寂しさう。

「もしお氣に召しますなら、御都合で私宅の離家へ御越し遊ばしませんかつて、みんなが申して居り升のよ、さうすれば私にだつて、お繪の具位溶けますものねえ、そしてお氣の向いた時に、一日一筆でも畫いて頂戴。」

えゝつて肩に寄りかゝつて訊くと、

「私は自分を勞つて與れる人が有うとは、少とも思つちやあ居なかつたのに、如何した運命に拾はれたものでせう、何だか敵の前へでゝ、味方を並べて遣りたい樣な氣にもなる、――おはなれを拜借するのは願つてもない事だけれど、此樣に親切して與れる家を捨てゝよそへ行くのがすまないやうな氣もしますもの、不足に思つた樣な態度をするのがねえ……だから京ちやん！ 我儘は勘忍して頂戴よ、ねえ、そして、貴孃はまたかうして、遊びに入來して下さいな。」

「あゝ。」

掌に載せた桃山を、くづし／＼答へたけれど、寂しかつた、物足りない、私はもつと何か云ひ度いの、「あ

ゝ』なんて、何だか餘りあつけないやうな氣がするもの。ふと氣を更へて、

『其圖いつまでにお書きなさる？』

つて、袂を掴んだ儘に指さすと

『何時だか到底分りやしませんのよ、もう少し許りで出來上るんだけれど、以前の樣に仕上げを急ぐ氣にもさつぱりなれないんだ？、一昨日から同じ事なんですもの。』

下座敷のお婆さんが、蜜柑をお盆の上へのつけて持つて來てくれました、小さい房の、甘酸つぱいお汁を吸ひ乍ら、二人は僅かな沈默を守つてゐた。

『蜜柑は美鳥さんが好きだつたわね、私も最一度美鳥さん位に歸つてみたい、こんどは滿足に、十才の時から繰り返してみたいわ。』

荒んだ半生は、恰度砂漠の樣な乾燥して味のないものだつたと仰有る、紅い雫で染められた過去も持たぬ、灰色の行路を辿つて來たんだつて仰しやる、京ちやんは私の樣な曲れやと交はつても、荒んだ心に似ては下さるな、運命は反對をゆくやうにねつて、ほろりとする。お氣の毒だとは思ふけれど、運命を覆へして幸ひに導ほど、私の腕は強くはなかつた、たとへ少しでも幸福に寄る、導火線となれゝばうれしいのだけれど……。

時計はつチーンと、細長い餘韻を幽かに空氣につたへて消える。四時半！　一つは卅分を報らせるそれで、

『御飯の支度をしませうよ。』

柳の手文庫から、ふさはしからぬ緋縮緬の襷を出すと、

『大袈裟な。』

つて路子さんが手で奪ふのを、

『可笑い？』

『おかしくはないけれど、京ちやん！、何も御大相な風をしなくつていゝもの！　そんな事をしなくつちやお出來ないんなら、みんな私がして上げます。』

美くしい目でにらめ乍ら、

六疊の座敷の、半疊は階子の上り口に、その半疊が板の間で、其處には七輪だの土鍋だの炭取などが、ところ狹しく並んでゐた。

『あんなによくして下さるものを、一人の時は下で御飯もなされば好い』つて、口滑らして云つた時、

『みんな我儘だからなんですわ。』

つて仰しやつたけれど、この頃は、よく打ちとけて下さるつて、お婆さんは姉に語りました。

手炙火鉢から一はさみの火種を七輪に移して、消炭を少許のせて煽ぐと、くわつ〳〵と炭火の吐息、靑勝ちな玉蟲色の舌が長い。

おし被せるやうに其上へ、炭取から堅木のを三つ二つ、さら〳〵と火箸ならしてつぎそへると、

『路ねえさま！　お米は？』

『はい。』

と答へて差し出す、土燒の赤いお釜、わづかな底に米粒のいろの白さ、水に浸つて艶も無い。

はた〳〵と火をあふぐほどに、何時か薄紫の夕べの靄、窓傍近う迫り來つて、七輪の火のみの只赤う、あのおみ帶もこの袂も、一樣にうす墨の中にひたつたやう！

『彌に眞暗になつちやつたのね、燈火をつけませうよ、ねえ、みち子姉さま、點けて下さいな。』

蓮葉らしく云ひ切つて、暗中に涙を拭いた。何もかも、道理の分別つてゐるこの人を、皆して邪魔物扱ひにして……、純潔かつた少女の胸へ、いさゝかなれど親の罪を聞かせたのは誰です？　知らせねば知らずにすんだらうものを。

財產と知親のない女の戀は、淸くあつても疑がはれる、金にしやうと思つて釣るの、騙ますのが旨いのつて云はれてからは、詫しい半生にたつた一つの紅い彩だつた、初戀さへも思ひ切つた。

思ひ切つたと云つた時、『路子さん！　眞實に思ひ切つたんですか、表面は思ひ切つても、心でさう早く思ひ切れるか、裝ほふてゐる心は知つてゐる、何故僕達、久江だけにも思ひ切れないと云はないんです、心のな

かではいつまでも、やさしい人を忘れずに居て下さい　そんな断念の好い女は僕は嫌ひだ』つて、私の大兄様が云つたつて『にい様勘忍遊ばして下さい』つてお泣きなすつたのは、事のいきさつ知らぬ身乍おぼろげな記憶にうかぶ。

而、その人はもう亡くなりましたの、脚氣衝心とやらで、まるつきり夢のやうに逝つてお了ひなされた、恰度お廿四で、名は芳樹さん。山村海軍中將が二男の君！　それがうちの兄様と他人の空似？　瓜二つといふ程よく似てゐらしつたんだといふ。



長廊下を客間から、膳を引いて退る時などは、あの廊下の隅の仄暗い二燭光を斜に浴び乍ら、

『京ちやん、私にもお手傳ひさせて下さいな。』

つて、奪ふやうにして下るお膳は、いつも大兄様のだつた『私も母さんに似た人なら誰でも好きになるわ。』

つて、不圖した幼言葉にも頰を赤めて、

『路姉さんも京ちやんに似た人なら好きよ』つて仰有る。

あの美くしい目、母様似の切れの長い黑勝ちな眼は、過去半生のあらゆる事件に些も拘泥しないやうにふつくらした、初心らしい表情の、それは綺

麗な、艶のいゝものだつた。

こと〳〵と、戸棚の方に音のしたのは、路子さんが洋燈を出す、手觸の響であつた、細やかなマッチの軸木から火を移されて、ボーッと勇み立つ火勢をおさへる樣に、ぐつとねぢを出つてホヤを當てる、袂の端をくはえて座敷の眞中にうつすと、夢から覺めた樣な部屋の明るさ！

お釜をはづして板敷の上へ置くと、藥罐に水を增してあとにかける、御飯はうつしもせずと其儘に、もらすも待たで茶碗につける、戸棚からお小皿を二枚、これは五枚九錢といふ安物を、二人が夜の勸工場おさがりに求めて來た獲物の一つ、凸凹して、皿の肌は粗かつた。一枚にはお醬油を瓶からさすと、一枚には味つけ海苔を二十枚ほどふんわり載せる、下座敷のお婆さんが心盡のお魚は、たつた一疋の小鯵だけれど、この膳の上の女王といふかつこうに、威勢よくはねかへつてゐる。

『座敷を借りてる樣な氣がしない、私はこの頃始めて他人の暖かい懷に入りました。』

つて身に沁たやう、

今迄が今迄だから、いさゝかの優しい言葉やそぶりが、またどんなに嬉しい賜でせう。願ふ事ではないけれど、私は私の姉樣と少しでも境遇を入れかへて上げ度い、もちつと幸な位置にこの方を進めて上げたいの。

四つも重ねて箸をおいた時、路子さんはもう、萬古燒の急須に茶を濁んで、靜かに呑んでゐらつしやつた。

――洗ひに階下へ立たうとするのを、叱るやうに引き留められて、私はそのまゝ机に寄つた、頰杖ついて壁を見守ると、自分の影がくつきり濃い、下では幽かに瀬戸物のかちあふ音、ほと走る、水道栓の水の響！：……。

二才位で別れた親の顏は、昨夜みた夢の思ひ出よりもつと〳〵朧氣な、うすい記憶ではないでせうか、禿切もまだ、うなぢに屆かぬ幼だちを、嫁ぎの衣の膝にのせて、『思はすのが可哀想だから、母樣は亡いもの

さんが會ひたがつて居たよ。晩かつた』つて三宅の小父さまが、髭むしやなお顔にハンカチをあてゝ仰有るの、『變つた姿だ、會つてやつて下さい』つてねえ、その時はもう、顔に不淨布が懸つてましたの。

　この日ばかりは皆が、母樣が母さんがつて云つて呉れたわ、泣くまいと思つてね、天井ばつかし凝視て居ましたけれど、ほろ〳〵と泪が零れる。强ひて作らうとした微笑みが、かへつて悲しさの表情になるので、きつかり唇を結んで見たの！　泣いたつて好い、泣いたつて、溺れる程咽び入つたつて、誰も笑ふものは無かつたのに、私は恥かしいやうな氣がしましたの。

　こんどは眞實の孤獨になつて了つた。』

訊けば答て呉れる度に、やるせなささうに胸おさへるのを見るのが辛く、わたしはそれ限り問はずにゐる。去年の暮からの二階生活、繪筆も捨てずにゐる代り、寂しさも癒らなかつた。

　路子さんがゐらしたら、思ひ切り明るくして上げ樣と、心をひねれば、疊も机も本棚も、その描きさしの繪絹の人も、怪しく暗中にふつと消えて、晴れた雲間に淡月の影、光線は窓迄とゞかぬけれど、光刹までの小雨に濡れた葩を映して、ぽつてりと婀娜やかな八重櫻！　ゆさ〳〵とたわゝな枝が光る、雪のやうな、ましろい花を滿載た梢が……。

落ち付いたらしい空氣の中に憩へば、わが心さへ靜かにしづかに。思ふによき、泣くに好き、むせぶにもよき春の宵よ！！

小さな足音が階段に聞えて、ほつれ毛撫でつけつ路子さんが……、再びの部屋の明るみに、せめては路子樣の未來も、斯く明るく輝けかしと、圓な眸を袖に被ふて、わたしは切に、切に祈つた。

四

樂しかりし、その十六の春は逝た、程もなく、同じ秋も暮れたのである。

清岡の奧樣から、嫂さまのおはなしのあつたのは今年の正月、大兄樣が廿五才のはじめであつた、御容貌

と、聞いても知らせずに濟ましてお呉れ、死んだつもりになつて私は逝からねえ、ばあや、弱い心だと笑つておくれでない。私もかげで隨分に氣をつけたいつもりだけれど、到底今迄手許で育てたやうには出來ないから、風邪をひかせぬやう、寢冷をさせないやう、私はお前を信じてゐるから路子の事を頼みますよ、可愛がつてやつてお呉れよ、乳母！」つて、思へばお氣の毒な、逆ふ事も出來ぬ程、心弱く生れて來た母さまは白粉の類に泪を流して、「路子御機嫌よう、母樣はもう左樣ならですよ」つてそつと寢入つた儘を乳母の膝にうつすと、も一度顏さし延べて「別れたくない」と云つて、お泣きなされたとか…、間もなくその家を引拂つて、たつての望みを乳母の里に足かけ六年。八才から十幾年は、叔父さまの許に養なはれて、廿才のとしにおつかさま！　三宅夫人にお別なさる。

恰度十八の秋でしたらう、小父樣は第×師團附として、××へ御轉任なさることに成りましたけれど、叔母樣がどうしても都を離れ難く、地方へ行くのを嫌ふのと、學校の都合とで、遂には叔父樣一人、轉任地へお向ひなさいました。それでも日曜には、時々歸つてお見えなさいましたさうですけれど、まれにしかお姿がないので、さうなると此家が居憎く、繪の先生の内弟子といふ名のもとに、荷物をまとめてそのお玄關にうつりました。

「十七時からおあひ遊ばしたの？」つて訊くと、

「いゝえ、とう〳〵あはずに了ひましたわ、母の亡くなります日ね、恰度あの畫室で紅だの胡粉だのを別々の繪の具皿に、玩具のやうに溶かしてましたのよ、「路子さんに會ひたい」つていふつてね、執事の上田さんが綱引俥でとんで來ましたの、その時には意地も張もなく繪筆を捨てゝ了つて…せい〳〵のどが鳴るばかりで、泪さへも出やしなかつた、一言の逆ひもせず、それでも母子ですわね、連れて行かれましたけれど、それでさへ間に合やしませんでしたわ。常から心臟の弱い方だつたんですけれど、かう不意に、命を奪つて行かうとは思はなかつたものを。——「路さん、かほ

はよしお竹質はよし、うつてつけの御良縁といふので、もう父さまも母様も大乘地、何の思召しか兄様は、早い早いの一天張で强行に構へてゐらつしやる、眞面目で云へば笑談に受け流して、まとまりはさつぱり附かず、延び延びになつて居る中に、いつか櫻も芽ぐんで來た。

過ぎて四月、あんなに親しんで居た本郷の宿を捨て て、荷物を改めてあの二階へあづけ置きつ、何の目的の繪行脚ぞ、路子さんの行方はかいくれ知れず……。野や山にも、まだ草の葉の綠も淡く、丈さへのびぬその陰に、如何姿をくらましたか、その半生の過去のもつれの復雜なだけ、其人の行方も知らなかつた。

おもひみる、寫眞の裏の太き文字！

「實物よりずつと宜しく候」

彼事と此事と、此事を其事と、細やかにも、糸がつづいてあるのではあるまいか。

……………。

ことしも亦秋の風冷う、眞萩白萩亂れ散つて、病葉か櫻紅葉、千草に蟲の音も絶えしを、ちる花も花も、其人の行方を語つて與れやうとはしませぬもの。

秋晴れのわびしい窓に、やるせなき身を寄せれば、倉の屋根には三味線草の白い花も見える。

妹の京子が、も一度お目に懸り度いと願つたなら、歸つて來て下さるかと、けふもまた窓にもたれて、わたしは當も無い人を待ち盡してゐる。

あはれ、逝く秋の、風の眸の白きかな。　（了）





虛榮問答

野路の雨

○

おゝ涼しい、蟲の音があんなに聞えてよ、緋房を亂した樣な葉雞頭が月に光つてるのは。屹度露が下りたんだわれ……這麼中に何時迄も居たら、欲も利も不用いと思ふわ。

○

甘く云つてる、其實あんな月の樣な大きなダイアでも欲しいもんだなんて考へてる癖に。

○

冗談仰つちや困りますよ、女といふと直ぐさう虛榮染みた事を連想されるんだものそりあね、當世の風俗鑑第一ページの筆頭に登らうと焦心遊ばす方は、無きにしも非らず、でせうけれど、私達なんかゝ今更自動車で風を切つて、金銀ダイアを星の樣に輝かすなんて、榮華は到底及ばぬ事ですもの、那麼夢の樣な考へは持たないことよ、善く引合に出される宮の運命を御覽んなさいな、第一私には玉の輿なんか迎ひに來る筈もないし。

○

那麼に悲觀したものでもないさ、だが當美さんからそんな言葉を聞くと、矢張り女だなあと、僕は云ひたくなるぜ、

○

女ですとも、實際ある時は悟つて見てもね、ほとぼり覺め切らないと見えて、まあ島渡しても、芝居なら帝國座を觀に行かなけりあ話にならず、着物だつて三つ越で買はなけりあ巾がきかないわ……。

○

恐るべしだね、そろ〳〵本音を吹いて來た、ぢや矢張り未來の學士なんか眞平の方だね。

○

隨分馬鹿にして居らつしやるわ。私は單に女といふものに付いて話したのですわ、男だつて隨分虛榮だらけですわ。



○

まあ辨解しなくつたつて可いゝ、どうせ女は虚榮の權化だ、何も富貴や權力ばかりに憧憬るのが虚榮ぢや無さ、女つてものは本當に詰らん處へ見得張るものだね、富美さんだつて現に此間花岡さんの音樂會に誘はれたら、着物が無いから厭だと云つたね。

○

そりあさうですとも、あんな虚飾家の奥樣なんかと一緒になるのは眞平だわお小間使かお三どんの樣に思はれるより、一層行かない方がましぢやないの

○

そーら、だから女つてものは詰らん見得に齷齪して居ると云ふんだ。

○

見得ぢやなくつてよ、意氣地といふもんですわ、虚榮とは違つてますよ、男の方はすこし女が着物の話でもしやうもんなら、すぐけなすけれど、身分の體面といふものを重じなくちやならないわ、何時も眞黒になつて服裝も振りも構はずに居られるなら、女は幸福ですよ、だけれども結局女の構はないのは親や夫の耻を世間に吹聽するのですわ、女は先天的さう生れて來たのだから……。

○

やあ、捕へられやうとする蟹が穴に逃げ込む樣だぜ、女の逃げ道はいつもそれだ、そんな習套的な言語で自身を慰藉して居るんだ、なあ、可笑しい事があるぜ、僕の銀行に勤て居る事務員達だがね、俸給日なんか殊更金錢に付いちや平氣な顔をしてゐるんだ、たまに受取るのを忘れても、平氣な顔をして其樣ものはどうでもいゝと云つた風に、すん／＼歸つて了ふんだ。

○

虚榮心です……。

○

自己を僞つてるのは、富美さんと同じだね。

死刑女囚に花を贈る

遊　龜　江

一

俥は、陰欝な監獄の門前にとまつた。

遊龜江は、直ぐに、俥を下りたが、薩張り勝手が分らないので、キヨロ〳〵して居ると、突然に、何處かで、

「何か用事があるなら、此處へ。」

と云ふ聲がする。驚いて、仰向いて見ると、左手の塀に一尺四方ばかりの窓が切抜いてあつて、其の中から怖い顔した看守が眼を光らして居る。遊龜江は、急いで肩掛を外づして、叮嚀に、

「アノー、銀子樣に、一寸御目にかゝりたいので御座いますが。」

「そんな事では、要領を得んぢやないか、此處は普通の場所と違ふから、も少し委しく、囚人の原籍、姓名、及び、ねん……」

と、こゝまで看守が云つた時、烈しい北風が砂塵を捲いて、ヒユーと獄門へ吹きつけたので、唯さへ人相の餘りよくない看守は、恰で鬼の樣な澁面して、兩手で眼を擦り乍ら、

「年齡を、歷然、陳述なさらなければならんのです。」

「ハイ畏りました。矢田部銀子樣と被仰つて、御郷里は肥前の長崎、お年は多分二十七だと記憶致して居りまする。」

「ウム、それでは、十一房の之れだよ。」

と、傍に居た別の看守が、小指を示した、初て看守は瞳を妙に動かして、意味有りさうにニヤリと破顔した。遊龜江には、夫れが何の意味だか分らなかつたけれど、唯何となく氣味の惡い樣な氣がした。

「それで、貴孃は、其の囚徒の親戚にでも當るのかね。」

「いゝえ、左樣ぢや御座いませんけれど、昔からの親いお友達なので御座います。」

「然うか。」

と云ふ看守の荒々しい返事と共に、門の扉はギーと左右に開けて、遊龜江は、其の儘、獄内の面會室へ導かれた。

殺風景とは、斯う云ふ處を形容する爲めの言葉か。薄闇い四角な室の眞中に、鐵製の椅子が一脚、悄然と置かれて在るばかりで、他には何物も無い。遊龜江は案内される儘に、此の椅子に腰を下ろして、暫らく、待つ事にして、室内の濕つぽい空氣は不快な臭氣を帶びてツーンと鋭く胸にせまる。それも其の筈、此の室は、たつた二ッの小さな窓によつて外界と通じて居るばかりで、而も、其の一ッは廊下に面して居つて、鐵格子を嵌めてあるから、空氣の流通にも、光線の射入にも、些も役に立たないのである。遊龜江は、此の窓の効用に就いて種々と考へて見たけれども、どうも合點がゆかぬ。そのうちに、窓の事は何時の間にか全然忘れて仕舞つて、今度は、頻りと不幸な友の身の上に就いて夫れから夫れへと種々の想像を廻らし初めた。痩せては居まいか、憔悴れては居まいか、久し振で逢へると思へば嬉しいが、變り果てた友の姿を見る乎と思へば苦しい感も迫つて來る。自分は、何故こんな處へ訪づねて來たのだらう。など〻煩悶して居ると、忽ち、扉を排して入つて來たものがある。足元に餘り元氣が有り過ぎるとは思つたが、遊龜江は心を躍らして、振向いて見た。矢張り、それは、銀子ではなくて、手に珠數を持つた黑衣の敎誨師であつた。輕く會釋し乍ら彼は遊龜江の傍へ近寄つて來て、小聲に、

『今、門衛からの話によりますると、貴孃は、失禮なから、十一房の女囚と御懇意で被居るとか。』

『ハア、小學時代からの仲好で御座います。』

『就きましては、私から、折入つて一つお願ひ致したい事が御座います。と云ふのは他でもありません、可哀さうに、彼女の犯罪に就いては、何か餘程入組んだ事情が蟠つて居るので御座いませう。死刑囚には兎角有り勝ちの事ですが、彼女は、まだ其の宣告もないうちから、妙に精神が苛立つて仕舞つて、云ふ事に少しも纏りが付かなかつたのです。も少し條理のついた答

辯をしさへすれば裁判所の方でも、どうにか爲る事が出來たのださうですが、何しろ豫審の法廷で、ハイ私が殺したのではありませんけれど、確に私が殺しました、と云ふ樣な無茶苦茶な事を申立てたものですから、思へば、まだ年も若い、身分も相應な、容色も美しい身であり乍ら、此の境遇に陷つて仕舞つたかと思ふと、如何にも、同情に堪へんので、拙者も朝夕骨身を惜まずに、彼や此やと歎願致して居りまするが、此の頃は、どうしたものか、私の顏さへ見れば、いやだ〳〵と繰返し乍ら身震ひばかりするのです。



「ハイ何ぞお慰め申す事でも出來ますするならば、私も大層嬉しく……」

「それでは早速此處で御面會下さる樣に。」

と、敎誨師は足早に此室を去つた。

遠くで、錠を引摺る重々しい音がしたと思ふと、それが、段々近づいて來る。遊龜江は、其の友を見るのがたまらなく苦痛になつて來た。逃げようか、いや、もう、其の足音は、直ぐ其處に、礑と止まつたやうである。遊龜江は戸口を顧みた。然し、何者も其處には居ない。不思議に思ひ乍ら、視線を、ずつと右の方へ轉じると、廊

下に面した鐵格子の窓、先刻、遊龜江が何の爲めにあるのかと疑つた窓の外に、痩せた、青ざめた、凄い女が、瞳を据えて、ヂッと遊龜江を睨んで佇んで居るのを發見した。あゝ、其の瞬間、遊龜江の心は張裂けるばかりになつて、ワッと其の場に泣き伏して仕舞つた。女囚の涙は涸れて居るのであらうか、冴えた瞳で冷淡に遊龜江を嘲る樣に見下した。しばらくして、遊龜江は震へる聲を絞つて。

『遊龜江ですよ。』

と叫び乍ら、窓の方へ走つた。

『……』

『まア銀子さん――誠にはや何うも――』

『銀子樣――遊龜江ですよ、アノ――』

陰鬱な變つた姿を見て遊龜江は胸が一杯何にも言へない。

　銀子は、鎖を引摺つて、彼方へ、看守と共に去る。遊龜江は夫を呼返さんと焦心れども、鐵格子の內と外、奈何ともする事能はず、空しく、柱に倚りて、泣き入る。泣けばとて、破れし友の心に何の慰を與へることが出來よう。今は、もう、仕方も無いと思うたので、遊龜江は、其の儘、監獄の門を辭して、俥を我家へ走らせた。

　其の晩、遊龜江は、どうしても眠られなかつた。

　翌朝、夜の明けるのを待ちかねて、遊龜江は、庭の溫室に入つて、室咲きの菫の花を摘みとつて、束を作つて、それに『昔の友より』と札をつけて、早速、車夫に命じて、それを銀子の許に差入れる手續を運ばしめた。夕方、敎誨師から、囚人は非常に花を喜んで、花瓣を啜つて泣いて居ると云ふ知らせが來た。終りの處に、彼の囚人が泣き得る樣になつたのは、近來、全く珍しい事だと附加へてあつた。

　其の翌日、遊龜江は、蘭の花輪を差入れた。同じ樣な返事が、敎誨師から、又來た。

　三日目に、遊龜江は、薔薇の花輪をこしらへて、今度は自分で夫を手に持つて、再び、牢獄を訪うて、銀子に逢うた、銀子の態度は一變して居つた。鐵窓を隔

てゝ、今日は、銀子の眼は、人なつッこい光を放つて居る。そして、その光が、涙に沾うた時、彼女は口を開いた。

「花は昔を……ねえ、遊龜江樣、本統に、私、嬉しかつた、菫も、蘭も、……有難う。」

「どう致しまして。今日は、私、此の薔薇を。」

と、格子の間より、花束を差し出せば、不思議や、銀子は、見る見る血色を失つて。

「くるしい。」

と、微に云ひ乍ら、其の場に、ドッと倒れて仕舞つた。其の香の餘り强すぎた爲めであらうか。其の色の濃すぎた爲めであらうか。

二

「愈〻明朝」と、呻いて、銀子は倒れた。血は針の如く腦にのぼつて、前後不覺の境界に落ちて仕舞つた。然し之れは銀子にとつて寧ろ幸福であつた。若しも、此の時、彼女に幾分かの知覺が殘つて居つたなら、恐らく彼女は自分で自分の心臟を掻き挘つて死んで仕舞つたであらう。暫らくすると、世界は、再び、朦朧と、彼女の知覺に登つて來て、やがて、以前の如く正氣に戻つた。

「明朝、夫の故殺犯として、死刑台上に……」

と、之れが第一に彼女の胸中に浮んだ一ッの感覺であつた。

「夢のやうな、けれども夢ではない、どうも一度は死なねばならぬ人間だとは豫て覺悟はして居たものゝ今となつて、何時、何處で、どうして死ぬと云ふ事が瞭然分つた處で、自分にとつては、どうしても、それが事實とは思へない。矢張り、昔、小蝶のお葬式などして遊び乍ら、死と云ふ事を奇麗に奇麗に考へた時分と、少しも違はない樣な氣がする……

あゝ、戀しい、乙女の時が。

一體、今の此の感は何と云ふ感だらう。眩暈かしらん。イヽヤ私は眩暈はしない。恐怖かしらん。イヽエ、些も〳〵、怖くはない。齒醫者の方が餘程怖い位ゐも

のです。痛い、悶い、それが何です。私は平氣で堪へませう。」

『でも、唯一つ、どうしても、堪へられない事がある。眼を隠されて、追はれて、首を絞められて、外聞の惡い死に樣……

あゝ、羞かしい。身がすくむ。』

『短い冬の日は、もう、直き、暮れて仕濟ふでせう。明日の今頃、私は何處の世界に居るのでせうか。明日になれば分りますわ。

蠟燭燈さうかしらん、それでも、ぢつと、暗闇を見つめて居ようかしらん。妙に肌寒い。私の最終の日は最う暮れて、夜は近づきつゝある。今は夕暮。

あゝ今迄に、私は、幾多の樂しい夕暮を、芝生の上で、海邊で、兄弟姉妹と一緒に、父と母と、あゝ母と、種々と昔の事を思ひ出させる。平常ならば、今時分、私はお化粧して居るか、お客と應接して居るか、それとも、何處かへ彼の人と手を引いて、……ア、、懐しい、……あゝ、私は淋しい。どうか、彼の手を彼の聲を、もう一度だけ、

私だつて、彼の時、若しも正氣だつたら……全く一時の熱情に驅られたのですもの。

でも、あの憎らしい汚れた女と同じ天を戴いて居るよりは、矢張り、刄で、君諸共、刺して、殺して、葬つて仕舞ふ方が、餘程、氣持ちが晴々する。マア私は何時の間に斯んな荒んだ女になつて仕舞つたのでせう。

マア、悠然と、初からの成行を考へ出して見ませう。先づ、我々は結婚した。其の時、私の悅は極點に達して居つたのです。私は全く夫を信用して仕舞ひました。夫も、實際、眞實らしく見えたのです。けれども、夫に、本統の眞實はなかつたのです。一體、私は其の事をどうして知るに至つたのでせうか。或る出來事。一言で言ひ盡せる出來事、即ち、或夕方、私は買物の歸を急いで、並木へ差しかゝると、其の時、私の前を歩いて居る一人の紳士は、偶然にも、我夫である事に氣が付いた。私の心は嬉しくつて躍つた。けれども、

私は、罠と彼に追ひつかなかつた。何時になく夫の態度が、そわ〳〵して居る樣な氣がしだからである。向ふから歩いて來た一人の婦人があつた。婦人は、夫を呼び止めて、二人で手を引いてこそ〳〵話しながら向ふへ歩きだした。彼等は、公園の薔薇園へ忍び込んだ。私は夢中で、彼等に近づいた。……

ア、もうおもふまい・・・・それからの事は・・・・あゝもうおもふまい。』



三

執行官の一行は、翌朝早く、ぞろ、ぞろと第十一房の扉を排して、入つて來た。

銀子は、まだ、熟睡して居る樣である。

氣味が惡いのか、誰一人、彼女を起こしに行くものがない。一行は暫らく躊躇つて居た。其處

へ、慌忙しく駈け込んで來た一人の廷丁は、投げ込む樣に、一通の書類を檢事の手に渡した。檢事は、直ぐに開封して、

「執行中止。」

と叫んだ。

「エ。」

と、一同は眼をみはつた。

囚人は、まだ、靜かに、睡つて居る。

教誨師は、近く、彼女の傍へ進んで、腰をかゞめて、肩に手を置いて、顏を覗き込んだ。顏は既に蒼ざめて體は冷べたくなつて居る。教誨師は、一同を顧みて、

「もう、夙に、此の囚人は佛の御手に赦されてある。」

と嚴かに云つた。

看守等が、彼女の死體を片付ける時、彼女の懷中から、一片の白布を發見した。血書してある。

「薔薇の記憶は怖い。」

夫は自殺…でも、精神的には、矢張り、私が殺したのでせう。

當然、殺す可きだと思ひますわ。女の愛を保護する爲めに。

泣きたい。熱涙を君の頰に注いで、すべてを君に打明けたい。けれども、今は、もう…花を度々ありがたう。

遊龜江樣　　死刑囚より

あゝ、此れ、銀子の書置きである。彼女は、自分の指を嚙み切つて、自分の襦袢の袖を引きちぎつて、其の上に、右の文句を認め終つた時、獄裡に永く眠つたのである。寧ろ、之を認めつゝ永き眠りについたのであると云ふ方が適當であるかも知れぬ。

遊龜江の手許に、此の書置のとゞいたのは。一週間後の事であつた。

愼みの心の根をばうしなへば
姿も言葉も亂れちるなり



△女と夢

貴なる小さき蝶の仲睦まじく飛び交へるのみ、女の夢に入るにはあらじ。轉寢せる美しき女の微笑めるは、何事を夢見てやあるらんと、いと〳〵いぢらしう心憎きまでに可愛うこそ覺ゆれ。

さは云へいかばかり美はしき女なりとも、夢にうなされて悲しげなる叫びするは哀れにも亦苦々し。

角帽姿の凛々しき、貴族の若樣のいみじきのみ夢見てあらん女は、世にも芽出度き女なるらめ。まだ人の妻と定まらざる女の、子持ちたる夢見るなどは、うとましく興醒むるものゝ限りにこそ。

△女と口

女の口は小さく引き締りてあるこそよけれ。唇の薄きは何んとなう卑しう思はれてけうとし。又唇の厚く大きなるは世の常の女よりは、智惠なからんなど思はれてかなし。

口紅少しくさしたる女の、いとも相應はしき衣着て、讌遊に物打ち語らへる。心ある男も心なき男も何となうゆかしう思ふものぞかし。

口數多き女の絶えず面白く可笑しき事云ふとも聞手はさまでに喜こばざるものなり、されど、日頃口數少き女の稀に面白き事云ひ出でたるは、ひとしほめづらかに嬉しう思はるゝなり。

古き人の「物云へば唇寒し」など云ひたるも、實にこそと思はるれ。

△女と諺

女ほど諺になり易きものはなし。吾が國のみならず、西洋などにても女の諺は極めて多し。

夫あれば親を忘るなど云へる諺は、現代ぶりとやらの心の底を打ち破りたるにやと思はれて可笑し。借着よりは洗ひ着など云へるは下樣の女の平生を現はしたるものにや。

虚榮の女たらんよりは、貧しくとも女らしき女たらんこそ、若き凛々しき男にも慕はるゝものと知るべし。



闇を行く人

散紅葉

「花ちやん、お離れのおばさんにね、お茶が入りましたから入らつしやいつて云つておいで」

今迄廣いお縁で一人、人形かゝへて遊んでた花子は

「あたしにも頂戴よ、アノカステラをね」

「ハアいゝ事よ、早くおばさんを呼で入らつしやい」

人形かゝへたまゝ小さい足音に廊下を走つて行く秋晴れの好天氣、母の懐の温味の様なホカ〳〵と氣も遠くなる程よい氣持ちの日だ、お茶でも入れぬとねむくなる。

菓子鉢へカステラと今朝の栗饅頭とを盛つて、青い針の様な玉露をつまんで、わざと白湯をさゝずに千枝さんを待つてると、足音もなく現はれた花子はぬき足さし足やつて來て耳元に口。

「おばさんはね、お机の上へねてますのよ」つてさゝやく、

「ほんと、ぢやな母様が行つてくるからね花ちやんはこゝに番してるのよ又玉がお菓子食べるといけないから」

默つてうなづく花子を見返りながら立ち上る。

果して千枝さんは眠つて入らつしやるだらうか、花子の目に眠つてると見えたも無理はないが、又例の神經を起して泣いて入らつしやるではなからうか、どうも此頃の千枝さんはよつぽど病的になつて入らしたた様だ、この儘ゆくと神經衰弱等にならぬとも限らぬわ側からいくら氣をもんだつて仕方がないそれ共。

縁側へ出ると庭の植込みをへだてゝ、彼方に離座敷の硝子障子がキラ〳〵光つて見える、わざと庭下駄突かけて飛び石傳ひにゆくと木犀の強烈な芳香が鼻を襲

ふ。

＊　＊　＊　＊

左手に東山一帶を見晴らした八疊のお離れにッと二箇月前迄、良夫の書齋として金文字のキッシリつまつた戸棚や、文庫や机等があつて縁近くにはいつも食後靜臥なさるゝ長椅子が置いてありましたが、千枝さんが上京なすつてからは、其等は皆二階の十疊へうつされて、其あとへは千枝さんの柳行李や手道具の張裂けさうに入つた旅行袋等が運ばれました、そして鏡臺や机等も調へられて、千枝さんはこゝに半年を否半年以上を靜養せねばならぬ身體となりました。

千枝さんは良夫の妹で、國には花子と同年の茂一樣が殘してあります、急に慈母に離れた茂一樣は、祖父母の膝下で、夜な／＼の夢はどれ程か母親戀しく思ひ通つて入らつしやるでありませうか、思ひは勝る千枝さんも、お祖母樣の冷たい乳房をさぐりながら寢る我子の上を思ひ、又在米良夫の身の上を案じては千々の煩悶に苦しめられながら、日々病院通ひに日を送つて入らつしやるのです。

今度の上京も茂一樣をつれて渡米あそばす爲でありました、良夫の在住地北米の野に新生涯をお開きなさるゝ滿々の希望をだいて上京なすつたのでしたが、運命の神はまだ千枝さんに幸福をお許しにはなりません體格檢査の結果は渡米第一の條件となつてる眼病のため不合格となつて終ひました、千枝さんの失望はどんなものでありましたらう、僅に、もう半年の養生をせよとの檢査官の言を便りとして靜養して入らつしやいますけれど、弄される前半生の悲慘な運命と、前途を思ひなやむ苦しみとは全く千枝さんをヒステリー性に化してしまひました。

千枝さんは生れるとから母のあたゝか味を知りませんでしたが、産褥で死去なつた母に漸々似通つてくるさうです、とはいつも千枝さんが仰しやる言葉です。八歳の年今の母樣が入らしたのですけれど、同じ血でなければ味ふ事の出來ぬ情愛はふれた事もなく、淋しい／＼心は、事毎に實母の俤を慕ふのであります。

私が此家へ入つて千枝さんからは義姉さんと呼れる様になつたは十八の年、千枝さんは十九でした、かねて他國に奉職してた良夫は新婚十日目にはや、國を後にして二人共他國に生活を續けてゐるのですから、肝心の國の内狀は殆ど知りません、國の方でも成べく私等二人には色色な事は聞かすまいとしてをります、それで其翌年の秋千枝さんが二十歳で、今の一郎様に嫁ぎました時も良夫は少しも干渉しませんでした。



結婚なすつた千枝さんは幸福であるかと思ひの外、まだ／＼不幸な淵へ沈み行くのでした。蕩盡された家運とも知らず、媒人口を信じて嫁つて見ると、もうその時は家までなくなつて居たのです、氣弱の千枝さんは半ば自失して終つて、殘りの家財をまとめて一郎様と共に小さい家に引移りました、そして一

郎様は腰辨さげて日々役場へ通ふ身となりました、それ共大家に育つて放埒にもちくづした一郎様の心は却却十八圓位の月給に甘んじてはゐられません、いつの間にか少なからぬ公金を費消してる事が發覺しましたと同時に妻をすてゝ渡米して終つたのです、父様は斷然離縁と迄奮怒されましたが、其時ははや千枝さんはたゞの身體ではなかつたのです、其儘里へ引取られて其翌年茂一様は生れました、幾度か死を決した千枝さんも愛子の顔を見てはさすがに恩愛いきづな絶ちかねて無邪氣に成長しゆく我子に慰められつゝ四年の月日を送つて入らしたのです。

處が去年の四月、千枝さんにとつて大福音が傳はつてきました、それは在米の一郎様から初めての通信に接したのです、父様は見向きもなさいませんでしたが開封して見ると實に意外、渡米後の一郎様の有様を委しく書いて、今は全く改心して努力の結果は一部の日人の取締りともなり、多少の蓄財も出來た、此迄の重重の不都合はどんなにしても御わびするから、どうぞ千枝さんを渡米さしてくれとあります、別に費用として二千金迄送つて來ました、それ共父様は一郎様の人格を思つて容易に信をおきませんでしたが、漸々と歸朝した方々の言によつて、漸く千枝さんは渡米の事と決定いたしました、

果して北米の地は千枝さんに幸福を與へませうか私は弱い千枝さんの身を案じずにはゐられません。

* * * * *

庭木の枝と枝との下をぬけて、顔に引掛る蜘蛛の絲をはらひながら離れの縁側近く立つた。

「千枝さんお茶が入りましたから入らつしやいな」と聲をかけて見た、

「ハイ、ありがたう、、、、、、何の御馳走」

「オヤ厚顔しいのね、マア入らつしやいよ、貴女の豫期してるのよりはよいつもりだから」

「さう、、やつぱり川の藻屑ね、杭には引かゝるわ、ホヽヽヽヽ」

意外にも元氣なお聲して出て入らした千枝さん、や

つぱり泣いてゐらしたのだわ、お眼の縁が證據だものいつもこの通りだ千枝さんは、一人でとぢこもつて入らつしやる時には大抵くよ〱泣いてばかり入らつしやるのに私の前では別人の樣にはしやぎなさるんだもの、私が勉めてお氣をまぎらす樣にと陽氣に仕向けてゐるからでもあらうが、一つには不遇な境遇にありながら、其弱身を見られまいとしてつとめて平氣を裝ふて入らつしやるからだ、そのくせ何か心に響くものがあると直ぐ涙となつて現れるのに。

茶の間へ入ると花子が手をキチンと膝の上に重ねてまちあぐんでゐた。鐵瓶のお湯はチン〱沸つて「何の御馳走して下さるの、おばさんに、、オヤ〱おいしさうね。



お湯呑みに香しい匂ひのお茶を入れて、

「おつまみなさいよ、今朝ね病院へいらしたお留守に東京から荷物が歸りましてね、宅も明日は歸るさうです。

淋しい頰に笑顏を見せて、ハイカラが少しみだれてゐる、肩のあたりおやせなすつたわ、

今日は大變ひまどりましたねー、病院が」

「お藥を貰ふ日でしたからね、どうしてもこの充血がとれないさうですよ。もうだめですこんな眼なんかこれからよくなり樣がありませんわ」

「そんな事はありませんよ、充分御養生なすつたら、

昨日なんかあんなにお裁縫なんかして入らつしやるからいけませんよ、一番眼には毒ですよ、遠慮しないでお出しなさいよ、どうせ上手には出來ませんが、常着位は縫へますわ。

「ありがたう、こんなに御厄介になつてゐて何一つお手傳ひは出來ずほんとにすみませんのね」

とはや瞳がからんで入らつしやる、

「そんな氣でいらつしやるからだめよ、姉妹ぢやありませんか義姉としたらもつと〱世話やかせて下さればよいにと思ひますわそれが本望ですもの遠慮なさると水くさくていけませんよ、こんな氣樂者ですから氣がつきませんからどし〱御注文して下さい」

「いつも御親切はわかつてゐますけれど、私はもうこんなにひねくれて終つたのですね…不幸な者はどこ迄も浮ぶ瀬がありません」

伏眼になつた首に後れ毛がかすかにふるへてゐる。

「悲觀なさるからいけませんよ、もつと〱呑氣におなりなさい、そして運を天に任すと思ひなさい、後楯には宅も國のお父樣もありますわ、餘りくよ〱なさるとお身體に障りますよ、此頃は又餘計にどうかして入らつしやる樣ね、茂一樣を思つたら決して貴女の身體でも我物ではありますまい、お大事になさいよ」

とう〱千枝さんはハンカチを顔にあてゝおしまひなすつた茂一樣の事は口に出すまいと思つてゐて終に云つて終つて又千枝さんを泣かした、アヽ止せばよかつたのに。

涙の中から千枝さんは云ふ、

「三日でもいゝ義姉さんの樣な境遇でゐたいと思ひますわ、どこへ行つても私は…家のない漂浪者ですもの、田舍にゐるうちには餘りクシヤ〱すると、ちと賑やかな處へでもぬけて出たい等とおもひましたけれ共さて來て見ると全く反對で華やかな此地の生活のうちに卷き込れて見るといまさら自分の不幸が目立つて來て、義姉さんはすみませんが、こゝの樂しい家庭のなかにゐるのが、つらうございますの、やつぱり田舍で村の子供を集めて裁縫でも敎へてゐる方がよかつた

と思ひます……せめて、どんな山奥でもよい親子一緒に暮せたらと……愚痴っぽくなるんでせう」

千枝さんがしみじみこんな事仰しやつたのに今が初めて其心情を解すると實にお氣と毒でならぬ、自然につれ込れた私の胸も一ぱいになつた。

「ですから早くお眼の御養生さへ出來たら好機會が目前へ來てるではありませんか、一郎様は幸福の鍵を手にして待つて入らつしやるのですもの」

よつぽど元氣に云ふたつもりの私の聲もふるへてゐた、



「どうだかわかるものですか、あんな人の事ですもの別に望んでゆくんではありませんけれどこちらにゐたつてつまらぬ身體ですから」

と口には仰しやるけれど、たしかに心の奥には渡米の希望が燃えてるのであらう、今の千枝さんにはこれのみが生命である。

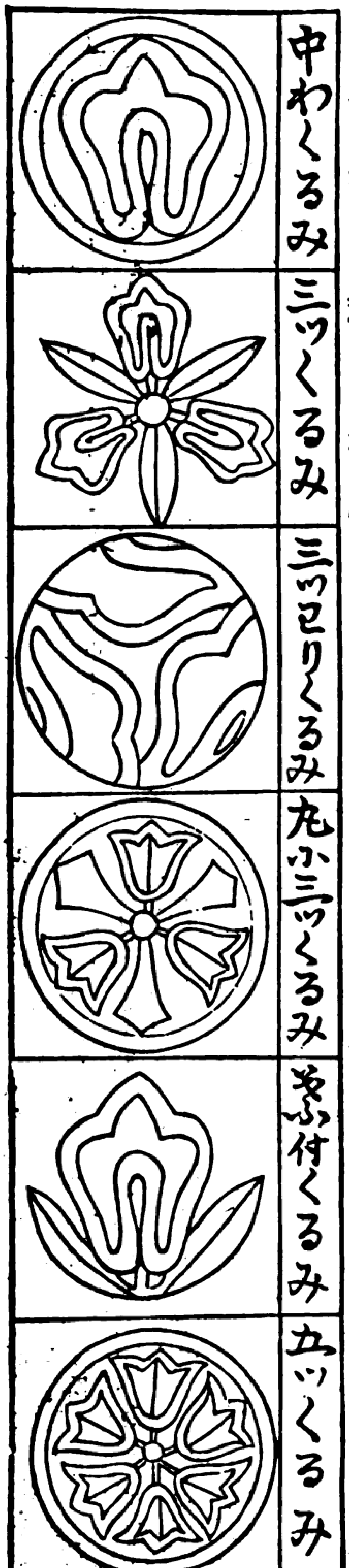
花子はいつの間にか庭へおりて桃から生れた桃太郎と大聲に唱つてゐる。

「それにね、今迄は義姉さんにもお話しなかつたけれど一郎には私より前に家内があつたんです、死んだ子供迄あつたさうですの、茂一は戸籍上二男です、一郎だつて情は深い方ですけれど、何かしら心の奥に冷たい、氷の樣なものが挟まつてるやうで一日も樂しく暮した事もありません、よし渡米して萬一にも思ふ丈の事が出來たにしても永久にこの冷たい感物はとけませんでせう……」

と又更らに新しい涙が湧く、

ア、そんな秘密があらうとは夢にも知らなかつた。今迄現實の表面の美しい順路をのみたどつて來た自分には裏面に潛んでる種々の苦境の味にふれた事はなく、或は新聞や小説等でのぞいて見る事があつても自分等とは全く無關係の別世界の事の樣に思ふて、同情の心はあつても全心をそれが爲奪はれる事はなく、片面の心はいつも歡樂をうたつてゐるのですもの、こゝに悲運に泣いて入らつしやる千枝さんに對してもなぐさめの言葉がない。どうすれば千枝さんの今の心を滿足さす事が出來るでせうか。

こんな時には苦勞も知らぬ私が千言を費やしてなぐさめてあげるよりも、同じ身の不幸をかこちて入らつしやる方が心からの一言が、たしかに千枝さんに取つては嬉しく感じるのであらうのにと思つた。





半世の幸不幸

松虫

△

千草八千草みだれ咲きて――花をしとねの夢面白と――と清い涼しい唱歌の聲が流れてるばかり、夕暮の田圃道はまことに淋しい。今迄『先生さよならあゝゝゝ』と後ふりかへつてはおじぎをしてゐた可愛らしい姿も、もう見えなくなつた。

急いでお歸りよと云つたのをよく聞き分け、一生懸命で驅けて行つた。ほんとうに子供といふものは可愛いものだ。敎師を神樣の樣に思つてるのですもの。それはよく云ふ事を聞きますことよ。家でする仕事でも私が一言いへば直ぐきゝめがあるつて母親が喜んでゐた。今日だつて日曜だのにわざわざ理科の材料を採集に來たのです。理科の材料といふとどんなものかと思ふが、ヌスビトハギだのイノコヅチだのを澤山とつて、鬼の首でも取つた樣に喜んでゐる。ホヽヽヽ、歸る迄に着物や前垂にひつついて困るだらうに。何時かも蒸氣機關の發明の話の時、ワツトが鐵瓶の蓋の上がるのを見て考へついたのだと話したら、早速家へ歸つて『ふたの上る樣になる迄湯を沸騰させてくれ』と云つて聞かない。母親がどこ迄蓋が上るのかと云ひますと、天井迄上ると云ひましたと懇話會の時大笑ひだつた。實に無邪氣なもので、此方の仕向け一つでどんなにでもなる。殊に一年生から持ち上つた子供は、三年位になると、もう自分の型にはまつて、目遣ひ音聲丈けで躾けが出來る。しかし中途に入學して來た生徒はどうも思ふ樣に行かない。妙に萎縮して仕舞つて、餘程の優等生でない限り、ずんと成績が落ちてしまふ。同じ書物で同一程度に敎へるの

に、如何してそんなに違ふものかと思ふ様だが、心理作用は不思議な力のあるもので、どうも甘く行かない。丁度植物の生えぬきと移植したのと勢がちがふ様なものだらうと思はれる。

こんな所に迄注意する親は少ないが、子を持つ親は小さい事にも氣をつけないと、取り返へしつかない失敗をする事がある。

△

あゝ又人世観ですか。あなたとお話をするといつも極まつてますのねえ。え私ですか、私は此の儘で通せれば最も幸福だと思つてゐます。だつて私は自分の人格を自覺してるんですもの。是を天職だと思つて努力してゐます。樂んで其責任を盡してるんですから幸福ぢやありませんか。元より女敎師なんかする人は逆境と云はなければなりますまいね。女子の本分も得盡さないで、自分の子でゝもある事か他人の子を育てるに汲々として、辛苦した結果は皆人のお手柄になつてしまふのですもの、しかしね、物は思ひ様一つですわ。「心燈を滅し去れば心自ら涼し」です。あまりあくせく思はないであきらめるのが肝心です。一日の苦勞は一日にて足れり。運命の舟に乘つて流されながら、ゆる〳〵と前途の方向を定めるのが、一番賢い人ですの。其中にはきつといゝ考へも出るでせうよ。といつて小成に安んずるのはいけません。私だつて是で滿足してるのぢやありません。まだ〳〵野心勃々たるものがあるのです。いゝえ、結婚ぢやありません。不自然な事が何故幸福だと仰有るのですか。

そりや性質によりますわ。人は己を知るのが第一です。自覺して適當な方法を考へて、最後の勝利に向て進みさへすれば、間違ひはありません。それはもう理想の夫がありさへすれば、直ぐ今にでも結婚しますけれど、それには餘りに男子の缺點が見え過ぎました。

私は男子の事は多く研究しませんが、日々交際してる間に、隨分よく缺點が出ます。此の世の中に、眞實に女の爲めになる男は、極めて少いと思ひます。否な

いといつて過言ではありますまい。何でも己れのためになる女、機械、奴隷、困つた時の助手位に見て居るのです、迚も人格なんか認めてくれるものですか。家庭教育に肩臂張つて見てもだめです。少し蟲のある女が、どうして堪へられるものですか。甘くクキンとなりすまして、全家庭を占領するのは、優れた賢婦か、マイナス附の囚はれて滿足してる婦人ばかり。悍婦は決して男子のものでありません。又男性化した女は家庭の破壞者です。



八重子さんが後妻においでになつたつてですか。三十にもなつて！そんなに淋しいのでせうか。今になつておいでになる位なら、何故もつと早く入らつしやらなかつたの。第一再婚といへばもうもぬけのからの様なもの。愛も戀もありやしませんわ。いゝえ、あるといふ人は僞りです。結婚は純潔なるべきもの、交り氣なき愛を要求するものでせう。此方はいくら年をとつて居ても初婚ですから滿腔の愛を捧げるに違ひありません。しかし先方は同じ熱度で受けて

呉れません。きつと不平も起りませう、失望も來ます。圓滿でない事は火を見るよりも明です。君子は危きに近らず。尊き身體をつまらぬ犧牲にするよりか、自分に適當した天職に盡して、思ふ存分腕をみがき、永く趣味に生きる方がいくら幸福か知れません。又世にはかゝる女性に待つ仕事も多いだらうと思ひます。私は忘れても結婚すべき女を女敎師なんかにするものぢやないと思ひます。永ければ永い程男性化してしまひますからね。又結婚してから勤めをさせるのは不自然も甚しいと思ひます。人は二人の主に仕ふること能はず、どちらかに無理の出來るのは當然ですもの。

だから私の樣な女は、これが適當だと信じてますの。オールドミッスと嘲笑を受けてもかまひません。どしどし信ずる所を行つて最後の勝利をはかる積りです。

物質上の滿足ですか。それは程度問題ですわ。私だつて女ですもの、いろ〳〵の望みもありますさ。しかし欲を云へば限りがありません。大抵で觀念しませんければねえ。こんな事を云ふと小さな望だとお笑ひなさるでせうけれど。

打明けたお話が、今私の俸給は貳拾貳圓です。ええ小學校の敎員でこれ丈け頂けば上々の部ですわ。そして出ましてから滿七年になりましたの。で七月には年功加俸の恩典に浴しまして、年額三十六圓を頂く事になりました。其他の雜收入を合せますと、二十八圓の月收となります。生活程度の低い當地、ことに親がかりの私ですから、小遣といつても澤山は入りません。私の事ですもの、隨分死金もつかひますけれど、――大部分は貯蓄してゐますから、五ケ年の間に千圓餘りになりました。東京あたりの全盛な令孃方の夜會に召す腕輪の一つにも價しませんでせうが、これが自己の獨力でこしらへた汗の結晶だと思ひますと、百萬圓にも優る樣に思ひます、かうして老朽しない樣に修養さへして行きましたら、數年の後には恩給を頂く事も出來ます。兎に角後を顧る必要もなく。安心立命の基の上に立て職務大切に勵精しましたら、至誠はたしかに通じますから、相當の成績は上ります。かくして職務

上に趣味さへ起りますれば、生涯然程の淋しさを感ずる事もありますまい。人はパンのみにて生くるものにあらず。あまりパンばかりに憧がれてゐては、禽獸と大差ないぢやありませんか。

△

今日は父兄會を開いた。割合によく集つたが、此方の來てほしいと思ふ人は來ないで、もう何にも彼もよく分つてゐる人ばかり集つた。併し世の中は凡そこんなものであらう。高い所へ土持とか云て、善い方は益〻よくなるし、惡る方はだん〳〵下るのだ。道德の源泉は母親の膝の上といふから、子供の敎育の事は女の人に聞いてほしいと思ふのに、どうしても女は出て來ない。何時かも學校へ行くのは恥かしいと云つてた人があつたが、出てい〻お話を聞くうちにだん〳〵賢くなり、恥かしくもなくなつた。人中へ出なければ何時迄も進歩する筈はない。もう少し母親が責任を重んじてくれなければ――。



今日のお話は訓練といふ事で、子供が可愛ければ躾を嚴にしなければならぬ、忙がしくて面倒だからと云て放任して置く樣ではいくら遺産が多くあつても終には家も財産も皆なくして仕

舞ふ、人物にさへして置けば財産はひとりでに出來る、だから子を持つ親は何事よりも躾に骨を折らなければならぬといふ意味でまことに適切なお話であつた。

後では例の通り各組々で懇談會を開いた。隨分顏馴染が出來たので、打とけて話が出來て、大に得る所があつた。中にも同情に堪へなかつたのは、なさぬ中の母親が『實は義理ある中で御座いますので、あれは繼子だからと後指さゝれまいと遠慮したのが仇となりまして、今日ではあの通りもう手もつけられない我儘者になつてしまひました、今更後悔しても後の祭、校長樣のお話を承つてまことに思ひ當りました』と涙流してのお話だつた。

ほんに義理の中程むづかしいものはありますまい。少しでもきびしくすれば虐待だといふ。甘くすれば直ぐつけ上つて侮つて仕舞ひ、親とも思はない樣になる。たゞでさへ育てにくいのを、同情でもする事か、近所や親類がおせつかいに入知慧つけてませかへすのだもの、圓滿にゆく筈がありません。

子供が何を知るものかと云ふが、子供ほど機微な所を見ぬく者はない。恐ろしい眼を持つてるものだ。私の組には此の種の子供がなか〳〵多い。母親のために少しでもと始終注意はしてゐるが、どうも皆傾向がよろしくない。父親が主になつて努力しなければ迚もだめだと思ふ。氣の毒なのは繼母と名のつく女だ。否善惡共になさぬ中に育てられる子供こそ實にあはれむべきものである。

とは云ふものゝたしかに例外はあるもので、お隣の奧樣なぞ、非凡な方と云てよい。お年は五十位だらうが、お美しいからお若く見える。そしてお好みが地味だから、上品でなつかしみのある方だ。又其お子樣御夫婦がお雛樣のやうなおきれいな方。婿樣は御養子ださうだが、皆が揃ひも揃てよく出來た方ばかり。隣へいらしてから四年になるが、笑ひ聲こそよく聞えるが、まだ高いお聲を聞いた事がない。そしてお二人して母樣々々と大切になさることゝ月雪花のをり〳〵に、若い方々に連れられてお出ましになるのを見ても、お

家庭の内が偲ばれて羨ましい樣だ。どうして是れがなさぬ中と思はれ樣。誰も一人娘のお秘藏子とばかり思つてゐたのに、此間お使ひに來た婆やに義理のお仲と聞いて驚いてしまつた。

主人は銀行の支配人、若い時から非常な放蕩家で、少しも家へ寄りつかないのだつて。たまに歸る時でも、醉つぱらつて歸つては管をまくのを、奥さんは惡るい顔もしないで待つてゐらつしやる……。心の中は……女ですもの。はたで見て居てもいぢらしかつたと泣き〳〵話して居たつけ。



あのお孃さんの產れた時、奥樣には內證で里子にやらうとしたのを、何處からか聞き出しなさつて、どうぞ私の子にして下さいと、無理に引取つてお育てなさつたとか。それからといふ者は、明けても暮れてもお孃さんの事ばりに浮身をやつし、神から下さつた授り子だと裏表なく可愛がりなさるので、娘さんが又母樣其まゝの優しい氣性、お互の意氣がしつくり合て、父樣よりも母樣

によくなついて、物心つく頃迄義理の仲を知らなんだといふ事です。眞情と云ふものはたしかに感應するものと見える。笑ふ門には福來るとやら、家庭がこんなに圓滿でにぎやかになると、汚れた快樂よりも清い團欒の樂しさに味を覺えて、主人の足も我家に止まる樣になり、年中木枯の吹き荒んだ家の内も、今の樣な平和な家庭になつたのですつて。私は今更に女の力の侮られないのに驚いた。つまり賢い妻、よい母樣を持つた者は幸福だといふ事になるのだから、一層女子の敎育を考へなければならぬと思ふ。

料理茶屋の風流

文化文政の頃草双紙の作者として有名なりし岩瀬京山の蜘蛛の糸巻といふ書に江戸の料理茶屋の奢侈風流をものしたるあり曰「く百五六十年以前は江戸に飯ン賣る店はなかりしを天和の比ひ始めて淺草並木に、奈良茶飯の店ありしを諸人珍らしとて。淺草の奈良の茶飯喰はんとて、わざ〳〵行きし由近世のさうしに見えたり。しかるに都下繁昌につれて、追々食店多くなりし中に明和の比ひ深川洲崎に升屋祝阿彌と云ひし、料理茶屋亭主は剃髪にて阿彌といふ名をつけしは、京都丸山に倣ひたるなるべし、此者夫婦、人の機をみる才ありて、しかも好事なりしゆゑ、其住居二間の床、高麗縁長押作り、側付を廣敷とし二の間三の間に座しきなかこひ、中の小亭。又數寄屋鞠場までもあり、庭中は推してしるべし、雲州侯の御隱居、南海殿おなじく御當主の御次男雪川殿。しば〳〵爰に遊び給へり。此兩殿は、其頃の大名の通人なり。雪川殿のかくし紋。川といふ字の羽織、名あるたいこ持は着ざるはなし。升屋祝阿彌、件のごとき大家ゆゑ。諸家の留守居者の振舞といふ事。みな升屋を定席とせり。其繁昌今比すべきなし。廣座敷に望陀覽の三字を額物になし。地は呂色。縁は蒔繪、四隅に紫銅のかな物。大さ六尺ばかり。書は漢文にて南海君の祝阿彌へ賜ふゆゑよし二百字ばかり記しあり。嗚呼盛唐の宮闕も亡ぶる時あり。此額近ごろ。質の流れを買ひしとて。或人の家にて見しが。後に聞けば今の白猿に與へけるとぞいひし。天明に繁せゝりの通人が遊ぶ料理茶屋は、葛西太郎(隅田川より秋葉へ往く堤の下リ口。今は平岩)大黒屋孫四郎(同所秋葉)甲子屋(眞崎)二軒茶屋(深川入幡境内)百川(室町横町)などあり」云々





小春日記

FW子

見よとて咲くのは千草、
櫻は返りて咲くよ、
樂しく〱小春。

軒端に友よぶ雀、
梢にさへづる百舌鳥よ、
樂しく〱小春。

とれとて赤きは柿よ、
拾へと落つるは栗よ、
樂しく〱小春。

日かげに初霜消えて、
赤く赤きはもみぢ、
樂しく〱小春。

豊かにたれたる稲穂、
ながむる農夫の笑がほ、
樂しく〱小春。

のどかに晴れた小春日和。妹の靜江さんは聲高らかに「たのしく〱小春」をくり返し歌ひながら裏の花園を散歩してゐる。

フックリと出した前がみにはとき色のコスモスを一輪さして…。

窓のガラス越しに私は袷のやうだとながめ入る。三月生れのカナリヤもよくさへづるようになつた事。

市ケ谷の御叔母様から電話。

「これから上野の公設展覽會へ如何？」との御さそひ!!! マア嬉しい!!! 丁度髪は今朝桃われに結ふたところ。すぐに仕度する。御叔母様は美術家の奥様だけに、衿と着物帯と帶どめなどの色の配合がおやかましい。御母上様に御相談してあのハデな紫矢絣の糸織に支那どんすの濃クリームの丸帯キユーッと立矢に結ぶ。衿は先日求めて來た薄紅葉の縫ひのをかけて…。

やがて御叔母様も御出になつて車をつらねて出かけたのが九時半。

やはらかな風が顔をながれてゆく。

子供の手を引いてたのしさうにあるいてゐる若夫婦、御袴に靴召した二三人伴れの女學生の幾組かを追ひ越して會場の入口についた。ヴェールとパラソルを車夫にあづけてひやゝかな建築物の中に私は吸ひ入れられた。

○

田邊艸郁の「山雲呑吐」御父々様の御氣に召しさうな繪だ。惜しいかな、これは非賣のしるしがある。ホホ、、非賣で仕合せ。どうせ求める力があるんぢやない!!

今村紫江の「露花鈴」。隨分いやな色どりですね、何何時代とかいつていゝのかもしれないけれど……何だかちつともはへない、櫻の花の盛りとはおもへないようなしづむだ陰氣な、

右の方の女の人の顏など「うらめしいッ」ていひさうだわ!ホヽヽ、アラまッたくよ。

鏑木清方の「朝顔と驛路の女」。これは大していゝとおもつたのでもありませんが、つい先日御母上様から朝顔の御話を初めて伺つたので何だか目につきました。

三宅背山の「揚弓遊び」。私は一たいこんな繪が大好き。優美で何となく氣が晴れるようあの矢をつがへて片ひざ立てゝゐる目の美しい人の顏が今でもハッキリと眼底にうつし出される。矢を拾つてゐる少女も美しかつた。

尾竹越堂の「韓信」。それ〴〵の人の顏の表情なかなかよく出來てゐるとおもつたけれども一たい韓信がマタクヾリをした時にあんなに多勢の見物人があつたのでせうか……?ホヽヽ、よけいな心配してゐるわ!!

池田蕉園の「髮。」ミス蕉園じやないんですよミセス蕉園。いつもの程にだらしなくないのがうれしい。同じ命題でも土田麥僊のゝよりは私はいゝ。土田麥僊のもいゝ事はいゝあの袖の重みなどいかにも縮緬らしいがあの女の年のわりに襦袢の衿があんまりじみなんですもの!!あれはもう三十からの人のかける衿ですわ!!

それはさうと蕉園さんは何だかやはり榊原さんと申上

た方が御似合ひ遊ばすのねー。池田樣ていふと今までの蕉園樣と又別の方のような氣がしますわ！どういふものでせうね。

尾竹々坡の「秋草」。マア何て細かい、そして美しい御筆でせう！！細い〳〵草の葉の一筋にも筆力が現はれてゐて草と〳〵のすれちがひはさわ〳〵と音がたちさう。實に美しい。私はこれが一番氣に入つた。

それからも一ッ私の氣に入つたのは。



竹内栖鳳の「雨」實に〳〵いゝのね。あの木の下に置かれてある車、ずッと左の雨のふつてゐるところなど實に私は前を去りかねた。

これも竹坡の「水」。隨分キバッな書ですわね、あの水の工合。だけれどもあれが竹坡だから書けたんですわねー。とても自信がなくちやア、は書けません、次に第八室に入つて一番に目についたのは寺崎廣業の支那風景の金屛風一双。これは何ともいへない。

又竹坡の「梧桐」。色のアッサリとしたところ、何となくすが〳〵しい。あの細笛にねむりさうな羊の目。見てゐる人も引きいれられるようでした。

平福百穂の「赤茄子と芋。」これがなか〳〵いゝのですつてねー。どこがいゝんだか私のようなヤボチャンにはわからない!!

ア丶肩がこつた!!まだこれから彫刻と西洋畫。もうとてもくたびれてたまらないから西洋畫は又の後日にして素通りする。只大下藤次郎の畫の下の菊の花輪に黒のシャの切れが結んでかけてあつたのにはおもはず目が曇つた。

○

ア丶もう出口かとおもつたら何だか急にものたらぬ心地がする。もう十二時前。「三越へでも行つて見ようぢやありませんか!御腹もすいたし……」と御叔母樣の仰せにしたがつてそれから又車にゆられながら電車と競走。

三越へ入ると正面の階段をすうツとのぼつて、一直線に食堂へ……相變らず三越の御膳は美味。コーヒーをのみながら二階ではじまつたピアノの八千代獅子きいてゐる心地よさ。天野あい子樣かしら?

寫眞室に入る。オ丶森律子さん!!ベンチに腰かけて……あの一寸氣どつた御目、かろく結んだ御口。よく撮れてゐらつしやる。かつてはトキ色の御洋服可愛らしく舞踏なすつたり、あの御上手な御和歌で校中をおならしなすつた森律子樣!!もう今ぢやすつかり……。

併し私はさうおもひました。律子樣は兎も角も御仕合せな方だと……。ね、さうでせう。苦でも樂でも人間の一生は一生ですもの!!その一生を御自分の好きな華美な世界に終らうとの初階段。まつたく金持の金庫の番人などになるよりかどんなに氣がきいてるかしれやしない。どうか此上は今のぼりかけてゐらつしやる階段をふみはづさずに首尾よく上までおのぼりなすつて下さるようにと私は只友情として祈ります。

靜江樣のおみやげに美しい針さし求めて歸る。もう四時前であつた。



愛なき良人の妻

川上葉子

闇の夜に鳴かぬ鳥の聲聞けば、濁つた嫌な鳥の聲。遠くの方で子供が眞似るアーアーアー。かあと啼かないので尚嫌に響く。誰か逐つて呉れると好いと思つて居るとフト啼かなくなつた。夜の鳥鳴き程嫌で氣になるものは無い。

父もない母も無い兄姉弟妹も、そして樂しみもない私は更け行く初秋の行燈の影に一人物思ひに沈んで居る。

庭の千草も蟲の音も枯て淋しくなりにけり
嗚呼白菊、嗚呼白菊、獨りおくれて咲にけり

又あんな淋しい歌。伊藤さんの文子さんよ。ホロ〱と譯もなく熱い涙が頬を傳ふ。悲しい夜だ。

眉山先生の逝かれたあの夜！屹度こんな靜かな松の葉ずれにまでホロリと落ちる露の音の讀める夜だつたにちがひない。

平凡だが兩刃の鋭い刄物に毒藥塗つて、我が思ふ人の其の手でたつた一突、心臟から溢れる血汐の中に思ふ樣狂つて見たい。倒れたら思ふその人に抱かれて噴火口でも好い、成るべくならば寺院の鐘鑄るルツボの中に投げ込まれたい、いやそれも月並！いつそ富士山上で割腹でも……。

見つめた壁の割目が人の顏に見えてそして消える靜かな靜かな死んだ樣な夜、ジジーと庭の隅で御定りの蚯蚓だらう、無理にふるはすかと思ふ樣な尺八の音が裏の寫眞屋の物干から響いて來る。千鳥の曲かと思ふと六段、博多節、追分。私は聞かない樣に耳を閉いで

居るが、指の間からスイ〳〵と悲曲が通ふ。それに合して歌ふ人がある。

碓氷峠の權現樣よわしが爲には守り神
墨染の袈裟や衣に身をやつせども
何時かぼんのふが歸するやら

あゝもう、好い加減によしてほしい。好きで好きで、もう一度もう一度と、松前を隣りの爺やにねだつた事の有つた私が、何故かう變つたのか知ら。今は聞くのが辛い。

船に乘なら身を大切に船は浮もの流れもの

ギリッと齒を嚙むと足の先まで冷りとする。頭の中では黒胡蝶が狂ひ出した。雌雄の蝶!!! 私しには戀人が有つた。誰か云ふ、

「一身を捧げた良人の前で何だ大馬鹿奴が」。振り返ると輕い寢息の洩れる夫の寢顏。……嫁いで來て八ケ月目の夜だ。

「チエッ口惜しい」とたしなみ忘れて思はず聲が出る

「オイ未だ起きて居るのか水は?」。手をつけるのが恐ろしい程よく澄んだギヤマンの水注から、コップになみなみとついで「さあ召し上りませ」。

と言つてすゝめると瘦たお手に引きたぐる樣に口つけてゴクリ〳〵と齒の染みる樣に呑んで、クルリと寢返り打つてそのまゝスヤ〳〵と眠つて了はれる。盛りの十七八は過ぎたつてまだ熱い血潮の香りは失せはせぬ二十二で初めての夫、これが一身を捧げる人かと悲しくなる。早い人なら孫の一人も有るお祖父樣の四十五。澤やかな髪が額に波打つてと云はれないんだもの。情ない、ヒイキ目に見てさへ白髪の方が慥かに多いんだもの。

花やかな所は塵程もない。青春は幾十年も後で手をたゝいて笑つて居るんだから無理もないもの丶、さりとて餘りな老人染樣。情ないとは思ふけれど私は今日迄口答所かお前は無神經かとまで云はれる程從つて來た。當前の事乍ら實によくすると自分乍ら不思議に思ふ位。末つ子だからと十九にもなる娘を夜中に便所に行たかあ無いか、などと馬鹿〳〵しいまで大切に育

てゝ下すつた母樣に今の夫の有樣をお話し申したなら腰も抜かしてお了ひになるだらう。娘の苦勞をどうぞ草葉の影から見屆けて下さいまし。

長いモミ上げに短かいお髯がバリ〳〵痛い程顔寄せて、親しく未來の夢に憧れて居らつしやる新婚の皆樣の御樣子を拜見すると涙が出る一年とたゝない間によう涙が枯れなかつたと不思議な位に泣いて暮した。私の不運だとあきらめもして居るが……。

家に入る時に面白半分に臺所の手傳顔して交かへして居たので不出來乍ら御飯も出來る。副食物だつてさ程化物の樣だとも思はれぬ位にはして居る積だのに、「こんな甘いもの食へるか、酒呑の家内なら氣を付けろ馬鹿ッ」。女中なしで病氣上りを働いた時の辛さは死んでも忘られない。勿體ないが嗚呼涙のある夫を持ちたかつた。乾度給金の入ぬ高等下女だと思つて居らつしやるにちがひない。あの毒々しい針を含んだ口のきき樣は……。愛も何もない冷たい灰色の樣な生活だ。面白くもない醫師なんか眞平だと泣いて斷つたのに……。三日に上げず怒り散らして其の度三日四日は一口もものを言はず、脊中合せの寒さかな、醒めて來るまで容易な事では無いんだから、クルリと床の間の薄暗方に向いて上目使にギロ〳〵し乍ら夢想兵衛胡蝶物語を讀んで居らつしやる、私は緣の方向いてセッセと冬物の仕度する。玄關には丸くなつて一生懸命美人畫の下畫つけて居る敏夫さん。斯した有樣は何時もの事。この時には無言つて居るのが一番なので四日目位からポツ〳〵口を開き初める。それも私からでは勿論ない。自分が惡かつたからと思へばあやまりもするが持まへの負け嫌ひが突ばつて白を黒とはどうしても云へない性分なので。

當りさわらず不味さうに召し上る御飯の前にチョコンと坐つて見て居る可笑さ。可笑いより馬鹿〴〵しくて時によれば噴き出して了ふ事さへある。四日も五日も怒つて居るなんて迚も女の私だつて忍耐力の乏しいものはちよつと出來ない藝だ。

來て二十五日目の夕、下女を歸したので一人生木の

煙る七輪の前に涙を拭乍ら仕度して居ると主が出て「洋食は一品位出來るのかい」と尋ねられて、ツヒ「眞似事位は」と大きく出たので、カツレツ位はごまかせると早合點が私の落度。八百屋に賴んで四十八錢のバタ一鑵買つたのが氣に入らないとて大嵐吹きすさんで口あけたばかりの鑵を私の胸目がけて發矢とばかり。ツイと身を交した拍子に緣側の金魚鉢にガチヤリ、時ならぬ落花狼藉。拭き込んだ柾目の立つた緣をスル〳〵と小さい動物は紅を流した樣。丁度一週間角突合。當り散らして出入の魚屋にまで來樣がおそいと大目玉。一月の中二十日は睨み合で暮して了ふ。三越の流行會だの白木屋の冬物賣出しだの丸髷とパナマ帽子と並んで

「オイ室町」つて電車の乘替をきらせなさる所を二階から見ると情なくつて……。枯野の樣な中にたつた一本咲いた撫子は實に悲慘なものだ。敏夫さんでも居なかつたら私は死んで了ふかも知れない。

降る程有つた緣談を皆斷はつて不具でも再婚でもない者を

「お前は幸福だよ」と云はぬばかりのお爲ごかしに仰言つて押付た叔母さん、人の心も知らないで……と恨めしい。世話になつたと云ふ弱みがあればこそ。

「若い戀人の事を考へるから」だなどゝ同情の心なんか露程もない。

先日も姪が來て、國に主人と二人で行くから言傳もがなと暑いのに子供を負つて本所から態々來て吳れた時の嬉しさ、之も、あれもと思つても胸がわく〳〵するばかりだつたが、

「お前の身內だからお前勝手にせよ」と云はぬばかり主人は橫に寢そべつて居て見向き所か挨拶もロクにして下さらぬ。

「まあ」と姪は驚いたらしい顏を目で知らせる。一緒に出て心ばかりの品物買て言傳た。羨しい姪の身の上三週間程滯在して來ると話した事や、親類の人々の俤ツラ〳〵と考へ出してホロリと譯のない淚。二百幾十里と隔つた故鄕の皆樣、來年は三回忌に當る父母の俤

事が有る筈、行きたい逢つて話たい人もある、泣きたい事も山程あるものを。親類一同が顔合はすのは此の時を置いて何時有らう、辛くされゝばさるゝ程故郷戀しく、たまり兼ねて寢物語りに恐る〳〵

「姪も參りましたから來年の佛事には行つて頂きたいですが」……止せば好かつた、國の言づけの品物だつて皆私の小使で買つた位だのに迚も……と思つたがおそかつた。

「何ッ」。死なしたり今日の九星は五黄だつた。

「否何でも」蒲團の襟をグイと嚙んだ。

「國に行きたいのなら夫婦の緣を切つてから行け」。それでも夫婦と思つて居て下さるのか、隨喜の涙が枕紙に染みる。七ケ月の其間、不自由もせぬが何一つ

「これでもお前に」と買つて下すつた品が有るだらうか。或る家から中元に頂いた絽縮緬の半襟一つ鬼の首でも取つた樣に云つて貰つた限り足袋一足買つて頂いた事は未だ夢にも見ぬ。涼風そよぐ夏の夕チラリチラりと扇片手に門を通る涼みの人々の中形、あゝ一枚と思つたとて座敷牢と等しき身は出る事なし、昨年ので辛棒して了つた。手柄一つ家の道具の石鹼一つ買つたとて私の金だから、何の何の主人から一厘だつて頂くものですか。チビリ〳〵と預けた金も今では賴み少なくなつて了つた。

苦勞して來た人は情があるつて噓も噓も大噓です。

「私は寄席の下足番やら蕎麥屋の出前までして泣いて來た」と話される口の下から取つて食ひさうなお顏に敏夫さんをニラミ付けてお湯さす所を間違へてお藥に水注したつて

「中學の二年も三年も行つといてそれ程の事が分らぬか橫着するからだッ」。クロール酸カリユームにはお湯を注すべしとは書いては無つたらう可愛さうにシクシク泣いて荷物の仕末して居た。私が止めなければ歸る積りだつたらう。

え、簞笥の鍵?だけは預かつて居ても、一寸借せそら借せで、持たして頂いて居る丈、それなら御自分で持つて居らつしやる方が世話なしでせうにと云つたら



趣味の人

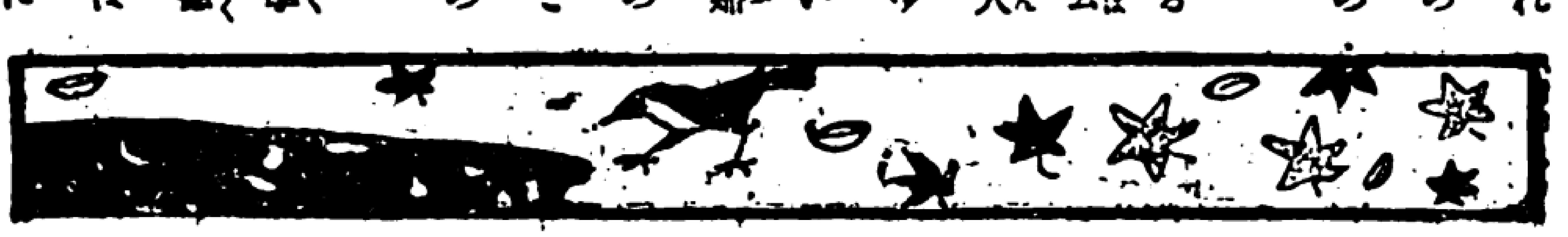
謳哉

三井鉞子夫人

所謂番町様と唱へられる三井得右衛門氏の夫人は伯爵松平直亮君の令妹で、有名な大名茶人の不昧公の玄孫に當られる（舊雲州松江の藩主松平出羽守家のお姫様）だから氣品も高く又極て鷹揚な性質である。氏より育と云ふが夫人などは氏も育も申分がない、ど云つて常世華族のお孃さん達に能くある尊大だの虚榮だのと云ふ所は微塵もない、だから三井家へ嫁がれてからも今の身分に安んじて少しでも里方の身柄を鼻にかけるなんどゝ云ふことはない、交際が上手で人を反感さないと云ふやうな特長のある人は婢僕に同情なかつたり、家政が不行屆であるとか、又家事向きの切り廻しは充分に出來存外親類や縁者の氣受けが悪くて彼是批難が多いと云ふやうな短所がある、然うでなくば當世式の大ハイカラで經濟が拙だの、敎育が無くて時には貴人に赤面させることがある、然るにこの鉞子さんには殆んどそれが無い、淑やかな中に凛とした所があつて、日本の女性の美點を最も多く備へて、マア女らしい女と云つて可いのはこの夫人などであらう。

世の風潮につれる爲かそれとも學校の敎育の爲方に依るのか知らないが現代の婦人には所謂男優りとでも云うか物知りとでも云うか或る意味から云つて立派な婦人は多い、が其代り日本風の床しい婦人は次第に寡くなりゆく今日にこの鉞子さんの如うな夫人は如何にも珍らしい——極い僻地か、一向の貧乏人の中には却て然う云ふ婦人が無いでもないがハイカラ風の吹き荒む上流の紳士の家庭には殆んど無いと斷言しても可い其中で——獨りこの夫人が昔氣質の日本婦人の長所を維持して居らるゝのは如何にも好い心地がする。

何でも明治二十七八年頃の卒業だとか聞て居る、華ー學校時代から才徳兼備の評判があつて徳大寺公の令孃徳川公の令孃と共に三才媛と云はれた方ださうだ　遊藝は一と通りお出來だとのことその内にも和歌と琴曲とは殊に





長所であつて歌は故中島歌子刀自に薫陶を受けられたさうで秀歌も澤山ある。

夫人に就て斯う云ふ逸話がある、良人の得右衛門さんと京見物に行かれて祇園清水あたりの名所〱を見て東山を下つてトある葭簾張の茶店に休んだのである、澁茶を汲んで出た七十近い婆さんが夫人の容子を見て公卿さんの娵とでも思つたのか歌でも發句でも書いて貰ひたいと云つて粗末な短册を出したものだ、然し遠慮深い控へ目な鉞子さんは歌など出來ませんのですと云つて斷つたが婆さん中々聞かないで强て乞ふから夫人は懐中から半紙を取出して

日からかさしはしたゝみて歸りけり
柳つゝける夏の川きし

と書いてお婆さん笑つチャ不可ないよと云つて出された、所が婆さん非常に感心して一體何方樣ですと云つて頻に名を尋ねたさうだが終に名乗らないで茶店を出られたさうだ、然るにこの婆さんは元蓮月の門人で歌も可なり詠むのであるが時候の好い時分には道樂半分に花の木蔭や柳の下に茶店を出して寺参りの賽錢を得るのを樂みとする變り物だと聞いた。

夫人は和歌琴曲の外に謡と小鼓が出來る、謡は觀世で鼓の方は幸流で習物までも濟んで居るさうだ、私が聞いたのは松風であつたが實に巧いものだ、「鹽汲み車わずかなる」と言ふ一聲などのシツトリとして艶のある所や「灘の鹽くむうき身ぞと」のあたりは節廻しから調子まで先代の家元ソツクリであつた。

夫人は人情にも通じ思ひ遣りもあるので奉公人から陰口一つきかれた事がない、奥さんは實に好いお方です、一生でも御奉公が爲たいと思ひます、とは婢僕等が常に語る所である、三井一家には同族間に婦人會と云ふがあつて中には隨分口の悪い夫人や小意地の悪い御隠居達があるさうだが鉞子さんのことはついぞ聞いた事がない。





「主婦の務めを知つて居るかッ」つて怒鳴られた。「どんな木に出來るものやら見た事は御座いません」と口まで出たが私が惡かつたので無言つて了ふ。そのあげく言葉が分らないとて又怒鳴つけられた。御自分だつて東京つ子では有るまいに、ヒ、とフの間違だらけだそれを人が來れば直ぐ

「お前はそつちの隅つ子に隠れてろ」。不具では有るまいし三時間も四時間も押入の中に顔突つ込んで居られないわ。

オヽ昨日の新聞やとの問答、二十五錢で取つて居た新聞の代金の受取に二十八錢と書いて有ると云ふが始まりで土方の様な言葉で畜性だの此の野郎、果ては手前だのと。敏夫さんは青くなつて

「奥さん交番に行つて來ませうか」つてハラ〱して居る。門に立つ人の中には向の荒物屋のかみさんも見えた、車屋の主人も居た。死ぬ様な恥かしさを忍んで私は新聞屋に挨拶した。口惡の八百屋が

「イヨー鞘當の千兩」と怒鳴つて行つたが主人には分らなかつた様子。ホツト息して湯殿で心行くまで泣いた。

「泣いたとて」と慰めて下さる味方がたつた一人ほしい。朝夕念じて居る神様佛様も見向ても下さらないのか。あゝ兄様！戀しい人！！夫は私の從兄でした。紅葉散敷く築山の蔭に四五日前だつたら定めしと思はれる八汐楓の蔭に濃い納戸のお召に白襟重ねて同じ色のヤチ無しの鹽瀨袴、頭髪を綺麗に分けて美術家か音樂家か、葉越に一生懸命スケツチして居る若人、夫は昨年の天長節でした。好める業の懐かしく拔き足に近づいて肩越に覗くと令孃、令夫人、紳士の花姿が見事に寫し出されて有つた。

「まあお上手です事、一寸拜見さして下さいましな」不意を喰つて處女の様に耳の附根からサと赤く血汐に染めて

「あ、いや未だ修業中ですから駄目です」。此の人は繪師だつた。

「修業中だものですか公展には御出品遊ばして」

「嫌々乍ら書いて見たのですが……」全身の毛穴から吹き出る何やらの香、細かく動く手先を私は穴のあく程見つめて居た。

「お弟子お取りになりますの？」

「まだ中々私が弟子なんですよ」

矢張り年方社中でせう耳の後ろの白さ、菊花壇に立つ島田の令嬢のあで姿が手際よくスケッチブックに浮き出る。

「ヲヤ御夫婦でおむつまじい」と心地抜いた襟元白く黒紋付の叔母さんが言はれる。そのテラ／＼と光る束髮に止められた櫛の石が夕陽に照つて何時までも若い方ねと思はせるのも不思議な位。

「え」聞きとがめると

「いゝえ今日は好いお天氣でしたよホヽヽヽ」

「まあ隨分な……」

「知らぬが佛だわねえ、末子さん毎日逢ひたい逢ひたいつて口癖の貴女のおつ母さんの姉さんのお子淑惠さんつてこれですよ……淑惠さんはます子叔母の娘でそら何時か話の末子ですの、どちらもまだ初めてねえ」。

「まあ」

「はあ」ポカンとして居ると

「末さん何故御挨拶改ためないの、三人共切つても切れない血つゞきなのよ」。あゝ忘れまい明治四十三年十一月三日の佳節を。

「イヤ／＼挨拶なんか御免ですよ僕あ……私は出來ないから叔母さんが預かつて置いて下されば……」。ヒユーと寒い風。その飾り氣の露程もない心の嬉しくて

「ホヽよしよしまあお話すると好いわ私も用事が有るから」。御主人役の叔母さんさつさと榎の横から花壇の方へ。夢にも忘られなかつた從兄と云ふ人に初めて逢つた。

「あゝそれぢやあ兄様でしたのねえ嬉しい」大膽さ。でもそれきり齒がゆい様でロクな口一つきけなかつたコンモリと茂つたアスナロ蔭の一時間、しびれる程腕を握られて居た。

「貴女のおつ母さん、つまり叔母さんはよく／＼知つ

て居たのですよ、貴女のお名前も‥‥でも機會が無かつたのです」

「ほんとに私は便ない女で御座いますの宜敷」。たつた一人世にとり殘された私は無暗に懷かしく死んだ人に逢つた樣に、尊とい處女の心も忘れて、人が居なかつたならすがりついたかも知れない。キチンと合した廣い胸から放つ氣高い香ひ、二十七の血の溢れる匂ひ、あゝ私しは忘られない。

△

血族結婚が何とやらいふが、因果を含められて見れば親代りの叔母樣。

「嫌ーよ」とキッパリ斷れない情なさ。いつそ世話にならなければ‥‥と二十日の菖蒲の致方なく叔父さん(叔母さんの夫)の親類の人(今の私の夫)に嫁いだ當座は無暗に泣けて泣けて大變な罪を犯した樣な氣で剃刀だの短刀だのと騷いで見たかつたり、せめてと叔母さんの手文庫からそつと盜み出した從兄の寫眞、ヒシと抱いて

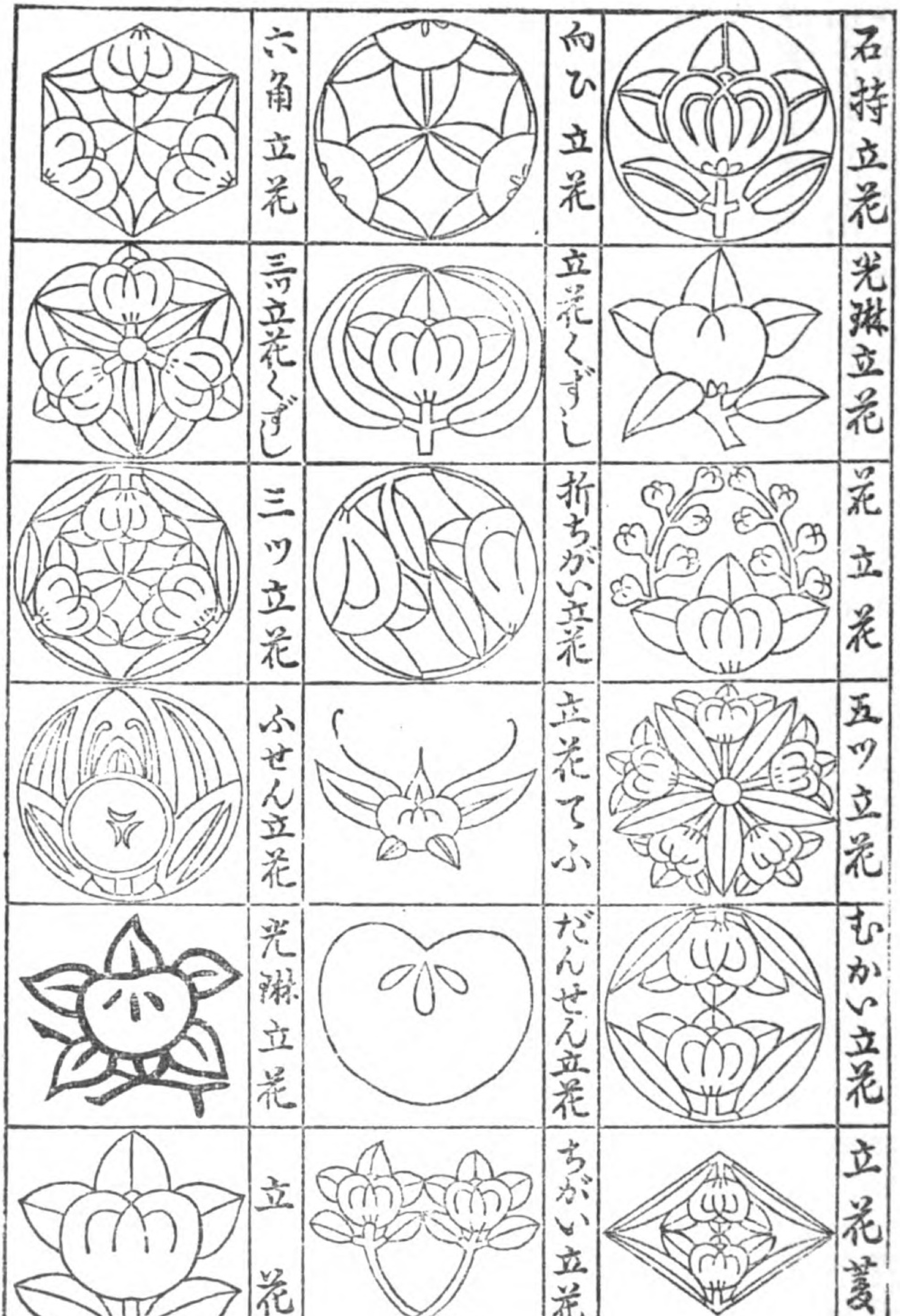
「私は行かねば成りませんの、許して下さるでせう」と叫んだのは嫁ぐ前夜の夜中だつた。ゴタ〳〵集まつた親類だの友だちだのゝ中を血眼に探してもその姿どころか影さへ見えなかつた。どうぞ來て下さるなと前かたに手紙を出して置いたんだもの。處女の中にはもう二度と逢へなかつたのだ。此君ならで玉も鏡も何かせむ命までもと決心して居たが‥‥。

約束した譯でも無かつたけれど不言不語の中に兄樣だつて屹度!。

かうでと認めた長い〳〵手紙を嫁いで五日目の夜私は良人の留守に丈にも餘る卷紙に笑はれる程言ひ譯がましい手紙を從兄に送つた。

「他所の人と成つたとて矢張從兄は從兄です、そりや殘念には殘念だけれど‥‥及ばず乍ら力にもなります叔母さんだつて御考あつての事でせう、主婦の責任は又云ふに云はれぬ大なるもの、笑つて暮さうと思へばそれは貴女の間違ひだ、御良人大切に‥‥いづれ其中御祝旁々參上ます、兄?と云はれる資格があるか知ら

橘の意匠


石持立花
向ひ立花
六角立花
光琳立花
立花くずし
三ツ立花くずし
花立花
折ちがい立花
三ツ立花
五ツ立花
立花てふ
ふせん立花
むかい立花
だんせん立花
光琳立花
立花菱
ちがい立花
立花

…まあ好い年の順からでも兄だ、御自愛専一に、別便は御祝の印迄に従兄のプレセント、御良人には云はない方がよろしからう、さよなら

よしゑ

すゑ子様

「まあ」人なき所で心行くまで私は泣いて了つた。只悲しくて悲しくつて。どうして恨んで怒つて下さらなかつたらう。來て頂かない方が好いわ。私は恥かしい。餘りに美しい清い心。馬鹿者と笑はゞ笑へわだつみの深き心をば誰か知る。若い美術家の心が恨めしい口惜しい……嗚呼別便の品!!

若月末子様へ呈す。ブルブルとふるふ手先からダラリとこぼれる首掛の細い鎖り!!!モルヒネか昇汞水でも何故入れて下さらぬ。首締めるには餘りに細い黄金の鎖私は丸めて仕まつて了つた。一生開けて見まいと思ひ乍ら……

△

「今月だけだよこんな月は、六圓も六圓二十錢も魚屋に何を買つたんだッ」まあ晝と夜だもの、それに御自分一人で召し食がつた癖に魚代が多いだの世帯持ちが悪いだのつて小つぴどく叱り付けられた。魚類が無いと機嫌が悪く買へば金が澤山入る、ほんとに困つて了ふ。だと云つて私の僅かな小使出して了つては。

「そんな世帯持ちで暮して行けるか考へて見ろ馬鹿野郎」云ふだけ云つて了つてプイとお出まし。心配乍ら極樂だ。たまに一日位留守だと好いのに一日所か一時間でも出ないんだから、「亭主は丈夫で留守がよい」つて乾度私の様な人が云はれたのだらう。自分で下駄洗ふやら傘出すやら大騒。何が御立腹かと考へると魚屋の一件と留守の間に敏夫さんを使ひに出したと云つてその飛ッ散だ。ガタピシと出て行かれたのでホッと一息すると直ぐ御歸り。

「ね奥様不思議ですね天氣か鏝月にでも行らしたのでせうか」薄暗い所で敏夫さんが耳こする。

「ホヽそんな所に行けばお金が入るのよ」。敏夫さん妙な顔して立つて居る。後で聞けば敷島一つ買ひに七丁目まで居らしたんだつて……短氣は損氣二三軒先の煙

草屋の門を横目で素通り、下駄の歯だつて二三分もちがふのに・・・

あゝ兄樣、淑惠樣は何うして可愛さうだとは仰言つて下さらないのだらう。笑つて暮さうと思へばそれは貴女の間違だつて」。そりやそんな呑氣なものぢやあ無いとは百も二百も承知はして居るが、こんな〳〵涙の多い生活は續けたく無いんだもの。ほんの御飯焚きだけに置いて貰つて居る樣なもの。せめて子供でも有つたなら幾分かの笑顏も見られるからと便りない事を便りにして居たのも水の泡　六七月の私、隱しては生梅をかぢり青梅を食べ「つけ梅と」門の呼聲は一人だつて聞き逃しは出來なかつた時分だつて

「足がだるい」と云へば早惡鬼の形相凄まじく、

「青梅ばかり食らふからだッ」と睨みつけられ　針の莚か劍の山毎日〳〵ヒヤ〳〵して暮らすばかり」袖では隱せぬ此の頃だつて

「どうしたか」とも云つては下さらぬ心細さ。

「冷えるなよ、烈しく動くなよ、それ五月帶だ」と大騷をなさる皆樣が羨ましく私一人は野分吹く寒い廣野に打つて打つて打ちのめされて投げ出された樣な氣がする。姑小姑が無いと云ふだけ、あゝせめて姑樣でも居らしたなら毒の中にも藥はある世間話の一つ二つは出樣もの。

「奥樣淋しいですね二人限りでは」。臺所で晝の仕度して居る時にランプ掃除して居た敏夫さんが云ふ。奥樣奥樣つて姉の樣に慕つて呉れる敏夫さん、國に居れば若旦那さんで居られるものをと可あいさうになる。

「さうね一年に一度でも好いから演伎座か萬歳館にでも行きたいのね」。敏夫さん無言つて居る。

「オイッ」何時の間にやらお歸り。又出迎へなかつたと小言かと嫌になる。

「お歸りなさいまし」。敏夫さんオド〳〵して玄關に逃げて行く。

「オイッ幾度も〳〵云ふのに二人共何故臺所に來て了つて居るんだ。主人の歸るのも知らないで客が來たつて返事もしない一體何がそんなに話があるんだッ」

恐れ入つて小さくなつて居ると百萬だら程毒つかれてやつと了つたと思へばその夜、主婦の資格が何とやら三角が何とやら。

「お前だち二人居たら何をするか知れやしない」。謎の樣な奥歯に物のはさまつた樣な、何をするものですか盜人する位な人はもつと目から鼻に突拔て居るわ。

「麹町(叔母の家)の家に歸つて了へ」とまで叱られた。泣いて泣いて目の張れる迄泣いた。

マツチが澤山入る炭が入る、お米の事まで臺所に出張して一升もすくひ出して賣つた樣な仰言り樣。石油が澤山使ひすぎると敏夫さんが怒鳴りつけられた。

「何と仰言つても四つのランプですもの入るだけは入ります」。口をピツツと動かして無口の人だけに一生懸命だつたらう。

「奥樣を殺して義理の父母を逐ひ出したんですつて、養子の癖に山師と同腹で相場か何かなすつたのでね、養父は娘には死なれ此の年になつてから追ひ出されて了ふとお老人は泣いて居られた」と敏夫さんが話す。横町の〇〇さんほんとにそんな話も一寸聞いた、役者にも無い樣な美しい顔して居らしても、三人も子供を置いて逝かれた奥さんは浮ばれまい、あゝ好かつた、して見ると私しの方が極らくなのだ。

「敏夫さん、決してそんな事人に云ふてはなりませんよ、事實にしろ人樣の事なんか決して決してねえ、恐ろしい」。今日は十五日小豆の入れ樣が多いとお釜の中覗いて見て叱られた。十五日……敏夫さんの稽古日だ行きたからう、品川の先生高輪の先生と寢言にまで言つて居るものを。父樣に逢ふ樣に云つて喜んで居るのに

「ね奥樣本所に行くより高輪に行く方が嬉しいんですよ、私は全くの父樣に逢ふ樣に思ひます、あんな御親切な先生は珍らしいです、夫に奥樣が御病氣ですの。氣にかゝつて……」と涙落して居た。

「いゝえ不勉强で行かないのではありませんから先生だつてよく御承知して居て下さいます四日も五日も先生と物言はずで睨み合の方が辛いですもの」。

ゴホン／＼と頭にクンと響く空せき。

襖の影から覗いて見ると母親らしい方に伴れられて診察受て居る若い人。フックリと餅を附た樣な胸のあたりと思ひきや此の若さに肋骨のはつきり讀める瘦せ樣。此の病氣に特有な透き通る樣な頰の色に紅さしてうなだれて居る薄汚れた袷に荒い大島がすりの羽織何所か品格のある身體の造り、母らしい方の言葉の使ひ樣私は一句も殘さじと耳引き立てた。

「麻布の第三高等女學校に行つて居りましたが昨年の暮頃から變になつて參りました不如意な所から御醫師樣にも見て頂かず見殺しにはと思ては居りましても女の腕に四人の子供の生活此女の父が無くなりましてから不幸續き藥もろくに買つて與へる事さへ出來ませんので…それで、病氣の原因、今まで私どもにはこんな病氣にかゝつたものは一人も御座いませんのでしたので學校の友だちの中にでもそんな方は無かつたかと聞いて見ましても無いと申すんで御座いますよ、せめて御診察だけなりとお願致しまする」。肺病なだと素人の私にでも分る　病人のまへで肺病だとは仰言らないと好いとハラ〳〵して居ると、

「これは貴女は何と思つて居られるか知らないが肺病と腹膜結核ですよ」

「あッ一寸先生ッ」母の身では死刑の宣告より辛いにちがひない。氣のない私してさへドクリと胸が騷出した。死人の樣な病人は案外平氣だつたので安心したものゝこれで人を助ける醫師と云はれ樣か。

「直りませんでせうね先生」。此の言葉の中に含んで居るある意味、直してやりたいと親の身では…。

「金さへ出せば直ります」咽喉の乾く樣な云ひ樣。

「いくら程」言葉がはづんで聞える。

「北里先生に見て頂くんだが診察料が五圓その次から五十錢づゝ餘は養生料金さへつゞけば直ります」。五圓の事は置いて五十錢もむつかしい一度で直るならば五圓や十圓出來ない事もなからうが。私は母なる人の心の中お氣の毒で〳〵シヲ〳〵と歸られるその後から追ひかけた。音せぬ樣臺所から一寸と呼ぶ。

「今承りましたら御氣の毒ですのね實に申上樣も御

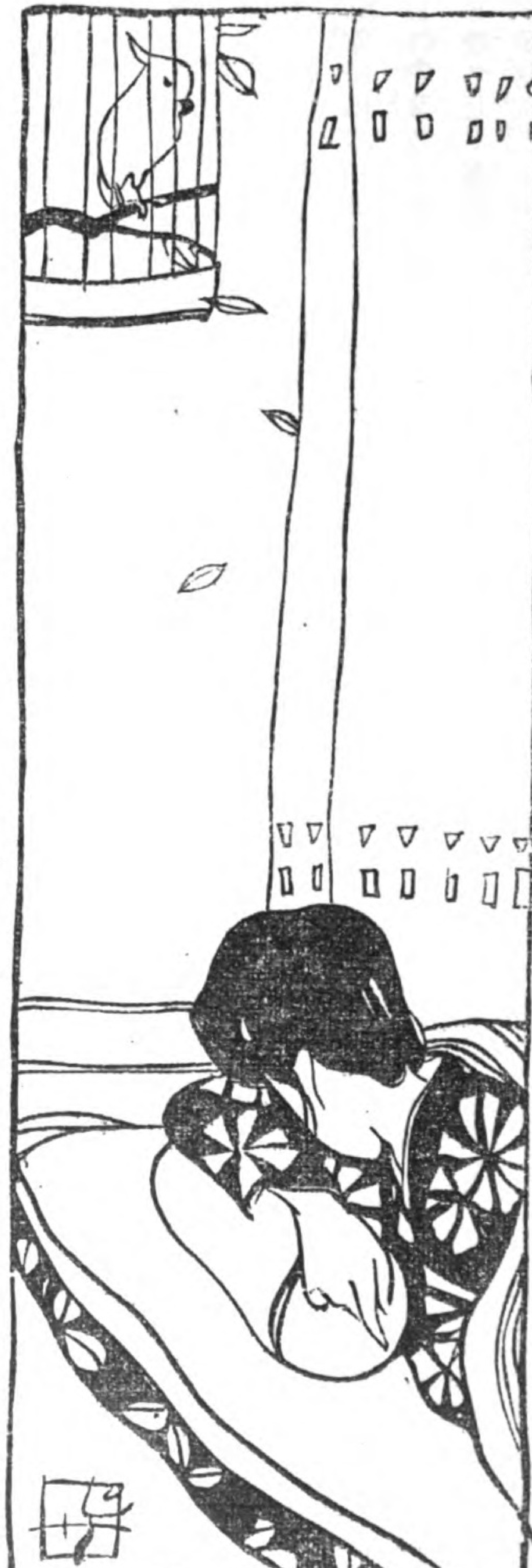
座いませむ、ほんとに失禮ですけれど玉子なりと……」私は小ひさい紙幣の皺のばして母なる人の掌へ置くなり逃げる樣に走り込んで了つた。これ讀んで下さる讀者樣の中には第三高女の方も居られませう。あはれなる人の身の上御同情の價値は充分だらうと思ひます。お名前は大谷しげ子樣、二十才と承知して居ます。長く持つて十一月まで位だと主の話。あゝ助けて上げたい力と賴む夫がこれでは何と致方どころか自分の身を持て餘して居るんだもの。皆樣だつたらどうなさるか知ら。底意地の惡い、綿の底に包んだ針の樣にギクリギクリと首締めたり胸突いたり……羨ましいのは浪さんに女夫波のとし子さん。敏夫さんの持つて居た戀慕流しにも胸の痛い程泣いた。

月は冴えても我が胸の
曇り勝なる旅の空
末をちぎりし甲斐もなく
馴れしエゾ地を後に見て
行方も知らぬ浪の上
忍路高島およびも無いが
せめてうたすつ磯谷まで
帆影は波にかくされて
烈しく颪す山脊風
岩に砕けて散る波に
鳴く音あはれな濱千鳥

たとへ淋しく暮すとも祈りますぞへ主の無事息災

鄉の里にさすらひの身は只故國の空のみなつかしく何の事かと名宛を見れば佛國巴里にて淑惠、まあ何時の間に……嗚呼私は又獨りになつて了つた。兄樣もあんまりな何故知らして下さらない今になつて……私に死ねよと仰言るんだわ。

野分して時雨て晴れて葉が落て霜にあられに雪が來て年は行く、かうして私も涙の中に墓に行くのか、嗚呼。



△女と嘘

嘘から出た誠、又は嘘も方便など、古えより云ひ傳へたれど、見え透くやうなる嘘、白々しう打ち語る女ほど憎々しきはあらじ。ましてや遠く隔たりて滅多に人の行く事なき己が國許を誇り顔に云ひ出で、富みもせぬ己が家に召使の男女二十何人もありなど、眞しやかにいふは、聞く人にもよるべけれ、心ある人の聞きもしたらんには、などて蔑視まざるべきやは。

さは云へ年三十を越したらんと思はるゝ女の姿は今年二十五にて侍りなど僞るは、いと〳〵女らしう思はれて可愛きものにぞある。なれども頸筋の邊に二三本の白髮の後れ毛混れる、又は白粉にて塗り隱せる鼻の上などに皺の寄れるは、年隱すとも得隱さるゝものかはと思はする心持して面白からず。

△女と目

女の目は鈴を張れなど古くより云ひ傳へたれど、餘りに大きく黑き目は、八幡宮の鳩の豆鐵砲喰ひて驚けるにも似て嬉しからず。さは云へ糸よりも細き目したるなどは眠れるにや覺めたるにやと疑はれていとびんなし。

稀々なる黑目勝の女の、物に驚きて殊更に目見張りたる、嬉しき極みならめ。

今の世は表情とやらんを喜ばるゝ由。女を生かすと殺すとは唯一つの目にこそあれと人並の事思ふぞ可笑しき。まして若き男など滑く寂しき女の目もて、いと容易く殺さるゝものなるよし。

△女と病

ヒステリーとやらんは女の文學病なるよし聞きたれど、さのみには限らじ。夫の優しき時は温順しき奧樣なども、留守の夜など恐ろしきまでに召使など叱り給ふはいかなる病にや。女の病にては子宮病などいふ病こそ、あさましくも恐しけれ。

病になやめる美はしき女の秋海棠など眺め入りたる時、秋雨の音もなく降るなど、物凄きまでにいぢらしくこそ思はるれ。



順逆三人妻

山田小枝子

△親の罪

朝三時三十分夫は出勤、今日は尾長村へ演習ゆゑ、歸宅は夜になるぞと仰せられる、起き出づるには餘りに早ければ、再び床には入りたれど、曉はさむく初冬の風身にしみて、練兵し給ふ夫の上思ふては、安くも眠られず又起き出でゝ、昨夜屆きしみつ子樣のお手紙くりかへしてよむ。

身も心も忙しき御蔭にて、すつかりと悟り開きました、最早や嘆きは致しませぬ、かくなるも皆神のみ旨ですもの、いま私が倒れては、病める母と幼なき弟、誰が世話して呉れませう、いふに情ふかき伯父ありとても、それに連れ添ふ伯母もあります、働きます、何事にも趣味を以て、一箇年の後には父も歸ります、父だに歸りたらば私の望みは父母姉弟揃ふて暮したらばと只それのみ。

明暮れに思ひ出らるゝは父の上、最早リングもダイヤもいりませぬ、過ぎにし昔のゆめ、さめて果敢なき今の身の上。

小枝子樣、母と弟との柱となり、伯父　伯母との仲に立つ私の心中、御察しなすつて。

お氣の毒なみつ子樣。

中田さんは天才、とは全校の評判でした、アノおむつかしやの博物の先生すら、中田さんの眼の光りは恐ろしい、と仰せられしとか、さればまだ御在學の當時より、御縁談のかず〳〵、澤山もなき子を、さまで急ぐにも及ぶまじ、いま一二年は手許におきてと仰せら

る丶御兩親の御言葉を、切にとの御懇望、仲に立つ人のざま〳〵、遂には餘義なき義理さへ生じて、美しかりしマガレツトのお姿、丸髷と變りしは、卒業式の翌日、はや四年の昔となりました、御良人は赤門出身の俊才、廣島の支店に三年のお勤めぶり拔目なかりしとて、重役のお目にかなひ、將來は天晴れとこそ内には父君が作り給ひし幾萬の富もあり、切にの御望み深かりし丈け、御良人の御愛情いと濃やかにて、現世の幸は皆みつ子樣に集まりしかとは、クラスメート二人集まれば必らず出る言葉でした、されど、

花に嵐の例は、みつ子樣とても洩れず、某銀行の重役として、羽振りよかりし實家の父樣が俄かの拘引、聞けば尠なからぬ行金の費消とやら。

世は永久の春とのみ、暮し給ひしみつ子樣の上にも秋は來ぬ、罪ある人の子は嫁にはならずとかねて仲よからぬ姑小姑の言分に、道理ありとて濃やかなる夫の愛の力も及ばず、昨日まで華やかに暮した身を、いまかなしくも父在さぬ、淋しき家へ！

それより後のみつ子樣を、一と年昔のおすがたと誰か見るべき、花の姿誰の爲めにか粧はむとて、只うつ〳〵とのみ暮し給へば、傍に見たまふ母君のおなげき果ては母子手を取りて悲恨の御なみだ！

四箇月の後、むなしかれと祈りし父君の罪は定まりぬ、いまは早や、恥おほき都に住む要もなかるべしと田舍より來られし伯父樣に從ふて、影もさびしく當地をお引拂らひ遊せし時の哀れさ、お見送りとては、時代樣と私のみ、伯母樣何とも仰せられて只御涙、みつ樣私の手を固く〳〵握つて。

小枝子樣、何も申しませぬ、いつお目にかゝられます事かつて、

伯母樣も、時代樣も、みつ子樣も妾も、田舍の伯父樣まで皆泣ゐた。

悲しいお別れしてより早や四箇月、其の後、田舍人のふかき親切に慰められて、少しはお心も落ちつき、先月よりは村の小學教師。

罪ある人の子が、田舍に歸りてより、伯父のすゝめ

もだし難く罪なき人の子を教へます。

とかいたお手紙も頂ゐた。

かねてよりお弱き伯母樣つらく不幸にお堪えあそばさず、田舍におうつり遊ばせしより、とかく御心地勝れず、只みつ子樣をたよりにて。

泣き盡した私は、最早や泣きませぬ、母のため弟の爲め、飽くまで働きます、續く限り働きます。何事も考へませぬ、運命は神のみ心のまゝに。こんなつよい〳〵お手紙よむ度に、私も泣く。

さすがにみつ子樣、よくお諦らめ遊した、かねての御修養の効むなしからで、變事に會して亂さず崩さず孝なる娘として、愛ある姉として、母君と俊夫さんとを慰め給ふ心中、世の中に、笑ふてなく女ありとすれ



ばみつ子様も其の一人。

世の父君達よ、ゆめな道ふみ違へ給ひそ、愛子の涙忘れ給ふな。

△平和な家庭

お隣りの奥様の甲高なお叱言連発、下女がソロソロまごつく様子、可愛想に主人の威光見よとばかりの御叱言に、驚かぬものはありませぬ、論より證據、私達が此所へ來てから早や五人目の下女、この奥様、前身は何屋の娘とやら、毎日のお化粧もコッテリと、流行におくれぬ御召物のいろいろ、私のやうな智恵なしぢやない。

ミヨを起して雨戸くらせ座敷の掃除する、手早く朝食すませてぬひかけの夫の羽織出す、思ひしよりもよき柄なりし、今夜は召させむ、昨夜私がこれ縫つて居たら、

僕の羽織か、感謝々々、持つべきものはワイフなり。

なんてホヽヽヽ、先日も新井大尉の御結婚式に御出席の時、新らしい紋付おきせ申たら。

こんなものきると顔がさす。

つて仰有る、同道のお約束ありし小谷さん來られ。

ヤー中隊長殿、よく似合ます、新井大尉と間違へろと大變ですせ、奥様御用心々々々。

私はお腹をかゝへた、青年將校ほど面白いものはない。

思ひ出してもおかしいのは私達の結婚當日の滑稽話いよいよと云ふ日の午後に至りて從卒の曰く。

大尉殿はお袴がありません。

其の前日結婚につけて、國許よりお越しなされし母様と伯母様のお驚き、伯母様は直ぐに呉服屋へおかけつけなされしも、生憎にも六尺にちかき大男に頃合の品なく、母様と伯母様とが如何せうと大心配あそばせば、夫は濟ましたもの。

母様、そんな面倒なものは要りませんよ。

と云つて母様に大叱られ、漸く從卒の心配によりて同

僚の山本大尉が新調されしを借りて済まし、翌日は従卒が返しにゆきしとか、先日山本さんお越しなされ。

奥さん、御結婚につけて僕は折かく新調の袴を取られました。

と眞面目に仰有つた時には、さすがに良人は大失敗、玄關に居りし従卒さへふき出すさわぎ、それよりは山田の借袴とて、隊にては有名な話。

△竹内夫人

晝食すませて後、永らく御無沙汰したれば、多田さんを御訪ねせむと、仕度し居る處へ、玄關に來客、竹内の奥様お越しとミヨは云ふ、折わるくとは思ひながら座敷へお通し申す様云ひつけて、私もすぐ出る。

暫らく御無沙汰いたしましてね、皆様お變りもなくて御結構で御座います、先日から一寸お伺ひ申す積りでしたけれど、つい用事にかまけまして申譯も御座いません、先月の婦人會に御出席あそばしませんでしたのね。

いつもながらの立板に水、今日はリング五つ、無地お召の重ねに、大島唐織のおみ帯胸高に、品よきお髪美しいおかほ、これが如何してあの様な恐ろしいこと遊ばすやら、私は知らねど皆様のお話しに聞けば、一昨年春の事とか、奥様御秘藏のリングうせしとて、お疑はさしづめ下女と定まり、度々の御責問、責めらるゝは苦しけれど、覺えなき身は白狀せむよしもなし遂には青竹もての御折檻、それがため右耳は生れもつかぬ片輪となりしとか、其の後間もなくいづこよりともなくリングは出でしとか。

お話はいつもお定まりの奥様方の評判、知事の奥様は如何で入らつしやるの、參事官の奥様、お産あそばすのと、おかげで私地方の奥様方の御様子よく存じてる、竹内は近い内に本省詰めになる筈ですと古いお話法學士が竹内様限りぢやなし。

この奥様とみつ子様、時代様と私とは、幼稚園時代からのお友達、私は十才の時、父に従ふて福岡に四年あまり住みたれど、つきせぬ緣のふかくてか、父は又

も廣島、私はみつ樣と共に女學校がよひ、同級六十あまりの仲にて私達四人は、わけて親しく交はりし仲、つね子樣（竹内夫人）の父樣は廣島控訴院の判事として令名高かりし御方にて、お國許の財も尠なからざるより、いつも立派なお召物、時々は車にて御通學、姉樣はあれど母樣お違ひ遊ばせば、御兩親の御鍾愛は一身にあつまり、浮世の波風少しも御存じなく、只樂しく面白く、青春の時を暮し給ひ、御縁ありて今春御結婚なされし後も、旦那樣のおやさしさ、つねさんつねさんと下にもおかぬ御親切、されば奥樣の勢力並ぶものなく、何事も奥樣の號令次第、いつか同窓會の時

可愛想なはつね樣、ハス樣は奥樣よりも御持参のものが大切と一生懸命に御機嫌お取りあそばすを、つね樣お心づき遊はさないのでせうか、何よりの證據は、時々の御出張、アレは奥樣のお手前つくる旦那樣のお氣晴し。

とは滿更ならぬ、幸子樣のおわる口。

方々へ別れしクラスメートのお話しより、果ては三越タイムスのお話しまで承り、御夕飯さし上むと申せば、急がしければと、しかし三時間あまりお話しの後御歸宅大いそぎにて、お湯にゆく、歸りてより襷かけてお料理こしらへ、お好きなサツマ汁もこしらへておく。

堅田の奥樣

八時うちてもお歸りなし、ミヨには夕飯先きに濟まさせる、下女とてもお腹のすくは同じ事、淋しさまゝに火鉢によりて、つね樣のお言葉考へて見る。

みつ子樣の事は私とても勿論、御同情は申します、しかし如何も文通はねへ！、いくら幼少の時よりの友だつて、夫の體面にもかゝりますもの。

人の心はかくなるものか。

同じ順境にお育ち遊ばしても、時代樣はおやさしい、父樣昔は山梨縣知事お勤めあそばされしとか、今は只二葉山下の御邸宅にて、一人娘の時代樣何よりのおたのしみに、碁よ謠よと、浮世を外のお暮し、じつ

にお幾とし御身の上、母様に似てお心のやさしさ、花ならば月見草か、パス様は伊國公使館に。九時うちてもお歸りなし、見上ぐる壁間の寫眞井上中尉。不幸は若きみつ樣の上ばかりぢやない。故郷は私達と同じ長州、幼少にして御兩親おくれ給ひしよりは、伯父樣の許に引取られて、一と方ならぬ御心勞、子供心にも時には思ひあまりて、面影すらも覺えぬ御兩親の墓石抱いて、おなきなされし事もありしとか、十六の年よりは苦學しながらの御勉強、その効むなしからず目出度少尉に任官なされし後は、孤兒の習ひとやら、我から僻みて人も相手にせぬ、相手にならぬと自ら世に容れられぬお心持ちぞ、一夜しみじみと兆の諫めに、涙を流しての御身の上話、その後は兄弟も及ばぬ御親しみ、今年こそ大學の試驗うけてと一心に御勉強なされしに、今年の二月頃よりお顏のけしき只ならず、日を重ぬるに從ふて、人にも會はれぬ



因果の病、哀れ天刑病、悲憤と絶望の極に達して、軍刀手にかけ給ひしも幾度か　いつも忠實なる從卒に止められて、產んで與れた親を恨むとて、お泣きなされしとか。

斯くなりても夫は少しも變らず、折々の訪問、訓戒慰安なし給へば、いぢらしきばかり夫を慕ふて、大尉殿々々と、悲しかりし日よ首夏の七日曉、現世の幸いとうすかりし中尉は、軍刀に伏して永久の旅に、夫に宛てた遺書には、

御鴻恩を謝すとばかり奉書に太く。

世に春風のみは吹きませぬ。

十時十分夫はお歸り、玄關にお出迎へして、お疲れあそばしましたでせうと申せば。

ナニ、他から思ふ樣なものぢやない。

とばかり、御酒召し上らねば食事も早く、好きなお茶入れて、御好物の虎屋の饅頭まゐらす。

お前堅田の細君の話きゐたかと仰有る。

近頃少しも御樣子承りませぬ。

俺は昨日聞いた、五人の子供に兩親連れちや、大尉の扶助料ぢやむづかしいさうだ　此の頃は他家の縫物まで仕てるさうだ、實に氣の毒千萬、それでも實家から少しの補助もうけぬと聞ゐて全く感心した、山本とも相談したが、如何にか救ける方法はないかなあ。

ア、堅田の奥樣、お傷はしい。

御實家は人も知る財產家、飯田と云へば知る人ぞ知る。

高利貸と早く知つたら結婚するのぢやなかつた。

とは堅田樣御生前のお口癖、あの清廉なお心にて、高利取る舅樣と如何して合ひませう。

夫婦の緣も早これまでと情なき旦那樣のお袖にすがりて、親子の緣は絕ゆるとも、操には替へられじと、切にお願ひあそばせば、旦那樣も流石に哀れに、それより奥樣は廣き世に親も兄弟もなき御身の上。

去年の秋、風邪が基ゐにて旦那樣が果敢なき御最後遊ばせし時にも、實家よりは葉書一枚の御弔辭、我から切つた親子の緣に、何の未練がありませうとて、十

歳を頭に五人のお子樣連れて御兩親に仕へながらの御辛棒は、意志弱き女には出來ませぬ。

僕はつく〴〵感心した、世に立つ上からは誰とても堅田の細君位の氣慨は持つてほしい、わけて軍人の妻たるものは、變に際して亂さぬ覺悟が一番大切だぞと仰せられる。

私とても軍人の妻、幼少の時より父母の訓戒に、それ丈けの覺悟はして居ます。

とにかく、明日山本の奧樣とも御相談して、何とか適當な方法を案ずる積り、先日のお話の通りに二番目の孃樣を、賀田中佐がお取り下さると都合はいゝが、と夫は獨言。

他人にさへ、かくまで優しき夫の心、私は誠に感謝する、軍人なれば口に出してこそ仰せられぬ、私をお愛し下さる御親切は、決して忘れませぬ、世の奧樣方の泣言聞く度に、つく〴〵と我身の幸を思ふ。

と思へば、私には貴い、富める許りが幸福ぢやない、九尺二間にも笑聲あり、ダイヤの光りにも涙はある

夜も更けぬらしと雨戸くれば、空には星の美しさ、北のよくさえしは明朝の霜も忍ばれる。

幸ふかき時代樣にもつね子樣にも、涙多き堅田の奧樣も、みつ子樣も、夜の神のみは隔て給はじ。

さらば、安らかに眠らせ給へ。





屑屋の觀た世間

觀風子

△「屑屋入る可からず」の張紙

此所かしこの御勝手口に、「屑屋入る可からず」など、張紙がしてあるのを見ると、私は涙がこぼれます。中には晝間は屑屋の姿をして、家の様子を探つて置いて、夜になると盗賊をしたり、靴をかつさらつたりする悪い奴も随分にあるさうですが、私までその様な仲間に入れられるのかと思ふと、實に心外でなりません。商賣に上下ないなど、理窟は申しますまいが、もとは相當な教育も受けましたから、屑屋などをしなくつても飯位食べられないこともなかつたけれど、有爲轉變は世の常で、トン／＼拍子に成り下つた揚句の果、つひこんな商賣を始めました。

△女の多い家庭の屑

私の家庭觀！それは面白うございます、ありますとも、解りますとも。第一、屑の髪の毛や、油の浸染んだ紙が澤山に混つてをれば、大抵女の多い家だと解りますが今一つ面白いのは、女の多い家に限つて字の書いた紙が多い事です。それも多くは手紙の引き裂いたもので、ズダズダに一寸四角位に裂つてあるから、値はずつとお安くなりますが、手紙の文句を讀まれるよりは、かうして置くが、御婦人方には安全なのでございませう。

△經濟のつまつた家庭

それは經濟の引きつまつた家ですと、普通の家よりは人が多勢居らしても、滅多に屑は出ません、お客様の方では知らぬ屑屋を呼び入れるのは、何彼と御心配なものですから、一度よりは二度二度よりは三度と顔馴染の深い者にお拂ひになるので、屑屋といつてもこれでやはりお得意様があるから、その邊の事がよく分ります。「屑イ」と通ると、お呼びになるから入つて見ますと、小さい屑籠にやつと一パイきり。それも紙なら西洋紙に何か書き散らして眞黒になつたのか、古新聞の使ひざらしか、日本紙ならランプを掃除して眞つ黒になつたの位が關の山です。そしてお髪の毛だとか、新聞紙だとか、當り前の日本紙だとか、切れや糸の類だとか、ランプの破片だとか云ふやうなものは、一々別にして値を踏めといはれます。それが贅澤なお家になると大違ひで、併生





さんが何も彼も一緒に大きな籠に山盛りに持つて來て、「さあこれを持つて行け」と投り出されます。何れ位な値のものか解りませんから、と言つて、いゝ加減にお錢を置いて、家に歸つて選り分けるのですが、時には其の中から隨分値のする物が出てまゐります。それゆゑ之を持つて歸つて選り分けるまでが私共にはなか〳〵樂しみでございます。

△一輪挿が傘さし代用

かうして歩くうちに屑屋の好くのは子供衆のある家です。別段子供が可愛ゆいから抱いたり笑はせたりするといふのではありません。子供のある家の屑に限つて、時々掘出し物があつて、品が上等だからでございます。また一番厭なのは文士家です。以前は原稿紙が大抵日本紙でしたから。大變いゝお客樣でしたが、近頃はロール紙や何かの原稿紙にペンでお書きになるから、屑屋に取つては大打撃です。

以前は女學校の寄宿舍などは、私等に取つて一番いゝお客樣でしたが、此頃ではだん〳〵に惡くなつて來ました。リボンや襟には帶の片側位……尤も古くはなつてゐましたが……以前は入つてをつたものですが、近頃はどうして、から駄目でございます。昔の樣に白粉の瓶が庭にころ〳〵してゐるやうな事は滅多にありません。机の上で一輪挿が傘挿に代用されるやうな時勢ですから、屑屋もお仕舞です。

△山の手の屑と下町の屑

銀行や會社になると、ご自分のお錢のかゝらない紙ですから、一字書き違つても屑にするやうな次第で、ごく質がよいので、私等の仲間ぢや競爭で買ひ入れます。尤も小さな銀行會社ではさうは參りません。殊に筆紙墨を宛てがい扶持にするやうな所と來ては目も當てられません。また私は山の手にも、下町にもお得意を持つて居ますが、山の手と下町とは屑物が全く違ひます。紙片の屑にしても、體裁がすつかり違ひます。山の手のものは種々な紙が混つて居て、字を書いてあるものでも、筆で書いたものが多いのです、下町のものは紙質が大抵一定して居て、印刷したものが多いので、屑屋仲間では山の手のが非常に喜びます。

△奥樣の出られる家

それから、屑を買ひに入つた時に、女中と一所に奥樣の出られる家の屑は、屹度質がわるくて値を高く買はせ





られます。其所に行くと旦那様はあつさりしたもので、「カム屑屋か、これを持つてけ」とおつしやつたきり、値が何程だらうが、そんな事にや御頓着なしですから、私共ら氣持よく貰つて來ます。

△貧乏な家の屑程有難い

しかし屑のいゝのは私共は喜びますが、屑のいゝお家に限つて貧乏です。金持の家の屑なんかは、とてもお話しになりません。又手紙の多い家に限つてなぜか貧乏です。金持の家には手紙などは滅多に入つてはゐません別段不用な手紙を保存して置く譯でもありますまいが、……それから屑の善い家に限つて家庭が滅茶です。家庭の睦まじい家は屑にまで氣なくばる餘裕があるものと見えます。それゆえ、惡い考ですが、私共の仲間では成丈け家庭の睦まじくない家を喜ぶ風があります。旦那様が怒つて金煙管かなんかを、奥様に投げつけられたのが、どう間違つたのか屑籠の中に入つたきりになつて見付からんでゐるといふ様な事があれば、それこそ私共の掘出しものです。

△殘月淡として曉氣冷やかに前栽一面に咲いた白菊の花が惜しげもなく清香を放つすがしい曉、胸を開ひて二つ三つ深呼吸を行つた。

△紅葉旣に散り、蕭寞たる寒山稍に染めたる如き翠松を點して蕭殺の致可レ畫可レ歌。

△菊水を、のめばかむろもかくやらんと、心も晴やかにとびたつばかり有明のよろひろとなき菜の、菊花にも賞に此うへやあるべきいつ迄ぞ、榮花の春もときはにて。

△うれしさを何につゝまんから衣
　　袂寛かにたてといはましを（讀人不知）

△微かな枯草の匂と弱い日光と、そして寒からぬ川上の靜さは、知らず〳〵瞑想の裡に引入れようとする筆もない繪の具もないそれで〳〵長い時間がたつた。

△杉、檜、欅の老木に圍まれた萱葺の百姓家は實に一個の庭園である。田舍、田舍、實に田舍に趣味が多い

△萩の穗の袖につく秋枯れにけり　卓池

△我胸一つには包み兼し此頃の思ひ、誰に訴り、誰にもらさん、思へば果敢なき昨日今日胸の焔も空しく燃えてなか〳〵に身もむもいたづらに冷えまさる夜半の寐覚、水音は枕の下を流れて居る。



冷たき床

三宅てふ子

（二二ページより）

昨日は注射の反應がなかつたので、今日は大威張りで外出する事にきめた。六月に入院して以來五ケ月になるけれど、外出はこれで四度目だ。無雜作に髮を卷いて、ネルの單衣に綿入羽織を引かけて出る。すつきりと晴れわたつた十月の空は昨日に劣らぬ好日和だけれど、空のはての方にところ〲薄い雲が浮んで、風がすこし動いてゐた。玄關を出ると、

『まあおめづらしいのね。』

と由井さんと高野さんが窓から顏を出して笑つてゐる。

『おみやげをもつて來ますよ』と言ひながら門を出ると電車が來た。急いで乘りは乘つたものゝどこへ行くといふあてはなかつた。何かなしにかうして街のとゞろきの一分子となるのがうれしかつた。何處までも行かう、默つて、電車が持つて行つてくれる處へなら二里でも三里でも、五里でも百里でも……ふと顏をあげると、二三人が私の方をじつと見てゐる。私も今更物めづらしげに皆さんの顏をぐるりと見廻した。何らの印象も得ない。けれど、何だかそわ〲と胸が躍つて不思議なほど輕い心持になつて來た。誰か言葉でもかける人があつたら、ニコ〱と返事をしてやり度い樣な心地がしてゐた。

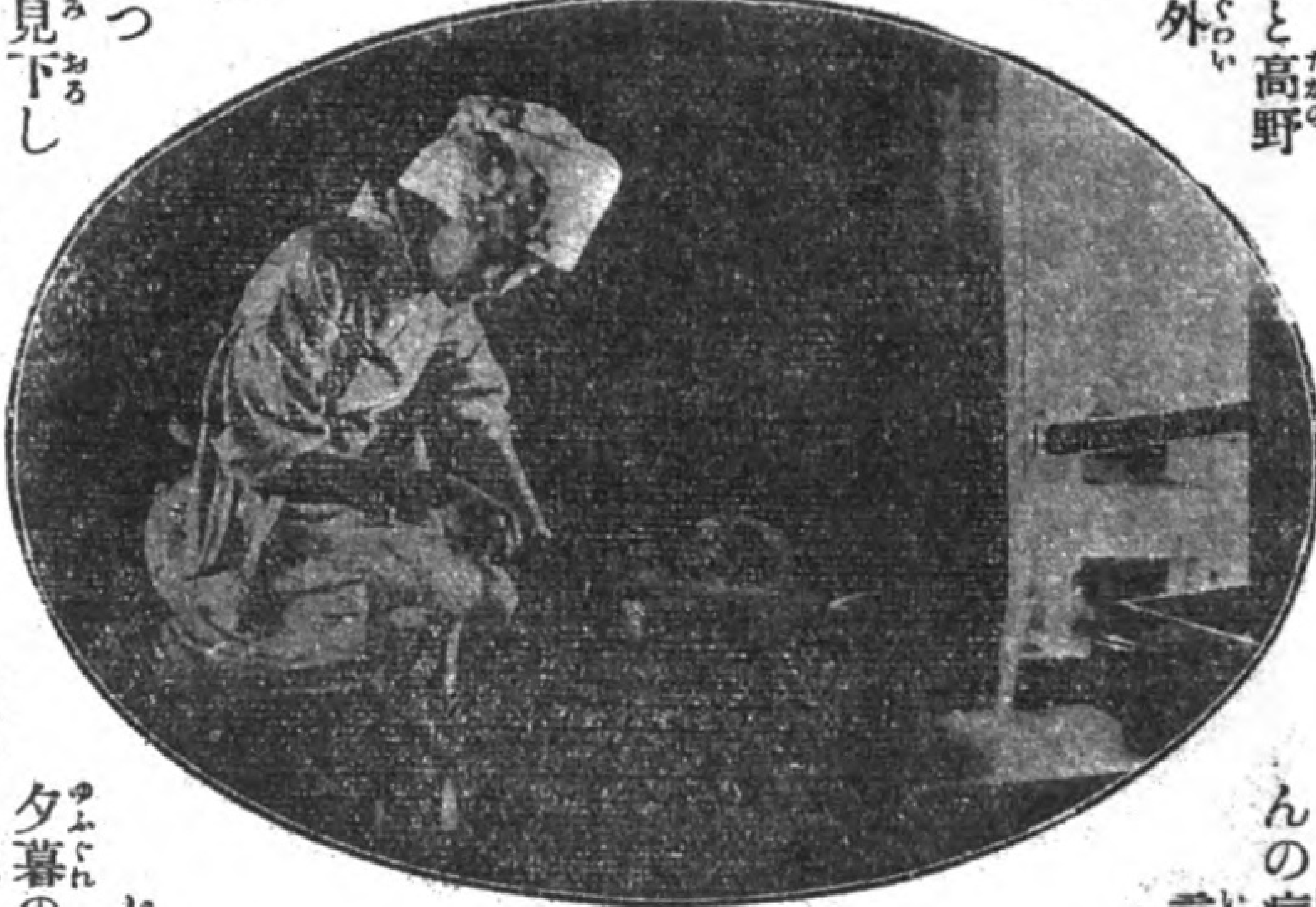
銀座の資生堂でアイスクリームを飲む。角帶をしめた番頭さんのお給仕はめづらしいと思つた。オイデルミンを買つてそこを出ると、石だたみの通りをふらふら下駄を鳴らしながら大きな家の店かざりをのぞきながら歩いた。横町でクラッカーをこしらへてる家の前に立つてぼんやり見物した後、五錢の袋をつまんで出る。乘つたり降りたり大都の中を我物顏して、電車の中にばかりも二三時間は居たらう。ゆけども〱知た顏に逢はないのも淋しいものだ。夕ぐれ近く歸つて來て放り出される樣に電車から出た時は、風の吹く

中に狐の落ちた狐つきの樣な顔をしてゐた。

夕飯がすむと廊下を歩く人、寢ころぶ人、廊下の談話會はこれから盛んになる。私と高野さんは窓から往來を眺めてゐた。郊外に近いはづれの町を、氣障に髪を分けた牛乳やだの、女工、腰辨、職人などが忙しさうに通る。口の惡いのは職人が一番だ。

『肺病患者、〳〵』と大きな聲をして罵つてゆく。

『憎らしいわねえ、物干竿でも用意しておいて叩きのめしてやり度いわ！』と、口惜しげにいふ高野さんの顔は、かうした病人とは思へぬほど肉あつな、肩のあたりもがつしりしてゐる。私は笑ひながらなほ見下してゐると、丁度通りかゝつた、二十四五の、少し亂れた丸髷の頭をうつむけて、小またに刻む人のえりすぢがぬけるほど蒼白い。



米薪に不足もなくて秋寒し

『可哀さうねえ、どうせ病氣したついでに、皆さんの病氣を脊負つてあげてもいゝ……』と言つた私の言葉は高野さんの氣に入らなかつた。

『厭ですわ貴女、このまゝ死んぢやつまりませんわ、私どうしてもいまひと花だと思ふわ』と言ふ顔を見守つて、いつぞやの外泊は見合ひをする爲めであつたといふ、廊下での噂も思ひ合されて慘ましい心持がした。不治と言はれる病ひをかくして男の前に立たされた時、何の不安も感じなかつたであらうか。

夕暮の色は街を暗くした。ふり返つてみると電燈の光りをあびて三四人の人が談笑してゐる私達も窓をはなれて自分の室の敷居の處へ腰を下して

皆なのはなしに耳をかたむけた。身の上ばなし、追懐談、人の噂さもまれには出る。その人達の自ら語る處によれば、いづれも私の樣な所謂餘り者では一人もないこゝにゐる五人の三人までは一人娘の聟取りだといふ。

『一人娘はあんまり大事にされるから體が弱くなるんぢやない。』

江田さんが言ふと

『うそよ、亡くなられちやあとが絶えてしまふからお金をかける氣にもなるんだわ。』

と由井さんが言ふ。いつか血を咯いた時、狂氣の樣になつて飛びつけたお母さんは、

『おまへが由井の家をとる人ではないか、一生懸命よくなつておくれでなくては困りますよ』

と言つて、さうでなくてさへ神經の高ぶつてゐるものをとう／＼泣かせてなほわるくしてしまつた。



水清く山幽かなるあたりより折こし紅葉いろのことなる　（有功）

柳田さんはまだ十四の子供らしい人であるけれども母さんも兄さんも姉さんも同じ病ひで亡くなつた後は、嫁に行つた末の姉さんより外にたよりにする人はなかつた。この姉さんと病人の前で涙を流しては何か言ひきかせて歸つてゆくのが常だ。深

い肩揚のあるその小さい肩に家の大任を脊負つた氣でゐる。高野さんも同じ樣な境遇らしい。江田さんは神田の商人の戀女房だ。留守の事ばかり氣にしてゐる。みな割合ひに呑氣だ。自分の行末については何の煩悶もないらしい。親の言ふ事にはそむかれないと言つてゐる。親の言ひつけならいやな人とも添ふ氣だらうか。

種子をとるために、賣らるゝために大切につちかはれて、麥わらの上にしやんとすましてゐる南瓜を見る度私はいつもをかしさと氣の毒さを感じさせられる。いかなる殿堂の中にも束縛と一緒に住む氣にはなれない私は、この病氣をしたばかりに、そしてあとゝりでなかつたおかげに、身と心とに親も束縛の手を休めた。數萬のたからをゆづられたよりも私にとつて幸福であつた。思へば長い病生涯は私にとつて決して無意義なものではなかつた。健康であつたならば味ひも知らぬであらうと思はれるほどの事も、深く心に經驗する事が出來た。南瓜にすれば百性の憎しみをうけ、畑のすみに投り出される種類であるかも知れぬけれども、順境に思ふ事なく老いゆく人と何れがうれしいか、それはとる人々の心にもよるであらう。（十月十四日夜）



白菊の花の盛になりにけり　おくらんつゆの千代の數みん　（景樹）



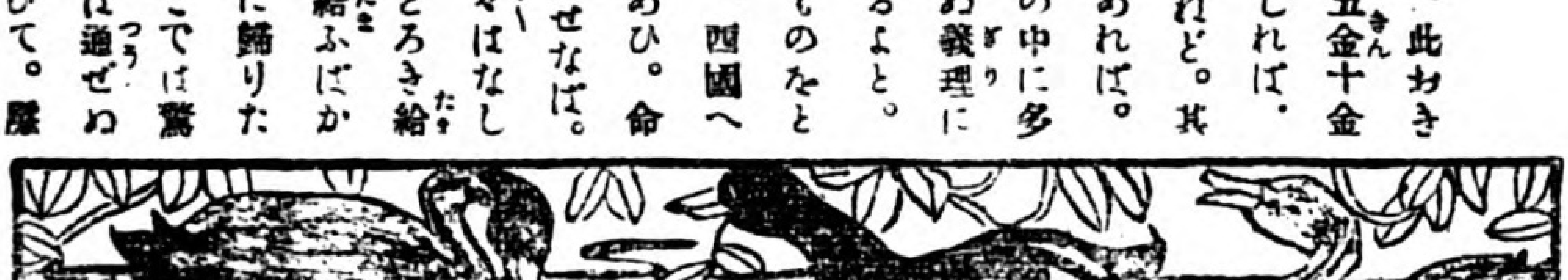
古今雅談

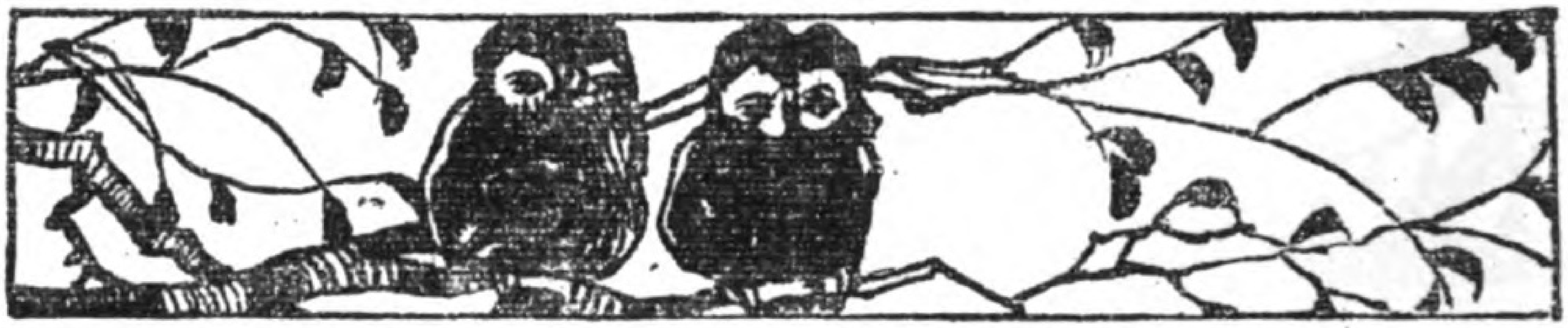
△眞の樂しみ

四谷に飴屋忠七といふものあり。朝はとく起き出でゝ飴をこしらへ、家業にをこたりなく、少しのひまをもをしみて、三度の食事の外、さらにやすむ事なし、暮時よりしまひて、風呂に入り。夫よりやぶれふるびたる麁服を脱ぎすて。黒羽二重に定紋の付きたる衣服に着かへ。黒天鵞絨の褥の上に座して、たばこを二三ぷくすひて。寢所に入る。夜具も繻子。純子の類ひにて。これを着て臥す、夜あけぬれば。また〳〵例のふるびたる綿服を着して飴をつくる事。きのふのごとし、人その意をとひければ。人といへるものは日々おのれが渡世にのみ。心を勞して慰むかたなし。たとへ外にいかなるたのしみをなすとも、其中に利を得んと思ふ心のはなるゝ時しなければ心のなぐさめにあらず。たゞ夜眠りたる内ばかり。まことのたのしみなり。これによりてさる事をして。性を養ふといへり。實に生涯中のたのしみなく。齢八十餘歳にてめでたく終りしよし。（太田南畝）

△風の翁の話

京都五條の邊りに。風の翁といへるものあり。此おきないはく。人情は通じがたきものなり。わづか五金十金の事にて死なねばならぬといへるも、實の事とすれば、力のおよぶだけは合力もすまじきものにもあらねど。其やうなる品〻以て。人の金銀をかたりとる者もあれば。又そのたぐひかと思ひて。取りあはぬもの。世の中に多し、されどもその者實の事にて。いよ〳〵たゝぬ義理にて。死しなどすれば。さては實の事にてありつるよと。はじめて驚き。かゝる事ともしらば。貸すべきものをと思ふはたれしも同じ事なるべし。われ壯年の時。西國へ商ひに行きたるかへりに。播磨潟にて。難風にあひ。命から〳〵に歸宅せり。其時の物語を。兩親にきかせなば。嘸泣き出だし給ふらんと。その後そろ〳〵と折々はなし出だしぬれど。見ぬ事なれば。それほどにはおどろき給はず。たゞそれは怪我もなくめでたしなどいひ給ふばかりなり。是わが子を愛せざるにはあらず。無事に歸りたるゆゑなり。もし片腕にても脱けて歸らば、そこでは驚きもあるべし。さすれば親子の間にてさへ。人情は通ぜぬものと覺悟してより。浮世もたのしみすくなく思ひて。歴





遁せりといへり。後に九十九庵風之と號し。諸國に行脚などして。生涯風流にしてをはりしとぞ。（太田南畝）

△肝癪もちの話

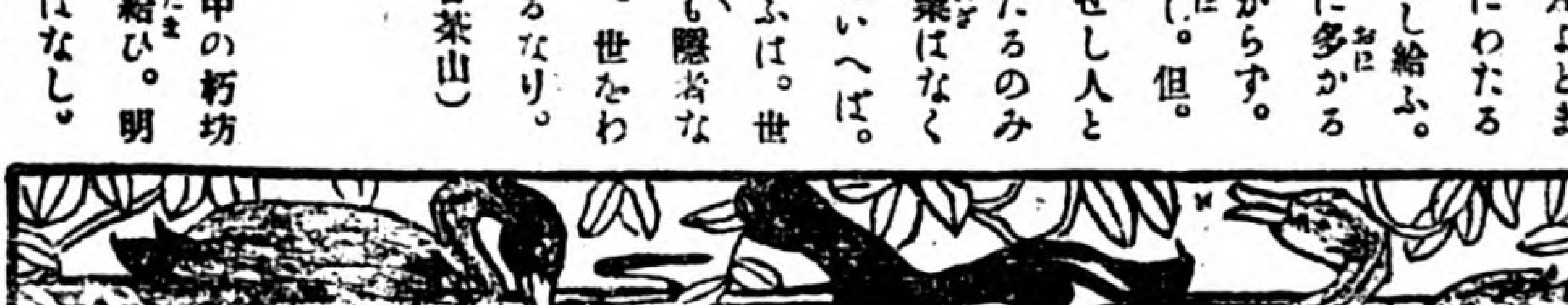
今の世に。肝癪もちといふ者。幼少より。親の愛を恃みて。驕奢放肆にそだち。富めるとて。人にかしづかれ位ありとて。人に諛はれて。何事も吾意のごとくなるより。一度意に忤ふ事あれば。俄かにはらだち。顔色姿體に見はれ。或は他所へゆかんとおもひしに。さはりありてゆく事を得ざれば。庭の内をあるきまはりて。坐し得ざるあり。或はありあふ器物を庭に投げ柱に打ちつけて。砕くもあり或は妄りに。人を罵り。また妻子婢僕を打擲するもあり。甚しきは。刄物をとりてうちさわぐもあり。他人よりは。かほどの事は。堪忍もなるべきにと。思はるゝ事を己が氣をおしたてゝ。自らとまる事のならぬは。皆幼少よりの驕奢放肆にて。一種の氣質をやしなひたてゝ所謂肝癪もちとはなりたるなり。予浩然の章を誦するに此說をひいて。直を以て。養の反對となす。（菅茶山）

△用事と雅事

凡。用事と雅事とかれざるは。眞の雅事にあらず。障子の腰に繪をかきたるは。はめかふるとき右よ左よとまよはず。又趣もありてよしといふ。この事萬事にわたるべし。何某公の領内の沮洳の地を堤して。湖となし給ふ。形勝もまさり。又灌漑をたすく。この類世間に多かろべけれど。吾便宜に志す人は。人の不便をもはからず。雅事に志す人は。吾家の不利をも省みざる者多し。但。雅事のみにしてよきは家を子弟に讓りて。隱居せし人と僧とのみなり。膏腴の地をすてゝ。柳櫻を植ゑたるのみはいかゞあらん。隱者といふものも世わたりの業はなくてはかなはず。陶朱公があきなひも同じ。隱者といへば。風月のみにて家のいとなみもなさゞる者とおもふは。世界もしらぬなるべし。孟子のいへる抱關擊柝も隱者なり。膠鬲が魚鹽も隱者なり。僧の托鉢乞食して。世をわたるよりして。みづからなす者をそしるは誣ふるなり。（菅茶山）

△三度まで源語

九條現山公。東福寺の門前乾高院といふ藪の中の朽坊におはしゝ頃。供御の後には。御机にかゝらせ給ひ。明暮源氏を御覽じけり。此物語ほどおもしろき事はなし。六十餘年みれどもあかず。是れ見れば。延喜の御代にす



むこゝちすると、不斷仰せられし。ある時、紹巴法橋まゐりて、何を御らんぜらると申されければ源語、またつらしき歌書は何か侍ると問ひしかば源語。又誰か參りて御閑居をなぐさめ申すと申されければ源語と。三度までおなじ御返答なりきとぞ。（太田南畝）

△盜賊を逐ふに心得べき事

備中吹屋村大塚何某は、銅山の事に達せし人なり　或夜ぬす人入りて、物ぬすみ出でんとするを、やゝぬす人よと、大音上げて追ひかけしかば、盜人あはてゝ、盜みし物もおとし置きて逃れ去りぬ、其聲におどろき家内のもの皆々馳せ集りしとき、主人いふはじめ盜人入りて、我鼻息を伺ふこと、再度にして。爰かしこを搜し出だし、靜に荷物をとゝのへて出でんとす、其時われ枕刀をぬきて進み出でたるなり。始めは盜人の心專らにして勢もさかんなり。其時に向へば。或は怪我あらんもはかりがたし彼心のまゝに仕課せて、今は氣勢もゆるみたるときに進みかけしによりて。ぬすみし物もおとし置きしなりと語りければ。みな〳〵感服しけりとなん。（菅茶山）

△大恥と小恥の別

明石の里正鳥羽の三右衛門老年に及び。誕生日に子弟一族を會合し席上にて謂ひていはく。予が家事に貧しからずといへども、水旱の時ならざるあり。其上人に不時の災厄もあるなれば。予が死して後、窮乏になる事も有るべし。さもあらば先づ第一番に居宅を賣るべし。それにてもふせがれずば。家の重寶をうるべし。次に諸器物衣服を賣り。赤裸にて田地を作ると心得べし。大百姓といはるゝ者。窮乏のはじめにひそかに重寶を質物とし。次に器物衣類を質物とす。つぎに田地をだん〳〵に賣る。つぎに居宅をうる。居宅を賣れば。手と身とに成りて。立ちよる方なきにいたる。小恥を知りて大恥を知らず。愚といふべし。一番にゐたくを賣るは。當時は恥なれども。それに準じて。萬事を省略すれば。引きかへす理。既にこゝにあり。其上田地さへあれば。取りつながるゝ物ぞ。汝等必小恥を知りて。大恥をまねく事なかれといへり。（太田南畝）

△むかしの育兒法

嬰兒はものいはぬものなれば。すべてのことどもなかたはらより察して。養育も治療もするものなれば。小兒科を啞科ともいひて、啞をあつかふに同じといへり。小



兒の養育治療の書も亦少からず。保嬰論云。若要ニ小兒安ニ須レ帶ニ三分饑與レ寒此格言也。終身守レ之可也といへる。知言といふべし。婦人産後乳のいでざるもの富豪なるは。乳母をもて嬰兒を養ふべけれど貧賤に至りては。これに充つるの食なく。はては嬰兒の病を引きいだしなどすること常に見ることなり。近ごろ乳の粉といふ物を製して。坊間に鬻ぐものあり。世の乳にともしき嬰兒を救ふこと。その功最多く。しかれども坊間のもの。あるひはその製麁なるものあり。予最上氏より聞きたる製法精且すぐれたりといふべし。

餅米の寒晒を水にてときゆるめ。ひめ糊の如くすべし。茶碗に一ぱいほど一日の食料に充つ。水飴一匙ばかり。右の寒晒の中へ入るゝなり。かゝれば飴にて米粉融化してことさらゆるくなるなり。世上にては砂糖を用ふるよろしからず。焼鹽白牛酪この二味桐子大ほど入るべし。世上にてはこの二味を入れず。鹽は腹中に入りて。脊ひとなることその功あり。白牛酪は蟹皮にておろし末として入るゝ。さてその飲ませやうは常のごとくにてもよろしけれど。よく〳〵は飲せこゝろみて。嬰兒の飲みよきやうにすべし。（山崎美成）

△他人はみな我也

夫人間の小慮を以て瞻れば。一生は永い夢。天の大理を以て観る時は實に短い夢。夢を夢と思はぬうちこそ。人間の境界なれ。我は夢も覺めかゝりて何事にも迷されば。おもしろからず。さつぱり覺めては夢もむすばず。此の世は夢の迷なれば。吾も夢中の人。向ふ人も夢の人。只迷ひ惑ふ事のみをして。是を樂しみ或は苦しみ。亦歡び患ひて。此の世に居る中は惱しき夢を見ぬ樣にして安居すべし。大なる樂歡をする時は必また大なる困み心配あるなれば。其の度を能く考ふべき事なり。名利とて此の二に迷ふ事なれば。爰を知り給へ。巨萬の富貴も。名の高く聞えたる人も。一世の中の事なり。釋迦も孔子も名のみ殘りて其の事なし。わが子われ一人の者に非ず。夫婦の間より生ず。予また孫を生ず。孫また彦を生ず。漸々血脉の遠く淺く淡くなりて。末に至りては悉く他人となる。然れば他人皆われなりといふべし。（司馬江漢）

△談話するには來因あることを要とすべし

△巧人は福を得る事多きも亦禍を得ることも少なからず



秋逝くこゝろ

○八束足穗の稻に音さやかなる波を打たせたるは昨日なりき、この頃よりぞ秋風はいと〱身にしむ、物思ふ人も思はぬ人も、何となく悽愴の心起りぬべし。

○見るかぎり野山のけしきは深く、みしらぬ人だにたゝにやはとおぼゆる、山風に耐ぬ木々の梢も峯のくず葉も、心あはたゞしう、爭ひ散る天地寂しや。

○さらでも夢にはよもあらじ、いざ〱砧擣たうよ、時雨せぬ夜も賤の女は風寒しとて衣うつ、秋の恨の小夜衣、重れて落つる紅葉ばの、積る木の葉をかき集め、燃やす心や歌ならん。

○昨日今日うら枯るゝ中の穗薄一叢、いよ〱さび行くさ流れに月碎く夜ぞいとも寒むけれ、靜かなる草野の廣さ大地の眠る時、蟲のさゝ音のたえ〱なるぞ、この世の秋なれや、

○穗尾花、焚く枯れ穗にさびれ行く庭面に筧の雫ならでは、つゆおとなふ者もなし、閼伽桶に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなり、かくてもあられけるよと見るもあはれ秋逝く心かな。

○我もたのむ雁金こそ、つれて越路のしるべなれ、名におふ蘇武が旅雁、玉章つけし都路に我をも共につれて行くらん宿かりがれの旅衣、謠曲の中の秋にも暮れ行く哀れあり。

○林間に酒をあたゝめて紅葉をたくとかや、とまれるも、ちりうくも、何れか千むらの錦ならざるに時しも秋の末なれや、折り焚く柴の烟と消えん世の風に人も心も木も草もうら寂びしうぞ色うしなへるも浮世の樣なれ。



菊の宴

紅梅

今日お兄様のお誕生日！心いはひの御會食をなされるため、土曜日から日曜日へかゝるのを幸ひに、常からお心の合つてゐる方たちを、觀楓がてら、箱根へ御招待申しあげやうといふので、昨日の午後こゝへ、來てから、姉様と二人で、お電話で不意に二三の方をおどろかして上げた。が、公用で廣島へお出向きのためおことはりのあつた田村様をのけての外は、皆さま大さうよろこんで下すつて、必ず定刻までには……とのうれしいお返事でした。

お午前はなにくれとなく、室内のかざりつけにかゝつて了つたが、お風呂をすましてから、時雨羊羹を切つて、父さまにお薄茶を立てゝさし上げる。

小窓のそばでは、うす緣の上に花器をおいて、姉様は白ぎくの振りよきをえらびつゝ、しきりと鋏を鳴らして被居る。ひまもるそよ風に、花は細々の香りをつたつて、秋の意は浩蕩として室にたゞよふ。

御案内の時刻に先つこと約廿分、先登第一にステッキうち振りつゝホテルの門を訪づれたのは、君津さんでした。

お菊さんの案内で室に入るや、若々しいお口元に、モウなつっこい微笑をふくみながら

『ヤ、昨夕はお電話で失禮いたしました。どうも私までお招きにあづかりまして、甚だ恐縮です！あ、伯父さま……』

『やあよく、來てくれました。さあずつと此方へ……早かつたのでな、第一着です！』

つやゝかな、頰を撫でつゝ莞爾〳〵して被居る。

姉様も欣々して

「武さん、君津さんが入來しつたよ。」

敷石に庭下駄の音がして、縁先に白い顔がちらりと見えたが、やがて小障子の陰に透く人の影……美しいお髯をまさぐりながら、大島絣に羽二重帯しめた兄様　吸ひかけの芙蓉をすいと土に捨てゝ『ヤア！』とばかり、お互ひに顔見あはせてたゞにつこり。

三つのお茶碗に紅茶をあたゝめつゝ、洋皿のワップルはさんでさし上げれば、かろくつむりを下げて掌に受け、

『あ、富美さん？甚だ恐縮ですが、只今上り口に置きました包みを、どうかお部屋の隅にでもおかして頂きたいもので……」

『はい、畏まりました。』

立とうとすると、恰度お菊さんが持つてきた。何やら嵩だかな風呂しき包み……重いかと思つてしつかり持ちあげたら、ひょいと上る。

『マア、何か御趣向なんですか？早く拜見したいこと……」

と姉様が、ほゝゑみながら床わきへ直す。

『や夫人！どうも恐縮ですな、何しろ不意の御出題で、昨夜は寝ずに考案いたしましたやうなわけで……。恐らく諸君も意想外の珍趣向がお出來でせう。しかし不意撃とはちと酷ですねえ…」

お頭をかゝへて閉口して被居る。

兄様のおもひ付きで、十二支のうちを撰んで、それぞれお芝居に因んだ御趣向をつて、皆さまにお願ひ致しましたのよ。君津さんは申の籤で孫悟空！

そのうちに、追々皆さまお寄りになる。久米さん、初島さん、河野先生、森さん、泉さん、笠原さん……磯さんは、私からお願ひした通り、治代さまおつれあそばして……。最新型の背廣をかろやかに、あのまあ襟飾のハイカラだこと！

荒い龜甲絣の御召縮緬に孔雀織の半コート召して、澤々と束髪にお上げあそばした治代さまはやゝ後れて……橋を渡つてお出でのをこちらから見ると、知ら

ないものにはお似合の約婚人とも見えやう。

「マアうれしい！治代さま……」

黄楊の廣縁に紅緒の草履辷らしつゝ、しき臺まで出むかへれば

「アラ富美子さん！昨日はお電話をありがたう。私とうとう母さんを攻めおとして、つれて來て頂きましたよ。はあ、母さんからも宜しく申しました！」



翡翠玉の柄の洋傘たたみつゝ、ほつれ毛をかきあげる細指の根に紅玉が可愛ゆくきらりと光る。

皆様そろつて一風呂あびていらつしやるまを、お茶やお菓子も直し、三つのお火鉢へは、さくら炭をピチ／＼と活けておく。

窮屈らしいお膳部よりは、却つて書生流に一つにした方がよからうといふ父様のお詞に、大テーブル持ち出して、眞中へは和洋の盛花、まはりへ八たんのお布團をしく。

「さ、諸君！御らんの通り萬事略式です。お口に合ふものも無いですが、どうかお寛ぎなすつて、うんとやつて頂きたいですな。」

「さあどうぞお席へいらつしやいまして‥‥あら、それでは此方がこまります。ま、どうぞ、何卒、河野先生！何卒貴君から‥‥え、私たちもお相伴いたします。」

姉様もとも〲手をとつて、無理にお席へ坐つていたゞく。父様と姉様の間にはさまつて、私は治代さまと並んで坐つた。兄様がお指圖なさると、お靜さんとお菊さんがビールの口をぬいて注ぐ。

十三の洋盃に潮とわきかへるのを、ひとつに寄せてカチリ！と合せて‥‥先づ祝盃があげられる。お口直しに辛いのゝ好い方はどうぞ御隨意に‥‥といひながら、姉様は女中に手つだひつゝ、銚子をとつて間をとりもつ。

皆様が洋刀や肉刺をせつせと働かしていらつしやる間を、治代さまと私は、しやうお口取のきんとんへお箸をはこばす。

一順お盃のとりやりが濟んだ頃には、電燈ましろく煌いて、皆さまモウいゝお顔色！ポートレースやら打球やらのお話に、それから夫へと花が咲いて、若き血潮は頬にたぎり、快活なわらひ聲は室にあふれつ。

「さあ、如何です！そろ〲餘興の方にとりかゝつちやあ‥‥‥」

「贊成々々！」

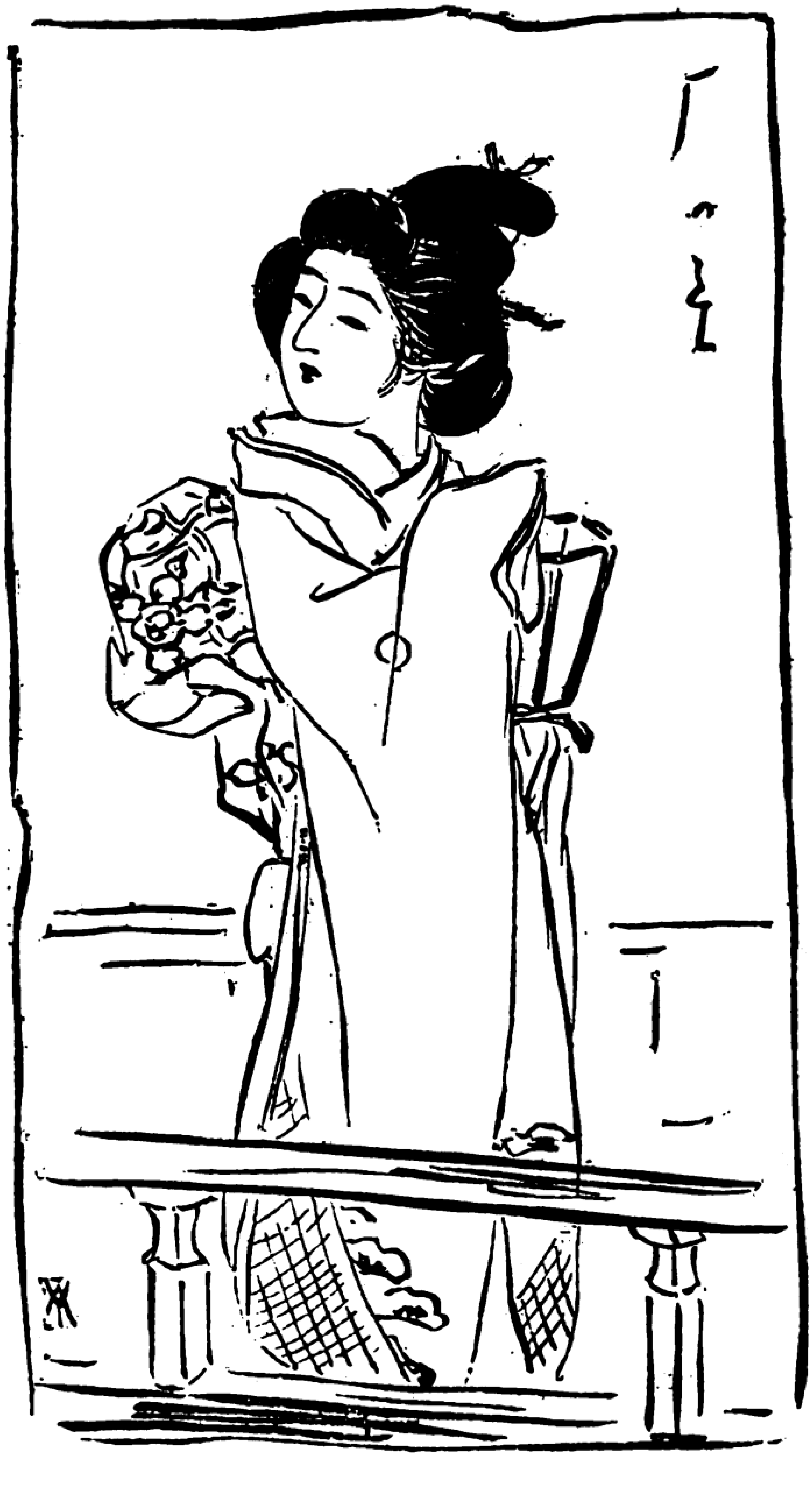
くじ引で、一番に席を起たれたのは、久米さんでした。赭顔長軀の法學士！この春、お茶の水出身のうつくしい夫人をお迎へあそばしたとやら‥‥お二人そろつておとりに成つた紀念のお寫眞は、兄様のお書齋で一寸拜見いたしましたつけ、しばらくお目にかゝらぬうち、お口髯もくろ〲と、思ひなしか、大さう更

けてお見えになる。

「僕のはねえ、丑に因んで市原野と云ふんです。御同様に、ずゐ分弱らせられましたよ。えゝまづ……トこゝに持つて來ましたのが一つの折です！此の上の化粧紙が奉書……即ち保昌にひゞきますね。中をあけると、牛肉の霜ふりです。赤いところと白い處が斑になつてゐる……から、是をこじつけて、あかまだら！つまり袴垂保輔と見て頂きませう！」

なんて、中々きわどい事を仰しやり出す。

次は磯さん！



「僕のは酉で、お初の烏啼きといふんです！まだ鏡山の芝居は見た事はなし、全く拙い趣向ですが、これで免してくれ給へ！」

小ぶくさから取りだして、テーブルの上へ投り出し

たのは、クゴ縄で吊してある小さな壺。

　これはお菓の辛子茄子……。ホヽヽヽヽと。洽代さまはハンカチかんでうつ向いて被居る。私は恰度熱いお椀盛をいたゞきかけて居たものだから、随分〳〵切なかつた。

　入れかはつて初島さん、此の方は横濱の斯真上へつとめていらつしやる……兄様とは所謂竹馬の友で、お身丈のたかい色白の、品のよい偉丈夫です。

『私は鼠で金閣寺です！然し、この席に斯ういふ大食卓、即ち大膳は出てをるし、又、久吉のやうな智者や直信のやうな美しい方たちも揃つてお出でゝすから、私はたゞ活人畫式に、雪姫が櫻の樹へいましめられて居るといふ、可憐な風姿だけを御覧に入れませう！』

　云ひつゝ食卓の上にのせたのは、荒縄でくゝつてある、一升瓶の櫻正宗と福姫！ヤンヤとばかり、しばしの間は鳴りも止まず。

　河野先生は、亥といふので猪早太！無地ちりめんの半えりを出して、これに『縫ひ度い地』といふ張り紙がしてあつた。何だか福引の種本にでも有りさうだこと……。

　君津さんたら、例の大風呂敷を抱へてきて

『どうも、諸君のお手ぎはがあまり見事だもんですから、ちと出しおくれの氣味ですがね、私のは道具ばかりで……つまり役者が一枚下なんですねえ。題は孫悟空！宙のりでも遣らうつていふんですから、中々足もと……いや、口元がむづかしいんです。』

　云ひつゝ包みの中から片手桶を出す。

　これは御承知の片手桶、俗にさるぼうと申します。猿の棒だから即ち金そう棒で、此の桶は、おさん殿が流し下で使つたり、又は風呂場で湯を汲んだり、時には馬に水をくれる事もあります。以上は金そう棒のつかひ分け……。これは今、途中の荒物やで求めましたので、おゝ〳〵、桶の中は『蜘蛛の巣』が一杯だ！底にもホコリがたまつて居る。そこで、此の埃をこうフーッと吹きます。』

此處で小さな笊を十個ばかり出して、

「すると、御らんの通り、小猿が澤山出て參りました。オットそれから肝腎の三藏法師をつれてゐまりませう！」

と、今度は土で造つた寶珠の玉と杓文字をだす。

「これは寶珠の玉で、つまり玉のやうな法師ですから三藏法師ですな。これは、おさん殿が屑などを賣つた金を入れては溜めておくもので、入れる時にはわけなく入りますが、さて、出さうとすると中々出ない、一寸八戒（やつかい）なものです。オヤ八戒が居るのにもう一人お供が足りない。そこで、此處へ沙悟淨（しやもじ）を加へまして、いよ〳〵人數がそろひましたから、終りに百廻りをやつて幕をしめませう！」

といひながら、小笊の中へ指を入れてはグル〳〵まはす。

森さんの和唐內、笠原さんの玉兎、泉さんの八犬傳……とり〳〵に御苦心のもやうを面白く拜見する。

●御飯がすむ。林檎やバナ、をうづ高く洋皿へ盛つてまん中へ……私たち三人は、メスをとつてする〳〵と剝く。

「どうです諸君！大分藝術家がお揃ひぢやありませんか。何かお一曲……是非拜聽さして頂きたいですな！」

父樣は悠々と、薰りのたかい卷莨を灰皿にさしおいて仰しやる。すると磯さんは。

「さあ、治代さんも富美さんも、お客さまにばかり成つて被居らずと、十八番のものを何かおひとつ、ぜひ僕たちからお願ひします。あんまり大切にしまつてばかり被居ると、今にカビが生えてしまひますよ。武君！君からも是非……ぜひ……」

なんて仰しやるんですもの。いくらおことはり申してもきゝ分けなく、父樣におすがり申せば、かたへの脇息へたをやかに肱をおかけあそばしたまゝ

「又氣がかはつて好いぢやらう！ナニ、一人では厭だと……はゝゝゝ意氣地のない奴ぢや！波津！お前も入つて、治代さんにも御迷惑を願つて、三人そろつて

何かやつたら……』

初島さん、眉秀でたる面をあげて

『ヤ、それは又一段です。さ、夫人！どうぞ……』

姉樣は美しい眉根をひそめつゝ、二人のかほを見て又にっこり。

『困りますわねえ。ぢや、此の間一寸浚つておいた、ゆきでも合はして見ませうかしら！ね、治代さま、およろしいでせう？』

凉やかなお眼をふせて、幽かにうなづく。

忽ち線外からはこび入れた二面のお琴と三味線一ちやう……ながい袂をさつとしいて、治代さまと私は檜心に、雁行にならんで爪をとつた。

錆鼠の鶉縮緬に、共糸で紋をぬつた羽おりを裾ながになびけて、伏眼になつた姉樣の長い睫毛が、殊にへんに人のめをひく。きやしやな手に撥をとつて、さて淑やかに會釋をした時、聽衆はさゝめきたつ。

…………　…………

…………　…………

をしのをとりに　もの思ひはの

氷るふすまに　啼くねもさぞな

…………　…………

…………　…………

姉樣に淸々しいお聲をヤ、小さう、絃にそふてうたふて下さる。

乳房をせどめて胸高にむすんだ帶の、手をのす每に音するのが、紅梅ふくらむ彌生のあしたを、やぶ鶯のさゝ啼きめく。治代さまのと私のと、心ゆくまでしつくりと合ふて……おゝ伴奏や、さわやかなおもひに胸にみちて、ともすれば現なき魂の、あたりのやは風にふは〳〵と飛んでも行かう。いく度か押へてははねるへの字の絃の根緒かけて、そり〳〵虹の華を見るやうに、颯と彩どるのはわが指の寶石である。

拍手のうちに調べをはれば、皆樣は大滿足！

『ヤ、どうも御苦勞さま、大さう面白くうかゞひました！』

『夫人！ひさし振でお手なみを……』

なんて、彼方こちらから……。

入れ直した宇治の葉の香りたかう、兄さまは、つと立つて」

「今晩は種々と諸君からお心入れの御趣向を頂きましたから、大切にいさゝかお禮のため、僕が、所作事の連獅子を御覽に入れます！」

何をなさるのかと、人々が好奇の眼をかゞやかしてゐると、かねて用意の洋皿に、紅白はなやかにつみ上げられたお壽もじを、親獅子と兒獅子に見立て、わきへ箸(橋)をそへてお配りになる。

皆さま、大よろこび！

ならば一夜は明してもと思つても、明日はうちつれての山めぐり、九時といふにせんかたなく、心をのこしてふし戸をしつらふ。――夜寒の閨にきこゆるは幽かな時雨の音。オヤ、降かしら？ 願はくば今宵のうちにはれよかし！ あけなば四方の峰々は、血しほの色のいや増さるであらうに……。

△

日は駒ヶ嶽に落ちそめて、芙蓉の峰はうすむらさきの燿やかしさ、見上ぐる空のるり色を、涯もなく音もなく、うつり流るゝ秋雲のすがた――さなきだに、梢の透いた樹々を嬲つて夕風の誘へば、枝をはなれし紅葉なんどの、空にくるふてひらひらひら、肩にたもとに打ちつけられつ。

からっ、からっ、からっ、と石だゝみを蹴る六本の息杖がうまく、調子をとつてトンと止ると、先棒が肩を代へながら

「山のなア……」

と、だみ聲あげて唄ひ初める。すぐ後の若いのが、思ひ切つて高い處から飛び下りでもするやうな聲で、「コォい！と」間を入れると、谷の彼方で谺が「ほゥい！」とこたへる。

仰ぐ高嶺、見下す谷間は、赤とみどりのだんだら染で、辿る小黑い一筋が、山姫の結ぶ帶とも見える。さと來る風のゆきずりに、黃な實をこぼす名なし草や、ゆかりの色のりんだうや、あはれは深い木立の路を、

ふと落葉の鳴るけはひして、かたへの樹叢かせから飛び出した斑紋奇羽の鳥一つ、嘲みがほの啼くねのこして、穴洞木の暗にかくれつ……。

老いたる禰宜の頬髯のやう、銀色にそよぐほ芒の路を、徒歩で夕越えの兄様連に半時ほどおくれて、女三人は山駕籠をつらねて降りてゆく。

脊をかゞめて膝をだいても、ともすれば横木にふれて前がみはほつれがち……湖畔からやゝ半里のとある茶店に、ヘチヨ〳〵〳〵のかけ聲おかしく駕き入れて、駕籠は床几の毛氈におかれた。

「入來つしやいまし。おつかれ様で……皆さん御くらうさま！」

火を焚きつけて居た白髪の婆一人、欣々と澁茶を汲んで盆ですゝめる。

『さあ、皆もゆつくり息をお入れな。あ、甘酒があるのねえ。お婆さん、若い衆たちにたんと上げて下さいな！』

姉様は駕籠から半身すべり出て、緋鹽瀬の筒から出した四つ純金の煙管に、白梅を吸ひつけながら

『治代さま如何！富美ちやんもお交際が出來るでせう？お腹が温つて好いかも知れないわ！』

顔見合せて笑つてゐると、お婆さんはずん〳〵平茶碗によそひつけて、三人の前にもつてくる。

『さ、冷めないうちに召し喰れよ。何ですねえ、お二人とも……』

遂々お茶碗とりあげて、ほかり〳〵と煙の立つのをフウ〳〵吹きながら喰べ終る。あら、お代りなんぞしやしませんわ！

これより先、一行より一つあいて彼方の床几にうしろ向きで、身じろぎもせでうづくまつて居た人かげがあつた。

背ひ見なれど、黒かみのやゝ亂れて、ほの白い襟あしの美しさ、まだうら若い女であらう！細脛にひたと絡まつた友禪の裾のあたりを、足袋ははかず、結ひつけ草履で、杖を力の草のみち、薄の露に、朽葉の塵に褪紅色にも成んぬ、痲うら緋鼻緒！

羽織はきずに質素な亂立のお召縮緬の袷、古渡更紗の丸帯を小さくお太鼓にしたが、裾はし折つた藤いろ絹に半がくれて……。さし込みでもするのか、胸を押へて腰を折つたのが、ふとした折に振り返つて、ちらと面をあはせた時――琴柱の額、小羊のひとみ、春やむかしの俤を偲ばせてなつかしい女の顔……あゝ、忘れもせぬ○○亭のお美津さんでした。



私とは三つちがひの年かさで、村田畫伯の許へかよつてゐた頃から、姉妹も及ばぬほどむつみ交はした間から……○○亭といふのは日本橋でも指折りの料理屋で、お美津さんは藁の上からの貰はれ兒だといふ……。幼い時に母親を失ひ、乳に困つて遣されたのが、恰度お美津さんが十四の年は、里

の父は都合上遠國へゆくといつて、その時まだ十七の、お美津さんの兄さんを連れて〇〇亭へ暇乞ひにきた時に〇〇亭の兩親より外に産みの親があつたといふ事を初めて知つたお美津さんは、なつかしい中にも何となく心へだてがせられて、挨拶さへもよう出來なかつたとやら……。

人なみすぐれてうつくしく、日にまし諸藝もおぼえてゆくうちに、ふとした事から不幸つゞきで、〇〇亭の身代がわづかの間につぶれてしまい、お美津さんは彼方此方の負債のかたをつけるため、容色のぞみで某男爵家へむかへられたとやら……その事はつひ此のごろ、思はぬ處からきゝ出したので、別れてからモウ四年になる……。

戀しいおもひに堪へかねて、そつと姉樣に囁いておいて走りよつた。

『あの、お人ちがひ致しましたら御免あそばせ。あなたはもしや〇〇亭のお美津さんではいらつしやいませんでせうか？』

思ひ切つて問ひかけると、つと寄つて

『マ…、よく……お忘れなく……。富美子さんおなつかしう存じます。』

あやなく其所へくづれて……。

あゝ、矢張りお美津さんも、覺えて居て下すつた。

『マア、實際にお美津さんで入來しつたのねえ！先刻からいく度もおたづねしやうか〳〵と存じて居しましたんですけれど……すつかりお變りなすつてねえ』

じつと横顔をながめたが、不思議なめぐり逢ひにおどろかるゝよりも先づ、その昔の人とは見ちがへるほどなやつれやうにびつくりした。その面はむかしながらの美しいけれども彼の頃の、絶えずうるはしい幻に包まれてゐるやうな、若い男の心を奪はずには置かぬ、始終物にあこがれて居るやうな、初々しい態度はモウ痕もとめず、ほつそりした胸のあたりを、半ゑりに浮く菊のつぼみも白くきよらに肌寒げな、何とはなしにたよりなげな姿かたち！つく〴〵と見た私はまづ問はずして、それからの不遇を語るのではないかしら

と、そゞろに悲しうおもはれた。

「……お友達のお話しでは、貴女あれから芝の方へお嫁ぎなさいましたつてねえ！あれつ切りお目にもかからなかつたものですから、つひまだ祝ひも……」

といひかけると

「あれ、何卒もうその事は仰しやつて下さいますな。何處まで不幸な身ですのやら……富美子さん！ 私もう、夫にも死別れまして……」

「え？」

私は驚いて眼をみはつた。俯向いた憐れな人の、かつらのやうな前髪を見つめて居るうち、つと胸がせまつてきて、草の上にハラ／＼と泪が……。

「サア、そろ／＼お出掛けなさいますかね。夫人！どうも御馳走さまでございました。」

結ひなほした素草鞋のひも、彼方では早ざわ立つ。

「あれ！久しぶりでお目にかゝつたのに、生憎汽車の都合もあり、……お美津さん、どうぞお手紙を下さいましな。でもこれから何方へ？」

「は、ちと都合がございまして、來月は函館の方へ參りますので、その前に、此の蘆の湯にたづねる人があるものですから……供をつれて參りましたのが、此の先の茶店へ包みを忘れてそれを、とりに行つてをりますの。いつ又お目にかゝれますやら……お客樣もおありの樣子、此樣な姿でお姉さまに御挨拶申し上げるのは却つて失禮ですから、これで御免くださいまし。」

「えゝ、私からよく申しておきませう。たとへ何樣にはなれて居りましたからつて、ねえお美津さん！ふたりはいつ迄もお友達よ。」

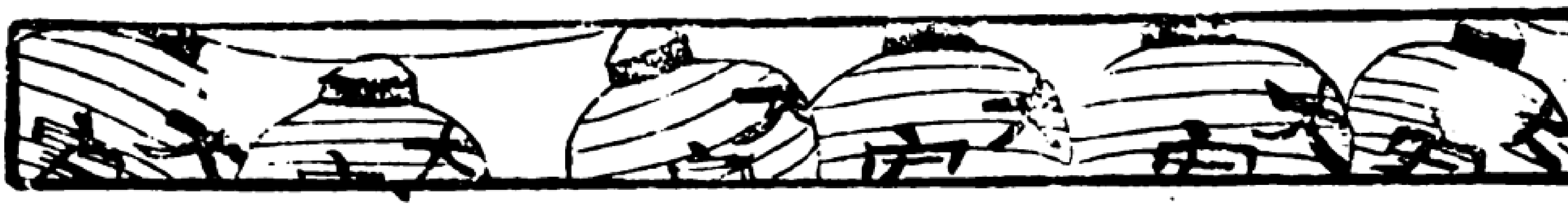
そして是れぎり相見ることも難い人！ あゝ神樣はどこまで此の人をもてあそぶのやら、怪しい運命の糸に操つられて、ゆく／＼定めぬお美津さんの身は……或はこれが永久の別れとならうともしれぬ。と思ふとモウ肉も骨もかき挘つてしまひたいやうな辛い心もちせぐる泪をじつとこらへて、改めて

「ちや、もうお別れいたしますわ！何だかお顏色もお

わるいやうなのに、しつかり御養生なすつてね。』
『ありがたう存じます。貴女もどうかお健康で……』
いたましいほど沈んだ聲に、かはす詞も覺束な。引かれ心地の袂を胸にたゝんで、駕籠の中へと潜り込む。人目いとはるゝまぶたの雫……。
『どうもお待遠さま。こんどは治代さまから、お先にお出であそばせよ。』

曳しよといと聲！駕籠は一搖り宙にういて、茶店の軒をするりとはなれた。
『有り難う存じました。……』
婆が愛想に送られて、牛丁、一丁、わが乘る駕籠は山の襞々流れの裾、涯しらぬ函嶺の秋を縫ふて、峠より、尾花のむれより、それよりもなほ、ひとり淋しい影の立ちつくす、甘酒茶屋の朽ちた林に遠ざかつて行く。





法隆寺の秋

むらさき

通の丁から車に乘つて未だ朝霜が消えやらぬ奈良の三條通りを走る、之れは土曜から日曜に亘つて關西鐵道の遊覽割引切符を無駄にせぬための忙がしい風流である。奈良には私の姉さんがゐる、久し振りに隔てなき姉妹の會見は、奈良一巡に土曜一日を費して豫想の時間は跡短かく成つたのである、然るに此短かき時間内に私は未だ法隆寺の秋色を探らねば成らぬ、而して奈良へ引返して是が非でも今夜の終列車で湊町驛へ歸らねばならぬのである。

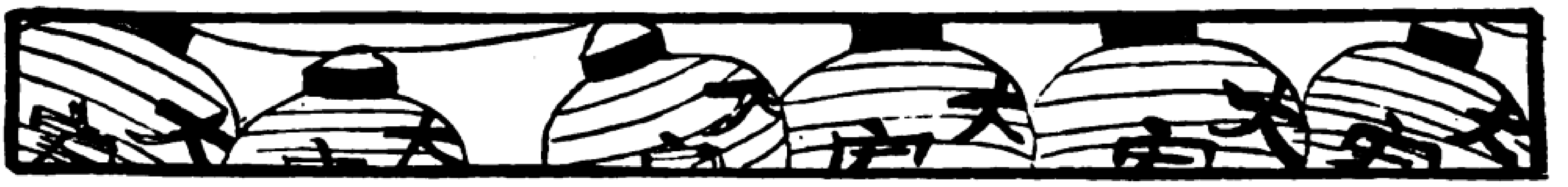
奈良の朝景色は頗る古雅である、振り顧ると興福寺の塔の九輪が消え入らぬ星を貫て澄み切つた霜空に高い、三條通りの家々は未だ半ばも起き出ぬ、名物大佛餅と書いた看板を下げた家の前に、洗ひ上げた大根を籠に累々と盛つて朝來の頰被りをした大根賣が息杖の上に荷をのつけて立つて居る。白い手拭を被つた姉さんが竹箒で門を掃いて居る。姉さんの白い手拭と、大根賣の大根の白さとが、昏暗を放れ切らぬ朝の街道に浮く程見立つ、角のない牝鹿がノソリノソリと歩行で來る、二人の車は此朝氣色の寂寞を破つて勢ひよく飛んで行く。停車場に來る。此處は割合に込んで居た、此快晴な日曜を龍田あたりの紅葉狩に行くのであらう、中賣店のお神さんが妙な眼付きをして私を見守る。

法隆寺停車場から里道十八丁眞直な一筋道は、處々に掛稲のシヨロを樹てゝ霜が白い、骨太な荷車に米俵を積んで痩せた馬が曳いて來る。馬士の頰被りの手拭の豆しぼりは陳腐ながら鄙びて居る、遙かに不規律な法隆寺村の草屋根が並んで、此草屋根の向ふには銅色の生駒山の一脈が橫たはつて、此頂きから澄んだ大空の淺黃の幕が張り詰めてある。

法隆寺村は奈良より一層古雅で、多くは藁葺の二階のない家許りである。此古雅なる家並の朝景色は、斑鳩の昔時代を忍ばしめる。トントンカタンと機の音がする、雀の群が道の眞中に散らばつて居る、あちこちに甘干の串を釣つた家もある、稻束を縁から庭へ掛けて積み重ねて、其垂れ穗を鷄の夫婦が仰向ひてはつゝついて居るのもある。

此家並の村中を通り越すと道は左に曲る、松の木がまばらに植ゑられた廣い道は法隆寺の南大門である。南大門を奥に多くの寺寮がある、屋根の尾から寺寮の建築から凡ての形狀が皆古式でスケンダ鬼瓦に鳶がつくれんと踞して居る。寺寮の一部に寺務所がある、鼠色の土塀や、黑ずんだ門柱などに新らしい寺務所の表札が際立つ、松は此廣き寺





樹に生立つて枝の凡てが推古式に垂れて居る。其處ら一面に松の落葉が散らばつて、香僧の若いのが衣の袖を背で結んで、此散松葉を掻いてはつくれ掻いてはつくれ、幾つとなく大きな饅頭を作らへる。

中門(仁王門)をくゞると案内の爺さんが居る、羊羹色の羽織を着て半白の顋髯を生やして、やさしげな爺さんである。此爺さんを先達として金堂、五重塔、講堂、西圓堂、聖靈殿などの數々を見る、名高い曇徴の壁畫や太子塑像の羅漢、橘夫人の玉蟲の厨子、など有名の寶物の中を菊子さんと二人で歩行く。冷たい薄暗い堂の中に菊子さんの白い顔が動いて居る。佛は何れも煤け切つたお顔揃で、前印度の模型圖を歩行いて居る樣な氣がある。東院の夢殿、繪殿、舍利殿、傳法堂など、三萬坪の境内に藤原式、推古式、鎌倉式の美術建造物が美を競つて滿ち〳〵て居る。此等を見終つて再び東院の門を出る。

『奥さんお宿りだすのか。』

と案内者が聞く。

『イーエ…何處がよいの、晝飯には。』

『大黒屋がよろしうムります。此處を曲りやはると直ぐ三階がムります。』

と云ふ。案内と別れる。

大黒屋に來る。成程三階は三階だが之れも法隆寺式と見る可き建築で、至つて妙な構造である。三階の一番中の八疊に案内する。二十前後な蝶々髷に結ふた姉さんが、お茶を持つて上つて晝飯の注文をする。

私は三階の欄に倚つて秋晴の郷景色を眺めつゝあつたが嫁入が通るので緣に出て見る。掛稻の一間道を嫁入の行列が練る。嫁の籠は舊式の殿樣籠で、かゝげられた籠の垂れから嫁樣の赤い衣裳の裾が出て居る。

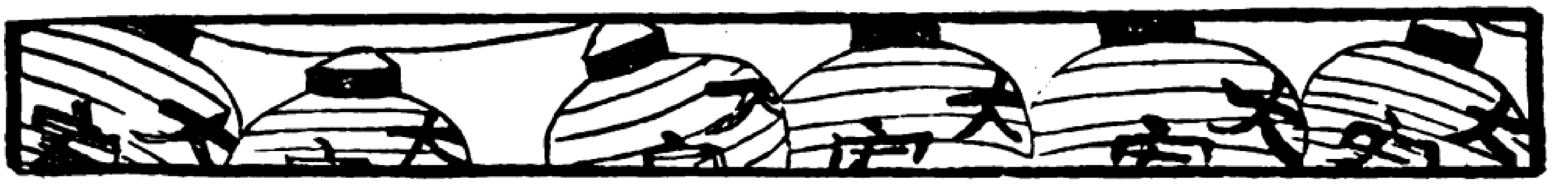
籠かきは反りの打つた菅笠を着て白と黑のだんだら染めの襷掛けた奴衲を着けて、四人共揃つて居る。長持には下り藤の桐油をかけて籠かきと同じ扮裝の男がさし合に擔ぐ其後から鋏函と兩掛が行く。紋付袴の連中がゾロ〳〵と尾行して居る。今行列は掛稻の隅から表はれて靜々と練る處である。向ふから女を乘せた人力車が轅棒を擡つた儘、道草の中に除けて居る。梨子の木棚の寂れたのが打越しに此行列の行手をかくす――遙かに淺黄の大空の下に高圓山三笠山などが黒く彩られて奈良の遠景も見える。近くは種々な草葺屋根が屯ろして掛稻のジヨロの袖から綴りに見えて居る。是等の凡てを背景に此嫁入の行列が練る處は、廣重の道中畫を連想せしめる。

下婢が膳を持つて來る。



法隆寺五重塔





『奥樣、今の嫁入な……あれ私しの家の三軒目の娘さんだつすぜ。
『さうかれ、何處へ行つたのかいっ』
『丹波市へ行きやはるのだす、あれもな他に言ひかはした男があつたのだすがな可憐想に親たちが一緒にしやはりまへんのでおます。』
『どうして。』
と私は顏をしかめてきく。
『夫れがな、あの人と夫婦に成れまへんのだすやろがな。……男はん氣が狂ひましたんだす……そしてな暗峠つて云ふのおますやろ——そこでみじめな死に樣しやはりましたのだす。』
『夫れで娘さんはどうしたの。』
『夫れが丁度今年の田植時分だしたやろ……夫れから此間私し梨子摘みにあの人と一緒に行きましたんや、梨子畑でな、あの人泣きやはりましたのだすえ。』
『何と云ふて泣いたの。』
『作ちやん私し、お嫁に行くが、もう之でお前さんの顏見る事もないやろつてな……袖を握つて泣きやはるのだす……そしたらな……私しも淚が出ますやろ、二人で梨子籠の影で泣きましたんや。』
『可憐想になぜそんな處へお嫁に行くんです。』
『夫れがあの人義理の親御だすよつてな……あの人死なはりますのでおますやろ。』
かういふ話を聞きつゝ食事了つた、下へ降りて勘定を濟して大黒屋を出る、大黒屋の神さんと簡袖を着た男と、蝶々髷の下婢とが門口迄送つて出る、『奥さん有難う。』
と一齊に禮を云ふ。大黒屋を出て之の一間道に來るともう例の嫁行列は何れの稻村にか隱れて見えぬ、振顧る法隆寺の村は午過ぎのまだるい日脚が照り渡つて、何處かで鷄が二聲三聲續けて鳴いて居る。村外れの柹木の杪に秋風がさわぐ。

△疑ひあれば就て人に問ふべし
△事を爲すに明日を待つことなかれ
△意を失ひたる人に對ひて意を得たる事を談ずること勿れ
△意を得たる時に在りては常に意を失ひし事を想ふべし
△言を以て人を譏るは禍を取るの端緒なり、度量を以て人を容るゝは福を集むるの要術なり
△人至愚なりとも己を責むれば明かなり、人を責むるの心にて己を責むれば過ち寡なかるべし





其日〳〵の精神修養

△一事々々に注意する習慣

人間は學問が出來るばかりではいけませんその上に人物がよくて何處かしつかりした處がなくてはなりません。それには先づ第一に書物を讀んで、廣く昔からの立派な人物の思想を知ることが大切であります。さうすれば自分の考も廣くなり、物の道理がよく分るやうになり、從つて精神もだん〳〵と落着いて參ります。それから或る事柄に向つたならば其の事に專心して、外の事には心を奪はれないといふ事が肝腎であります。例へば人と話をする時には、その以外の物事を考へてはなりません。また書物を讀む時にも、十分それに心を打ち入れて、途中でふいと他の事を思ふ様ではなりません。或は器物を扱ふ時などでも、よく注意をして扱ひ、決して他の事を考へながらしてはなりません。心が其處に集つて居ないと自然扱ひが粗末になり、つひ過ちもする譯です。此のやうにして一事々々を皆な着實にやつて其の事にのみ精神を注ぐやうにすると、精神は次第にしつかりして來ます。

△文字に現はるゝ性格

文字を書くにも十分注意しなければなりません。これは其の人の性質を現はすと共に、之を愼んで書くといふ事がまた精神修養の一つになります。如何に拙に書いてあつても、眞面目に書いてある文字は、やはり其の筆者の眞面目なことを示し、ぞんざいに書いてある文字は、やはり其の筆者のぞんざいなことを示します。そして文字を書くにも注意をしないといふやうな者は、何をしてもぞんざい



で、實際將來の見込みがありませんから、男女に限らず文字は眞面目に書くことが大切であります。昔から、書は體を表はすといひ、墨色家は文字だけを見て其の人が如何なる發達を爲すかといふ事を判斷し、商人が店員を採用する際に、文字によつて人物を選ぶなどは、皆な夫れ〴〵一理あることです。

△齷齪として仕事の出來ぬ人

人によつては、いつも何彼と齷齪として、一向仕事の手に着かぬ人があるが、あれは非常によくないことです。かう云ふ人は、時々目を冥つて自分は何を爲したか、自分の爲した事が善いか惡いかを考へて見る習慣をつけるのが宜しいでせう。之れは精神修養の上に一方ならぬ効果があります。もし禪に趣味のある人ならば、坐禪なども宜しいでせう。かくして平生事をする場合に、人が見て居ないから惡い事をしてもよいといふ樣な考を起さず、一事々々公明正大にするやうに心がければ、自然氣分が大きくなります。

△少し讀書して多く悟る讀み方

何事によらず樂な仕事をしやうといふのが人情であります。同じく机に向つて書物を讀むにしても、むづかしい物よりも樂な物を餘計に讀みます。英語を讀むよりも小說を讀んだ方が樂だから小說をよみます。字引と首つ引するのはいやだから、つひ懷手して讀めるやうな書物を讀みちらします。けれども之れがそも〳〵誤りで、此の惡るいくせを直さなければ、人は到底進むことは出來ません。書物は何も澤山讀まねばならぬ譯ではありません。難かしい書物を少しづゝ讀んで居ればいいのです。この樣にして讀んで行けば、書物は世間に如何に澤山あつても大概程度がある



から、或る程度までゆくと、讀まないでも意味の解るものが澤山出て來ます。また難かしい書物も、少しの部分を長くかゝつて十分に讀んで行くのですから、少しも困難を感じません。

△交際上の習慣

交際上の習慣も一應心得て置く必要があります。交際に慣れた人は人から好く言はれるし、慣れない人は多くの場合に好く言はれません。また心は惡くなくても交際術がまづいと惡く思はれるといふやうな譯ですから、害のない限りは、成るべく習慣に從ふ方がよろしいでせう。まづ人を訪問する時などは先方の都合のよい時を考へて行くべきです。そして忙はしい人に何か用事があつて訪ねたやうな場合には其れが濟んだら無駄口を利かずに速かに歸へる方がよろしいのです。また非常に忙はしい人は、むやみに人に訪問せられては自分の仕事が出來ないから、客に接する日を極めたり時間をきめたりしますが、さういふ人を訪ねるには、やはり其の日なり時なりに於てすべきです。自分は何時人が訪ねて來ても差支ないから人もさうだらうと思ふのは間違であります。

△世話になる人への心附

贈答に就ては、いろ〳〵理窟をいふ人があつて、考へて見ると一寸馬鹿げたことの樣だけれども、之れも交際上の習慣として行ふ方がよろしいと思ひます。ことに中元の贈答とか、歳暮の贈答、暑中見舞などいふことは普通に行はれて居ることだから、平生世話になつて居る人のところへは、それ〳〵此の禮を盡すのがよろしいでせう。先方が心ある人ならば、これをしないからとて別に何とも思は



ぬでせうが、中には感情を害する人がないとも限らぬし、また此の禮を盡すことは大に好い感情をつくるものですから、どの道此の禮を盡した方がよいやうです。義理を知らぬといふ言葉はよく聞くことで、此の禮を盡さぬ場合にもやはり此の言葉が用ゐられるから、どうか之を盡して義理を知つてゐる人と言はれたいものであります。其の贈答品には普通は必ず水引をかけて熨斗を附けるが、熨斗は腥き物といふ意味だから、佛事には之を用ゐません。

△自然に出來る趣味の生活

人間の生活には種々な方面がありますが、其の種々な方面に於て凡て自分の勢力を利用する癖を附ける事がまた肝腎です。例へば、私共は家の内に居て、書齋に坐つて居ることもあらうし、縁側を歩くこともありませう。或は庭を歩くこともあらうし、樹を見ることもありませう。そして庭の樹を見るならば其の樹が整頓して居ることを好むでせう。さう思つたら自分で枯葉は取り、枝は直してやりして、之を整頓する癖をつけるのです。また或は垣根の破れた所は塞いでやるとか、棒の倒れて居るものは起してやるとかするのですさうすればそれだけ自分の努力の影がそこに映ります。又縁側にしても平生自分の歩く處だから綺麗なことを望むのは人情です。そこで又自分で其處を掃除するやうに心がけるのです。かうして居れば、永い間には家の中に著しく自分の影が遺されて、其處に非常に趣味をもつて來ます。そしてこれは家の内ばかりでなく、此の樣にして働くと、凡ての方面に渉つて趣味がわいて來ます。園藝の趣味もつき活動の趣味も出來るといふ風で、勢力があらゆる方面に働らきます。そしてこれが



やがて人にのみ頼らない獨立の氣風を養ひます。

△久しく堪へ忍ぶ實例

また人間は成るべく久しく堪へることが肝腎で、之れをしなければ何事も出來ません。子供が綱引をするときに、氣の早い子供は負けたと思ふと直に手を放して了ふけれども、忍耐力の強い者は負けても引張つて居ります。引摺られながらも引張つて居ります。此の位にすると或は仕舞に成功することもあります。これと同じことで、人間は自分の出來るだけの事をなして成るべく久しく堪へるといふ事が必要であります。よく氣が長いといふ事をいふが、唯だ其場々々のみでなく、三年五年、或はもつと十年も二十年も繼續して同じ目的に向つて進むやうに力めなければなりません。隨分世の中には其の場だけの忍耐はする人があるけれども、永く忍耐する人は少なうございます。燒火箸を握つて熱いともいはずに我慢する者はあつても、一つの書物もちと大冊になると初めから仕舞まで忍耐して讀み通す者は容易にありません。これも一つは習慣にもよるから、どうかして直さねばなりません。

△人情に通ぜざる人の失敗

私共のすることはやはり他の人を相手にするものですから、他の人の人情はどんな風のものであるかといふ事を十分知らなければなりません。人情を知るといふのは世の中の人の苦しむ所、又は心に蟠まりのある所、心の直き所は何處にあるかといふことを知りぬくことです。これは婦人に殊に大切でありますけれども深窓の下に成長して人と交際したことのない者は、之を知ることは出來ません。



これと同じく、學窓にのみ居る者にはやはり世間の人の實際の人情が分りません。學窓からのぞいた世間は、極めて純粋なものだけれども、實際はひどく情實のつき纏うた世間です。無垢の學生ばかりを相手にして居た敎育家などが、一朝方針をかへて實業界などにはいると、其の相手にする人は何れも利慾の拔目のないものばかりで、非常な違ひのあるのに驚くといふことはよく聞く話です。また學校を卒業したばかりの人が何か纏つた話をしても、其の話は專門の學者には分るけれども一般の人には少しも分りません。これは普通人の人情はどうであるか、智識の程度がどれほどといふことを知らないで話をするからです。一家の生活に就て言つてもやはり之れと同じことですから、細かに其の家の各方面の仕事をして、各方面の人情に通じて置かねばなりません。人間は何ういふ處で苦しい思ひをして居るものか、如何なる處で樂をして居るものか、其等のことが細かに分らなければ人を使ふことも出來ないし、又人に當てはまるやうな善い事をいふ事も出來ませぬ。

△病氣に罹るも亦一德

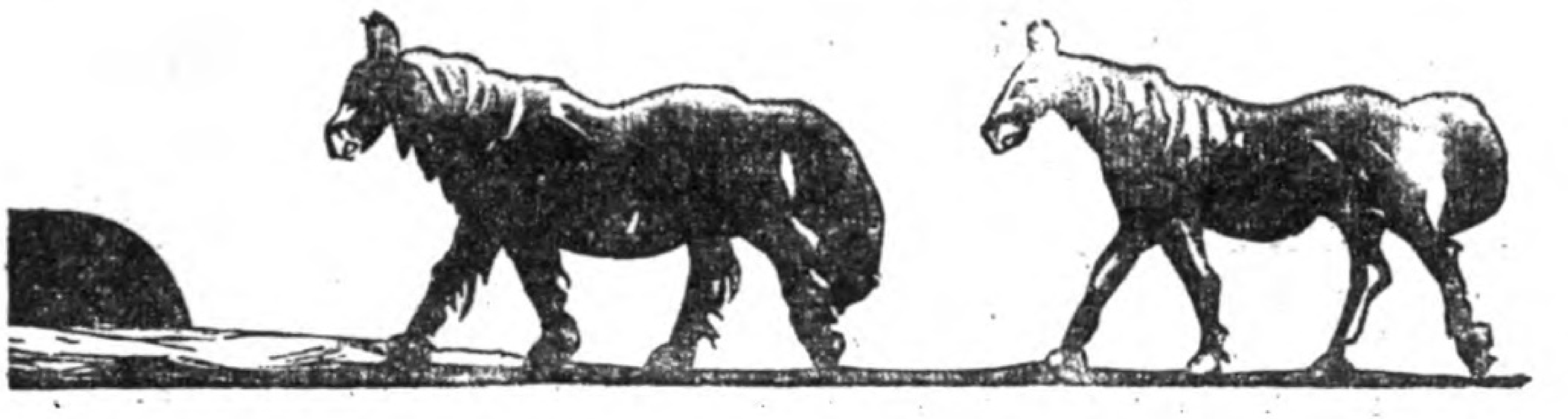
人は折々病氣にかゝるが、これも修養の一つの好い機會であります。今こゝに一人の學生が病氣になつたとしますと、他から見ると其の人は實に不幸であると思ふし、自身も然う感じて居ります。他の者は皆な學校に通つて勉强をし、或は運動會や遠足に行つたりして非常に樂しくして居るのに、其の學生のみは病院に這入つて藥餌に親しんで居るのだから、實に不幸なわけですが、此の境遇もまた利用の途があります。即ち心の持ちやうでは精神全體の改造が出來るのです。人間はいつでも同じ境遇に居つて同じ事に追はれて居るのみでは、進步も發展もありません。それが少しく境遇をかへて反省の餘暇があるやうになると、外の方面の事に氣の着くことがあります。之れが病氣になつた時の効能であります。癇癖の強い婦人が、永い間病院に這入つて居て、つく〲と自分の過を省みて、



是迄良人に對し父母に對して行ふた處置が宜しくなかつたことを思ふて、すつかり樣子が變るといふやうな例はよくあります。

△食事に招かれた時の心得

食事に招かれて膳に向つた時は、本膳と二の膳は一緒に箸をつけますが、たべる順序は第一に飯、次に汁、平、それから二の汁、壺といふ風にいたします。箸は蓋を取つて後に取ります。蓋の取り方は、すべて左の方にあるものは、左の手にてとり、右の手をそへて取り直し、仰向けて左の方に置き、右の方にあるものは、右の手にてとり、左の手をそへて取り直し、仰向けて右の方に置きます。吸物をたべるには、先づ蓋を取り、右の手に箸をとり、右の手に椀をとりあげて、左の手に持ち、右の手を添へ、まづ汁を吸ひ、次に實を食し、又汁を吸つて置きますが、之を置く度に蓋をするには及びません。飯はやはり右の手に箸を持ち、左の手に椀をとり、拇指を少しく椀の縁にかけ、椀の糸底を中指と藥指とにて割りて持ち、常のやうに食します。汁のたべ方は吸物とかはりありません。右のやうにして、まづ飯、次に汁を食し、また重ねて飯と汁、次に平、また飯と汁、今度は鱠、また飯と汁、今度は二の汁、また飯と汁、今度は壺、また飯と汁、今度は猪口を食べ、飯と汁、燒物を食べ、これで一巡になるから、あとは飯をたべては何なりと好みの菜を食べまた飯をたべては何でも好みの菜を食べるのです。但し、一つの菜を食べて、次にまた他の菜をたべる間には是非とも一旦飯に歸らねばならぬので、飯を間に挿まずに汁から菜にうつり、菜から菜にうつるやうなことは不作法であります、尚ほ箸を下に置いて休めるのは、飯または汁の代りを出した間ばかりです。之を休める時は、箸の先を少し左の縁にかけて置きます。たゞし食事の終つた時は、箸の先を少し左の縁にかけて置きます。たゞし食事の終つた時は、箸の先を少しも縁にかけず、全く膳の中に入れて置きます。そして食べ終つた時には、蓋は取つた時とは反對に、最後に取つた蓋より順々に蓋をして返します。



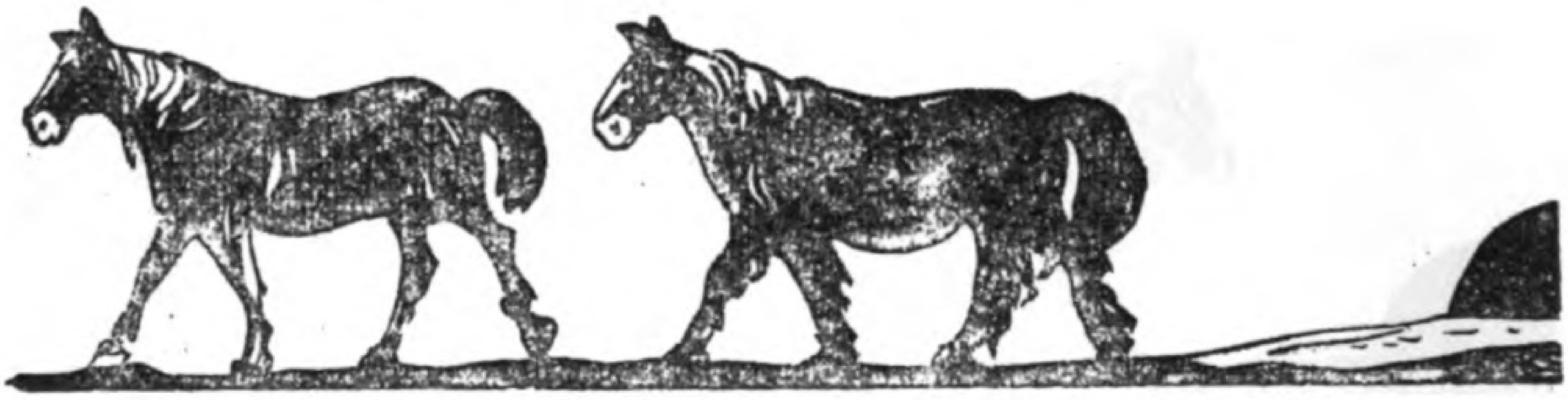
日用帳

▲月給生活と家計

月給で生活してゐる人が、其の月の月給をその月一ぱいに使つて了ふといふ事は、甚だ心細いやり方で、不時の出來事のあつた時に、非常に困難をするから、何うかして前月の月給を其の月の生活費となし、其の月の月給を來月分に繰り越すやうにしたいものです。そして其の間に一日の費用の中から一錢でも五厘でも殘してゆくやうに心掛けたら、何時どんな事が起つても滅多に苦しむことはなく、年末が來ようが何が來ようが、平常と少しも異はぬ心持で居られます。急に此の樣にするのは困難でせうが、一年間漸次貯蓄する事に心がければ、其の次の年には、前月分の收入を其月の生活費に當てる樣にする事は敢てむづかしい事ではありません。かく家計の基礎ができてこそ、精神的にも物質的にも餘裕が出來て、樂しい家庭を作ることが出來るのです主人はほんの月給の取次者で、妻君の手には月末の拂ひをすませば後は手元に十日も暮せるか暮せない程しか殘らず、それもある内はばた〳〵買ひをして、五日目位にはもう苦しい〳〵を始めるといふやうな家が隨分あるやうですが、こんなに火の車が廻はつて居ては、とても家庭の平和は望まれません。

▲支出は一切現金が得策

家の經費を節約する爲に一番大切な事は買物を通帳買ひにせぬこと、即ち現金で買ふことです。通帳であると、現金を渡さぬから、一二錢位高い物でも、つひ買つて了

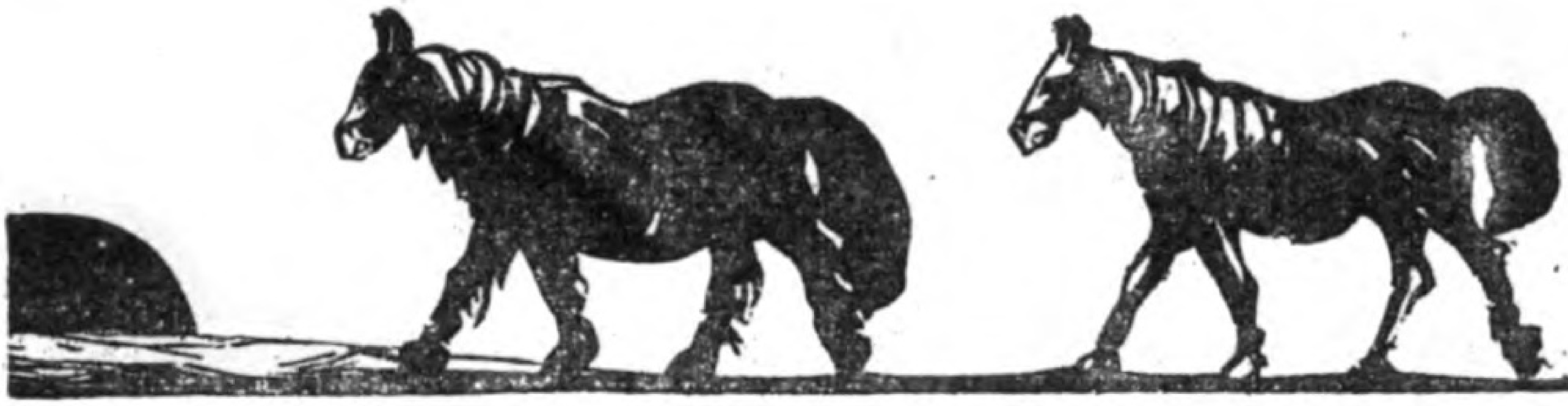


ふやうになります。こゝは考へねばならぬ所で、一寸の心の持ちやうで斯うも違ふものかと驚く程の相違があります。殊にそれが呉服屋などの品であると、一寸〳〵が積つて大變な嵩になります。電車の回數券などもよしあしで、月末に勘定して見たら、其の都度買つた方が却つて經濟であつたといふ人が澤山あります。丁度通帳と同じ樣で、現金だと止めるものを、金が目に見えない切符だから、つひ乘つて了ひます。すべての事が斯うですから、支出は一切現金にする方が得策です。

▲手紙の書き方

手紙は、忌中の人に送る文には、始めに時候見舞などを並べ立てないで、直ちに、「何々樣御逝去の由、御愁傷の御事とお察し申上候云々」と書き出すのが普通です。死んだ者のある家では愁傷の情に堪へないで、心が一ぱいになつて居ますから、餘計なことは言はないで直ちにこれを弔ふのが人情であります。また謹賀の文、例へば出産、卒業、榮轉などを祝する文には、時候見舞も入れて後に、「扨て云々」と用事を述べるのが普通です。尤も新年を祝する文には、直ちに「改曆の御慶目出度申納候云云」といふやうに書くべきであります。そして凡て手紙の文字は、丁寧に始めから終りまで同樣に書かねばなりません。始めは丁寧で終りの雜なのは失禮です。ことに注意すべきは墨付きで、一度筆を染めて二三行書き、更に筆を染めして、其の濃い部分と淡い部分とが美しく調和するやうに出來なければなりません。

▲手紙の宛名と内容



手紙の宛名と自分の名の書き方は、今日は餘程くづれて居るやうですが、自分の先生に送るには、『何々先生』と姓だけ書いて名は書きません。ことに、假りに吉田といふ人とすれば、「吉田先生」と書くのが一層丁寧なのです。そして自分の方は、單だ「はな」とか、或は「井上はな」といふ風に書きます。それを自分の方を「井上」と姓だけ書き、先生の方を「吉田光子先生」と名までも書くのは、ごく失禮な書き方です。また先生に向つて「吉田樣」と書くのはよくありません。必ず「吉田先生」と書くべきであります。友達の間では、互に姓と名を書いて構ひません。親兄弟又は親しい親戚に對しては姓は書きません。これは親しむ意味からです。其の宛名は、「父上樣」、「母上樣」、「姉上樣」、「兄上樣」、「伯父上樣」などゝ書きます。弟や妹に對しては名を書きます。

其の手紙の内容は、書く時に敬意を表して自分の情が十分先方の人にうつる樣に勉めねばなりません。

▲障子の貼り方

障子を貼る糊は、生麩を糸を引くまでよく煮詰めたものに限ります。糸を引かない中に火から下した糊は、つまり生煮のものですから、利きが悪うございます。その出來上つた糊を布巾なり手拭なりで裏漉して、いゝ加減に水を加へて用ゐれば、極く伸し心地がよくて、張つた後に紙が引きつれたり、山のふくらみなどが出來ませんそれから紙を張る前に、紙に水を入れることを怠つてはなりません。これは刷毛で極く僅かばかりの水を紙の繼目をさけて上下一刷毛づゝ刷くのです。かうして張り上げると、少しの小皺もよらず、綺麗に一杯に張られます張つてから霧を吹くよりも此の方が紙が自由に扱はれて結果がよいやうです。其の貼り工合は、最初紙を貼る時に紙を半端に使はないことが肝腎です。かうすれば終り迄紙の繼目が重ならずに互ひ違ひになり、見たところ綺麗です。それから繼目の骨へかゝるのも避ければなりま



せん。また貼る時には、障子は洗つたり運んだりしてゐる中によく骨組の狂ふものですから、それをよく調べて行儀正しく斜に立掛けて、狂ひのないやうにして貼るやうに注意せねばなりません。

▲婦人帶の仕立方

婦人の帶の幅は、普通は八寸五分ですが、四十歳以上の者は八寸に致します。之を仕立てるには非常にむづかしいもので、色々呼吸があります。之を仕立て直して廣い帶を狹くする時には、餘つた所を縫ひ込まないで切り捨てた方が仕立てゝ體裁がよくなります。仕立方は角が一番困難です。之を工合よくするには、折目を四角につけ、角の尖端から五分位の處で斜かけに外へ一分位づゝ兩方から縫つて置いて、之を折る時に折目の通りになれば、角がきちんと工合よく出來ます。つまり角のさきで一分位縫ひに餘裕を持たして置くのです。また其の折目は八寸五分に仕立てる時ならば、八寸六分位の處へヘラを附けて置きます。それから心は年とつた者には成るべく薄いのが似合ひます。そして八寸六分にヘラを打つものならば、心を八寸五分位にして置けば、恰度よく出來上ります。尤も唐繻子などは、仕立つた上で多少伸びるから、ヘラと折目とを同じにして置きます。

▲身體つきと衣類の仕立方

肥えてゐる身體を着物の仕立方によつて瘦せてゐるやうに見せるには、肩付の所を普通よりも三分位後へ繰り越し、袖幅を普通八寸五分のものとすれば八寸七分か八分位に致します。さうすると、一尺六寸五分の行は肩で二三分つまり、袖幅は普通よりも廣くなります。尚ほそれに襟幅を普通三寸のものならば三寸二分位にいたします。かうして仕立てたものを脫衣紋に着れば、肥えてゐる者も幾らか瘦せて見えます。尤も肩付の處の後へ繰り越す寸法は、地質の硬い袷物とか羽織などで地質の硬いものならば、先づ二分位がいゝ加減です。縮緬などの軟いものならば一分五厘位がよろしいやうです。それから瘦せてゐるが着物の仕立方で肥えてゐるやうに見せるのは一寸むづかしいことで、これは着方によつて工夫する外仕方がありません。たゞ瘦せた者が着物をきると乳下のだきの所に皺が出來て見苦しいから、これの出來ないやうな注意がいります。それには、襟肩が普通二寸三分あるものならば二寸二分位になし、前幅を五寸三分より狹くならぬやうにして脇縫ひを三分縫ひ込みます。



冬のよとぎ

△人の本性は善也

むかし或家に盗宵のほどより忍び入りて物蔭に隱れてうかゞひ居たりけるに。夜ふけて家内の者みな寝靜まりて後、その家の娘とおぼしき年ころ二十歳ばかりなるがひとりおきゐて。髪ゆひ、化粧などするあり。盗いぶかしくおもひてや丑滿どきにもなりけるに、こは何人をか待ちわぶる者ならんと思ふうち、机の上より硯箱をとり出だして。こまぐと書をしたゝむる様なりしが、やがて了りて、後ち梁によぢ上り繩をうちかけて。我れと我が手もて首を縊りて、あはや前に飛ばんとなしたり。盗大いに驚ろき、おぼえず聲をあげて、やあ待ちたまへ、はやまり給ふな、これ人々おき給へといひつゝ、娘を抱きとゞめたり。家内の者其物音に打驚きて、皆々起き出て、不審の眼をこすりつゝ其ゆゑよしをとひければ、娘は只打なきてありし次第を物語るさて其とゞめたるは、如何なる人ぞと問へば案に相違の盗人なり。聞かれて盗人も面伏せながら斯くくなりとあからさまに其よしを述べければ、家人も大いに感心しその日頃は惡しけれど今の志は殊勝なりとて若干の金をとらせてかへしたりとなり。又ある處ろに人の妻をぬすみてかよひける白者ありけり。ある時。其妻の許に來り押入の中に忍び居たるに、不貞なる妻は、靑赤龍子を膾に調して、酒をあたゝめてこれを本夫にすゝめたり。神ならぬ本夫は、知るよしなければ、箸とりてそを喰はんとしけり。事のよしを窺ひゐたる密夫覺えず押入の中よりはしり出で、やよ待ちたまへ、其膾には毒あり、かまへて食ひ給ふなと、おしとゞめければ。本夫はおどろきて、そは何故ぞとまづ其人の忍び居た



る事より先に問ひけるに、詮方なく、我身の不行跡をあからさまに打語りつ、不貞の妻の心あまりに恐ろしきに魂消えて斯くは走り出でたるなりとかたるよつて其妻を追ひ出だし。密夫は、命の親なりと悦びて後ち兄弟の約をなせしとなり。

△寡慾却つて徳を稟く

むかし芝三島町に、菓子をあきなふ男ありけり。此者、極めて寡慾にして日ごとに買ふ品の價をあらそう事なく、賣る人のいふがまゝにまかせてもとめければ、家内の者いぶかりて、商人はいづれも同じ事にて、そのあたひの高下を爭ふならひなるに、いかなればかくいふがまゝにはしたまふぞといふをきゝて、否、かれらは日ごとに重きを荷ひて朝はとく出で、ゆふべには遲く歸ることに、暑寒の折からは其くるしみいふべくもあらじ、おのれらは年中店に居て風雨のうれへもなく、家業をいとなむは有りがたき事ならずや、たとひ人にもの施す事はなしがたくとも、せめてはその價をあらそはずしてもとめなば、すこしはかれらがたすけともならんかといひける、後には此の男の情ある事をしりて、賣る者も又價をひきく〵して持ち來りしとなん、この男春の頃ひ、遊山に出でんと思へど、われひとりにては樂みうすしとて櫻花の咲きみだれたるをいく枝となく買ひ入れてこれを家の内、こゝかしこに夥しくさしかざりて、よき酒さかなあまた調じさせて、妻子をはじめ、召しつかひどもにうちまじりつゝたのしみけりとなん。

ひえの根に初雪ふれり今よりは
小野のすみがまたき増るらん　（京樹）

△愛なき良人の妻	壹等金五拾圓	葉子
△冷たき床	貳等金參拾圓	三宅てふ
△女繪師	參等金貳拾圓	松平鏡子
△鳶の眼と馬の背	四等金拾圓	司馬蘭子
△順逆三人妻	四等金拾圓	山田小枝子
△菊の宴	四等金拾圓	紅梅
△草籠	四等金拾圓	秋雨女
△闇を行く人	四等金拾圓	散紅葉

△半世の幸不幸（松蟲）△死刑女囚に花を贈る（遊龜江）△姉と妹（若紫）△弱き心よ（夕かげ草）△偽らぬ少女の心（瑞枝）△結婚難（松かせ）△樂しき家庭（芳井若菜）△人生の表裏（野菊）以上五等

本號未掲載の分は次號發表


絶代の歌人
不遇の英主
後鳥羽上皇
御事蹟
物集梧水

金枝玉葉の御身を以て、波風さびしき隱岐島の露と消え給ひし後鳥羽院の御生涯こそ、實に限りも知らず哀史とは云ふべけれ。藤衣の袂を繙きて『延應元年といふ二月二十二日、六十路にて崩れさせたまひぬ。今一度都へ歸らむの御志深かりしかど、終に空しく病み給ひにしこと、甚とかたじけなく、哀れに情なき世も、今更心憂し。近き山にて例の作法になし奉るも、無下に人少なる心細き御有様、いと哀れになむ。御骨をば、能茂と云ひし北面の、入道して御供にさぶらひしぞ、頸に掛け奉りて都へ上りける。』の條に至れば、誰れか涙、滂沱たらざらむ。秋、漸く深からむとして壁に蟲聲を聞く時、ひそかに千載の昔を偲びまゐらせ、孤憤に堪へず、長き永夜を燈火掲げつくして、この篇を艸す。

一　水無瀨殿

後鳥羽院御位を下させ給ひぬる後は、風雅の御志いよゝ茂く、時折、鳥羽殿、白河殿などへ御幸ありては、詩歌管絃の御催しありしも、尙ほ水無瀨の離宮をぞ、此上なう好ませ給ひし。

春の花、秋の紅葉、其は言ふも更なり。夏は御苑の瀑布、青葉の蔭に落ちて、末流は水無瀨の川へ流れゆくさま、甚としも心淸々し。冬は白妙の水無瀨山、面前に聳えて、寒月高く差かゝりたる風情、神々しさは此に盡きなむとぞおぼゆる。

然れば元久の頃なりけむ、離宮の春を愛で給ひて、

見渡せば山本かすむ水無瀨川
夕べは秋となに思ひけむ

と詠じ給ひぬるも、實に道理なり。爰に承久二年、秋暮れなむとする頃、上皇、水無瀨の離宮へ御幸ありて、蹴鞠の御遊び一刻催されたる後、夕暮れ、燈火の點せるほどに、御殿へ入り給ひぬれば、早や何時しかと御宴の設けありて、公卿殿上人など、連りに興をぞ扶けまゐらせける。

更稍々深くれば、御宴も酣になりぬ。上皇、渡殿へ

御出でありて、少時夜風に吹かれ居たまひければ、軈て燈火の灯影に背むきて、此方へ、しと〳〵と來る女の氣勢ありけり。

『誰ぞや。』

と、稍々聲高に問はせ給へば、

『妾にて侍り。龜菊にてこそ。』

と、微かなる聲にて御應答をぞ仕ふまつる。上皇、欄干に倚らせられながら、

『なぞ來りつるぞ。獨り和歌すみ出でむと思ひゐたりしに。』

と微笑みつゝ宣へば、龜菊拜伏して、

『御獨りにて渡らせ給へるまゝ、心元なう思ほえ侍りて、御跡より慕ひまつりてはべり。御和歌の御妨げ、あはれ免させ給はれかし。』

と憎からず微笑みて去なむとぞしければ、上皇、一入興あることに思召されてぞ、

『な往きそ。其許も少時此處に居よ。』

と宣へば、龜菊其儘立ちも去らず、居も安からず、思ひ迷ひてゐたりけるに、上皇、不圖案じ出で給ひぬる御氣色して、

『然ればよ。豫て其許が申出でける長江、倉橋の莊園のこと、直ちに關東へ宣旨を下しぬれば、近き日に、必ず其返事來りぬべし。鎌倉にても、やはか其儘に捨て置くべき。』

と宣へば、龜菊俯向けるまゝにて、

『斯程まで思召されけることこそ、實に有難き極みなれ。』

と、ひそかに涙に咽びて悦びける。

軈て殿上人ども、御迎へに參りたれば、上皇も御氣色甚とゞ麗はしう玉座へ歸りたまひぬ。

斯くて此夜は過ぎぬ。あはれ上皇の宣旨も、龜菊が願ひも、終に仇となりにき。數日の後、鎌倉執權北條右京太夫義時が御答へまつりしを見れば——白拍子龜菊殿の莊園長江、倉橋二箇所の地頭職改易のことは、容易の義に候はず。故右大將頼朝公の御時諸將の勳功に依つて任じたる地頭職をば、白拍子龜菊殿と些かばかりの爭ひの爲めに改易する事、天下を紊す基にて候

ふ──と、宣旨に從ひ兼ぬる旨、細々と認められたり。

上皇御覽ずるまゝに、烈火の如く憤り給ひぬ。『義時何ものぞ。陪臣の身にて猥りに勅命に背かむとはする。』と、御足をそばだて給ひしも、實に道理なり。



二　御擧兵

抑や後鳥羽上皇の御位に即かせ給ひし時は、平家の一門未だ西海に漂流ひし頃なり。其後、夙に御位を下りさせ給ひて、熟々と世の推移る狀を御覽ぜらるゝに鎌倉幕府の勢力こそ益々盛んになりゆけ、朝廷の稜威は宛ら火の消えなむとするが如かり世をば憂ひ給ふ後鳥羽上皇の、爭で忍び給はるべき。

去年の正月、鶴岡の八幡宮にて右大臣實朝の討たれぬれば、源家の系統こゝに絶えて、世は王政に復りぬべしと思ひきや、尼將軍平政子簾中に政を聽き、右京太夫義時いと更に益々權柄を握

りぬ。上皇、爭で憤らせ給はざるべき。

上皇、また熊野詣の砌、信濃の武士仁科盛遠父子を擧げて、西面の武士としたまひぬ。義時これを聞いて怒り、盛遠の領地をば沒收してけり。上皇、宣旨を下して領地を返さむことを諭し給ひぬれども、義時更にも肯かず。上皇、爭で憤らせ給はざるべき。

今や又關東の地頭職、遂に白拍子龜菊の莊園を妨げぬ。上皇、宣旨を下して、地頭職改易のことを仰せらるれど、義時言葉を左右にして承らず。上皇、爭で憤らせ給はざるべき。

斯くて承久三年とはなりぬ。初春の頃より都の中何となく穩かならざりしが、四月の頃に至りて、順德天皇俄かに御位を下りさせ給ひぬ。此は父君後鳥羽上皇と共に關東征伐の御用意のほどとぞ聞えし。

機や愈よ熟しけむ、翌る五月の十五日といふに、上皇、高陽院殿へ御幸ありければ、警固の武士一千七百餘騎、皆な犇々と嚴めしう武裝ひて、諸所の御門を固めぬ。

少時ありて、土御門、順德の兩院を初めとし、六條、冷泉の宮々、急ぎ御車にて渡らせらるゝなど、世の中直だに騷動めきたり。

素破や世の中亂れそめぬと、都の民ども、上を下へと周章て惑ふほどに、高辻京極の方に當りて、一道の火焔、天に燃えあがりぬ。

「守護職の館に火のかゝりたるぞや。」

「伊賀判官殿、最早討死の他あらむずらむ。」

「官兵を引受けて戰へるこそ、弓矢執る身の冥加にも盡きはてぬらめ。」

「あな淺猿し。あな淺猿し。」

など口々に罵りあひながら、人々東西に逃まどふ。折から南風頻りに吹ひて、火の粉は姉小路、東洞院わたりまで亂れ飛ぶ。

夕暮に及びて、火の手は治まりし頃、三浦判官胤義、山田次郎重忠等、八百餘騎の官兵を率ゐて、徐々と高陽院殿に凱旋したり。先づは伊賀判官光季を誅しぬるこそ、關東征伐の先幸好しと、皆な手を拍ちて喜びあ

ひぬ。

後鳥羽上皇、數多の公卿衆に命せて、關東征伐の宣旨を認めしめ、密かに五畿七道の豪族を召し給ふ御用意のほど、をさ／＼怠りなし。關東へは、狎松丸も云へる、殊の外足早き飛脚に命せて、夜を日に次いで打立たせてけり。

この夜、高陽院殿には、關東調伏の御修法行はせられぬ。千僧の讀經、夜陰に徹して、甚と物凄じと云ふだに愚かにこそ。

三　尼　將　軍

數日を經て、都の騷擾關東に聞えぬれば、左京太夫義時大に驚き、心利きたる武士に命じて、狎松丸を搜さしめしに、軈て葛が谷に隱れゐたるをば引捕へて來りぬ

義時、狎松丸が持ちし宣旨を奪ひて讀むよりハタと睨みする、

「能うも斯くは御企てありしよな。」

と云ふより早く引破りて火桶の中へ投げ捨つれば、宣旨は敢へなくめら／＼と燃えたる。

其れより義時、直ちに尼將軍の御所へ參りて、悉く文武の臣下を招けば、時刻を移さず、大概其處へ集りぬ。

尼將軍平政子は御座の御簾をば半ば揭げて、

「是れ最後の言葉なれば、確かに聽けよかし。」

と、先づ言葉を切りて、扨て、

「此度、上皇には、胤義、重忠等の讒訴を御用ひありて、義時を討たむ其爲め、先づ伊賀判官を討たせ給ひぬ。是れ君をも世をも怨むべきにあらねど、唯だ我が身の果報薄きをば歎かるゝなり。世の人々、毎時も目出度き姐の例には我が身を引けども、世に尼ほど心をくだくものはあらじ。故殿に會ひ奉りし。初めより。父の訓戒、繼母の嫉妬、其れだに甚とゞ辛かりしに、次で六年が間の長き合戰、如何ばかり我れは心を苦めしか。故殿が漸う平家を亡ぼして世を治め給ひしかと思へば、軈て又大姬(息女)に先立たれぬ。其折も我れ

は現世を捨てむと思ひしに、故殿に戒められたれば、辛う少時思ひ止まりしに、程なく故殿も死亡り給ひ、次で兩人の子も、宛ら夢のやうに果敢なき最後を遂げられぬ。然れば今こそ尼が死ぬる時は來りぬれと思へば、如何なることをも苦しからざれど、三代將軍の御墓の、跡形なく失せむことこそ、尚ほ返す〲も口惜しく覺え侍れ。見給はずや。昔東國の殿原が平家に宮仕へせし時には、三年の在京に資力盡て、國へ下る時には皆な徒跣足にて歸りしに、故殿は其れを愍ませ給ひて三年を六月に縮め給ひしかば、皆な悅ぶこと限りなかりしぞや。斯かる御情深き御心をも忘れまゐらせて、京方の味方仕らむと思はゞ、先づ尼を殺て鎌倉中を燒き拂て後、京へは參り給へ。是れ最後の言葉なるぞ。



と泣く〳〵云へば、文武の臣下、皆な涙を流して、

「禽獸にてすら恩義は感じて候ふものを。我等唯だ一命を捨てゝ、力の及ばむ限り攻め戰ひ、敵陣を枕に討死仕らむ。」

と、拜伏してぞ答へぬる。尼將軍徐ら愁眉を開きて、其れより諸臣の者に、名馬、名刀などを頒ち與ふれば、臣下共愈よ勇み喜びて、必ず此の御恩のほど忘れ難しとぞ言ひける。

その日、入相告ぐる頃ほひ、義時が館にて軍評定は開かれたり。或は都へ押寄せむと云ひ、或は箱根足柄の天險に支へむと云ふなど、諸論甚と區々なりしが、大江廣元、一膝搖りて進み出で、

「此度の合戰、すでに朝敵の名を受け候ふ上からは、一日も止まりては、却つて變心者も出で來候ふべし。寧ろ運を天に任せて、一刻も早く都へ攻め上らむ方、然るべく候ふ。」

と道理せめて述ぶれば、義時直ちに同意してけり。

五月二十二日の昧爽、嫡子泰時由比が濱邊を出で立ち、鞭を揚げて西すれば、其れに從ふ兵士僅かに十八騎なり。空は暗澹、墨の如く曇りて、五月雨の絲、絕え間もなく降りしきる。

四　復奏

都にては、上皇を始めとし奉り、此度の事に與れる公卿、武士達、連りに關東の消息を待ちけるほどに、六月一日の夕暮れ、使者狎松丸は道々の體にて高陽院殿にぞ馳せ歸りける。

警固の武士ども、其由を奏しければ、直ちに御壺の內に召さる。

上皇には、一目御覽せらるゝより疾く、

「狎松、關東の狀態は如何に。」

と宣ふを、狎松丸直だに平伏して、物をも得言はず。按察使大納言光親卿進み出でゝ、

「狎松、なぞ物をは申さぬぞ。疲れたるか。關東の狀態は如何にぞ。」

と押疊みて問へども、更に返事せず。甲斐宰相中將

範茂甚とゞ心急きて、

『如何に、如何に、狎松、義時が首は、何者が討取りて參りつるぞ。』

と押迫りて問へば、中御門中納言宗行卿も傍らよりにじり出でゝ、

『鎌倉にては、然こそ狼狽しつらめ。戰はむの心ありや。』

と、畝ひかゝるやうに問へば、狎松丸徐ら苦しげに太息して、

『某、餘りに急ぎて參り候ふほどに、息切れて苦しく候ふ。敵は早や雲霞の如く攻め上り候ふ。東海、東山、北陸三道より攻め上る勢總て十九萬餘騎と聞え候ひつるが、某が密かに見まゐらする所に依れば、其勢百萬騎にも越えつべう候ふ。街道筋を馳せ歸り候ふに、一町と馬の足の切れたる所は候はず。』

と奏しければ、其處に並居し公卿衆、顏色を失ひて、

『此は抑も如何にしたる譯ぞ。』

『あな淺猿しき極みなれや。』

などゝ口々に云ひ罵るを、狎松丸更に言葉を次ぎて、

『某、鎌倉へ參りて、暫時葛西が谷に隱れ居り候ひしに、忽ち搜し出されて、宣旨は悉く燒き捨てられて候ふ。一旦は衲脱れ難う思はれ候ひしに、去ぬる二十七日の曉、辛う追ひ出されて參り候ふ。其時、義時の申し候ふ樣は、鎌倉將軍の後見を致し候へども、些かだに王事をば輕んじ申し候はぬに、卒爾に朝敵に罷りなり候ふこと、甚と口惜しく候ふ。然りながら、上皇には武勇を御好み、合戰を御嗜み遊ばされ候はゞ、海道の大將には舍弟時房、嫡子泰時を遣はし、十萬餘騎を見參に入れ候ふ。尙ほ仙道より五萬餘騎、北陸より四萬餘騎、次男朝時をも差遣はし候間、御心のまゝに御合戰させて御覽ぜらるべく候ふ。若し此勢にて御不足に御思召し候はゞ、更に義時、坂東の兵士を悉く牽ゐて馳せ參じ、三男重時に先陣仕らすべく候ふ。この旨委しく奏上仕れと申し候ふ。』

と、甚と打萎れて奏しければ、垂直着たる月卿雲客の輩は言ふも更なり、武具嚴めしう鎧ひたる武士まで、

俄かに顔色土の如く變りて、互ひに眼を見合はせ、少時は何の言葉も出でざりけり。

然れど一度乘出したる舟の、後へは引くべからず、上皇直ちに諸將を集めて軍評定を開かれ、三浦胤義、山田重忠等に命せて、尾張、美濃、越中にて關東勢を防がせ給ひぬるが、其勢僅かに一萬七千餘騎、敵軍の十が一にも及ばざりけり。

五　神　託

六月の初めつ方、五月雨連りに降りしきりて、大井、天龍などの河には、濁浪滔々として天に漲り、如何なる龍馬も得渡るべしとは思はれざりしに、直だに逸ぶる關東勢の、些かだにも懼るゝなく、何時しか早や押寄せ來りて、其處此處に官軍と矢合はせを初めぬ。

合戰は五日より八日に渡りぬ。諸道の官軍悉く潰えければ、敗兵、多くは手疵を負ひたるまゝ、五人、十人と、都へ迯げ歸り、今にも坂東の大軍押寄せんずるやうにぞ周章て騷ぎける。

上皇には、在るにも得堪へず思召され、切めては叡山の衆徒に賴らばやとて、九かの日西坂本なる梶井宮へ御幸し給ひぬ。

然れば叡山の座主も恭々しく梶井宮へ參りしに、上皇殊の外悅ばせられて、玉座に近う召され、

「此度の合戰、官兵悉く利を失ひしこと、口惜しとも口惜し。此上は山僧の力を賴みて、暫時賊軍を支へむとは思ふなるぞ。」

と宣へば、座主は頭を垂れて太息吐き、

「さればにて候ひぬ。昔は山門の威勢なか〳〵に強く主上をも守護し奉りしかど、今は衆徒等痛く衰へたるが上に、役に立ちぬべく覺ゆる者共は、既に宇治、勢多へ遣はして候へば、今は早や殘り少く、兎ても角ても玉體を守護し奉ることは覺束なく候ふ。」

と言上しければ、上皇痛く御力を落されて、

「然らば如何はすべき。都に遺れる兵士とて、早や幾千も無きに。」

と宣へば、座主暫時瞑目してありけるが、軈て、

「山門に御滯留あらせられては、却つて官軍の氣を挫く基にて侍るべし。些かばかり山僧の猛き輩を選りて御味方に添はせ奉り候ふ間、君には再び都へ御還幸ありて、宇治、勢多の守口を嚴しく御防ぎ遊ばさるゝ方然るべくと思はれ候ふ。五日十日とだに御防ぎある中には、諸國の武士ども追追馳せ參り候はむほどに、未だ必ずしも御力を落させ侍るまじうとぞ存じ候ふ」と答へ奉れば、上皇には唯だ默然として首を垂れて坐しましき。

その夜、上皇忍びやかに日吉神社へ詣でさせ給ひて大宮の御前に端坐し、終夜御念誦ありけり。



小夜更けて物の音なく、燈籠の灯さへ稍々消えがてになりし比ほひ、幼少き童子の伏したりけるが、俄かに跳えあがりて、上皇の御前に直走りに走り來り、神託をぞ宣りたる。

『忝くも斯く渡らせて訴へ給ひぬれば、聽き過し難う侍れど、一年、神輿振の時、情なくも防がせ給ひければ、衆徒ども神輿を捨てゝ走り、痛しく牛馬の蹄にかけられしこと、今に口惜し。されば縱ひ七社の神殿を黄金白金にて裝はむと宣ふとも、此度ばかりは御味方に得仕ふまつるまじ。』と甚とゞ荒らかに宣り終りて、息も絶え〴〵に其儘打

伏してぞ寢入りたる。
上皇には、言ひ知らず淺猿しき御心地して、霎時は茫然と坐しましゝが、軈て堪へ難き口惜しの涙、はらはらと御頬に傳はるも理なしや。
斯くて翌る十日の曉、力なくも再び都へ御還幸ありて、四辻殿へ入らせ給ひぬ。

六　八十氏川

追々都に馳せ集まれる官兵に、更に諸山の僧兵を加ふれば、尙ほ四五萬騎がほどは數へつべし。されば上皇、三浦胤義、山田重忠等を召して、宇治、勢多の要所々々をぞ守らしめられける。
僅か一日を距て、關東の大軍宛ら高潮の如く押寄せ來りぬ。勢多へは北條時房、宇治へは北條泰時、其勢今は幾十萬といふことを知らず。
官軍は等しく橋を撤いて防ぎたれば、先づ矢軍よりぞ初まりける。折しも雨大に降りて、勢多川、宇治川など、轟々と凄しき音して濁浪漲りぬれば、流石の大軍も容易くは渡らざりけり。
六月十四日の昧爽なり。雷鳴大に震ふと思へば、一天拭ふが如く霽れわたりぬ。泰時俄かに進擊の下知を下せば、勳功を思ふ武士ども、我れ先にと宇治川へ乘入れ、疾き流れをも、敵の矢をも、厭へばこそ、溺るる味方の屍體を乘越え〳〵、咄嗟彼方の岸へぞ上陸らむとすなる。官軍其勢ひに怖ぢ懼れて、些か引色立ちて見ゆる所を、附近の民家に火を放ちて攻むるほどに、終に大崩れに崩れて潰え去りぬ。
其夜、勢多の防禦も亦た敗れたれば、雲霞の如き坂東軍、雪崩を打つてぞ都へ亂れ入る。
上皇よりは直ちに宣旨を下して狼唳のことあるべからずと命せられけれど、坂東武者絕かに猛り狂ひて、白刄提げたるまゝ都の巷を横行しつ、此處にも、彼處にも、官兵の民家に隱れたるが搜し出されて殺さるゝもの數を知らず、三浦胤義、山田重忠など、淺猿しき修羅の巷に變り果てぬる都の狀を眺めながら、深き怨みを呑んで自殺してけり。

爰に東山の淸水寺に鏡月法師と云へる僧ありき。宇治川の戰ひに敢へなくも捕へられて、泰時の前に引出されぬ。泰時、法師に對ひて、

「汝は法師の身なるに、なぞ弓矢執りつるぞ。」

と詰問ば、鏡月法師、紙筆を請ひて、一首の和歌を詠じぬ。

勅なれば身をば捨てゝき武士の、
八十氏川の瀨には立たねど

泰時、幾度か其れを繰返し〳〵讀みけるが、双の眼より淚はら〳〵と流して、軈てこの法師を釋してけり。あはれ直に勇と義とにのみ誇る、宛ら犬の如き關東武士の中にも、泰時ばかりは物の情を知れる人にぞありける。

七　水のながれ

後鳥羽上皇に御味方し奉りぬる武士共は大概討たれたりしが、軈て程なく按察使大納言光親卿、中御門中納言宗行卿、甲斐宰相中將範茂など云へる公卿衆も亦悉く六波羅に召捕はれぬ。

折柄鎌倉より使者來りて、公卿衆をば悉く鎌倉へ伴れまゐらせ、途すがら斬捨てよと命令ありければ、武田信光は光親卿を、小山朝長は宗行卿を、北條朝時は範茂を、各自護送してぞ出で立ちける。

空に秋風立ちぬる七月の初浣、宗行卿、遠江國菊川の宿に着きし時、

「此處は何處ぞ。」

と、傍らなる武士に問へば、

「菊川の宿にて候ふ。」

と答へぬ。宗行卿頻りに呻吟してゐたりけるが、軈て硯引寄せ、旅宿の柱に二句の辭を識しぬ。

昔南陽縣菊水汲㆓下流㆒而延㆑齡
今東海道菊河宿西岸而失㆑命

駿河國浮島が原へ差かゝりぬる時、嘗て見知りけむやうなる男の、何やらむ荷を負ひて來りければ、

「汝は誰れなりしか。」

と、馬上より問ふに、彼の男、佇立りて仰ぎ見ながら、

「某は按察使卿の下男にて候ふ。昨日、主君の梟首せられて候へば、御遺骨をば拾ひて、都へ歸るところにて候ふ。」

と答へぬ。宗行卿これを聞きて、甚とゞ魂を消しけるが、其の夕べ、黄瀬川の宿に着きぬる時、筆硯を請ひうけて、

　　けふ過ぐる身をうき島の原にてぞ
　　　露のいのちは捨てさだめける

と、一首の和歌を詠じたる後、終に首を討たれにき。

甲斐宰相中將範茂は、足柄山を越えて關本の宿に着きける時、今日こそ命の失はるべき日なりと聞きければ、朝時に對ひて、

「同じく死なむにも、無下に首討たれむよりは、自から入水せむと思ふなり。如何にや。」

と問へば、朝時、

「孰れにても、御所望のほどに從ひ候はむ。」

とぞ答へぬる。

宿の後方に細やかなる谷川ありければ、此の河こそ可からめと思ひしに、河底あまりに淺く、迚も入水すべきやうも無かりき。朝時、武士共に命じて、石を積み、流れを堰き止めしに、漸う身長に餘る淵とはなりぬ。朝時、宰相中將の前へ行きて、

「早や御所望の用意も出來致し候ふ間、御覺悟召されよ。」

と云へば、宰相中將頻りに眼をしばだゝきて、

「同じく死なむにも、出家して死なば、然こそ往生好からめ。」

と云ふ。然らばとて、近き邊に住へる僧侶を召出して、戒を授け、頭髮を剃り落さしめけり。

其間に武士ども、駕籠の中に大石五つ六つ入れたるを運び來りて、其中に宰相中將を入れ、双の膝を確乎と駕籠に結びつけつ。今や谷川の底に沈めむとすれば、宰相中將徐ろに、

　　思ひきや苔の下水堰きとめて
　　　月ならぬ身の宿るべしとは

と口誦さみ終りて、念佛を唱へながら入水してけり。

武士ども、今か息絶えぬらむと耳を澄しゝに、忽ち一聲ウンと呻く聲すと思へば、築きたる堤壞れて、淺猿しき駕籠の、水面に露出れいでけり。

「此は如何にぞ。」と、武士共罵りあへれば、宰相中將、仰臥さまになりたるまゝ太息吐きて、「得死なぬぞよ。」と、眼を瞬きぬ。

然れば再び堰を築きて、今度は愈よ



堅く膝を駕籠に結びつけ、七八人の武士ども、確手と宰相中將の頭を壓へつつ、終に息の根を止めしこそ、可笑しく無慘なりしか。

斯かる狀にて、大概の公卿衆、皆な誅せられてけり。

八　御落飾

後鳥羽上皇には、御身の行末いかにとあるにも得堪へず思し暮れてゐ給ひしに六波羅より北條時氏參りて、直ちに鳥羽

殿へ御遷幸の旨をば奏しぬ。
上皇、暫時は默然としてゐたまひしが、軈て傍らに侍る女房達を顧み給ひて、
『先づ女車に乘りて出でよ。』
と宣へば、女房達、顏に袖あてゝ泣く／＼女車に乘りて出でぬ。時氏、衝と車の傍らに寄添ひて、弓の筈にて簾を揭げ、
『謀叛人にもや。』
と、一言いひて退く。
暫時の後、軈て上皇も女車に召され、名殘惜しき四辻殿を後ろに、鳥羽殿へ遷らせ給ひぬ。
一日を經て、六波羅より又もや使者參りぬ。御落飾の旨をば奏してけり。
元來御覺悟の上なれば、さまで驚かせ給はず、御室の道助法親王を召されて御戒の師に仰ぎ、忽ちの間に、御頭髮くる／＼と剃落し給ひぬ。
扨て、信實朝臣を召して、
『やよ、新法師になりたる姿描寫してよ。御母君に御送り參らせむ。』
と宣へば、信實畏りて御姿を描寫し奉りぬ。上皇、其れを御母君七條院へ御送り奉れば、七條院、一目御覽ずるより、御胸も轟くばかりに打悲み給ひけるが、軈て修明門院（順德天皇の御母）と同じ車に召されて鳥羽殿へ參り給ふ。
上皇には、俄かに變り果てゐる御姿にて對面せ給はむこと、甚と御心切なくや思召されけむ、御簾をば少し推退け、御顏ばかり出しつ。右手を振らせながら、歸れよとぞ命せられしに、兩所の女院、胸も塞る心地して、其儘よゝとばかりに咽び入らせ給ひにき。

九　浪岐の浪風

七月十三日といふに、六波羅より又もや時氏參りて、隱岐國へ御遷しまゐらする旨をば奏しぬ。上皇甚とゞ周章てさせ給ひて、
『すでに出家せし上は、遠き所にゆかでも宜かるべきに。』

と宣へば、時代拜伏して、
「然ればにて候ふ。六波羅にてのみの一存に候はゞ、如何やうにも取計らひ仕るべけれど、鎌倉にての命令にて候へば、詮術これなく候ふ。」
と答へ奉りて、早や怪しげなる網代車など用意し、一刻も速かにと急ぎまゐらせぬ。
然れば、今ぞ此世の別れかと、御使者を走らせて、其旨を七條院、修明門院の許に告げ給ひければ、軈て兩院ともに、周章てまどひつゝ馳せ參らせ給ひけり。
七條院、上皇を見參らせて、
「あはれ如何なる宿世の爲め、終に斯くは成らせ給ひぬるぞ。」
と、御袖に執りつきて歎きければ、修明門院にも御胸を掻抱いて俯伏し、
「我が身こそ命惜からぬに。」
と、涙に暮れて歎き給ひぬ。上皇には愁然として、
「夢の世なれば、然のみな歎きぞ。」
と、淋しげに微笑ませ給ひし御眼元より、一雫はろりと遊ばされぬ。斯かる間に、時氏は頻りに急ぎまゐらせて、網代車ひたと砌の傍に据寄せ、
「御名殘の盡きぬこそ道理には候へど、今は速かに御諦め給はれかし。はや〳〵。」
と急き立て奉れば、軈て、今はとて、網代車に乘らせ給ひぬ。供奉の人々には、僅かばかりの殿上人に、彼の白拍子龜菊は泣く〳〵隨ひ奉るも哀れなり。
何時しか都を出で、水無瀬殿の邊を過ぎさせ給へばありし昔の事ども多く思し出されて、

　立ちこむる關とはならで水無瀬川
　　霧なほ晴れぬ行末の空

と口誦さみ給ひぬ。日數經て播磨國明石を通らせ給ひしに、月甚と明う空に輝きければ、

　都をばくらやみにこそ出でしかど
　　月はあかしの浦に出でたり

と御製ありしに、傍らなる龜菊、

　月影はさこそ明石の浦なれど
　　雲井の秋ぞなほもかなしき

と和し奉りてけり。美作と伯耆との境なる山に、細き岨道ありければ、供奉の者どもを顧み給ひて、

「彼の道は何處へ通ふぞ。」

と問はせられしに、知れる者ありて、

「昔は都へ參る道にて候ひしが、今は通ふ人もなくて候ふ。」

と御答へまつりしに、暫時撫然として坐しましゝが、稍て、

　　都人たれ踏みそめて通ひけむ
　　　むかふの道のなつかしき哉

と詠じ給ひぬる。斯くて出雲國大濱の湊にて供奉の者共に御暇賜はり、波路遙けく御舟を漕ぎ出させ給ひぬれば、秋もやゝ深き八月五日に、隱岐國へぞ着かせ給ひし。

＊　＊　＊　＊

あはれ島の御住居と云へば、丸木の柱に茅の屋根葺きたる、唯だ形ばかりに詫しかりけり。濱邊よりは稍々離れたれど、浪音高く響きぬれば、寢覺の夜半に果敢なき御事ども思し出されしぞ多かりける。折々都より御消息まゐりぬれど、皆な心細げに哀れならぬものかは、四季折々の眺めにつけて、和歌のみ甚とゞ多く詠み給ひぬ。

　我れこそは新島守よ隱岐の海の
　　あらき波風心して吹け

羨まし永き日影の春に逢ひて
　汐くむあまも袖や干すらむ

あやめふく茅が軒ばに風すぎて
　しどろに落つる村雨の露

故郷を別れ路に生ふる葛の葉の
　秋は來れども歸る世もなし

水無瀬山我が故郷は荒れぬらむ
　まがきは野らと人も通はで

斯くて長き星霜をば此の島に過させ給ひ、今一度都へと思召しつゝも、終にその詮なく、あはれ六十路を一期として崩御れさせ給ひぬ。御痛ましき哉。

花籠

〆切拾二月十日

青春は花の世界なり、姿さまぐ\いろとりぐ\清香薫じ奇葩ひるがへるも今なり、實にや一刻千金、君が頭上の榮冠を飾らずや錦心繡腸の君、摘んで一輪送りたまへ、來つて一枝を投じたまへ

賞金

一等　金五拾圓　（一名）
二等　金參拾圓　（一名）
三等　金貳拾圓　（一名）
四等　金拾圓　（五名）
五等　金五圓　（十名）

△紙數は十枚以上十五枚までの事
△賞金は發表の當日現金にて送る
△原稿には「花籠」と朱書ありたし
△名宛は「女學世界編輯部」の
△原稿の文字は亂筆ならぬ樣に願ひます

募集（十二月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄稿の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

每月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
定刊數……十二冊
内　増刊四回…一、五、九、十一月價格同一

郵税　一冊　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	……	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十四年十一月十二日印刷納本　第拾壹卷第拾五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

博通社 (博) 特賣品

●安心の出來る買物は博通社に限る!!!

◀教育珈琲濾器▶



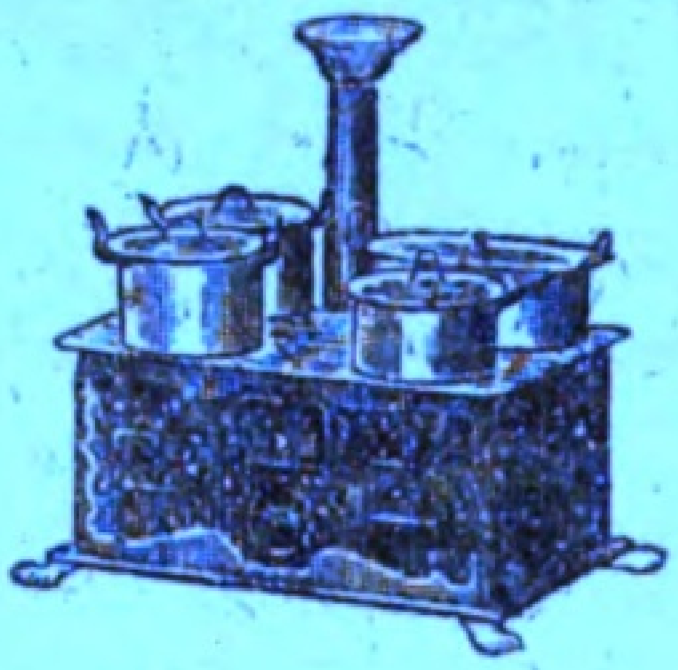
少年、少女諸君が御茶々の御遊びをなさるには是非共必要の器具であります、此道具を御使用なれば實際に珈琲を入れ御湯を差し召し上る事が出來る至極興味のある器で知らず〳〵の間に禮式の作法を知る教育參考品であります

珈琲濾器一個、藥　罐一個
珈琲煎器一個、金屬茶碗二個

壹組　特價　六拾五錢

▲送料内地十二錢海外卅五錢

◀洋食製造器▶



本器は優等金屬製にして體裁頗る優美且つ堅牢なり然かもアルコールランプにて凡ての洋食ビフテキでもフライでもシチウでも御菓子でも何んでも自由に作る事が出來る御割烹稽古用として尤も適當なる逸品であります

▲一號圖面の外アルコールランプ菓子燒一式付

銅製壹組特價三圓五拾錢

▲二號附屬壹號の通り

鐵製壹組特價二圓五拾錢

▲荷造送料内地廿五錢臺、樺、清朝、六拾錢

●九重もゝ引



舶來ネル製にて腰卷に股引を巧に取付けあり、取外しも自在で少しも窮屈でなく且つ溫く御召の工合のよいのが本品の新案たる所以であります

●色合：純白、クリーム色、とき色

◎大形大人用箱入特價九拾五錢
◎中形十五、六歲用箱入特價七拾五錢
◎小形十二、三歲用箱入特價六拾五錢

▲荷造送料内地拾錢臺、樺、清、朝卅五錢

●婦人メリヤスシャツ

メリヤス類は本年特製の最優等品にして肌ざはりの軟き瀞時色總裏毛眞に寒さ知らずの逸品で體裁頗る優秀にして且つ價格の低廉なる弊社の特色であります

注意　襦袢仕立、シャツ仕立｝値段は同じです
シャツ、もゝ引

◎一號　總裏毛優等品　特價　八拾五錢
◎二號　總裏毛上等品　特價　七拾五錢
◎三號　總裏毛上等品　特價　六拾五錢

▲荷造送料内地拾錢臺、樺、清、朝卅二錢

●御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!

（後付の一）

大橋メール、オーダー、ビジネス

博通社

東京日本橋區
本町一丁目

電話本局六百十四番
振替口座東京五十番

新案

紳士淑女用

明治四十五年

ポケット日記

A、B、C……三種



●本日記の特長は何れも特製總革を用ゆ其手當りの滑かにして三方金緣を附したる、共に見ざる逸品たり。又製本の堅牢なる、日常携帯に至便なる紳士淑女用として優美高尚なる日記なり。

●本日記は何れも薄手の舶來用紙を用ゐ、ポケット用として携帯至便なり、尙前記三種を調製し發賣せり各種亦特色を有せり。

●附錄＝金錢收支表、郵便規則、稅法、年齢表、補遺記事欄等の如きは日常座右缺くべからざるものなり。

A號……(厚形)
總革製三方金緣舶來紙薄手
美本紙數四百四十頁函入り
(記入欄一日一頁宛)
正價金五十五錢
郵稅金四錢

B號……(薄形)
總革製三方金緣舶來紙薄手
美本紙數二百二十頁函入り
(記入欄一日半頁宛)
正價金四十五錢
郵稅金四錢

C號……(薄形)
總革製三方金緣舶來紙薄手
美本紙數四百四十頁前後季
二冊差換函入(特長普通手帖兼用)
(記入欄一日一頁宛)
正價金六十五錢
郵稅金四錢

●右三種共……吸取紙附き

◀東京　博文館　本町▶

(後付の三)

女(後付の四)

(後付の七)

第拾七巻……第拾五號

文藝倶樂部

燈火可親は餘りい古めかしき口上となりしも、一年中にて最も心地好き頃は、十一月號を出だす時なるべし。本誌は殊に其の編輯に留意し、益々讀者をして快からしめんと勗む。先づ卷頭に近く實演さるべき新作悲劇「野火」を収む。是れ江見水蔭氏の心血を濺ぎし傑作。美人あり、勇士あり、讀者は其の面白さに、恍然自失さるべし。次に山岸荷葉氏作長篇小說「夜汽車」を掲ぐ。艶麗流暢なる氏の筆致は、必ずや讀者を魅せずんば已まず。第三に高階柳蔭氏譯の「浮燈臺」てふ小說を公けにす。是れ巖谷小波氏の嚴密なる校閲を經たるもの。其の面白きは卷を措くに遑あらざらん。第四に花柳小說の一旗幟を蹶へす田村西男氏の「坊主」を載す。花明柳闇の光景目に睹る如けむ。また新講談は桃川如燕師を勞して、師得意の「松平外記」を口演せしめて、愈々讀者の好評を博さん。倘ほ活社會欄、其の他の各欄、津々たる趣味と酌めども盡きぬ實益とにては、字内に冠絶せん。愛讀を祈る。



十一月一日發行

菊判紙數三百二十頁口繪石版寫眞版澤山　定價廿五錢　郵税二錢五厘

東京本町　博文館

（後付の八）

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界 第拾壹卷 第拾五號（增刊 順境と逆境）（毎月一回廿三日印刷納本）

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

明治四十四年十一月十二日印刷納本

定價金貳拾錢●郵税金貳錢